

頭註
新葉和歌集

著 順 忠 上 村
補 吉 太 田 品

集 歌 和 葉 新 註 頭

版 社 造 改

(長谷部製本)

昭和十一年八月四日印刷
昭和十一年八月八日發行

頭註 新葉和歌集

定價金貳圓五拾錢

校訂者 品田太吉

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 青野仙吉

東京市芝區田村町四丁目二番地

發兌 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替東京 八四〇二番
電話芝(43) 自一二一四番
至一二二四番

序

言ふまでも無く、人の心は時代の影響を受ける。従つて、人の心の聲である詩歌は、時代の影響を受ける。盛時の詩歌に泰平の氣象があり、亂世の詩歌に沈痛の調あるは、自然の勢と言はねばならぬ。神武天皇の卷の御製には、士卒をばげまし、軍旅をねぎらひ給うたる中に、建國の御氣魄が溢れて居る。壬申の亂は人麿黑人等の歌人の胸に宿つて、痛切なる響を遺して居る。天平の盛時には、他の藝術の美と相並んで、千古不朽の歌集を傳へ、延喜の治世には、溫雅なる撰集が選ばれた。平氏の滅亡は、平家物語に百首に近き悲哀の作を傳へ、また女歌人右京大夫を生んだ。承久の亂に當つては、三上皇の御製に、痛憤の御意を托し給へるものが多い。元龜天正前後の武士の作には、所謂武士道の眞髓を發揮したものがあつた。幕末當時の志士の作を見ると、國を憂へ君を思ふ情の溢れてをらぬ歌は

一首も無い。維新以前の時勢が、志士を驅つて熱烈なる歌を成さしめ、同時に回天の大事業を成さしめたのである。要するに、詩歌は時代の影響を受けるものである。此の點より見れば、詩歌は時代を側面から寫す鏡と謂つても可い。

ここに、吉野朝時代に撰ばれた新葉集がある。元來此の時代は、文學上に於いても亦、暗黒を極めた時代である。然るに、此の時代の暗黒を照破する二部の著作があつた。それは、新葉集と神皇正統記とである。

如何にして新葉集は撰ばれたか。當時北朝方では勅撰集が出たが、吉野朝方の歌は採らなかつた。その爲めに、當代第一流の歌人であらせられた後醍醐天皇の皇子宗良親王は、撰集を出さうとせられたところ、勅旨に依つて勅撰集に准ぜられたのである。かかる事情のもとに編纂せられた新葉集が、最も多く時代の影響を受け、最も克く時代を反映するものであることは、言ふまでも無い。

此の新葉集の歌と、維新以前の志士の歌とは、最もよく我が國民の特色を發

露し、最も人々を感動せしむる作がある。新葉集を取つて一首を高唱すると、切つて離れた弓絃の高鳴る響が聞える。馬上の武士の草摺に觸れて錚鏘たる佩劍の響が聞える。更に瞑目して當時を想像すると、御簾あらはに板敷寒き行宮の夜、山風に瞬く燈火の下に侍して、もとの都にかへさざらめやと憤り歌つたおもかけが現はれる。皇事に瘦盡せる白髮の老准后が、敵地深き孤城の一室に史筆を執るさまもうかぶ。新葉集は熱烈の作に富んで、浮華な調が無い。彼の新勅撰集以後の撰集に對して、異彩を放つて居る。ある意味に於いては、萬葉集より直ちに新葉集ありとも言ひ得べく、辭藻に於いては相似ざれども、其の眞髓は同一であるといへる。

以上は新葉集に就いて、かねて自分の懷抱してをる意見である。しかも此の新葉集には、古來註解の書が乏しい。纔にある村上忠順翁の標註は、はやく刊行されたが、今は容易に讀書子の手に入り難い。

ここに品田太吉翁は、現代に於ける篤學の老學者であつて、數十年間孜々として、吾が國文學の爲めに筆を執つてをられるが、今年喜壽を迎へられた記念にとて、かの標註に増註を加へて、世に公にされることとなつた。翁にして此の書を出ださるる、まことに其の人を得たと言ふべきである。

翁を知ること數十年の久しき予は、喜びて此の序詞をしるすと云爾。

昭和十一年七月

佐 佐 木 信 綱

○古事紀曰 天地初發之時○神代紀一書曰 天地初判

○新古今集序曰 倭歌は昔あめつちひらけはじめて人のしわざいまだ定まらざりし時葦原の中つ國の言のほとして云々○新古今集序曰 理世撫民之鴻徴云々

○新撰字鏡曰 媒灼也奈加太豆

○拾遺集、いづれをかしると思はむ、みわの山ありとしあるは杉にぞありける

○古今集雜下、神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふる事ぞこれ○萬葉集、古今集、後撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞花集、撰集、續古今集、新勅撰集、續後撰集、續古今集、續千載集、續後撰集、以上十七集

○國號考曰 秋津島は古事記に大倭帶日子國押人命坐焉城室之秋津島宮治天下也と見え書紀にも此御卷に二年冬十月遷都於室ノ地是謂秋津島宮と有りてもと此孝安天皇の都の地名なりかの神武天皇の猶如二蟠蛇之醫也と詔へりしは則此地の事にてかの大詔より起れる名なり腋ノ上も隙間ノ丘も皆相近き所にて大和國葛上郡なりきて孝安天皇の百餘年久く敷坐りし京師の名なるから秋津島倭とつづけて天ノ下の大號にもなれる事は師木島と全く同例

新葉和歌集序

新葉和歌集序

あめつち開けはじめしより、あしはらの代々にかはらず、世ををさめ民をなで、ころざしを言ひ、心をなぐさむるなかだちとして、わが國にありとしある人、あまねくもてあそび、さかりにひろまれるは、ただこの歌の道ならし。これによりて、ならの葉の名におふみかどの御時より、正中のかしこかりしおほむ世に至るまで、えらびあつめらるる跡、十あまり七たびになむなれりける。そのあひだ家々にあつめおけるたぐひ、又そのかずを知らざるべし。しかあるを元弘のはじめ、秋つしまのうち、浪の音しづかならず、春日野のほとり、とぶ火のかけしばしば見えしかど、ほどなく亂れたるを

なり○古今集 かすが野のとぶひの
野守いでて見よ今いくかありて若菜
つみてむ○續日本紀曰元明天皇和
銅五年正月廢河内國高安_二烽始
置_三高見_一烽及大倭國春日_二烽_一以通
平城_二也

○孟子曰 予豈好辯哉予不得已
也天下之生久矣一治一亂云々

○晉書曰 元帝姓牛名詵字景文瑯琊
恭王之五子 帝曾孫永嘉元年與西陽
王承等五王 渡江父老 襄_二纒_一而歸之
途據_三有建業_一而都焉是爲_三東晉_一○十
八史略便蒙云都_三江東建業_一故曰東
晉_一後改_三建業_一爲_三建康_一避_三愍帝諱_一
也

○日本書紀曰 天照大神乃賜_三天津
彦々火瓊々杵命_一八坂曲玉及八咫鏡
草薙劍三種寶物云々○此集賀部に
後村上院 四の海波もをさまるしる
しとて三のたからを身にぞつたふる
○萬葉集七いせの海のあまのしまつ
があはび玉とりて後もか戀のしげけ
む○淺香山かげさへ見ゆる山の井の
あさき心をわがもはなくに

○史項羽紀云 項王心懷_レ思欲_二東歸_一
曰富貴不_レ歸_二故鄉_一如_二衣_レ繡夜行_一誰
知_レ之者

○前漢書朱買臣傳云上拜_二朱買臣會
稽太守_一上謂_二買臣_一曰富貴不_レ歸_二故
鄉_一如_二衣_レ繡夜行_一○三代の帝は後
醍醐天皇後村上天皇後龜山天皇を申奉
る
○千載集序曰 和歌の浦の道にたづ
さひては七十のしほにもすぎ云々

をさめて、ただしきにかへされしのちは、雲のうへのまつり
ごと、更に古きあとにかへり、あめの下の民、かさねてあま
ねき御めぐみをたのしみて、あしきをたひらげ、そむくをう
つ道まで、ひとつにすべおこなはれしかど、一たびはをさま
り、一たびは亂るる世のことわりなればにや、つひに又むか
しもろこしに江をわたりけむ世のためしにさへなりにたれ
ど、ちはやふる神代より、國をつたふるしとなれる三く
さのたからをも受けつたへましまし、やまともろこしにつけ
て、もろもろの道をもおこし行はせ給ふおほむまつりごとな
りければ、伊勢のうみの玉も光ことに、あさか山のことの葉
も、色ふかきなむ多くつもりにたれど、いたづらにあつめえ
らばるる事もなかりけるぞ。ぬひものをきて、よるゆくたぐ
ひになんありける。

○散木集 七十にみちぬるしほのはま楸ひさしくも世にうもれぬるかな
 ○月詣集に顯昭、七十にみちぬるしほを待つて千年つむべき舟よそひせり
 ○史高祖紀云、高祖曰公知其一未レ知其二夫運籌策ヲ帷帳之中決ニ勝於千里之外一吾不レ如三子房
 ○三衣は僧伽梨、爵多羅僧、安陀會なり
 ○翻譯名義集云一僧伽梨梵語、華言レ合又云重謂割レ之而成也二僧陀羅僧華言上著衣即七條也三安陀會華言中宿衣謂宿睡時常近レ身衣也○萬葉十一卷に湊入の芦わけ小舟さはり多み我思ふ君にあはぬ此ごろ○且は字書に不定之辭とも姑且也とも見ゆ
 ○新拾遺集 いつまてと思ふにつけて老が身はなぐさむほどのあらましもなし○元弘元年より弘和元年に至りて五十一年也世はみつぎは上なる三柱也
 ○淵鑑類函曰 瑤臺玉臺築爲 瓊宮瑤臺 輝三百姓之財 ○禮樂志曰 遊閭闔觀玉臺
 ○玉葉集に上東門院、かげだにもとまらざりける雲の上をたまのうてなと誰か言ひけむ○千載集序 瓦の窓柴の庵の言の葉をもちす事なし
 ○論語曰子曰君子不三以言譽人
 ○此集春上に國量、咲きぬべき枝を

新葉和歌集序

ここに吳竹のその人がずにつらなりても、三代の御門につかへ、和歌の浦の道にたづさひては、ななそぢのしほにもみちぬるうへ、かつことを千さとのほかにさだめし昔は、野邊のくさ、ことしげきにもまぎれき。ころろを三の衣の色にそめぬる今は、あしまのふねのさはるべきふしもなければ、かつは老のころろをもなぐさめ、かつはすゑの世までものことさむため、かみ元弘のはじめより、しも弘和の今にいたるまで、世は三つぎ年はいそとせのあひだ、かりの宮にしたがひつからまつりて、をりにふれ時につけつつ言ひあらはせることの葉どもを、玉のうてな金のとのより、かはらのまど、なはのとぼそのうちにいたるまで、人をもちて事をすてず、えらびさだむるところ、千うた四ももちあまりはたまき、名づけて新葉和歌集と云へり。花をたづね郭公をまち、月をながめ雪を

葉に今日はしてあすも外山の花やた
 づねむし
 ○又夏に前内大臣、今よりやねぬ夜
 重ねて時鳥しのぶるころの初音また
 まし
 ○秋下に妙光寺内大臣、ながめても
 我世ふけぬとかなしきは四十にかか
 山のはの月
 ○冬に後村上院、名をとへばつかさ
 初雪も心してくもるにけるきけさの
 ○離別に同院、わかれる袖にかけ
 けりすずか川八十せのたきにおつる
 白玉
 ○旅に長親母、枕ゆふ野原のくさの
 つゆの上にかりね争ふ月のかげかな
 ○神祇に宗良親王、五十鈴川その人
 なみにかげずともただよふ水のあは
 れとは見よ中院入道一品、石清水き
 よき流をたのむよりにごらじとこそ
 思ひそめしか
 ○老子曰 和其光 同其塵 ○涅槃
 經曰 爾時 世尊 娑羅 下 雙合 爲 一
 樹 南 北 二 雙 合 爲 一 樹 垂 覆 寶 林 蓋 覆 如
 來 其 樹 卽 時 合 變 白 猶 如 白 鶴 ○釋 氏
 要 覽 曰 鹿 苑 又 名 鹿 林 在 波 羅 奈
 國 佛 成 道 初 轉 法輪 一 度 橋 陳 如 等
 比丘 一 處 ○此 集 雜 中 新 待 賣 門 院、吳
 竹のいく世もあらじものゆゑに身の
 長歌ふしはなげかずもがな○古今集
 なればし○密勘云 基俊公は閻浮の身
 ば思はじと思へどかなはずとこそす

もてあそぶよりはじめて、花の都にわかれをしみ、草の枕
 にふるさとを戀ひ、いすず川いはし水のながれをくみては、
 光をやはらげて塵にまじはるちかひをたふとび、鶴のはやし
 鹿の園の跡をたづねては、まよひをのぞきて、さとりをひら
 くむねをこひねがふ。あるはかたいとのあひ見ぬ戀に思ひみ
 だれ、あるは吳竹のうきふししげき世をなげきても、恨をか
 こち思ひをのべ、えふのさかひのつねならぬことわりをかな
 しみ、また百敷のうちにしては雨露のめぐみをほどこし、や
 しまのほかまでも浪風のおとしづかにして、むしろ田の鶴の
 よはひにあらそひ、すみよしの松の千とせをたもたせ給ふべ
 きすべらきのおほむ光をいはひたてまつるにいたるまで、こ
 ころ内にうごき、こと葉ほかにあらはれて、六くさのすがた
 にかなひ、一ふしのとるべきあるをば、これをすつる事なし

此は普通に心えがたき事に侍と傳
 ふる説有りところ申されけめ
 ○催馬樂席田むしろだのいつぬき
 川にすむつるの千とせをかねてぞあ
 そびあへる云々
 ○此集賀に前關白左大臣千代を又
 かさねて契れみゆきして二たびなる
 すみよしの松
 ○毛詩序曰情動於中而形於言
 云々故詩有三義焉一曰風二曰賦三
 曰比四曰興五曰雅六曰頌
 ○續千載集あら玉のことしもかく
 てこゆるぎのいそぢの波を袖にかけ
 つゝ○和名鈔云相模餘綾郡餘綾(與
 呂木)郷
 ○後撰に貫之は、は、山みねの嵐の
 風をいたみふることのはをかきぞあ
 つむる
 ○夫木に内大臣、和歌の浦はおほく
 の人の筆の海沖にもへにももしほか
 くらし
 ○新古今に家長、もしほ草かくとも
 つきじ君が代のかずによみおくわか
 の浦波
 ○續紀二十、見可レ咎事和尚奈世曾
 ○古今集序に世の中にある人ことわ
 ざしげきものなれば云々○源氏夕霧
 巻にことわざしげきおのがじし
 となみにまぎれつつ、玩弄をもてあ
 そぶとよめり持遊の義也、幻卷に此
 宮ばかりぞもて遊びに見奉り給ふ
 ○此集奥書に爰新葉集衆篇鏤金每部
 飾玉云々、觀感之餘所被撰勳撰
 集也者論言如此○大日本史曰宗良

といへども、よものうみの浪のさわぎも、こよろぎのいそと
 せにおよべれば、家々のことの葉風にちり、浦々のもしほ草
 かきもらせるたぐひも、又なきにあらざるべし。
 そもくかくえらびあつむる事も、ただ苑のうちのわづかな
 ることわざなれば、あめのした廣きもてあそびものとならむ
 事は、おもひよるべきにあらぬを、はからざるに、いま勅撰
 になずらふべきよしのみことをかうふりて、老のさいは
 ひ、のぞみにこえ、よろこびのなみだ、たもとにあまれり。
 これによりてところくあらためなほして、弘和元年十二月
 三日これを奏す。おほよそ此道にたづさはらむ人は、いよ
 くなにはづのふかきころをさとり、この時にあへらむと
 もがらは、あまねくしきしまの道ある御代にほこりて、春の
 花のさかゆるたのしみを四のときにきはめ、秋の夜のながき

嘗撰_二新葉和歌集_一後龜山帝勅準_二奉
教撰_二弘和元年十二月重訂上之_一時年
七十不知_二其所_一終

○或書云弘和元年十二月入道親王、
宮新葉和歌集を撰して奏覽ありしが
やがて勅撰になぞらへさせ玉ひける
元弘元年より弘和元年の間南帝三代
後醍醐院、後村上院、後龜山院、并
月卿雲容男女諸官等の和歌此集に載
させたまふ北朝の諸臣は載せずと云
々其序も親王あそばしおかれし御年
七十ときこえさせたまふ○中務卿宗
良親王信濃宮とも上野宮とも井伊谷
宮とも申奉る後醍醐天皇第三の皇子
にて元弘三年に征東將軍に補し東國
にましませり後年河内國山田莊に閑
居まし、新葉集を撰びて奏せらる
又終に井伊谷に隠れさせたまひ七十
三歳にて薨じたまひぬ(葉)
○古今集にきりも、すいたくな鳴き
そ秋の夜の永きおもひは吾ぞまされ
る○文選吳都賦云 露伴霜來
○古今集 わすられむ時しのべとぞ
濱千鳥ゆくへもしらぬあとをとどむ
る○蒼頡觀_二鳥跡_一始作_二文字_一○老子
曰 天長地久天地所以能長且久者
以其不自生故能長生

名を萬のとしにとどめつつ、露ゆき霜きたりて、濱千鳥の跡
たゆる事なく、あめ長く土久しくして、神代の風はるかにあ
ふがざらめかも。

頭註 新葉和歌集目次

序	一	
卷第一	春歌上	一
卷第二	春歌下	一九
卷第三	夏歌	三七
卷第四	秋歌上	五四
卷第五	秋歌下	七〇
卷第六	冬歌	八九
卷第七	離別歌	一〇九
卷第八	羈旅歌	一二七
卷第九	神祇歌	一三五
卷第十	釋教歌	一三五
卷第十一	戀歌一	一四三

卷第十二	戀歌	二	一五
卷第十三	戀歌	三	一七
卷第十四	戀歌	四	一八
卷第十五	戀歌	五	二〇
卷第十六	雜歌	上	二一
卷第十七	雜歌	中	二二
卷第十八	雜歌	下	二七
卷第十九	哀傷歌		二七
卷第二十	賀部		二九
奧	書		三四

□序	佐佐木信綱	一
□村上忠順翁の事蹟	深見愛子	一
□新葉和歌集増註別記	品田太吉	一

○新葉和歌集卷第一頭註

○大日本史云後村上天皇諱義良初名
憲良後醍醐帝第八子也母新待賢門院
夢抱_レ日有_レ身嘉曆三年生正平二十三
年三月崩_二子住吉殿_一年四十一、葬_二子
觀心寺_一稱_二後村上院_一

○新續古今集に忠房親王、いづる日
の光やそらに匂ふらむ峰よりあくる
天のかぐ山

○大日本史曰宗良親王十餘歳爲僧
名_二尊澄_一住_二妙法院_一叙_二三品_一爲_二天
合座主_一尊澄養_レ髮改名宗良_二稱_二上
野親王或信濃宮_一尋救宗良爲_二中務卿
征東將軍_二云々_一

○新拾遺集に公宗母、あらはれてい
つ名に立たむせきもりのうちぬるひ
まのかずもつもらば

〔增〕伊勢物語に 人知れぬわが通
路の關守はよひよひごとのうちも寝
ななん

○大日本史曰後龜山天皇諱熙成後村
上帝第二子也母嘉喜門院應永元年二
月上_二尊號_一曰_二太上天皇_一薙髮法名金
剛心、三十一年四月崩稱_二後龜山院_一

新葉和歌集 卷第一

春歌上

たつ春の心をよませ給うける

後村上院御製

出づる日に春の光はあらはれて年立ちかへるあまのかぐ山

千首歌よみ侍りし中に立春關を

中務卿宗良親王

御集

關守のうちぬるひまに年こえて春は來にけり逢坂の山

うへのをのこども題をさぐりて百首歌つかうまつりける

ついでに立春氷といふ事をよませ給うける

御製

○古今集に當純、谷風にとくるこほりのひまごとによりうちいづる波や春のはつ花

○拾遺愚草 よしの山かすまぬかたの谷水もうちいづる波に春はたつたり

○續千載集に西宮左大臣、空にもや人はしるらむよととも天つくもゐるをながめくらせば

○南朝皇胤譜云尊良親王後醍醐天皇第一之皇子母贈從三位爲子權大納言藤原爲世卿女延元三年三月六日於

越前金崎百書後撰集に雅正、花鳥のいろをもねをもいたづらにものうかる身はずぐすのみなり

○源氏物語桐壺卷云云なつかしうらうたげなりしをおぼし出づるに花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき

〔増〕後撰の花鳥は櫻と郭公なれども玉葉集春下に花鳥の色音もたえてくる空の霞ばかりに残る春哉これは櫻と鶯なり

○類題歌集に基綱、むせかへり又こそ水に春來ぬと岩間の水のいはまほしきに

○千載集に國信、御室山谷にや春の立ぬらむ雪の下水岩たたく也

○才子傳云藤原爲忠者權中納言爲藤之第二子也觀應二年參于南山而爲藏人頭二年參議一應安六年十二月十八日薨歲六十四其詞什見三代之撰集、貞和百首等二又新集集多載二卿之歌一是暫在南山之故乎

風わたる池の水もとけそめて打出づる浪に春や立つらん

百首歌よみ侍りける中に

冷泉入道前右大臣

九重の都に春や立ちぬらむあまつ雲のけさはかすめる

建武二年内裏にて人々題をさぐりて千首歌よみ

侍りける中に春天象を

中務卿尊良親王

花鳥の色にもねにも先だちて時知るものは霞なりけり

右大臣に侍りけるととき家に三百番歌合し侍りけるに

溪餘寒といへる心を

關白左大臣

さえかへり又こそ谷に氷りぬれ高嶺にとくる雪の下水

○新續古今集に西園寺内大臣女、すずしきは夏の外なるすみか哉山のいはねの松の下水
 ○拾遺愚草いかにせむさすが夜な夜なみなれ竿しづくににぐるうちの川をさ
 ○公卿補任云天授二年正三位藤師兼四月任春宮權大夫大學頭如元同月轉大夫弘和四年三月叙正二位
 ○萬葉集二に有馬皇子自傷結松枝一歌いまさきくあらば又かへり見む○金葉集に中納言女王、磐代のむすべる松にふるゆきは春もとけずやあらむとすらむ
 ○磐代は紀國日高郡なり雪だにとけぬは有馬皇子の結松によりてよめり
 ○風雅集に圓光院關白、かつ消ゆる庭にはあとも見えわかくて草葉にうすき春のあわ雪
 ○大日本史曰家賢事後醍醐帝爲二侍從一正平六年詔行在至二十一年一再詣行在爲二大納言一歷二内大臣右近衛大將一是年薨號二妙光寺一
 ○妙光寺内大臣は文貞公の男なり
 ○古今集に高世枝よりもあだにちりにし花なればおちても水のあわとこそなれ
 ○日本紀に沫雪、釋に其弱如三永沫二とあり萬葉集冬の歌に沫雪とよめり
 ○拾玉集いづしかと覆にけりなうぐひすは谷の古巢を今やいづらむ
 ○新撰字鏡云鶴鶴鷓鷯四字字久比須

題しらす

前中納言爲忠

つれもなき梢の雪もきえそめて雫ににぐる松の下水

松下殘雪といふ事をよみ侍りける

春宮大夫師兼

風さむみ何をか春といはしろや雪だに解けぬ松の下陰

百首歌よませ給うけるに春雪を

後村上院御製

春、松井本

かつ消えて庭には跡もなかりけり空にみだるる松のあわ雪

春の歌の中に

妙光寺内大臣

岩ねにはつもと見れど瀧つせに落ちては水の沫雪ぞふる

冷泉入道前右大臣

いとはやも谷の古巢を出てそめて人に待たれぬ鶯のこゑ

○新千載集云百首歌奉りし時鶯を、なれも又云々
○續後拾遺に關白、君がため谷のといづるうぐひすはいく萬代の春をつぐらむ

○李花集云千首歌中に鶯とて撰者みづからの歌をよみ人しらずと書く事あり新拾遺集に頼阿法師みづからの物名の歌によみ人しらずとかける類なり次々猶多し

○新後拾遺に龜山院、梅が香を木づたふ枝にさきだてて花にうつろふうぐひすのこゑ
○玉葉集に季經、なほざりに一むらうゑしくれ竹をねぐらにしめてうぐひすぞなく

○和名類聚鈔云竹文字集略云竹似簧而節茂葉滋者也楊氏漢語抄云吳竹也和語云久禮太介
○夫木鈔(廿二)後鳥羽院うぐひすのかりにはふ梅がえ

○公事根源云供若菜内藏寮并に内膳中より始めの事にや若菜を十二種供する事あり其種々は若菜はこべら苜蓿芹蕨薺芝蓬水蓼水雲松と見えたり尋常の若菜は七種の物也齊はこべら芹薺御形すずしる佛座などなり正月七日七種の菜羹を食すれば其人萬病たり又邪氣を除く術に侍ると見えた

正平八年内裏にて人々題をさぐりて千首歌よみ侍りけるととき初鶯を

なれもまづ谷の戸出でて君が代にあへるを時と鶯ぞ鳴く

九新千載集

福恩寺前關白内大臣

春の歌の中に
よみ人知らず

李花集

春くれば花にうつろふ鶯のこころの色ぞねには知らるる

竹鶯といへる心を
後村上院御製

おのづからながき日影もくれ竹のねぐらにうつる鶯の聲

題しらす
中務卿宗良親王

李花集若菜を

鶯の飛火の野べのはつ聲にたれさそはれて若菜つむらむ

正平廿年内裏にて人々年中行事を題にて三百六十首歌よみ侍りけるととき猷若菜といふ事をよみ侍りける

○ゑぐは小さきくわぬ也
 ○萬葉集十一 あし曳の山さはゑぐをつみに往かむ日だにもあはむ母はせむとも
 ○大日本史曰 後醍醐天皇諱尊治後宇多帝第二子也 母談天門院正應元年十一月二日生 延元四年八月十六日崩于吉野行宮二年五十二遺詔稱二後醍醐天皇一
 ○夫木第一に丹後 みよし野の花のさかりをまつほどはふもとののへにわかかなをぞつむ
 ○泰成親王は後村上天皇第四の皇子也 ○大日本史曰皇太弟泰成正平十五年生于住吉行宮爲親王任太宰帥後龜山帝即伸爲皇太弟一
 ○古今集に忠岑 かすが野の雪まをわけて生出づる草のはつかに見えし君はも
 ○藤原定房正二位權大納言經房之後也 定房二子長宗房爲三中納言官終二大納言一 次守房至二從一位大納言一
 ○萬葉集十 百しきの大宮人はいとまあれ梅をかざしてここにつどへる
 ○鳥羽は山城國紀伊郡 鳥羽田のおもを見わたせば云々新古今秋下にお江山傾かりがねえて鳥羽田の面に天おつるかりが津川を鳥羽川と云へば此鳥羽田は丹波敷
 ○萬葉集三に黒人 いづくにか我はやどらむたかしまのかち野の原にこの日くれなば
 ○近江國高島郡三尾郷勝野原

前内大臣 隆
 千世までの春をつみてや君が爲けふ奉る若菜なるらん

百首歌よませ給うける中に

後村上院御製

この里は山澤ゑぐを摘そめて野べの雪まも待たぬなりけり

題しらず

後醍醐天皇御製

春日山尾上の雪もきえにけり麓の野べの若菜つまなむ

太宰帥泰成親王

消そむる雪まを分けて生出づる野べのわかなるも今や摘らん

ちし松井本

前大納言宗房

都人いとまありてや今日も又とばたの面に若菜つむらむ

入道前右大臣

○李花集云千首歌の中に霞

○大日本史曰長親任中納言兼文章博士一歴大納言右近衛大將一刺髮法

名明親號耕雲山人一學和歌於宗良親王一深得師法一與撰新葉和歌集一

所著有耕雲口傳一○長親は文貞公の孫妙光寺内大臣の子也

○古今集 都出てけふみかの原いづみ川川風さむしころもかせ山○古語拾遺云於是從思兼神議令石凝姥神鑄三佛像之鏡一初度所鑄少不都合意紀伊國日前神是也○神名帳云紀伊國名草郡日前神社名神大

○新後撰に爲兼、山ざくらはやさきにけりかつらぎやかすみをかけて句ふ春風

○和名抄大和國葛上郡葛下郡

○新勅撰に後京極、花はみなかすみのそこにうつろひてくもに色づくを初瀬の山

〔増〕 此處の「まだ」は未の意なるを原本には誤りて又と書けり後撰集春上に「まだみよし」の山は雪ふる玉葉集春上に「まだ咲かぬ梅の梢に」などある皆同じ

○大日本史曰後龜山中宮不詳誰女入宮爲女御一稱阿佐殿一○續千載に爲氏ころもてのたな上山のあさ

がすみ立かさねてぞ春もきにける○袖師の浦は出雲なるべし

くるるまで若菜はつまじ高島やかち野の原は宿もあらじを

題しらず

よみ人しらず

立わたる霞のしたの白雪は山のはながらそらにきえつつ

山霞といふ事を

右近大將長親

春きても川風さむしみかの原たつやかすみの衣かせやま

日前宮によみてたてまつりける五十首歌の中に

冷泉入道前右大臣

春くれば霞をかけてかつらぎや山の尾上ぞ遠ざかり行く

題しらず

入道前右大臣

まだ上も嵐と見えしふじのねの霞の底にいつなりにけむ

浦霞を

中宮

さほ姫の袖師の浦の朝霞たちかさねても見ゆる春かな

〔増〕「こや」は攝津河邊郡昆陽にて山城乙訓郡山崎より西之宮に至る街道に當れり行基の建てし昆陽寺、行基の堀りし昆陽の池ある地にて歌には多くは小屋を添へてよめり

○新後拾遺に等持院、なにはがたあし火の烟そのままにやがてぞかすむこやの松原

○天授元年五百番歌合に十四番

左公長 たれか又袖ふりはへて春の野に雪まのわかなけさはつむらん
右勝○師兼、清見がた霞や深くなりぬらむ云々○判者、きよみがたゆたにぞかすむ若菜つむ雪まは春のいろもすくなし

○拾玉集 住吉の松のはごしに見るべきはとほざかりゆく沖のつり舟

○大日本史曰藤原光繼參議光泰之子家號三堀河二子光季光有

○夫木六に爲家 むさし野や墓をだにもたづね見むかぎりもしらぬいろやふかきと

○大日本史曰後村上帝皇女某不詳二所生一叙二品一稱二品宮一後龜山帝進二號新宣陽門院一考一新葉集一後村上

文中四年内裏にて人々題をさぐりて五十番歌
合し侍りける時海邊霞といふ事を

關白左大臣

なにはめがこやの蘆火の夕煙猶たてそへてかすむ春かな

天授元年内裏にて人々五百番歌合し侍りける時

春宮大夫師兼

きよみ瀉かすみや深く成ぬらむ遠ざかりゆくみほの浦松

松原、歌合

正平廿年内裏にて人々題をさぐりて七百首歌

よみ侍りける中に野霞といふ事を

前大納言光有

草の原みどりをこめて武藏野や限りも知らずかすむ春かな

夜梅といふ事を

新宣陽門院

帝崩、新宣陽門院與三嘉喜門院唱和及百首和歌中、春月作亦載在哀傷部、皆詞氣悽惋最極哀痛、而後醍醐帝宮人亦奉和歌於新宣陽門院、悼後村上帝、繇是觀之、其爲後村上皇女、無復可疑、今斷從之、按本書曰後村上帝居三住吉野行宮、新宣陽門院稱二品宮、又曰後村上帝崩、翌年新宣陽門院猶稱一品宮、據之則叙一品正在後村上帝未崩之前、嘉喜門院集成在天授三年、而書中稱二品宮、弘和元年宗良親王上三新葉集、集中稱新宣陽門院、自天授三年一至弘和元年、計五年矣、進門院號、蓋在是間、故係之後龜山帝云

○千載集に匡房、にほひもてわかばぞわかむ梅の花それとも見えぬ春のよの月
 ○續後拾遺に圓光院、梅が香のにほふものからくらぶ山このもとしらぬ春の夕やみ
 ○玉葉集に長方、梅の花さかぬかきねもにほふかなよその木末に風やふくらむ
 ○大日本史云後村上帝第三子惟成親王任式部卿兼髮號梅陰所常
 ○壬二集 たづねくるはかなき羽にもにほふらむ軒端の梅の花のはつ蝶

木のもとはそのことも見えて春の夜の霞める月に梅が香ぞする

梅薫風といふ事をよませ給うける

後村上院御製

匂ふなり木のもと知らぬ梅が香の便りとなれる春の夕かぜ

題しらず

後醍醐天皇御製

梅の花よそのかきねの匂ひをも木の下風の便りにぞしる

文中四年内裏五十番歌合に簷梅薫風といふ事を

式部卿惟成親王

こぬ人もさそふばかりに匂ひけり軒端の梅の花の下風

題しらず

よみ人しらず

ふく風の便りばかりの梅が香をうはの空にや尋ねゆくべき

五百番歌合に

前大納言賞爲

○玉葉集に茂重、吹風のたよりにつ
けてこととはばうはのそらにや人の
おもはむ
○五百番歌合に廿二番左○無品法親
王ことわりや谷には春もしら雪の
ふるすをいでてうぐひすのなく右
勝○實爲、句ひくる風をしるべに尋
ねばや云々○判、ものうさや今わす
るらむ鶯も梅さく宿のあるじたづね
て
○新拾遺集に爲親、はる風のにほふ
かたにやたどるらむ梅さくやどをと
ふ人もなし
○爲尹千首、さそひくるよそのにほ
ひのわかれぬは梅さくころの軒の春
風
○新後撰集に源惠、春の宮につかへ
しままのとしをへて今はくもるの月
を見るかな
○古今集、つくばねの木のもとごと
に立ちぞよる春のみやまのかげをこ
ひつゝ○春宮をはるのみやとよめる
なり
○合集解曰穴云御子宮在御所東二故
云二東宮也伴云四時氣自東發即春
准此故爲東宮春宮其義无別也
○職原鈔曰東宮春宮是一也左傳正義
云四時東爲春萬物生長在東西爲秋
萬物成就在西是以君在西宮二太
子處二東宮也
○詠千首歌○折梅
○古今集に康秀、春の日のひかりに
わたる我なれどかしらの雪となるぞ
わびしき

句ひくる風をしるべに尋ねばや梅咲く宿の花のあるじを

春の歌の中に

最惠法親王

ふきやめばよそに軒ばの梅が香をしばし袂にやどす春風

今上いまだ御子におまし／＼ける時家に侍りける

梅の花ををりて奉るとて

福恩寺前關白内大臣

いと早もわきて手折らば春の宮に木高く句へ宿の梅が枝

御返し

御 製

春の宮に木高く句ふ花ならばわきてや見まし宿の梅がえ

千首歌たてまつりし中に

中務卿宗良親王

かぎせども老はかくさて梅の花いとどかしらの雪と見えつつ

○類題歌集には梅散得客三句梅がかのとあり

○古今集 川のせになびく玉ものみかくれて人にしられぬ戀もするかな
○類題に通宗、あをやぎのうつれるかみを池水のそこの玉もおもひけるかな

○夫木鈔に常盤井、ながめやるみむろのきしの柳はらかすみのうへに春風ぞふく

○新續古今に家長、立田川三室の岸のふる柳いかにのこりて春を知るらむ

○新千載哀傷に大江千里、我身をばうかべるくもになせればぞつくかたもなくはかなかりける

○同集雑中に惟宗光庭、身にたへぬわが名もよしや中空にかべるくものありて無ければ○論語曰不義而富且貴於我如浮雲、春の日の光にあたるわれなれど云々

春宮にて人々題をさぐりて百五十番歌合し侍りける時
梅散後客といふ事を得イ

關白左大臣

類題
さらに又嵐ぞつらき梅が枝の花ゆゑ待ちし人にとはれて

正平十六年内裏にて人々題をさぐりて百首歌

よみ侍りける時柳を

權大納言公夏

青柳の緑うつろふ川の瀬になびく玉藻も數やそふらむ

題しらず

妙光寺内大臣

春風にけづりもやらぬ神なびのみむろの岸の青柳のいと

正平八年内裏千首歌中に春駒を

中院入道一品

野べ遠み春の心ぞつながれぬうかべる雲の跡を見るにも

○宗良親王千首歌跋云天授二年の夏の末つかた山風も閑に吹てしげき梢も枝をならさず、蝸の聲もどかにきこえて大宮人もいとまある比なればにや内春宮二御かた千首御歌あそばさるべしとて關白などを始として面々同題にて歌奉るべきよし仰言有りし云々

○里のあまは阿波國なり一説讃岐〔著〕里のあまは讃岐の名所なるよし離別部に見えたり袖の浦は類字名所に羽とあり

○和名抄云日本紀私記云漁人(阿末)辨色立成云白水郎(和名同上)楊氏漢語抄又同(萬葉集云海人)

○萬葉集には海人海部海士海子海夫泉郎白水郎など種々にかけり又磯廻灣廻などをいさりともめりいそかりの義にや

○才也正長元年正月叙一品一登日之子也

○藤原實秀者權大納言公仲投三危勿二難髮號三福實二和歌一首見二千新編古今集一

○新撰字鏡云僻巨管反但一也階也人之品也單已也獨單也比土利又豆禮豆禮

○眞字伊勢物語は徒然伊呂波字類抄に徒然蕭然などをつれなくとよめりつらねくゝの義か物思ひをればするわざもなくて寂しきなり

○和名抄云兼名苑云霖三日以上雨也奈加阿女字鏡云淫淫雨無止也奈加阿女長雨を詠にいひかけたるは「我身世にふるながめせしまに」など古くよめる例多し

同廿年内裏にて人々題をさぐりて三百六十首

歌よみ侍りけるとき遊絲を

右兵衛督成直

有りとだに今こそ見ゆれ春の日の光にあたる野への糸ゆふ

千首歌めされしついでに春海を

御製

里の蟹の袖の浦風長閑にていさりにくだす春の夕なぎ

關白左大臣右大臣に侍りける時家に三百番歌

合しけるに庵春雨を

前中納言實秀

山のはは霞へだててつれづれのながめにくるる草の庵哉

千首歌たてまつりしとき山春月を

權中納言經高

○古今集雜上、遅く出る月にもあるかな足曳の山のあなたも惜むべらなり

○枕詞補注云 むばたまの夜、やみ、黒髪など續けよめり惣て黒といはむとて云ふ言也むば玉うば玉ぬば玉などかへてよめる皆同じ詞也然を喜撰式に夢をぬば玉、よるはぬば玉、髪はむばたまと云へり天徳歌合に中務、思ふ事を人に見せばやとよみたるをよるはぬば玉と云ふをかきあやまてりと奏しければ、あやまちあらむにはいかでかと仰せられて此歌負に成りぬ是は喜撰が式につきてかくぞ侍りつらむ云々

○冠辭考云 ぬば玉は日本紀私記に鳥扇之實也と云るを佳とす古事記日本紀萬葉等に假字にては必奴婆多麻とのみ書きて宇婆玉武婆玉など書たる事なし喜撰式に黒にはうば玉夢にはぬば玉と云とあるは皆據もなき事也云々

○延喜式云凡黃昏之後出二入内裏二五位以上稱レ名六位以下稱レ姓名然後聽レ之其宮門皆令衛士炬火開門亦同
秋下すみのぼるの歌の注併考ふべし
○後拾遺に赤染衛門、きえにける衛士のたく火のあとを見てけふりとなりし君ぞかなしき

いかばかり山のあなたも霞むらむ曇りて出づる春の夜の月

春の御歌中に

後醍醐天皇御製

いかにして霞のひまの月を見むさてだに曇る習ひなりやと

中 宮

むば玉のよるのみかすむ習ならば月にうらみや春は残らむ

正平廿年内裏三百六十首歌中に禁中春月

類題

前左近大將公冬

百敷や衛士のたく火の煙さへかすみそへたる春の夜の月

五百番歌合に

前内大臣顯

しほがまの煙になるる浦人はかすむも知らで月や見るらむ

こしのくににすみ侍りし比躰中百首歌よみて都なる

人のもとへつかはし侍りし中に

宮五百番歌合に四十五番左勝○春
 う大夫顯統しほがまの烟になる
 は春へもかりかてね○山消あへぬ雪
 づくはあれど鹽がまのけふりにかす
 む月をこそ見ぬ
 し○李花集に興國三年越中國に住侍り
 又興國三年越中國名古といふ浦に忍
 て住侍りたまへる御百首なり下之に同
 じ○宿がらは宿ながらより轉りて宿な
 みと云はむが如し日がら身がら家が
 らぬ春やむかし○古今集に業平月やあ
 つはもとの身に於て
 かしをしのぶ袖の上にあしにあら
 ぬ月ぞやどれる
 て○新千載に形舞、今は身にくもりは
 のよの月
 ○新續古今に爲教、うき事も何をか
 こと夕べどとはばや人に秋のな
 らひを○さのみは然のみなり萬葉集
 然をさよめりしか反さ也やは
 は反語にてさのみ霞みはつべきや也
 に○古事記傳云阿志比紀能は山の枕詞
 引延たるをいふ城とはすべ一橋
 なる地を云て此は山の平なる所を云
 ふ其は周りに限ありて自ら一かまへ
 なれば也されば此は足を引たる城の
 山と云ふ續きなり

卷第一春歌上

中務卿宗良親王
 李花集
 やどからに霞むとのみやなげかれむ都の春の月見ざりせば

百首歌中に
 冷泉入道前右大臣

さても身の春や昔に變るらむ有りしにもあらずかすむ月哉

題しらず
 中院入道一品

いかにせむさらでもかすむ月影の老の泪の袖にくもらば

幸子内親王

我袖にわきてや月の霞むらん問はばやよその春のならひを

權中納言實興

さのみやは霞みはつべき春の月昔おもはぬ袖にやどらば

入道前關白家にて題をさぐりて百首歌よみ侍りけ

るとき歸鷹を

○大日本史曰 後村上女御某、關白
 某女也入宮爲女御二生後龜山帝一
 至帝崩上落髮上院號曰嘉喜門院一
 南朝紀傳云後村上院太子母勝子嘉
 喜門院左大臣經宗公女
 ○古今集に源さね、人やりの道なら
 なくにおほかたはいきうしといひて
 いざかへりなむわかれに打そへて人
 にしらぬ秋のわかれに打そへて人
 首歌らみず物ぞかなしき○季花集云百
 首歌をみて北野宮に法樂し侍りし中
 に歸雁を
 ○五百番歌合に四十一番左勝○女房、
 春はまた我すむかたにいそぐなり云
 々○右頼意、いとはやもみどりこそ
 へて春雨のふる木の柳つゆむすぶな
 り○判の鹽やくあまのたぐひもあらじ
 芦のやの鹽やくあまのたぐひもあらじ
 ね
 ○續後撰に少將内侍、とへかしなあ
 しやの里のはるる夜にわがすむ方
 月はいかにと○御製は後龜山院なり
 新續古今には後龜山院御製と書けり
 御製今内侍の伊勢物語なる我住む
 かたのあまのたく火かといふ歌によ
 れる也
 ○續古今集に後京極、霜うづむ刈田
 のこの葉ふみしだきむれる雁も秋
 をこふらさし○萬葉集十一に湊入の蘆
 分小舟さはいり多かよめり湊入の蘆
 の朽葉はいかか舟ならでも湊入とい
 ふべきにや
 ○後拾遺に國基、うすずみにかく玉
 づさと見ゆるかなかすめるそらにか
 へるかりがね

足引の山こえくれて行く鴈は霞のすゑにやどやとふらむ

右大臣

あなじこころを

嘉喜門院

いきうしと思はぬ旅の空なれや人やりならぬ春の鴈がね

季花 中務卿宗良親王

歸るかりなにいそぐらむ思ひ出もなき故郷の山と知らずや

御製

新續古今

いそぐ歌合

五百番歌合に

春はまたわがすむ方にかへるなり蘆屋のあまの衣かりがね

春の歌の中に 前中納言爲忠

湊いりの蘆のくち葉の霜の上にむれるし鴈も立歸るなり

妙光寺内大臣

霞たつゆふべの空のうすずみに末はかきけつ鴈の玉づさ

○古語拾遺曰素美嗚神奉爲日神行
甚無狀云々令石凝姥神鑄日像之
鏡一初度所鑄少不重合是紀伊國日
前神是也
○壬二集 ながめやるくものいくへ
をみこしちのそらに消えゆくはるの
かりがね

○土清云さすが讚嘆の辭また務て本
を忘れざるの意あり大凡物二つにか
けていふ辭なるべし字書に併は相並
也と注せし義に似たり萬葉集にしか
すがとよめり是也然するからとい
ふ語意也仍て眞名伊勢物語には然の
字をよめり○さすがといふ言古くは
にもじをそへてさすがついめに見ゆ
るものからとやうに云へり新古今の
比よりさすがやうに云へり新古今の
うらにをさすがはぶきても云へり爲
首にさすが又山をばこえぬほどなれ
やなり
○新後撰に禪助 まよはじなこしち
の空はかすむともかへりなれたる春
のかりがね

〔着〕 續千載戀二に雅有さすが又心
や通ふ云々同雜中に定房さすが又心
もらじと思ふ心をば新拾遺戀三に從
三位爲子さすが又かざりありける
契とや此戀一に新宣陽門院さすが
又忍ぶは同じ心ともなど見えたり
○壬二集 春をあさみまだまちどほ
の山ざくら花かとも見ずかかるとほ
くも○初句は雪消こそなりきえ反
け也雪氣にはあらず

日前宮によみて奉りける五十首歌中に

冷泉入道前右大臣

はては又聲もかすかに成にけり空にきえゆく鷹の一つら

中務卿宗良親王人々にすすめてよませ侍りし住吉

社三百六十番歌合に春動物

權大納言顯經

さすが又花にこしぢや忘るらむ歸りもやらぬ春の雁がね

百首歌よみ侍りける中に

前大納言光任

雪けこそ猶のこるらめ吉野山花まちどほにかかる白雲

花百首歌よみ侍りける中に

民部卿光資

○山家集 なかむ聲やちりぬる花の
 なごりなるやがてまたるほととぎす
 なかぬ○應ずなはちそのまゝの意
 なども訓へしなはちそのまゝの意
 なり○拾遺集 うつろふは下葉ばか
 りと見しほどにやがても秋になりに
 けるかな
 ○續千載に西園寺太政大臣、けふこ
 ずばあすともまたじさくら花いたづ
 らにのみちらばらなむ
 ○伊呂波字類抄に徒憎捐逗槽虚六字
 をイタヅラとよめり日本紀に閑曠萬
 葉に無用をいたづらとよめり
 ○千載集に赤染衛門、ふめばをしふ
 まてはゆかむかたもなし心づくしの
 山ざくらかな
 山ざくらかな
 ○士清云なごさむ神代紀に慰をよめ
 り平善の意合レ和の意也物思をまぎ
 らかして慰勞するを云へり萬葉集に
 意遣の字又名草むと書るは義訓せし
 也なごさもとも見ゆもる反む也
 なごさとのみもよめり歌物語にもな
 ぐさめと見えてなごさみと云へる例
 なしと云へり枕をよめるは俊の俗字
 也要は西士の俗字也○今案なごさみ
 とよめる歌もあればあながちにはい
 ひがたし

○新勅撰に俊成、おもかげに花のす
 がたをさきだてていくへこえきぬみ
 ねの白くも
 ○士清云おもかげ文選に顔をよめり
 顔氣をいふ也常に面影と書けりか
 げは景氣をいふ又依稱をよめり面相
 是、心、相、非と注す佛の字は義を
 もて二合したる也

春といへばやがて待たるる心こそぞ見し花の名残りけれ

待花といふ心をよませ給うける

中 宮

惜き哉いたづらにのみながめして花まつ程に移る日數は

春の歌の中に 遍照光院入道前太政大臣

待つほどの心づくしや山櫻花に物おもふはじめなるらむ

前内大臣 隆

咲きやらぬ日數ながらもこの比は待つになくさむ山櫻かな

日前宮によみて奉りける五十首歌中に

冷泉入道前右大臣

さかぬよりまづ面影をさきだてて待つ日かさなる山櫻哉

題しらず 従二位 儀子

○伊呂波字類抄、強顔オモカゲ
 ○續千載に爲定、なほざりに鳴きてやすぐるほととぎす待つはくるしき心づくしを
 ○古今集に兼麩、かたちこそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなり
 ○玉葉集に爲子、もろ人の春の衣にまづぞ見ゆる木末におそき花のいろ
 ○新續古今に左大臣、咲やらぬ花をまつちの山のはに人だのめなる春の白くも
 ○和訓栞云眞土山は紀の國にあり萬葉集に見ゆ角田川を合せてよめるは駿河盛崎の邊也新千載集によみしは武藏と云へり古今集なるは大和國也
 ○類題に堯孝、咲きぬやといそぐ心の花かつら木末にかけぬ時のまもなし
 ○新古今に雅經、きえねただしのぶの山の峰のくもかかる心にあともなきまで
 ○後撰集に伊勢、うみとのみまるとの中はなりぬめりそながらあらぬかげの見ゆれば
 ○新古今集よそにのみ見てややみなむかつらきやたかまの山のみねのしらくも
 ○伊呂波字類抄云葛木カツラキ大和國葛上郡七高山の一也
 ○葛上郡七高山の一也
 ○神代集才子傳云津守圓量者住吉二十一年國夏之長子也爲攝津守歷二任修理左京大夫等二應永五年

卷第一春歌上

年をへて待つは苦しき山ざくら心つくさぬ春にあはばや

貞子内親王

まちわぶる心は花に成ぬれどこずゑにおそき山ざくら哉

前大納言季繼

咲やらぬ花を眞土の山の端に雲だにかかれ紛へても見む

上野太守守永親王

咲そむる花やまがふと白雲に心をかけぬ山のはもなし

後村上院御製

等閑ナホザリにまつ身なりせば嶺の雲かかるを花と見てややみなん

二品法親王深勝

葛城やよそに待たるる花の色そながらあらぬ嶺の白雲

正平廿年内裏三百六十首歌に題をたまはりてよ

十二月叙三位二聽昇殿五年正月
 菴土清云山に入るに木の枝を折かけて
 道のしるしとするを、しをりて云ふ
 標折の義又柴折の義なるべし日本紀
 に折取枝葉と見ゆ葉をいふ也刊も
 葉も同じ字書に葉は菴識也周伯温説
 に再貢隨山葉木謂下隨所行林木
 研三其枝爲道識也と見えたり
 ○新古今集に西行法師、よしの山こ
 そのをしをりの道かへてまだ見ぬかた
 の花をたづねむ
 (増) 新後撰集雑中に右衛門督、迷
 はしをりせずとも山人の爪木の道
 はしをりせずとも
 ○大日本史曰祥子内親王藤原皇后所
 生也元弘三年爲伊勢齋後入二保安
 寺爲沙尼
 ○後撰集に兼覽王、年をへて花のた
 よりのこととはばいとどあだなる名
 もやちちなむ
 ○五百番歌合に五十六番 ○左勝、
 春宮大夫顯統つらからむ後をばし
 れぬ泪にのみぞかすみける春やわか
 しの袖の月かげ○判、後しらぬ花の
 かをのみ身にしめてむかしわするる
 そでの月かげ
 ○續後撰に定頼、ふく風をいとひも
 はてじちりこる花のしるべとけふ
 はなりけり
 ○萬葉集七〇拾遺集 沙みてば入ぬ
 ふらくの草なれや見らくすくなく戀
 ○古今集に貫之、さくら花さきにけ
 りしらくも
 しらくも

みてたてまつりけるに尋花といふ事を

從三位國量

咲きぬべき枝を^{シナリ}葉に今日はして明日も外山の花や尋ねむ

後村上院よし野の行宮におまし／＼ける比よみ

侍りける歌の中に 祥子内親王

名にしおふ花の便りにことよせて尋ねやせましみ吉野の山

五百番歌合に 前内大臣顯

つらからむ後をば知らず尋ね行く花のしるべに風をまつかな

花の歌の中に 福恩寺前關白内大臣

おしなべてまだ咲かぬまは尋ねても見らくすくなき山櫻かな

海邊花といふ事を 妙光寺内大臣

櫻花咲きにけらしな濱松のおよばぬ枝にかかるしら浪

○新葉和歌集卷第二頭註

○後撰集、吹く風や春たちきぬとつげつらむ枝にこもれる花さきにけり

○千載集に匡房、四方山にこのめはる雨ふりぬればかぞいろはとや花のたのまむ

○吉野拾遺云先帝の御時世中うつり變りもてきて吉野の行宮にわたらせたまひうかりし年も事の騒ぎの内にはてて春立と云ふばかりなる御節會のさまもいとかなし二月の半すぎゆくほどに御庭の櫻の漸咲出たるを御覽じて勾當内侍に仰られける御歌「こゝにててもくもゐの櫻さきにけり」云々

○鷲尾山、世尊寺は獅子尾坂の上にあるあり

○玉葉集に辨内侍、春ごとの花に心はそめおきつ雲井のさくら我をわするな

○續拾遺集に徳大寺入道、前太政大臣千枝にさす松のみどりは君が代にあふべき春の數にぞありける

〔拾〕新古今集賀に土御門右大臣、君が代にあふべき春の多ければ散るとも櫻飽くまでぞ見ん

○つとは土産也、伊勢物語に都のつとにいざといはましを萬葉集には斐と書けり

新葉和歌集 卷第二

春歌下

題しらず

後醍醐天皇御製

今はよも枝にこもれる花もあらじ木のみ春雨時を知る比

よし野の行宮におまし／＼ける時雲井の櫻とて世

尊寺のほとりにありける花の咲きたるを御覽じて

よませ給うける

へど吉野拾遺

こゝにてても雲井の櫻咲きにけりたゞかりそめの宿と思ふに

春歌の中に

中院入道一品

よしの山雲井の櫻君が代にあふべき春や契りおきけむ

花の御歌中に

後村上院御製

○萬葉集に挿頭頭刺などかざしに用たり和名抄に挿頭花は賀佐之とあり髮刺の義なるべし

○めかれぬは不_二目離_一也、古今集にくるとあくどめかれぬものを梅の花とよめり○伊勢物語におもへども身をわねばめかれせぬ雪のつもるぞわがこころなる

〔替〕萬葉集三に妹を^{メカレズ}目不離相見しめとぞとあり目とは相見ることなり

○拾遺集 あさみどり野への霞はつづめどもこぼれてにほふ花ざくらかな

○萬葉集にみよし野の瀧の水沫とよどり
○續後拾遺集に順徳院、みよし野の瀧の白沫おちたぎり吹けども風の聲もきこえず

○古今集 あはれともうしとも物をおもふ時などか泪のいとなかるらむ
○新撰字鏡云徳徳同作弄反因倭々也須牟也介志又伊止奈志いとなしはセヲシキなり暇なきにはあらず

○新千載集に伏見院、しがの浦や寄せくる波も白妙に花吹きおろすひらの山風

よし野山花も時えて咲きにけり都のつとに今やかざむ
咲きぬべきかた枝に移る心哉かつ見る花もめかれせぬまに

前内大臣 隆

朝日さす峰のかすみのたえまより匂ひそへたる山櫻かな

正平廿年内裏七百首歌中に瀧花

右兵衛督成直

山櫻咲きにし後はみ吉野の瀧の白あわも花かとぞ見る

花歌の中に

入道前右大臣

暮れぬなり名に流れたるみ吉野の瀧のいとなく花を見るまに

前大納言光任

しがの浦の浪の花こそ影うつすひらの高嶺の櫻なりけれ

正平八年内裏千首歌中に社頭花

○古今集 ちはやふる神代もきかず
立田川からくねなるに水くくるとは

○詞花集 京極前太政大臣の家に歌
合し侍りけるによめる康資王母紅
のうす花さくらにほはざびみな白く
もと見てやすぎまし、此歌を判者大
納言經信、紅の櫻は詩に作れども歌
にはよみたる事なむ無きと申ければ
あしたにかの康資王母のもとにつか
はしける京極前太政大臣、白雲は
たちへだつれなくれなるのうす花さ
くらにぞそむ

○かへし 康資王母、白雲はさもた
たばたて紅のいま一しほを君しそむ
れば

○新後撰集に隆信、かつらきやたか
まの山の峰つづきあさるくもやさ
くらなるらむ

○玉葉集に成仲、山たかみ朝ゐる雲
と見えつるは夜のまにさけるさくら
なりけり

○萬代集に季經、さかぬまは花かと
見えし白雲のまたまがひぬる山さく
らかな

○風雅集に道昭、わけきつる山又山
はふもとにて峰よりみねのおくぞは
るけき

○新後撰集に後京極、都にはかすみ
のよそにながむらむ今日見るみねの
花のしらくも

〔繪〕 同集春上に大藏卿隆博、待た
れつる尾上の櫻色見えて霞のまより
匂ふ白雲

前中納言爲忠

をしほ山神代も聞かぬ紅のうす花ざくらいまさかりなり

花の御歌中に

後村上院御製

しばしこそ雲とも見つれ山櫻花さかりになればにほふ春風

朝花を

福恩寺前關白内大臣

山の端にあさるる雲やみ吉野の高嶺の花の盛なるらん

題しらず

入道前右大臣

白雲にまがふもつらし山櫻花はたぐひもあらじと思へば

後村上院御時四季歌合せられし時花を

右兵衛督成直

たちわたる霞のひまにあらはれぬ山又山の花のしら雲

花の歌の中に

二品法親王聖尊

○二十一一代集才子傳云聖尊者後二條院第五皇子母權大納言局也爵位二品醍醐遺智院新編風雅一首新拾遺二首新後拾遺一首新續古今一首五集之作者新葉集亦載十六首

○古今集に友則花の香を風のたよりにたぐへてぞちぐひすさふするべにはやる○天武天皇紀に配をタグフとよめり又紀萬葉集等に副をよめり新撰萬葉集に交へてぞと見えたり

〔增〕まだは未なり原本又に見る

○千載集に定宗山さくら花をあるはと思はずば人をまつべき柴の庵か

○萬葉集卷十一あし引の山さくらとをあげおきて我が待つ君をたれかとどむる

○萬葉集卷一わたつみのとよはた雲に入日さしこよひのつく夜あきらけくこそ

○新千載集に經宣入日さす潮瀬も遠しわたつみやとよはたくも末のしら波

○文徳天皇實錄曰天安二年六月有白雲龜天自良耳坤時人謂之旗雲豐は人の義なるべし

○千載集に有家はつせ山入あひのかねを聞くたびにむかしの遠くなるぞかなしき

○伊呂波字類抄云長谷寺豊山寺云異名也日本紀云養老六年始造長谷寺願主沙彌道明姓姓六人部氏養老三年大和國城上郡始建之同四年供養三寺行基菩薩二後長谷寺也其差別十一者長谷寺二後長谷寺也其差別十一

風にたぐふ花の匂ひは山かくす春の霞もへだてざりけり

權中納言經高母

この山の花のあるじと成にけりまだ菴しむる人し無ければ

前中納言爲忠

あすもこむ山櫻戸に入日さす柴の庵りの花の夕ばえ

關白左大臣

入日さす山のたかねのさくら花とよはた雲の色にそめつゝ

夕花を 冷泉入道前右大臣

初瀬山入あひの鐘も打わびぬあかて暮れぬる花の名残に

題しらず 前中納言忠成

梓弓春の日ぐらし見ても猶かへるはをしき花の蔭かな

入道前右大臣

面堂西方有谷其谷西岡上有三重塔並石室石像等是本長谷寺也

○新續古今集に儀同三司、よしの山たきの白糸くりかへし見てしもあかぬ花の色かな

○古今集に東三條左大臣、うぐひすの笠にぬふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと

○壬二集 年くれて四十はすぎぬ鳥羽玉のわがくるかみも霜やおくらむ

○神名式曰攝津國七十五座

住吉座神社四座並名神大月次續紀曰延暦三年六月叙正三位住吉神勳三等同年十二月叙住吉神從二位

○古今集に素性、見てのみや人にかたらむさくら花手ごとに折りていへづとにせむ

○類題和歌集に雅親、くれなばといひし山べの花のかげさても幾夜ぞいへぢわすれて

○五百番歌合六十二番に左勝、無品法親○よしの山みねの岩かどふみな

心をやとめて歸らむ今いくか見ても飽くべき花の色かは

正平八年内裏千首歌中に花挿頭

前大納言光任

いざ櫻かざしにさゝむむば玉のわが黒髪の霜かくるやと

住吉社三百六十番歌合に春植物

よみ人しらず

やま櫻ちるまで見ては家づとに折るべき枝の花や無からむ

かれこれ李花

扇の繪に春の山にこれかれたちやすらひて花の枝か

ざしたる所を人のよませ侍りしかばかさつけ侍りし

中務卿宗良親王

誰が爲にしひては花を手折るらむさても家路のいそがれぬ哉

五百番歌合に

二品法親王仁譽

らし云々○右師兼、にほひくる風をばなにかいとましましなべてさくららぬ世ならば○判、なべて櫻ちらぬ世ならばよしの山たれかいはねの道もいそがむ

○拾遺集に高遠、あふ坂の關の岩かどふみならず山たちいづるきり原の駒

○伊呂波字類鈔云講堂在四王院延命院中間安置金色胎藏大日如來

○大日本史曰藤原廉子、右近衛中將公廉女也太政大臣公賢養爲子有_二才色_一善和歌_一正平六年十二月號曰新待賢門院十四年四月薨於吉野二年五十九、後村上帝爲喪服三年

○五百番歌合に七十七番左 ○前關白_一わすれじな又出でぬともよし山云々○右勝、資氏、よしの山わか木のさくら咲にけりまだ見ぬかたにかかる白くも○判、三年みし花かぶりて吉野山わか木のさくらめづらしきかな

吉野山峯の岩かどふみならず花の爲にも身をばをします
 吉野にまうで給ひけるにかう堂の花の夕ばえおもし
 ろかりければ折らせて内へ奉らせ給ひける次に
 新待賢門院

すぎがてにたをるさくららの一枝を猶九重に色そへて見よ
 五百番歌合に
 入道前關白左大臣

忘れじな又出でぬとも吉野山なれてみとせの花の下かけ
 よし野の行宮にて人々に千首歌めされし次に山花と
 いふ事をよませ給うける
 御製

我宿とたのまずながら吉野山花になれぬる春もいくとせ
 ちなじ行宮にてよませ給うける御歌の中に

○續古今集に新羅明神、から舟にのり守りにとこしかりはありけるものをこのとまりに

○古今集に業平、世の中にたえてさくらのなかりせば春のころはのどけからまし

○拾芥抄云華山院近衛南東洞院東一町本名東一條云々式部卿貞保親王家貞信公傳領之住小一條之間號之東家九條殿令給外家冷泉院此所立坊花山院傳領之

○李花集云延元四年春ノ比にや顯家卿などいざなひてあづまよりはるばるとのぼりて今は都へといそぎ侍りしに奈良天王寺の軍やぶれにしかば思ひの外に吉野行宮にまゐりて月日をおくりしにやよひのころ爲定卿のもとなり風のたよりに「かへるさをはやいそがなむ名にしおふ山の櫻は心とむとも」と申おこせたりし返事に

後村上院御製

おのづから故郷人のことづても有けるものを花のさかりは

文中四年内裏五十番歌合に山家花を

權中納言經高

山ざとにたえてさくらの無くばこそ花に都の春もしのばめ

花山院の八本かゝりの花を思ひやりてよみ侍りける

右近大將長親

故郷の八本の櫻思ひ出よわが見し春はむかしなりとも

延元四年春あづまよりのぼり侍りて思ひのほかによ

し野の行宮に日かずを經侍りし時前大納言爲定もと

いかにいそがむ櫻雲

より「かへるさをはやいそがなむ名にしおふ山の櫻

は心とむとも」と申おくりて侍りし返事に

○新千載集に實性、山ざくらにほひを風にまかせてぞ花のさかりをよそにしらす

○新千載集に後醍醐院、九重のくもる春のさくら花秋の宮人いかでをるらむ

○九重は禁中也楚辭の注に天子九門とあり九天になぞらへたる也このかさねともよめり一條より九條まで開きしも同じ

○古今集實に、しげはる、つるかめも千年のちはしらなくにあかぬ心にまかせはててむ

○此集雜下に前右大臣、いかにしていせの濱萩ふく風のをさまりにきと四方に知らせむ

〔塔〕 續古今集に春下後鳥羽院、ふく風もをさまれる代のうれしきは花見る時ぞまづおほえける

○新續古今集に秀長、君がすむ九かさねの花ざかりあらしの風もきかぬ春かな

櫻雲李花集

故郷は戀しくともみよし野の花の盛をいかゞ見すてむ

中務卿宗良親王

禁中花といふ事をよめる

春宮大夫師兼

千首

九重の雲のうへなる花なれば又まがふべき色や無からむ

千首歌めされしついでに見花といふ事を

御製

吹風もをさまる春の花ざかりあかぬ心にまかせてぞ見る

おなじ心を

冷泉入道前右大臣

時しあれば嵐の風も吹かぬ世にけふこそ櫻長閑には見れ

正平廿年内裏三百六十首歌中に栽花といふことを

前中納言實秀

○新千載集に爲藤、折人をわきてい
さむ九重のみはしの花に風はふく
とも

○禁秘抄曰南殿櫻在紫宸殿巽角是大
略自草創樹也康保元年三月有華宴兩
帝之間一重明親王家樹一八自西京
移裁之其後度々燒失每度裁之近樹者
堀河院御宇已來樹也

○新千載集に三條太政大臣、百しき
のみはしの櫻ちらぬまに朝きよめせ
よ伴のみやつこ
○宋雅千首 いく春もみはしのさく
らいろまされくもぬの花は風もおよ
ばじ

○新續古今集に中園太政大臣、立な
みはしたならねども忘れぬはよそに
みはしの花のおもかげ

○年中行事歌合に寄南殿櫻戀、内大
臣ししられじなよそにみはしのさく
らはなをらぬなげきのいるまささと
も

○南殿の櫻橋などの事別のさいかく
も侍らざくしの事などおろく申侍
とも禁中の草木の事禁秘抄にもこま
かにのせられて侍ればしるし申に及
ばず

○拾遺愚草 雲のうへ近きまもりに
立なれしみはしの花のかけぞこひし
き
○土佐國烟におはしまししほどの御
歌にや大日本史に 元弘二年遷三子土
佐烟といへり

移しうゑて君が御階の花盛久しかれとや風ものどけき

中納言中將より左大將にうつり侍りける頃家に

百首歌よみける中に花を

右 大臣

たちなる、御階のさくら咲きにけりかはらぬ袖に匂ふ春風

大將はなれて侍りける次の年の春内裏にて人々題を

さぐりて百首歌よみ侍りけるに禁中花といふ事を

前左近大將公冬

春までと頼めしものを今は身のよそに御階の花の下蔭

百首歌中に 冷泉入道前右大臣

身のよそに立別れても戀しきは御階の花の昔なりけり

遠き所に侍りける比よみ侍りける歌の中に禁中花を

○拾遺集○伊勢物語 わするなよほ
 どは雲みになりぬともそらく月
 めぐりあふまど
 ○後成卿の歌に又や見むかた野の
 の櫻狩とよめるは又見む事はか
 しの秀句也○家隆卿の又や見む
 や見ざらむ白つゆの歌を京極黄門
 評に又や見むにて不足なきものと
 言へり
 ○土清云日本紀に内裏をもしきと
 訓り常に百敷とかけり百寮調要に百
 官の座を敷かるゝ義といへりされど
 百寮敷奏の義なるべし一説萬葉に百
 磯城とかけける正義にて皇城の堅固を
 祝せる也と云へり
 ○後撰集○大和物語に伊勢、わかる
 れどあひもをしまぬもしきを見ざ
 らむことのかかなしき
 ○古今集に興風、たれをかも知る人
 にせむたかさごの松もむかしの友な
 らなくに
 ○高砂の尾上と古くよめるは山の惣
 名也砂長為レ山といふに據れるにや
 播磨の名所となりしは後世の事也
 の名松は大さ五尋ありて雌雄の二幹
 茂れるよし高砂社記に見えたり興風
 の歌は今ひたすら老の友なしとな
 げきたる也
 ○古今集に伊勢、さくら花春くはは
 ぬる年だにも人の心にあかれやはせ
 れぬ
 ○新千載集に三條太政大臣、手折り
 てもよしやかざさじさくら花六十の
 老のかくれなき身は

又や見むなれし御かきも思ひやる程は雲井の花の盛を

中務卿尊良親王

正平八年うへのをのこども題をさぐりて千首歌つ

かうまつりけるついでにおなじ心を

後村上院御製

あひ思はゞ見ざらんものか百敷の花も千歳の春の盛を

花歌の中に

よみ人しらず

花をなほ知る人にせむ高砂の松はむかしの香にも匂はず

天授二年内裏にて人々題をさぐりて百首歌合し侍

りし時花を

中務卿宗良親王

櫻花あかれやはせぬ六十あまりながめなれぬる老の心に

題しらず

中院入道一品

○風雅集に慈鎮、春の心のどけしとてもなにかせむたえてさくららのなき世なりせば
 ○才子傳云後文者紀伊守淑氏之子也爲三日前宮國造一叙三四品任三紀伊守不三藤三父祖之家聲一嗜レ歌有三佳名三矣
 ○紀に貞をさだかよみ管家萬葉に眞をさだかならずとよみ菅家萬葉に眞をさだかよみ白氏文集には安定二字をさだかと訓り○古今集に 泪川枕なざるうきねには夢もさだかに見えずぞ有ける
 ○古今集 春日野の飛火の野守いでて見よ今いくかありてわかなつみてむ
 ○五百番歌合に七十二番 左○實興、此春もかはらぬいろにとはれ來て花には人のいつはりぞなき○右勝光資うつろはゞいかにせむとか山さくら云々○判 人心かはらぬいろはさもあらばあろうふ花よ我いかにせむ
 ○古今集 名とり川せゞの埋木あらはれていかにせむとかあひ見そめけむ
 ○五百番歌合に六十五番 左持○顯統 よし山いほもとさくらうつろへば○右資氏 まつほどは同じ梢に尋來て花ゆゑなる春の山守○判にまつほどはおなじ梢ぞ吉野川いろなき花のあだ波やたつ吉野川いろなきくらくらにけり峰よりつつく花のしら波

卷第二春歌下

いかにして老の心をなぐさめむ絶えて櫻のさかぬ世ならば

從三位俊文

花をだにさだかに見ばや物ごととに霞むは老の習ひなりとも

中務卿宗良親王

千首歌奉りしとき野花を

嵐吹く野守が庵の花盛いまいくかとか出でて見るらむ

中院入道一品

春歌の中に

まだ咲かぬ梢あればとたのまざれば移ろふ花や猶うからまし

民部卿光資

五百番歌合に

移ろはゞいかにせんとか山櫻あだなる花にあひ見そめけん

前内大臣顯

吉野川いはもと櫻うつろへば散らでも花のなみやたつらむ

山歌合

○萬葉集に副添並兼共の五字皆「さへ」とよめり「そへ」の義にてそのうへの意あり○古今集にあすきへ色さへ影さへ夜さへにとよめり○源氏末摘花卷にいやましの御心さへそひてといへり

○拾遺愚草 百千鳥こゑやむかしのそれならぬわが身ふりゆく春雨のそら

○萬葉集七 月草に衣いろどりすらめどもうつろふ色といふがくるしさ

○古今集 春がすみたなびく山のさくら花うつろはむとやいろかはりゆく○うつろふはおとろふと通へり散るにもいへり

○古今集に深養父、光なき谷には春もよそなればさきてとくちる物思もなし

○古今集に惟喬親王、さくら花ちらばちらなむ散らずとてふる里人のきても見なくに

○芥川は攝津國島上郡なり○金葉集に津圖のまろやは人をあくた川とよめり

花の歌の中に

前中納言爲忠

こゝろさへあらぬ梢にうつるかな一樹の花の色かはるより

冷泉入道前右大臣

今は早我身ふり行く春をおきて移ろふ花を惜むはかなさ

前内大臣隆

幾春かうつろふ花の色にのみ心を染めてをしみきぬらむ

嘉喜門院

御集

櫻花咲きてとく散るならひこそわが身の春のもの思ひなれ

關白左大臣

さくら花ふる里人はとはずとも散らば散れとはいかゞ思はむ

よみ人しらす

をしめたゞ散りなむ後はあくた川それとも見えじ花の白浪

○玉葉集に西園寺太政大臣、ほの
く^と花のよこぐも明そめてさくら
にしらむみよし野の山

○萬葉集六に金村、はつせ女のつく
るゆふ花み吉野のたきのみなわにさ
きにけらずや

〔増〕 風雅集夏に後鳥羽院、みだれ
蘆の下葉なみよりゆく水の音せぬ浪
の色ぞ涼しき

○水沫みなわとよめり祝詞に青水沫
を事問てと見えたり乃阿反奈なり萬
葉集に水沫なす モロキリチとよめり

○大智論に此身四大和合シテ造如ニ水
沫ノ聚虚無ニ堅固ニとあり

○續古今集に前右大臣、吹風もとふ
につらさのまさるかななぐさめかぬ
る秋の山ざと

○新拾遺集に爲氏、たかさごの尾上
の雲のいろそへて花にかさなる山ざ
くらかな

○古今集 世のうきめ見えぬ山ぢへ
いらむにはおもふ人こそほだしなり
けれ

〔増〕 玉葉集雜一に大江頼重、世の
うきめ見えぬ山ぢの奥までも猶悲し
きは秋の夕暮

千首歌奉りしとき嶺花を

右近大將長親

月残る嶺のこずゑはあけやらで風にわかるゝ花のよこぐも

題しらず

二品法親王聖尊

吉野河たぎつみなわの色そへておとせぬ浪と散る櫻哉

建武二年内裏千首歌中に

中務卿尊良親王

吹風のつらさにのみはなさじとや誘サツはぬひまも花の散るらむ

花の歌の中に

右近大將長親母

高砂の尾上の雲は晴れにけりまがひし花も今や散るらむ

嘉喜門院

嵐御集ふき花散る頃は世のうきめ見えぬ山路もかひなかりけり

○五百番歌合に七十五番○左勝、光有、うつり行日かずにつけて散花の云々 ○右關白、よしの山名もかひありて三代までのみゆきかさなる花のしらくも○判、うつり行みよのみゆきの花のかげをしさやまさる春の山風
 ○拾遺集、ありへむと思ひもかけぬ世の中はなかく身ぞなげかざりける
 ○源氏須磨巻云しらずがほにありへてもこれよりまさることもやおぼしなりぬ
 ○古今集、よしの川よしや人こそつらからめはやくいひてし事はわすれじ○よしやは縦哉の意にて、さもあらばあれと云はむが如し
 ○新後撰集に院御製、あらし吹く木の本ばかりうづもれてよそにつもらぬ花の白雪
 ○五百番歌合に八十九番○左、實興、花はやり過にける梢にもつらきなごりの山風ぞふく○右勝、具氏、枝よりはあだにちるとも木の本に云々○判、山風のつらきかたみはよしやただきえなでのこれ花のしら雪

○大日本史曰、按、新葉集、有、兵部卿、師成親王、上野、大守、懷成親王、多々良氏、李花集、跋亦云、先師、兵部卿、師成親王

五百番歌合に

前大納言光有

移りゆく日數につけて散る花のつらさをそふる春の山風

千首歌めされし次に落花のこゝろを

御製

ありへての後をば知らず櫻花散りてぞ人にうきめ見えける

花雪

中務卿宗良親王

つらければ花とも見せじよしや只けふこぬ庭のあすの白雪

題しらす

前内大臣隆

あらし吹く梢ばかりは散そめてまだふかゝらぬ花のしら雪

五百番歌合に

權大納言具氏

枝よりはあだに散るとも木のもとにしはしは残れ花の白雪

落花の心を

兵部卿師成親王

しらに歌合

出家シテ號^二惠覺^一蓋^二二人皆帝之子今無^所考證^一
 ○新千載集に頼阿、山里はとほれし庭もあとたえてちりしく花に春風ぞふく
 ○俊賴無名抄云東宮はるのみやといふ
 ○東宮を春宮とも稱奉れり春宮坊井に奉仕の官名に春宮と云へり太子御自體の上にては東宮と書き御居處に就ては春宮と書く故實也

○天中記引周王褒箴云天良繼體麗正離^唯秋坊通^夢春宮養^德
 ○後撰集夏朱雀院の春宮におはしましける時たはきはきら五月ばかり御書所にまかりて酒などたうへてこれかれ歌よみけるに大春日師範、五月雨に春の宮人くる時はほととぎすをや鶯にせむ
 ○新千載集に行尊、思ひきや春のみや人名のみして花よりさきにちらむものとは
 ○古今集に敏行、秋來ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬ
 ○後撰集のこがらしのもりの下草風はやみ人のなげきはおひそひにけり
 ○五百番歌合に八十九番、左五首上は枝よりは云々の歌の條に注せり
 ○壬二集 たのみつる神のいがきにはふくずのつらきいるなる秋風ぞふく

木のもとに散りしく花を吹きたてゝ二たび匂ふ春の山かぜ

やよひの頃散りすぎたる花をゝりて春宮大夫師兼

のもとへつかはすとて

中務卿宗良親王

花咲かば訪ふべき春の宮人をちるまであやなすごしつる哉

返し

春宮大夫師兼

尋ね見ぬ身のおこたりと櫻花ちると聞くにぞ驚かれぬる

杜花といふ事を

右近大將長親

あらしふく梢は春もなくなりておのれ花さく杜の下くさ

五百番歌合に

權中納言實興

花ははや散りすぎにける梢にもつらき名残の山かぜぞ吹く

春の歌中に

右近大將長親母

光り無き谷には春もおそざくら外の散りなむ後や見るべき

○古今集雜下、光なき谷には春もよ
 そなればさきてとくちる物思もなし
 同春下、みる人もなき山里のさくら
 花ほかのちりなむ後ぞさかまし
 ○公事根源云、曲水宴は昔玉卿など
 まゝりて御前にて詩を作りて講せら
 れけるに、や御溝水に杯を泛りて、
 下是をのむよし、康保の御記に見え
 り又顯宗天皇元年三月上巳日、後死
 幸してめぐり水の豊の明きこしめす
 と日本秘抄にあり
 ○禁秘抄曰、御溝近來東庭瀧、深任流
 昔者或風流様々也、流非一脉且古立石
 等在離御也
 ○堀川院百首に、顯季、小山田にたね
 まきすてて、苗代の水のころにまか
 せつるかな
 ○新古今集に、勝命、雨ふれば小田の
 ますらをいとまあれや、苗しる水をそ
 らにまかせて
 ○古今にふかやぶ、花ちれる水のま
 りにけり
 ○新拾遺集に、後西園寺太政大臣、け
 ふしはやかへるさ涼しみそぎ川、波
 かけて秋や立つらむ
 ○後拾遺集、すみみのえの松のみどり
 もむらさきのいろにぞかくるきしの
 藤なみ
 ○新千載集に、尊風、のき近き竹のそ
 のふの世々の風つらなる枝にふきぞ
 つたへむ

曲水宴を

妙光寺内大臣

めぐりあふ今日はやよひのみかは水名に流れたる花の盃

路苗代といふ事を

權大納言公夏

玉ぼこの道ある時は苗代の水も心にまかせてぞひく

春御歌の中に

新宣陽門院

花ちれる水の流れをせきとめて春をもかへせ小田のますらを

山吹をよめる

冷泉入道前右大臣

よしの河夕浪かけてゆく春のかへらぬ色を見する山吹

やよひの末つかた妙光寺内大臣信賢卿など誘ひて

住のえの藤見侍りけるをりしもかしこにまかりあ

ひて侍りけるに歸りて後申つかはしける

前大僧正頼意

○謝靈運答惠連詩云況我連枝樹與子
同一身

○大日本史曰藤原師賢内大臣師信之
子也家稱云花山院元弘二年冬病薨年
三十二贈太政大臣諡曰文貞

○古今集に康秀、春の日の光にあたる
我なれとかしらの雪となるぞわび
しき

○袖中抄云末の松山波こすといふ事は昔男女にあひて末の松山をさして彼山に波のこえむ時ぞこと心は有べきと誓けるより男も女もことふるまひするを末の松山波こすとよむ也彼山はとほくて見れば山よりあなたに波の立つが山より上に見こされて山をこゆと見ゆるによりてまことの波のこゆべきよしをちかへるなめり云々

○新續古今集 今はとてこゆらむかたもしら波のあとなき春の末のまつ山

○群書類従なる師兼千首に此歌なし異時の千首なるべし

○源氏簞木卷云いはむかたなくすごき言のはあはれなる歌をよみおき云々

○拾玉集 あはれにも雁の泪ぞ袖におつる月はありあけの小夜の枕に

住の江の松もさかゆく色見えてつらなる枝にかゝる藤なみ

百首歌よみ侍りける中に藤を

文 貞 公

よゝかけて絶えじとぞ思ふ春の日の光にあたる北の藤浪

暮春のこゝろをよませ給うける

後村上院御製

浪こゆと見えしは花の盛にて春の日數はすゑのまつやま

欲 松井本

千首歌奉りし時春將暮といへる心を

春宮大夫師兼

花はちり月は有明になる比の春のわかれぞいはむかたなき

暮春花といふ事をよませ給うける

嘉 喜 門 院

○古今集に貫之、世の中はかくこそ有りけれ吹風のめに見ぬ人もこひしかりけり○拾玉集 あさみどり春吹風にさそはれて花とともにやちりうせぬべき

〔釋〕 萬葉十九にふく風の見えぬが如くゆく水のとまらぬ如く云々續古今集に土御門院ふく風の目に見ぬ方を都としてしぶも悲し夕暮の空
○金葉集に顯輔、むらさきの色のゆかりに藤の花かかれる松もむつまじきかな

吹風の目に見ぬかたにさそはれて花と共にや春の行くらむ

る御集

暮春藤を

新宣陽門院

明日までも猶咲きかゝれ藤の花春のゆかりの色ぞとも見む

○新葉和歌集卷第三頭註

○桃花莢葉云白莢と云ふは綾若平絹を表裏白莖にして着す或表裏共に張之四月十月更衣の外は暑月に著之云々○書紀和名抄伊呂波字類抄等に綾をかとりとよめり紺も訓り堅織の義なるべし

○新千載に六條内大臣、立かふるかとり衣の白かさねかさねても猶うすき袖かな

○公事根源云四月一日けふは衣かへなれば宮中處々の御裝束掃部寮改む御殿の御帳のかたびら表すずしに胡粉にて畫をかく壁代みな徹す御服は御直衣御ぞすずしの綾の御單御はりばかま内藏寮より献る女房のきぬ袴のきぬとも衣かへの一重からきぬ裕ずしなり裳は上臈薄裳小上臈うす色常の如し○月令云孟夏の月天子始綵○玉葉集夏 いつしかとかへつる花のたもとかなときにくつるはならひなれども
○文明十三年歌合、花染の袖たちかへていやしきもよきもひとへに春したふらし

新葉和歌集 卷第三

夏 歌

百首歌よみ侍りける中に

冷泉入道前右大臣

百敷や今日宮人はあかざりし花のかとりの白がさねせり

更衣惜春といへるころを

中 宮

いつしかとたちはかふれど夏衣ころにのこる春の色哉

建武二年内裏千首歌中に

中務卿尊良親王

夏衣たつ日にかぎる花染の袖のわかれぞしたふかひなき

○五百番歌合に百一番 左勝、女房、おしなべて山もあをばになりぬなり云々 右資氏、あかざりし花のかたみとなりけり青葉の山のみねのしら雪○列に花を見しきのふの夢のなごりだに猶なぐさまぬ降のしら木も○金葉集に院御製、おしなべて木末青葉になりぬれば松のみどりもわかれざりけり

○玉葉集に經親、月かげのもるかと見えて夏木立しげれる庭にさけるうの花
○詩に綠樹重陰とつくれるは、すなはち夏樹立也
○新拾遺集に院御製、けふも猶かすむと山の朝ぼらけきのふの春のおもかげぞたつ

○新撰字鏡云械梳舎字豆木○和名抄云本草云洩跳一名楊槿和名字豆木

〔繪〕玉葉に大僧正仁澄、花は散り鳥は稀なる頃にしも吹く山吹は心ありけり、新後拾遺夏に前内大臣女、何をかは春の形見と尋ねまし心ありける遅櫻哉

○谷響集云古昔誤以郭公謂杜鵑名和名助詠集等為郭公一並非是郭公鳩鳩也字彙云鷓鴣鳥名俗稱郭公故和郭公即杜鵑而非三子規也和名集誤謂郭公即杜鵑故與鷓鴣保度々木須ノ和名也

五百番歌合に

ぬなり歌合

御製

おしなべて山も青葉に成にけり花見し春は昨日と思ふに

新樹を李花集

百首歌よみ侍りし中に

中務卿宗良親王

春花集上
春わけし跡にしをりを残しおきて櫻はしるき夏木立哉

新樹を

前大僧正頼意

花に見し昨日の春の面影もいつしかかはる夏木立哉

題しらず

貞子内親王

卯の花の咲きての後に見ゆるかな心ありける賤が垣ほは

正平二十年内裏三百六十首歌に漸待郭公といへ

前内大臣隆

る心を

今よりや寝ぬ夜重ねて時鳥忍ぶる比のはつね待たまし

○續後撰に小辨、あやにくにきかまほしきはほとゝぎすしのぶるほどのはつねなりけり
 ○拾遺集に兼盛、み山出て夜はにや來つるほとゝぎすあかつきかけてこゑのきこゆる
 ○古今夏 あし引の山ほとゝぎすをりはへてたれかまさると音をのみぞなく
 ○千載に頼政、人しれぬ大内山のやまもりは木がくれてのみ月をみるかな
 ○草庵集 一聲にあくるならひもまだしらでまつ夜かさなる時鳥かな
 ○後撰集に思寢の夢といひてもやみなましなかゝるにありとしらせむ
 ○大日本史上野太守懐成親王とあり春下卷師成親王の御歌の標注考合すべし
 ○増 古今集雜上に榮平大原やをしほの山も今日こそは神代の事も思ひ出づらめ
 ○續後拾遺に左大臣、大はらやをしほの山のほとゝぎすわれに神代のことかたらなむ
 ○小鹽山は山城國乙訓郡也愛宕郡にも小鹽山ありいづれにか
 ○増 懐邦とあるを可とす冬部にも上野太守懐邦親王とあり
 ○新後拾遺に爲世、つれなきをしばしわすれてほとゝぎすまたでや見まし有明のそら

同八年内裏千首歌中に

前中納言爲忠

深山よりいづるをぞ待つ時鳥夕べの月の光りならねど

百首歌よみ侍りける中に

權中納言長賢

足曳の山時鳥いづこにか木がくれてのみさつき待つらむ

待郭公といふ事を

權大納言

ほとゝぎす待夜重なる思寢の夢にさへなどつれなかるらむ

邦、松井本

上野太守懐那親王

一聲もをしほの山の時鳥神代もかくやつれなかりけむ

冷泉入道前右大臣

夜をかさねつれなしとて時鳥待たてはいかゞ有明の空

〔増〕 續千載夏に伏見院、つれなさを月にぞかこつ郭公待つに空しき有明の空

○新拾遺に後西園寺、つれなさのたぐひならじと有明の月にしもなくほととぎすかな

○新古今に俊成、わがこころいかにせよとてほととぎすくもまの月のかげになくらむ

〔増〕 新續古今夏に入道二品親王、時鳥ただ一聲もほのかにて雲間の月に猶待たれつつ

○類題に道遙院、里わかぬ心やちぎるほととぎすくるる夜ごとの月のひかりに

〔増〕 新古今雜下に守覺法親王ながらへて世にすむかひは無けれどもうきてかへたる命なりけり

前中納言氏定
つれなさの程を知らせて有明の月にも鳴かぬ時鳥かな

千首歌奉りし時月前時鳥といふ事を

春宮大夫師兼

忍ぶべき初音なりともほととぎす雲まの月に物忘れせよ

兵部卿親王家にて人々五十首歌よみ侍りける中に

右兵衛督成直

里わかぬ光にならへほととぎすおなじ山路を月に出てなば

天授二年内裏百首歌合に

關白左大臣

ほととぎす心つくさで山里のうきにかへたる一こゑもがな

五百番歌合に

前大納言實爲

○山家集 時鳥いかばかりなる契りにて心つくきて人のきくらむ

○五百番歌合に百十八番 ○左辨内侍 待わぶる山ほととぎす心あらば

勝 實爲つひによも忍びははてじ 時鳥云々 ○判 ねぬよのみかさねば

つらし子規心つくさぬ初ねきかばや

○新續古今集 さのみなどつれなかならむねに ○拾玉集 のびはつべき初

よふげがたの 一摩はゆめにきつる ころち社すれ ○季花集 草の菴雨す

なれば 山郭公心ありぬべき折から

○四句いまよりはいまこそ誤りに

はあらじか「より」と「こそ」と似たり

○永徳百首に前關白 人ははやくつたのみなりけり

○頼政集 時鳥きつとかたる人さへまたもやくるとまたぬよぞなき

○新後拾遺に實任 まだきかぬ恨もあらじほととぎすなきぬとつぐる人

なかりせば ○二十一代集 才子傳云、津守國夏者

從四位上國冬之子也正平七年叙正三位八年五月歸泉年六十五社務勞二十六年襲家風吹笛之能名于時和歌亦其詞章矣

つひによも忍びははてじ時鳥こゝろつくきて初音聞かせよ

題しらす

中院入道一品

うたゝねの夢には聞きつ時鳥おもひあはする一こゑもがな

季花集上

こそ季花

よみ人知らず

ふらぬ夜の心は知りつ時鳥いまより鳴かめむら雨の空

太宰帥泰成親王

よそにはや鳴とは聞きつ今はよも待つ夜重ねじ山ほととぎす

建武二年内裏千首歌中に夏動物を

中務卿尊良親王

時鳥なきつと語る人しあれば今日を初音といかゝ頼まん

正三位國夏

またれてぞ今も鳴くなる時鳥身はならはしのこぞのふる聲

○古今集夏 五月まつ山ほとゝぎす
打はふきいまも鳴かなむこそぞのふる
こそ

○新續古今集に成久、おのづからま
たぬ夜もなし時鳥身はならはしの老
の寢ざめに

○新拾遺に定爲、しばしだにかたら
はゞこそ時鳥心づくしのほどもうら
みめ

○新千載に御製、むら雨のくもまの
月をしるべにていとゞまたるゝほと
ゝぎすかな

○夫本抄八に顯季、五月雨にいまき
の岡のほとゝぎすしとゞにぬれてな
きわたるなり

○同二十に成仲、つねよりもめづら
しきかなほとゝぎすいまきの山のけ
ふのはつこゑ

○今來岡は大和國高市郡なり

○類題に祐舉、ほのかなるたゞ一こ
ゑはほとゝぎすねざめくやしき心ち
こそすれ

○古今集戀三 むば玉の鬮のうつゝ
はさだかなる夢にいくらもまささらざ
りけり

夏歌中に

前大納言光任

時鳥なきてやすらへ待ちわびし心づくしを我もかたらむ

天授二年内裏百番歌合に時鳥を

民部卿光資

聞きてこそいとゞ待たるれ時鳥初音ばかりとなに思ひけむ

おなじ心を

從三位親文

いづかたに猶も待つらむ時鳥鳴きていまきの岡の初音を

上野太守守永親王

ほのかなる一こゑなれど時鳥又聞く人のあらばたのまむ

關白家三百番歌合に郭公幽といふ事をよみてつ

右近大將長親

かはしける

ほのかなる鬮のうつゝの一こゑはゆめにまさらぬ時鳥かな

○續後拾遺に常磐井入道、たちかへり鳴けや五月のほとゝぎすやみのうつゝの道まどふがに

○續拾遺に隆博、一こゑのあかぬなごりをほとゝぎすきかぬになして猶やまたまし

○新拾遺に後鳥羽院、さのみやは心あるべきほとゝぎすねざめのそらに一こゑもがな

○玉葉集に宣直、我ための初音とのみやほとゝぎすおなじねざめの人やきくらむ

〔増〕古今集夏にのみ人知らず、こそ夏なきふるしてし時鳥それかあらぬか聲の變らぬ

○草菴集 いづかたときゝだにわかて過にけりねざめの空の山ほとゝぎす

○新千載に頼遠、たれに猶しのぶの山のほとゝぎす心におくのことかたゐらむ

正平十二年内裏五首歌中に曉郭公を

冷泉入道前右大臣

一こゑの名残有明の月影に更に待たるゝほとゝぎすかな

寢覺郭公といふ事を

前中納言忠成

ひと聲を又もや聞くと時鳥寢覺のまゝにあかす夜半かな

新宣陽門院

一聲はそれかあらぬかほとゝぎす同じ寢覺の人に問はゞや

うへのをのこども題をさぐりて百番歌合し侍りける

ついでに郭公を

御製

ほのかなる寢覺の空の時鳥それとも聞かじ待つ身ならずば

題知らず

妙光寺内大臣

たれに猶忍ぶのさとの郭公あかつきふかき雲に鳴くらむ

○氣色のもりは大隅にあり六帖の歌に大隅のけしきのもりとよめり

○此集雜上に御製、子規そなたの空にかよふならばやよやまてとてことづてましを○やよやまては古今集の歌をとれり

○拾遺集に忠見、いづかたに鳴きて行くらむほととぎすよどのわたりのまだ夜ふかきに

○新後拾遺集に淨阿、老が身の寝ざめの後やあかつきのゆふつけ鳥も八聲なくらむ○ゆふつけ鳥は木綿付鳥にて鶉なり夕告鳥にはあらず
〔塔〕 此集雜上に御製、一聲にあくる夜ならば曉の夕つけ鳥はいかゞ鳴くらん」とあり

○金葉集に顯隆、山里のかど田のいねのほのくとあくるもしらす月をみるかな○續後拾遺に關白、しがらきのまきのこずゑもかすむなりあくる外山のよこぐものそら

正平二十年内裏四季歌合に

なきぬべきけしきの杜のむら雨に忍びもあへぬ郭公かな

聞郭公といふ事を

前大納言季繼

啼すてゝ行かた知らぬ時鳥やよや待てともえこそしたはね

正平八年内裏千首歌中に夜郭公

前大納言光任

この里はまだ夜ふかきに時鳥なきてや人の寢覺まつらむ

内裡百番歌合に

中務卿宗良親王

八こゑ鳴け寢覺の空の時鳥夕つけ鳥のおなじたくひに

曙郭公といふ心を

妙光寺内大臣

ほのくとあくる外山の横雲に鳴きてわかるゝ郭公かな

吉野の行宮にて百首歌よませ給うける中に聞郭

○續後拾遺に在良、都人まつらむも
○を山里にきよふる時鳥かな
○詞花集に道命、山里のかひこそな
けれ時鳥みやこの人もかくやまつら
む

○新續古今集に内大臣、おきなれて
明けぬとやしる鳥のねもきこえぬ山
をいそぐたび人

○古今集雜上ちはやふる宇治の橋守
なれをしぞあはれとは思ふとしのへ
ぬれば ○なれは汝なり其方と云はむ
が如し

〔増〕 古今集戀四に月夜よし夜よし
と人につげやらばこてふに似たり待
たずしもあらずとあるに依りて「や
みを夜よし」とよめるならん

○古今集にしげかげ、あし引の山た
ちはなれゆくくものやどりさだめぬ
世にこそ有りけれ

○新拾遺に定宗、今もなほつれなめ
りけり郭公おのが五月のそらたのめ
して

○拾玉集 ほととぎすたかつの宮に
くればとりあやしきまでのこゑのい
るか

公といふ事を

中 宮

聞きなるゝ山ほととぎすこの頃や都の人ははつね待つらむ

住吉社三百六十番歌合に夏動物

よみ人知らず

鳥の音のなべて聞えぬ山にしもなれはなきける郭公かな

雨中郭公といふ心を

郭公なれを待たずば五月雨のやみを夜よしと思はましやは

題しらず

嘉 喜 門 院

足曳のやまたちはなれ郭公おのが五月はさとなれにけり

て鳴く御集

前中納言爲忠

時鳥己が五月のくれはとりあやめも知らぬ時と鳴くなり

五月五日菖蒲の根につけてたまはせ侍りし

○李花集云延元四年五月五日吉野に
 ○新待賢門院いまだ准后と申侍りし
 比又菖蒲の根にそへて○わきてわが
 たのむ心のふかき江にひけるあやめ
 のねとはしらなむとほせられし御
 返事に○ふかき江も云々○後にま
 りたりしにきても菖蒲の御歌は内の
 御かたよりおほせられし由御物かた
 り有りしとなり
 ○拾玉集一、我戀は人しれぬまのあ
 やめ草君が心にひくとさかばや
 ○續拾遺に雅具、あやめ草一よばか
 りの枕だにむすびもはてぬ夢のみじ
 かさ

○後水尾院當時年中行事云あやめの
 枕ワスエフニツツム一対ゆひ御枕も
 とにありうすえふは極蔭調進す御枕
 は勾當の内侍よりいたす也其やうあ
 やめをたけ五六寸ばかりに伐て五寸
 ばかりにあとさきを紙捻にて結ひて
 兩方の小口にさしはさむ云々

○風雅集に承覺、くちのこる軒のか
 けひをつたひきて庭にしたゝるこけ
 のした水

○續千載に爲世、山川の岩にせかる
 う音もなしうへこす波のさみだれの
 ころ

○新後拾遺に光正、水まさる淀のわ
 かごも末ばかりもえしににたる五月
 雨のころ

櫻雲 李花集上

わきて我が頼む心の深き江にひける菖蒲のねとは知らなむ

御返し

中務卿宗良親王

櫻雲 李花集上

ふかき江もけふぞかひある菖蒲草君が心にひくと思へば

羈中百首歌よみ侍りしに菖蒲を

櫻雲 李花集上

あやめひく今夜ばかりや思ひやる都も草のまくらなるらむ

題しらず

上野太守永親王

うづもれし苔の下水音たて、岩ねをこゆる五月雨の比

よみ人しらず

宗良親王千首河五月雨

山川や音そふ浪の岩こすげ葉ずゑもしたにさみだれの比

前大納言守親

まこもかる人こそ見えね山城の淀の渡りの五月雨の比

○山家集 ひるせ川わたりの沖のみ
をつくしみかさそふらし五月雨のこ
ろ

○古今集に友則、天の川あさせしら
波たどりつゝわたりはてねば明けぞ
しにける

○續古今に行能、さみだれに水のみ
な上すみやらでさらすかひなき布引
のたき

〔増〕糸のみだれと言ひかけたれば
松井本に「の」字あるを善しとす

○新續古今に祐殖、さらしえぬいろ
かとぞ見る五月雨ににごりておつる
布引のたき

○新千載に雅經、久方のくもの波こ
す瀧の上のみ舟の山のさみだれのこ
ろ

○耕雲千首 しげりあふしのぶのつ
ゆの五月雨にいとふるやの軒やく
ちなむ

○萬葉集十二に君があたり見つゝも
をらむいこま山くもなたなびき雨は
ふるとも

○新後拾遺集に貞秀、なにはより見
えし雲まのいこま山今はいづくぞさ
みだれのころ

百首御歌中に五月雨を

後村上院御製

五月雨はみかさぞまさる山川の浅瀬白浪たどるばかりに

正平八年内裏千首歌中に瀧五月雨を

前中納言爲忠

うちはへて晒す日もなし布引の瀧の白糸の五月雨の比

イの字なし

あなじ心を

冷泉入道前右大臣

五月雨に濁りて落つる瀧の上の御舟の山は雲ぞかゝれる

山五月雨といふ事を

前内大臣 隆

茂りあふ梢は雲にうづもれて山の端見えぬ五月雨の比

題しらず

權中納言經高母

君があたり幾重の雲か隔つらむ伊駒の山の五月雨の比

○新拾遺に義詮、今日見れば川波た
かしみよし野の六田のよどの五月雨
のころ

○李花集云信濃國いなと申處に侍り
しころ五月雨はれまなかりしに都へ
申つかはしける

○二句李花集にみさかと有ぞ正しか
りける長秋詠藻に五月雨に木曾のみ
さかをこえわびてかけちに紫の巻を
ぞさす

○五百番歌合に百十一番○左勝、經
高、むかしたれはな橘にしのをとて
云々○右資氏まつになどつれなきも
のと契りけむ心もしらぬほとよぎす
かな○判、うつしうゑし花橘の袖の
香もけにまたしらぬ時鳥かな

○新後拾遺に淨阿、ふる郷の花立は
なにむかしたれ袖の香ながらうつし
うゑけむ

吉野の行宮にてうへのをのこども題をさぐりて歌よ
み侍りける次に五月雨といふ事をよませ給うける

後醍醐天皇御製

都だに淋しかりしを雲はれぬ吉野の奥の五月雨の比

信濃國に侍りし頃都なる人のもとへ申つかはし

侍りし

中務卿宗良親王

櫻雲 李花 みさかの李花集

思ひやれ木曾のみかさも雲とづる山の此方の五月雨の比

五百番歌合に

權中納言經高

昔たれ花橘に忍べとて袖の香ながらうつしうゑけむ

題しらす

前中納言爲忠

しげりあふ信太の森の下草は千枝の梢に猶まさりけり

關白家三百番歌合に夏草深といふ事を

○六帖二 いづみなるしのだの杜のくすの木の子枝にわかれてものをこそ思へ
○詞花雜上に内大臣、くまもなくしのだの杜の下はれて千枝のかずさへ見ゆる月かげ

○夫木抄八に後九條内大臣、泪こそつゆとおくらめほとゝぎすおのが夏野の深草の里

○類題に爲重、朝ごとのつゆより秋をまづ見せて花をいそぐ庭のなつ艸
〔附〕「からでや」とあるを可とす夏草を茹らずして秋に至りて花咲く時を待たんと云ふ意なり

○新勅撰夏に家隆、風そよぐならの小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるしなりける

○續千載釋教に公澄、三日月のくもるにたかく出ぬればかすみもきりも立ちぞへだてぬ
○後拾遺雜一に頼家、しきたへの枕のちりやつもるらむ月のさかりはいこそねられぬ

○古今集・初雁のはつかにこゑを聞きしよりなかなぞらにのみもの思ふかな

權中納言實興

ふみわけしそのかよひ路も今更に迷ふ夏野の深草の里

夏草を

から松井本

後醍醐天皇御製

茂るとも庭の夏草よしさらばかくてや秋の花を待たまし

夏の歌中に

權大納言公夏

風そよぐならの葉がくれ影見えて曇るも涼し夏の夜の月

文 貞 公

山のはに霞も霧もたちそはぬ月のさかりは夏の夜のそら

千首歌奉りし時夏月易明といへる事をよみ侍りける

關白左大臣

山のはのつらさを知らて夏の夜は半天にのみ残る月哉

題しらず

二品法親王聖尊

○伊勢物語○新古今、ときしらぬ山はふじのねいつとてかゝのこまだらに雪のふるらむ

○古今○伊勢物語、大かたは月をもめてじこれぞこのつもれば人の老となるもの

○續千載夏に定家、夏衣かとり浦のうたゝねに波のよるゝかよふ秋風

○近江國高島郡、下總國香取郡とも香取の浦ありいづれにか

○續後拾遺戀三に爲道女、夢にても見つとないひそなにはなるあしのかりねの一夜ばかりは

○續後拾遺に忠房親王、夏刈の玉江のあしのみじか夜に見るそらもなき月のかげかな

○玉江は津の國なるべし越前にも有りといへり勝地叶懷編考ふべし

○詞花集冬に家成、いろゝにそむる時雨にもみちばはあらそひかねてちりはてにけり

時しらぬ山こそあらめ夏の夜の月さへこほる富士の川浪

後醍醐天皇御製

短夜の月をばめてじあぢきなく傾きやすき影も恨めし

妙光寺内大臣

明けぬるかはや影薄し夏衣かとり浦のみじか夜の月

前大納言光任

灘波瀉芦のかりねの夢さめて袖に涼しきみじか夜の月

夏曉月を

後村上院御製

夏かりの玉江の芦の夜もすがら待ち出づる月は有明のそら

百首歌よませ給うける中に螢を

月夜にはあらそひかねてむば玉の闇ぞほたるの光なりける

題しらず

よみ人しらず

○後撰又大和物語に武藏、かずならぬみにおくよひの白玉はひかりみえさすものぞ有ける
 ○雪玉集 ゆくへなき思ひそへてや玉すだれ光みえさすよひのほたるは
 ○草葺集 草ふかみ見えぬ野澤の埋れ水ありとやこゝにとぶほたるかな
 ○螢化辨云傳云齊草化為螢世人信之
 久矣文政甲辰歲初夏以木鐸過綾南入二分里路邊楊柳及蒿薇枝葉間著如綿絮者無數予異問之同行之人則云螢之將化也予茫乎驚怪旁問之里人皆以為然予於是視其絁中一赤首既已生矣於是乎予初知草化之謬也云々
 ○月令云季夏之月腐草化為螢
 ○柳川陰百首に顯仲 五月雨に草くちにつけりわがやどの蓬がそまにほたるとひかふ
 ○山家集 わけかねし袖につゆをばとめおきてしもにくちぬる眞野の萩原
 ○新撰字鏡云焚蟻二形同、胡永反保太留
 ○新拾遺夏に寛馨、くもかゝる夕日はそらにかげろふの小野のあさちふ風ぞすゞしき
 「かげろふの小野」また「かたちの小野」など云ふは萬葉の誤訓より出でたる詞なり「あきつの小野」と云ふべし
 ○新續古今に後九條前内大臣、とぶ螢いはもる水にやどる夜はおもひやいとゞわきかへらむ

卷 第三夏歌

あしまゆく野澤の螢たえくゝに光見えさす夕やみの空

水邊螢をよませ給うける

後村上院御製

夏草のしげみがしたの埋れ水ありと知らせて行くほたる哉

千首歌よみ侍りける中に野螢といふ事を

春宮大夫師兼

春日野や霜に朽にし冬草の又もえ出でてとぶほたるかな

題しらず

妙光寺内大臣

なれも又思ひにもえてかげろふの小野の浅茅に飛ぶ螢かな

百首歌よみ侍りける中に螢

右 大 臣

飛螢もえざばいかで身にあまる思ひ有りともしよそに知らまし

○新千載に一條、なには人しのびにとしもおもはじをこやに夜ふけてうつころもかな

○萬葉集七 沙みてば入りぬるいの草なれや見らくすくなくこふらくのおほき
〔増〕新續古今夏に宗尊親王、打躰ぞく野嶋が崎の夏草に夕浪かけて浦風ぞ吹く

○五百番歌合に百四十八番、左勝○長親、しげりあふ櫻が下の夕すゞみ云々○右太宰帥親王、立かへり又やむすばむ松がねのいはまおちくる水のしら波○判、風をまつさくらが下のゆふ涼み花のときよりめづらしきかな
〔増〕「いとひし風」とある方よろしからん、金葉集春に雅定、ちりはてぬ花のありかを知らすればいとひし風ぞ今日ほうれしき

○拾玉集二 山かげのいは井の水にやどしめて夏をよそにも過しつるかな
○拾遺愚草員外 住見ばや岩もる清水手にくみて夏よそげなる松の木の

○風雅集に進子内親王、雨はれ、てつゆ吹はらふ梢より風にみだるゝせみのもるごゑ
○新撰字鏡云蟬ハ時旃反蝸也世比蝸虫尾又世比蝸世比

おなじこゝろを

前中納言爲忠

もえあまる芦のしのびの思ひゆるゑこやに夜ふけてとぶ螢哉

納涼の心を

新宣陽門院

夏の日の入りぬる磯の松がねに夕浪かけて風ぞ涼しき

五百番歌合に

右近大將長親

しげりあふさくらが下の夕すゞみ春はうかりし風ぞ待たるゝ
いとひし歌合

内裏五十番歌合に

左近大將公長

せきとむるいは井の清水底清み夏のよそなる松のした陰

樹上蟬といへるこゝろを

前中納言實秀

山もとの柳の梢うちなびき風にしたがふ蟬のもろごゑ

夕立をよませ給うける

後村上院御製

なるかみのおとは雲井に高砂の松風ながらすぐる夕立

○新後拾遺に爲定なる神の音ばかりかときくほどに山風はげし夕立のそら
○鳴神は雷の聲を稱す萬葉集に動神とかけり河國帝通記に雷は天地之鼓也といへり
○風雅集に公重、おちすさぶ眞木の下つゆなほふかし雨のなごりのきりの朝あけ

○玉葉春下に仲綱、さきまじる花をわけてや白くもの山をはなれて立のぼるらむ

○五百番歌合に百三十七番

左持○前關白、ふるほどはむすびもあへず夕立の云々

右○具氏、打なびき草のしげみをふく風につゆもたまらぬ夕立のそら○判、いづれとも分ぞかねつる野へはみなおなじ草葉の夕立のつゆ
〔誓〕「夕立のあと」原本「夕立のみち」とあり歌合に依りて訂正す

○古今集 たがみそぎゆふつけ鳥かからごろもたつたの山にをりはへてなく

○麻をみそぎの具とし麻の葉を流す也、好忠歌に、我まきしあきをのたねを今日見ればちへにわかれて風ぞ涼しき

題しらす

前參議持房

いかばかりまきの下露みだるらむ夕立すぐる風の名残に

正三位國夏

空はなほ曇りかねたる夏の日山をはなれぬ夕立のくも

五百番歌合に

予歌合

入道前關白左大臣

ふるほどは結びもあへて夕立のあとの草葉にしげきつゆ哉

住吉社三百六十番歌合に夏雜物

よみ人しらす

たがみそぎ夕浪かけて川の瀬の麻の葉ながし風ぞ涼しき

新葉和歌集 卷第四

秋歌上

千首歌奉りし時立秋風をよめる

中務卿宗良親王

新續古今よみ人しらす

浅茅生の小野の篠原風そよぎ人知るらめや秋立ちぬとは

新續古

題しらす

前中納言爲忠

夏と秋と行合のわせのほのくと明くる門田の風ぞ身にしむ

千首歌たてまつりし時初秋曉を

右近大將長親

あかつきの寢覺の床に露ぞおく枕もいまや秋を知るらむ

新葉和歌集卷四頭註

○古今集 浅ぢふの小野のしの原しのぶとも人しるらめやいふ人なしに
○新續古今に四辻入道、神垣の月ぞすいしき夏と秋とゆきあひのまの霜と見るまで

○續後拾遺に基隆、彦星のつま待つ秋もめぐり來てゆきあひのわせはほに出にけり

○金葉に顯隆、山里のかど田のいねのほのくとあくるもしらず月を見るかな

○新千載集、こし方をおもひ出でずはあかつきのねざめの床やまびしからまし

○續後撰秋上に隆信、今さらにきけばものこそかなしけれかねておもひし秋のはつ風

○源氏推本卷云、都にはまだ入たぬ秋のけしきを音羽の山近く風の音もいと冷にまきの山べもわづかに色づきて云々

○雪玉集 音羽山けさふく風やみやこにはまだ入りたぬ秋をつぐらむ

○續撰吟に爲廣、きゝわびぬ世のはげしさもあすに明けてきのふにかはる秋のはつ風

○新古今秋上に基俊、秋風のやゝはださむくふくなべにをぎのうは葉の音ぞかなしき

○續後拾遺に宮内卿、住吉の松にしらゆきふるからにこそよわりぬる沖つしほ風

○新千載秋上に師賢、くもの上の月もいくよかなれぬらむ秋くるかたのとのへ守る身に

春宮大夫師兼

今よりは寢覺の床のあはれまでかねて知らるゝ秋の初風

源氏物語の言葉にてよませ給うける御歌の中に

中 宮

都にやまだ入りたぬ秋ならむおとはの山は風ぞ身にしむ

秋の御歌中に

新待賢門院

けさははや萩のうは葉に音たてゝ昨日にも似ぬ秋の初風

正平十八年内裏にて人々題をさぐりて百首歌

よみ侍りける時初秋の心を

福恩寺前關白内大臣

住吉の松に涼しく聞きそめつ秋くるかたのおきつしほ風

兵部卿親王家にて百首歌よみ侍りける中に

○續拾遺に通忠、阿のへやいつともわかぬ松風の身にしむほどに秋は來にけり

○後撰に躬恒、すゞか山いせをのあまのすて衣しほなれけりと人や見るらむ

○伊勢物語云つとめて其家のめのこども出てうきみるの波によせられたるを拾ひて家の内にもて來ぬ

○續後拾遺に爲藤、つゆむすぶしのをすゝきほにいでゝいはねどしるき秋は來にけり

○類題に爲氏、打つけにまづぞ身にしむ秋來ぬといふばかりなる萩のうは風

○續拾遺冬に宗尊親王、村くものあとなきかたもしぐるゝは風をたよりのこの葉なりけり

○狭衣物語、身にしみて秋は來にけり萩原や末こそ風のおとならねども

心なき伊勢をの蜚も潮風の身にしむよりや秋を知るらむ
ほア本

海邊初秋を

中務卿宗良親王

浪によるみるめに秋は無けれども松に音そふ浦かぜぞふく

關白家三百番歌合に薄未出穂といふ事をよめる

前内大臣顯

類題

風吹けば露ちる小野のしの薄ほにこそ出てね秋はきにけり

建武二年内裏千首歌中に

中務卿尊良親王

いつしかも吹けば身にしむ萩の葉の風を便に秋はきにけり

正平廿年内裏三百六十首歌中に萩知秋といふ事を

從二位儀子

○那瑯代醉編引三述異記云天河之東
 美麗女人乃天帝之子機杼女工年々勞
 役織成雲霧綉天帝憐其獨苦殊無歡容
 貌不暇整理天帝憐其獨苦殊無歡容
 牛之夫婿自後竟織經一年一度與牽牛相
 會帝怒竟歸河東但使一年一度與牽牛相

○古今集 一つはりのなき世なりせ
 ばいかばかり人のことのはうれしか
 らまし
 ○宋雅千首、偽のある中ならばたな
 はたもまつに心を猶やつくさむ
 ○續拾遺に後鳥羽院彦星のかざし
 のたまやあまの川水かげ艸のつゆに
 まがはむ

〔増〕水かげ草とは萬葉十の卷七夕
 の歌に天漢水陰草とあるを舊訓に
 ミツカゲ草とよめるより出でたりさ
 れど陰は隱の義に用ひたればミコモ
 リ草と讀むべし水中に生ずる草なり
 ○古今集に素性ぬれてほす山ぢの
 菊のつゆのまにいつか千年を我はへ
 にけむ
 ○新撰に左大臣、天の川水かげ艸
 のつゆのまにたまへ來てもあけぬ
 此夜は

○李花集云七月七日よみ待りし
 ○新續古今に花園院冷泉、かきくら
 す涙のひまのあらばこそいまのわか
 れの御も見ぬ
 ○類題に經有、なびきける水かげ艸
 にしられけり二のほしのかよふ心は

秋きぬと誰か知らまし下萩の末こそ風の音にたてずば

同十三年七夕七首歌講ぜられし時待七夕といふ

事をよませ給うける 後村上院御製

偽りのなきためしをや契り置きて待ちならひけむ星合の空

七夕橋 冷泉入道前右大臣

暮れゆかばあふ瀬にわたせ天の川水かげ草の露のたまはし

題しらず 妙光寺内大臣

暮をまつ水かげぐさの露のまに千とせの秋をふる泪かな

よみ人しらず

待ちえつる泪のひまの秋かぜにこよひや袖をほしあひの空

興國五年七月七日内裏にて人々歌つかうまつ

りける中に 四條贈左大臣

○五百番歌合に百六十二番
左持○實興 まとほなる契ながらも
秋をへて云々○右、成直 夕ぐれは
風のやどりとなりはて、つゆこそな
けれ庭の萩原○判、星合の契のかず
にむすびおけばつゆもまれなる庭の
をぎ原

○草莽集 まれに來てうらみながら
や棚機の天の羽衣たちかへるらむ

○伊勢物語 これやこの天の羽衣諾
しこそ君がみけしと奉りけれ

○酉陽雜俎云天人衣無經緯搜神記
に毛衣といへるや羽衣なるへき

○新後拾遺に爲子、ふちは瀬にかは
らぬほど天の川としのわたりの契
にぞしる

〔増〕萬葉第十、玉かつら絶えぬも
のから、さぬらくは年のわたりに只
一夜のみ

○此集編旅部に、けふのみと思ふ我
身の夢の世にわたるもつらしせたの
長はし

○新勅撰に前關白、そらならばたづ
ねきなましうめの花まだ身にしまぬ
にほひとぞ見る

今年より君にし契れ雲の上にふたつの星の行あひの空

五百番歌合に

權中納言實興

まどほなる契りながらも秋をへてぬる夜數そふ星あひの空

題しらず

前中納言氏定

棚機のあまの羽衣きても又かへるうらみの數やかさねむ

正平十三年内裏七夕七首歌中に七夕後朝を

遍照光院入道前太政大臣

天の河今朝しらなみの立歸り年のわたりを又や待つらむ

おなじ心を

幸子内親王

立かへりわたるもつらし棚機の今朝はうきせの天の川浪

萩をよみ侍りける

前内大臣 隆

吹風はまだ身にしまで萩の葉のおとばかりなる秋の夕暮

○師兼千首 天つ空たが言づてと知らねども秋ぞとつぐる萩の上風
○永徳百首に關白、植おきて心づからにあき風をきよそわぶれ庭の萩原

○新續古今に永助、秋來ての風のやどりはこよにのみありとやそよぐ庭の萩原

○寶治百首に御製、たのめおく人なきよひも秋風のそよとおどろく庭の萩原

○李花集云 山里の秋のけしきやうやうものかなしう侍りしに萩の風を開て、今よりはものおもへとや萩のはにあつらへつくる秋のはつ風○夕ぐれはよきてと思ふ云々

○後拾遺集 いかにせむあなあやにくの春の日や夜はのけしきのかよらましかば

○新撰字鏡云吟哥也憎也責也阿夜爾久、生憎可憎をあやにく又あなにくと訓めり

○續古今に中務卿親王、あはれうき秋の夕のならひかなものおもへとは誰をしへけむ

閑居秋風といふ事を

新宣陽門院

訪ふ人もなき宿からのさびしさを秋ぞと告ぐる萩の上風

題しらず

冷泉入道前右大臣

心から又うゑおきて萩の葉にこぞもうかりし風を聞く哉

千首歌奉りし時庭萩といふ事を

權中納言經高

うき秋の風の宿りとなるたびに植ゑてくやしき庭の萩原

秋の歌の中に

中務卿尊良親王

そよとのみ庭の萩原吹く風にこぬ人頼むやどぞさびしき

よみ人しらず

夕暮はよきてと思ふ萩の葉にあやにくに吹く風の音かな

李花集上

秋夕の心を

掌侍頼子

○續後拾遺に聖尊、津の國のなにはの事も偽は後の世かけてあしとこそそきけ

○續古今に左大臣、なに事と心にものはわかねどもあはれとぞ思ふ秋の夕ぐれ

○山家集 波ちかきいその松がね枕にてうらかなしきはこよひのみかは
○續古今に太政大臣、ながむれば心に落つる泪かないかなるときぞ秋の夕ぐれ

○拾玉集 白つゆのやどゝなりぬるあさちふも人のすみかのゆくへなりけり

○新後拾遺に伏見院、ふけぬるかつゆのやどりも夜さむにてあさちが月に秋風ぞふく

○淮南子云梧桐一葉落而天下知し秋
○雪玉集 桐のはもこのま見えつゝ、つゝみつゝいつより秋の風はふくらむ

あはれてふならひにそへて身をあきの夕べは袖に露ぞ隙なき

入道前右大臣

津の國のなにはの事とわかねどもうらがなきは秋の夕暮

源重春朝臣

こゝろなき尾花が袖も露ぞおく秋はいかなる夕べなるらむ

家にて人々題をさぐりて千首歌よみ侍りける

中に古郷露

福恩寺前關白内大臣

夜な〜の露の宿りに成にけり浅茅が原とある、古郷

住吉社三百六十番歌合に秋植物を

よみ人しらず

桐の葉もたゞやおつるわが泪おなじくさそへ秋のゆふ風

秋雨をよませ給うける

時 ○白氏文集長恨歌に 秋雨梧桐葉落

○風雅集に西園寺女、秋の雨にしを
れておつる桐の葉はおとするしもぞ
さびしかりける

○新勅撰に家隆、ふる郷の庭の日か
げもさえくれてきりのおち葉にあら
れふるなり

○玉葉に章義門院、さきやらぬ末葉
の花はまれに見えてゆふつゆしげき
庭の萩原

○後撰集に嵯峨后、ことしげしげ
しはたてれ宵のまにおけらむつゆは
出てはらはむ

○萬葉集八に さをしかの萩にぬき
おけるつゆの白玉あふさわにたれの
人かも手にまかむちふ

○守房父は藤原定房にて經長權大納
言の孫也春上卷宗房の注考併すべし

○禁秘抄曰萩戸又常御所也不限萩色
々萩花皆被植之

○夫木鈔に爲家、咲やらぬ萩の戸わ
たる村雨に玉しく庭を見する白つゆ

○宗隆云萩戸は清涼殿の内の御名也
然に秋草を栽らるゝと云ふはおぼつ
かなし又餘のことわり有や考ふべし

○古今集に 紫の一もとゆゑにむさ
し野のくさはみながらあはれとぞ見
る

後村上院御製

おとづる、桐の落葉もまがふらし憐れな添へそ秋の村雨

題しらす 新待賢門院

花はまだ片枝ばかりに咲そめて露のみしげきにはの萩原

嘉喜門院

萩がえにおけらむ露の白玉をはらはで見せよ野べの秋かぜ

後村上院御製

にしきかと見るだにあるを秋萩の花にむすべる露の白玉

前大納言守房

萩のとの花も色そふ白露に千世のかず見る玉しきの庭

前中納言爲忠

原萩をよみ侍りける
むらさきは一もとならで秋はぎの花も色こき武藏野の原

〔增〕「いもたらぐ」とは紫草一本の
みにはあらで萩も紫色に咲けりと云
ふ意、古今集秋下、一本と思ひし花
を大澤の池の底にも誰か植ゑけん
○古今集に 春がすみたなびく山の
さくら花うつろはむとやいろかはり
ゆく

○新後撰に定家、かたみこそあたの
大野の萩のつゆうつろふいろはいふ
かひもなし

○夫木に爲家、とまらじなねての朝
けの花すゝき岡のやかたに人まねく
とも

○淮南子云虞公與夏戰日欲落以
劍指日日還不落

○又云魯陽公與韓搆難戰酣日暮
援戈而搆之日反三舍

○夫木十一に 保安二年九月歌合、
庭もせに玉ときちらす白つゆのみだ
れてぬける糸薄かな

○俊頼云糸薄とよめる證歌を可進云
々基俊不答云々

關白家三百番歌合に萩欲移といふ事を

前中納言實秀

おく露もうつろはむとや秋萩の下葉をかけて色かはりゆく

萩欲散といふ心をよませ給うける

後村上院御製

萩が花うつろふ色に高砂の尾上の風は吹かずもあらなむ

建武二年内裏千首歌中に薄を

中務卿尊良親王

とまるべき宿をばさてもいづくとして野への尾花の人招くらむ

千首歌よませ給うける中に岡薄を

御製

夕風になびくをかべの花すゝき入目をかへす袖かとぞ見る

○續古今に太上天皇、糸すゝきこなたかたに裁おきてあだなるつゆの玉の緒にせん
 ○五百番歌合に百八十七番、左勝、前關白 おく山の松ふく風にたぐひ来て云々○右、具氏 秋さむくなり行く風の夕ぐれやむしもうらみみ音をばなくらむ○判、鹿のねをたぐへてきつる松風にあさちが虫のなどよわるらむ
 ○古今集に 雁のくる峰の朝ぎりはれずのみおもひつきせぬ世の中のうさ
 ○新續古今に宗仲、小倉山みね立ならすほどなれや月のあたりのさをしかのこゑ
 ○紫禁和歌草 いろかはる野ぢのはき原朝な／＼つゆわけなるゝさをしかの聲
 ○拾玉集、夫木抄十二 さをしかの立田の山のもみぢばやおのが泪のいろとなるらむ
 ○新古今冬に公衡、かりくらしかた野の眞柴折しきて淀の川せの月を見らかな○交野に淀をよみ合せたるはこれや始なるべき
 ○續千載に大中臣爲實、あふことはかたのゝみのゝまくずはらうらみもあへずつゆぞこぼるゝ

秋の歌の中に

右近大將長親母

秋風の吹かぬたえまは白露の玉の緒ながき糸すゝきかな

五百番歌合に

入道前關白左大臣

おく山の松吹く風にたぐひきて軒端に近きさをしかの聲

朝鹿を

御製

小倉山峯の朝霧立ならしおもひつきせぬさをしかの聲

秋歌の中に

文貞公女

聞く人も袖ぞぬれける秋の野の露わけて鳴くさを鹿の聲

興國五年内裡にてひと／＼題をさぐりて歌よみ侍

りける時夜鹿を

民部卿親忠

夜もすがらおのが涙に曇るとも知らでや鹿の月に鳴くらむ

題しらず

菅原爲基

〔増〕 かた野は河内國交野郡淀川の
附なり交野の御野とも交野の小野と
も云へり金葉集冬ことわりや交野の
小野に鳴く雉子さこそは狩の人はつ
らけれ

○月清集 秋の夜は小野のしの原風
さえて月かげわたるさをしかの聲

○玉葉冬に鶯敷、すみのぼる空には
くもるかげもなし木かげしぐるゝ冬
の夜の月

○萬葉集十四に 坂こえて阿部の田
のものゐるたづのともしき君はあす
さへもがも

○後撰集 うき世とは思ふものから
あまのとのあくるはつらきものにぞ
有ける

○五百番歌合に百九十一番
左勝○女房、風はやみしぐるゝくも
のたえんくに云々○右、頼意 くも
りなきみよのしるしに今も引くむか
しながらのもちづきのごま○判、み
ねこゆる雁がねわたる梯にひきお
れたるもちづきの駒

あふ事は交野のみ野のさをしかや淀の渡りの月に鳴くらむ

右 大 臣

有明の空になるまで聞ゆなり月影したふさをしかのこゑ

よみ人しらす

秋山の木陰しぐれて鳴く鹿のおのれもそむる聲の色かな

從三位行義

むら雨のすぎゆく雲は坂こえてあべの田のものに秋風ぞ吹く

中院入道一品

誰かはと思ふ物から故郷のたより待たるゝはつ鴈のこゑ

五百番歌合に

御 製

風はやみしぐるゝ雲もたえんくに亂れてわたる鴈の一つら

題しらす

左大辨時長

○續古今集に中務卿親王、松風もはげしくなりぬたかさごのをのへのくもの夕立のそら
〔增〕秋の夕霧を原本「秋の夕暮」とあり松井本に依りて訂正す

○筏おろす竿を佐保川にいひかけた
り但竿は佐良なり後世は高瀬さすさほの川原などよめる歌多し頼阿法師が青柳の花田の糸を染かけてさほの川原に今や干すらむとよめるも佐保川に竿をそへたるなり

○大和志吉野郡古蹟部云後醍醐帝皇居在賀名生莊和田村傍有華藏院故址古鐘勒曰河内國高福寺鐘、康永元年八月鑄、里人云昔日楠氏獻焉
○南朝公卿補任云正平七年正月皇居改穴太被稱賀名宇云々五月十一日自八幡還幸同月十二日着御賀名宇皇居
○延喜式大和國宇知郡丹生川神社

○續後撰集に長時、水まさるなには入江のさみだれにあしべをさしてかよふ舟人

○新續古今に左大臣、住吉の沖つ汐あひは見えわかでかすみにうかぶあはぢしま山

松風のおとはきこえて高砂の尾上をこむる秋の夕霧

正平廿年内裏七百首歌中に霧底筏を

妙光寺内大臣

筏おろすさほの川かぜ吹きぬらしうきてながる、秋の夕霧

賀名生の行宮にて人々歌よみ侍りける中に

冷泉入道前右大臣

忘れめやみかきに近き丹生河のながれにうきてくだる秋霧

秋歌の中に

紀種文

難波がた入江も見えず立こめて霧より出づる秋の舟人

從三位國量

住吉のおきをふかめて立霧にしづみ出でぬるあはぢ島山

五百番歌合に

前大納言光有

○五百番歌合に二百四十五番 左膝
○光有、もしほやく烟の末も見えそ
めて云々○右頼意、秋ふかきいろは
見えけりつゆしぐれそむるやしほの
岡のみみぢ葉○判者、秋深き浦ぢの
きりの朝あけにやしほの岡も見ねば
しられず

○拾遺愚草 我思ふ人すむ宿のうす
もみぢきりのたえまに見てやすぎな
む

○金葉○新古今に經信、月かげのす
みわたるかな天のはらくもふきはら
ふ夜はの嵐に

○玉葉に長家、天つ風くも吹はらふ
つねよりもさやけさまさる秋の夜の
月

○新拾遺に後醍醐院、夕つく日しぐ
れてのこる山のはのうつろふくもに
秋風ぞふく

○古今集 おそく出る月にもあるか
なあし引のやまのあなたも惜むべら
なり

もしほ焼く煙の末も見えそめて空よりはるゝ浦の朝ぎり

あき歌合

題しらす

後村上院御製

一木まづ霧のたえまに見えそめて風に數そふうらの松原

千首歌よませ給うける時夕月

御製

夕かぜの雲吹きはらふ半天にいでゝ夜をまつ月のかげかな

月歌の中に

入道前右大臣

出でそむる夕の影に知られけりさやけかるべき秋の夜の月

冷泉入道前右大臣

よそにたつ雲をもはらへ夕月夜うつろふ山の峯のあき風

中院入道一品

待つもうし山のあなたの里人となりてぞ月は見るべかりける

○續拾遺に基氏、くもあよりのどかにかすむ山のはのあらはれわたる春のあけぼの
○壬二集、天の原月にこぎ出るこゝちしてしばしやすらふさとのたなはし

○新勅撰に前關白、村くものみねにわかるゝあともめて山のはつかに出る月かげ

○新後拾遺に等持院、ほどもなく松よりうへになりけりこのまに見つる山のはの月

○續拾遺に淨助法親王、くもはるゝ三上の山の秋風にさゞ波とほくいづる月かげ

○五百番歌合に二百五番、左持、光有、秋風にくもゝのこらぬ山のはの云々

○右資氏、すみのぼる光もしるし名にしおふこよひぞ秋の中ぞらの月
○判者、山のはの梢をたかみ分いてて月のなかばの空の秋風

○大日本史曰祥子内親王藤原皇后所生也元弘三年爲伊勢齋一後入二保安寺爲尾

二品法親王仁譽

山の端のあらはれわたる程よりはしばしやすらふ月の影哉

關白家三百番歌合に山月初昇といふ事を

權中納言實興

月ははや山のはつかに出でそめて松のあなたに影ぞやすらふ

題しらず

新待賢門院

出でぬより光ばかりをさきだてゝ木の間に更くる秋の夜の月

貞子内親王

雲はるゝ遠山松の木の間より心つくさで出づる月かげ

五百番歌合に

前大納言光有

秋風に雲ものこらぬ山のはの梢をわけて出づる月かげ

月歌中に

祥子内親王

○壬二集に 秋のよのふもとをこむる夕ぎりにあたもらさるゝ山のはの月

○後撰集戀三、宿かへてまつにも見えずなりぬればつらきところのおほくも有るかな

○信明集、ありしよりつらきところもまさらなむかひなきよりはたえてやみなむ

○風雅集に冷泉前太政大臣、三笠山みね立のぼる朝日かげそらくもらぬ萬代の春

○新千載に長家、久方の月のくまなき秋の夜は人の心もすみまさりけり

○後拾遺に和泉式部、いづくにかきてもかくれむへだてつる心のくまのあらばこそあらめ

○李花集云正平十七年秋住吉の行宮よりことしの八月十五夜こそ月もおもしろかりしかいかど見つらむなどおほせられて「としへぬるひなのすまひの秋はあれど月はみやことおもひだにやれ」と有りしかば御返事に申侍りし「いかとせむ月も都と云々〇月に君おもひ出でけり秋ふかく我をばすての山となげくに

はるかなるふもとをこめて立つ霧の上より出づる山の端の月

李花集上
中務卿宗良親王

秋風にまよふ村雲もりかねてつらき所やおほぞらの月

建武二年人々題をさぐりて千首歌つかうまつり

ける時月といふ事をよませ給うける

新千載歌上
後醍醐天皇御製

見る人の心もなかすまざらん空にくもらぬ秋の夜の月

正平廿年内裏三百六十首歌中に禁中月を

妙光寺内大臣

見る人のこゝろのくまもはるゝまで猶すみまされ雲の上の月

中務卿宗良親王あづまに侍りし頃すみよしの行

宮よりたまはせ侍りし
後村上院御製

○玉葉に前太政大臣、思ひ入る山のおくまで身にそふは月も都やすみうかれにし

へぬま李花

年をふるひなのすまひの秋はあれど月は都と思ひやらなむ

だにやれ櫻雲 李花

御返し

中務卿宗良親王

が李花櫻雲

いかにせむ月も都と光りそふ君住の江の秋のゆかしさ

新葉和歌集 卷第五

秋歌下

五百番歌合に

關白左大臣

澄のぼる雲井の月に厭ふ哉衛士のたく火の夜半の煙を

延元三年九月十三夜うへのをのこども題をさぐり

て月三十首歌つかうまつりけるついでに月前雲と

いへるこゝろをよませ給うける

後醍醐天皇御製

わきて猶今宵ぞつらき夜半の雲月にはいとふ習ひなれども

月前霧

吉田前内大臣

月影や山のは遠くなりぬらむふもとの霧はたちもおよばず

○五百番歌合に二百十七番
 左○公長、見るまゝにあくがれはつ
 る心かな月やいづくにさそひ行くら
 む、右勝○關白 すみのぼるくも
 の月にいとふかな云々○判者、あく
 がるゝ心はなくて御垣守くもるに高
 き月になるらむ
 ○宮衛令曰理門至レ夜燃レ火、義解云
 謂内及中外三門皆衛士燃レ火也○春
 上に百敷やの歌の注考併すべし
 ○續古今に順徳院心あらば衛士のた
 く火もたゆむらむこよひぞ秋の月は
 見るべき
 ○中右記曰保延元年九月十三日今宵
 雲淨月明是寛平法皇明月無双之由被
 仰出云々仍我朝以九月十三夜爲明月
 之夜
 ○新千載に覺助、くれかゝるふもと
 の霧をわけすきてのぼればはるる山
 のはの月
 ○續後撰に家隆、旭さすたかねのみ
 雪そらはれてたちもおよばぬふじの
 川霧

○壬二集 秋のよのふもとをこむる
夕ざりにたちもらさるゝ山のはの月

○續拾遺に宗良親王、よそまではな
にかいとほむかつらぎや月にかゝら
ぬみねのしらくも

○新後拾遺に國量、いとゞ猶やへた
つくものさみだれによかはの水もさ
ぞまさるらむ

○新後拾遺に爲量、かつらぎやよる
とも見えず晴にけりくものよそなる
秋の月かげ

○夫木鈔三十一に家衡、くもや無き
をばすて山の秋のそら月ぞすみはる
さらしなの里

雨後月といへる事をよみ侍りける

與喜左大臣

心なきものとは言はじ雨晴れて月にかゝらぬ夜半のうき雲

水邊月といふ事をよめる

前中納言氏定

秋風や八重たつ雲をはらふらむ横川ヨカハの水にすめる月影

住吉社三百六十番歌合に

前左近中將光實

葛城やたかまの月の影ふけて雲ぞよそなるみねの秋風

民部卿光資

をばすての山の嵐に雲きえて月すみわたるさらしなの里

をばすて山ちかく住み侍りし比夜更くるまで月を

○李花集云 更科の里にすみしかば
 月いと愉くて秋ことに思やられし事
 など思出られければ「もろとも」に姑
 棄山をこえぬとは都にかたれ更科の
 月「同じ比の御詠にや」
 ○古今集「をくるさきみつ」の小島の
 人ならば都のつとにいざといはまし
 ○南朝紀傳云天授六年信州の宮方皆
 良親王背く高坂高宗はかりのこる河
 内國山田に住せたまふ九月十三夜關
 白左大臣冬賞公歌を詠て宗良親王に
 おくりたまふ「おもかげも見しには
 云々かへし」身のゆくへなぐさめか
 ねし云々
 ○或書云天授三年信濃の宮方そむき
 まゐらせ高坂高宗が外は皆御敵とな
 りしかば將軍宮信濃を御出ありて河
 内國山田といふ所に立忍ばせたまひ
 けり云々
 ○古今集○大和物語、我心なぐさめ
 かねつさらしなやをばすて山にてる
 月を見て○續古今に小町 あやしく
 もなぐさめがたき心かなをばすて山
 の月も見なくに
 ○新古今に頼政 かり衣われとはす
 らじつゆしげき野原の萩の花にまか
 せて
 ○續後撰に太上天皇 しほがまの浦
 のけふりはたえにけり月見むとのの
 あまのしわざに
 ○續古今に後鳥羽院 しほがまの浦
 のひがたのあけぼのにかすみみのこ
 るうきしまの松
 【誓】松井本に「月のくまなる」とあ
 るを善しとす

櫻雲
 見て思ひつゞけ侍りし
 中務卿宗良親王

これにます都のつとは無きものをいざといはゞや姑棄の月

中務卿宗良親王信濃國よりのぼりて河内國山田と

いふ所に住み侍りし比九月十三夜月いとあかゝり

しに申あくり侍りし
 關白左大臣

南朝櫻雲
 面影も見しにはいかにかはるらむ姑棄ならぬ山のはの月

返し
 中務卿宗良親王

身のゆくへなぐさめかねし心にはをば捨山の月もうかりき

野月を
 よみ人しらす

李花集
 わけきつる野原の萩を枝ながらうつしてすれる袖の月影

月歌中に
 妙光寺内大臣

しほがまの浦の煙もたゆむ夜に月のくまなきうき島の松
なる松井本

○玉葉に萬里小路右大臣、沖つ風ふけゆくまゝにあかしがたとわたる月のかげのさやけさ

○月清集 明石より浦づたひゆく友なれやすまにも同じ月をみるかな
○綴古今に平時茂、身のうさをなげかぬ秋のよはもあらばそてにくまなき月は見てまし

○拾遺員外、天の川ふ月は名のみかさなれどくの衣やよそにぬるらむ
○金葉集に俊頼、山のはにくもの衣をぬぎすてゝひとりも月の立のぼるかな

○玉葉に宗尊親王、くれぬとてとまりをいそぐ浦波に月のみふねぞいでかはりぬる

○井鞋抄云戸部云遠所千首御歌合家隆卿詠に又や見むまたや見ざらむ白つゆのと云歌を京極禪門あはれ大夫入道の又や見むかたの野み野の櫻がりには劣りたるものかな又や見むにて又や見ざらむは不足なきものをと云々○玉葉に少將内侍、心ゆくほどまでのぼれくらゐ山名だかき秋の月のしるべに

渡月をよませ給うける

後村上院御製

明石がたとわたる月の影ふけて雲も残らぬ秋のうら風

題しらす

從三位行義

明石瀉くまなき月にさそはれて浦づたひゆくあきの舟人

津守國久

すまの蜚の袖に限なき夜半の月雲の衣や間遠なるらむ

新宣陽門院

難波江や蘆の浦風更くる夜に月の御舟はさはらでぞ行く

正平十六年九月十三夜内裏にて人々題をさぐ

りて歌よみ侍りける時江上月を

冷泉入道前右大臣

又や見む松吹く風もすみのえや名だかき月の秋のこよひを

○續後撰に越前、月かげは氷と見え
てよしの川いはこす波に秋かぜぞふ
く

○志賀の都は天智天皇の大津の宮を
いふ古里とも荒にしともよめるは萬
葉集に過_三近江荒都と見えたるによ
れり○千載集に さざ波やしがの都
はあれにしを昔ながらの山ざくらか
な○古今集 袖人は宮木引くらしあ
しびきの山のやまびこよびとよむな
り_一宮木守は材木を守る人も又御園
の植木を守る人もいふ○新後撰に
法皇、春風にさきぬる花の宮木守心
ゆるすなやどのさくらを

○新古今に俊頼 ふる里はちるもみ
ち葉に埋れてのきのしのぶに秋風ぞ
ふく○和名抄云垣衣本草云垣衣一名
烏韭和名之乃布久佐

○拾遺集 わするなよほどはくもひ
になりぬともそら行く月のめぐりあ
ふまで_一衣の關は陸奥岩瀨郡にあり

○拾遺愚草 みやぎのに風まちわぶ
る萩の枝のつゆをかぞへてやどる月
かげ

月移河水と云ふ事を

兵部卿師成親王

吉野河岩こす浪にかげ見れば月もくだくる夜半の秋風

故郷月といへる事を

權大納言公夏

荒にける志賀の都の秋風にひとりや月の宮木もるらむ

千首歌奉りし時あなじ心を

關白左大臣

月だにも軒の忍ぶをもりかねてすまずなりぬる秋の故郷

題しらず

前中納言爲忠

露むすぶ袖をころもの關路とや空ゆく月も影とむらむ

貞子内親王

秋風の吹けばかつちる淺茅生の露を尋ねてやどる月影

住吉社三百六十番歌合に

○八雲御抄云寂蓮法師云歌のやうにいみじきものなし猪などいふおそろしきものもふすゐの床などいひつればやさしきなりといふ、ましてやさしきものをおろそしげにいひなす無下の事なり○かゝるものは刈物なり○後拾遺に和泉式部 かゝるもかきふすゐのとこのいやすみさこそねざらめかゝらずもがな

○金葉に顯輔、こひわびてねぬ夜つもればしきたへのまくらさへこそうとくなりけれ

○風雅集に隆淵、なれて見る月ぞしるらむ年をへてなぐさめがたき秋の心は

○續後拾遺に今出河院近衛、初しものおくての山田もるいほにかりそめながら衣うつなり

○新古今に西行、月を見て心うかれしいにしへの秋にもさらにめぐりありぬる

○續千載に爲道 おのづからともに見しよのおもかげもむかしになりぬ秋のよの月

よみ人しらず
山深み月もやどりをかるもかく臥猪フスナの床の露の下草

題しらず
新宣陽門院

しきたへの枕もうとく成にけり月になれゆく秋の夜な〜

中院入道一品

かくてなどすまざりけると山里の月見る秋の心にぞ問ふ

權中納言經高母

白露のおくての山田からで見む稻葉おしなみ月宿りけり

前大納言光任

月や猶わが身は知らぬいにしへの秋をも見する鏡なるらん

正三位國夏

いさやそのかはらぬ影は知らねどもこれぞ昔の秋の夜の月

○大日本史曰新業集載光明台院入道前關白左大臣歌三首蓋師基也細々要亦曰師基薙髮號光明台院師基公は藤原道平公の弟なり雜上と賀部に此公の歌あり

○古今、後撰に伊勢あひにあひて物思ふころの我袖にやどる月さへぬるゝかほなる

○古今集 世の中のうけくにあきぬおく山のこのはにふれるゆきやけなまし

○新後拾遺に氏經、めぐりあふ月こそ人のかたみとも涙くもらて見るよはぞなき

○續古今に信實、くもれとは思はぬものを秋のよの月に涙のなどこぼるらむ

○草菴集 待出で見るほどもなく村くものたえまにいそぐ月のかげかな

○大和物語 久方のそらなる月のみなりせばゆくとも見えて君は見てまし

夜更くるまで月を見てよみ侍りける

光明臺院入道前關白左大臣

わが袖にやどるたよりと成にけり月のためにはおちぬ泪も

千首歌奉りし時夜月を

春宮大夫師兼

世中のうけくに秋の月を見て泪くもらぬ夜半ぞすくなき

題しらす

妙光寺内大臣

さのみやは更けは露のおきそはむ月に涙のおつるなりけり

文貞公女

西にのみ行くとは見えむら雲の絶まにいそぐ秋の夜の月

文貞公

浮雲の残らぬ空にすむ月は行くとも見えて夜半ぞ更けぬる

○古今、伊勢物語に榮平、大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

○玉葉に爲子 なれ見るもいつまでかはとあはれなりわが世ふけゆく行末の月

○續後撰に八條院高倉、いそぎきてこゝはかりねのくさまくらなほおくふかしみ吉野の里

○百首異見云かこちは、かりごとしなり、としを約むれば知となるに、かりのりを省きて、かこちといへり、さるは何にまれうはべはそれをかりて、ひそかにもものするをいふ、初學にかこつは懸託てふ言をはぶきいふにて常にかこつげごと、いふ是也、

後撰に 下紐のしるしとするもとけなくにかゝるかごとはかけずもあらなくてふと同じと云ふは非也ひとり言しを、ひとりごち、まつりごとしをまつりごちなどいへると同格にて、かけつけを省きたるにあらざ後撰の「かり言」也

○續後撰に忠良、身にすればよる鳴く虫もあはれなりうき世を秋の永き思ひに

後醍醐天皇御製

いく秋をおくりむかへて徒らに老となるまで月を見つらむ

妙光寺内大臣

眺めてもわが世ふけぬと悲しきは四十にかゝる山のはの月

二品法親王仁譽

山深きかぎりと思ふみよし野を猶おくありと月は入りけり

延元三年九月十三夜うへのをのこども題をさ

ぐりて月三十首歌つかうまつりける次に月前

蟲といふ事をよませ給うける

後醍醐天皇御製

ねにたてゝ虫も鳴くなり身一つのうき世を月にかこつと思へば

題しらず

四條贈左大臣

○新續古今に小槻匡遠、さても猶人はわかれをいそぐかとりへのねきかぬあかつきもがな

○古今集、秋の夜はつゆこそことにさむからしくさむらごとと虫のわぶれば

○新千載に土御門院、きりくすすぎにし秋やしのおらむふるき枕のしたに鳴くなり

○寶治百首に寂能、ときはなる名にはたてども松虫のかるしものあかつきの聲

○玉葉に西行、秋ふかみよわるは虫のこゑのみか聞く我とてもたのみやはある

○新千載に宗尊親王、いくよしもあらじとぞきく露しものさむき夕の松虫のこゑ

秋さればさらでも袖や露けきと虫の音聞かぬ夕ぐれもがな

二品法親王深勝

なく虫の聲を尋ねて分けゆけば草むらごとにつゆぞ亂るゝ

千首歌奉りしとき聞蟲

中務卿宗良親王

床はあれてたが秋ならぬ虫の音を古き枕の下に聞く哉

松蟲のなきけるを聞きてよませ給うける

嘉喜門院

御集常磐なる名にはならはて松虫の夜な〜霜に聲の枯れゆく

秋の歌の中に 坂上頼澄

虫の音も弱りにけりな露霜の夜寒は老の身にも限らず

延元三年九月十三夜内裏月三十首歌中に

○新後拾遺に儀同三司、月かげにお
きそふ霜のよやさむきふくるにつけ
てうつ衣かな

○後撰戀三に伊尹、鈴鹿山いせをの
あまのすて衣しほなれたりと人を見
るらむ

○續後撰に俊平 すまのあまの汐た
れ衣ほしやらでさながらやどす秋の
よの月

○師兼千首 もしほくむすまの浦人
夜やさむき波かけ衣うちもたゆまず
うつらむ

○新後拾遺に定宗、里人や夜さむの
霜のおきみつふくるもしらず衣う
つらむ

月前擣衣

前大僧正信聰

秋風も夜さむになれば月影の更くるまで打つ麻のさ衣

住吉社三百六十番歌合に秋雜物

よみ人しらず

ぬし知らぬいせをの蟹のすて衣秋なりけりと浪や打つらん

題しらず

幸子内親王

すまの蟹の袖の秋風更くる夜にしほたれ衣うちもたゆまず

太宰帥泰成親王

おしなべて夜寒に秋や成りぬらむ里をもわかずうつ衣哉

京極贈左大臣

寢覺して夜寒をわぶる人もあらば聞けとや賤が衣打つらん

遠き國に侍りける頃聞擣衣といへる心をよめる

○類題に前關白、きよなれてこれも契とおもふかな同じねぎめに衣うつなり○玉葉に前太政大臣、衣うつしづがふせやのいたまあらみきぬたのうへに月もりにけり

○金葉に俊忠、五月やみ花たちばなのありかをば風につてにぞ空にしりける

○新後撰に俊定、夜をさむみともにおきぬる露霜をそてにかさねてうつ衣かな

○古歌、せながためみのしろ衣うつ時ぞそら行く雁の音もまがひける
○みのしろ衣は簀代衣なり後撰集、續千載集、拾遺恩草、狭衣などにみのしろ衣をよめる歌見えたり

聞きなるゝ契りもつらし衣うつ民のふせやに軒をならべて

中務卿尊良親王

霽中百首歌よみ侍りし中に

中務卿宗良親王

李花集

みやこには風のつてにもまれなりし砧の音を枕にぞきく

秋の歌の中に

前内大臣隆

里人の袖にかさねておく霜のさむきにつけて打つ衣かな

日前宮に奉りける五十首歌中に

冷泉入道前右大臣

山里は夜寒重ねておく霜のみのしろ衣今やうつらむ

關白家三百番歌合に待人擣衣といふ事をよみて

右近大將長親

つかはしける

○古今に索性 今こむといひしばかりに九月のあり明の月をまち出つるかな○續後拾遺に式子内親王、まちいてゝいかながめむわするなどいひしばかりの在明の月

○新拾遺集に公雄、くもの上になれしむかしの俤もわすれやすると月にとはどや

○新拾遺に中國太政大臣、長月のつきも夜さむのいねがてにおきゐてたれか衣うつらむ

○拾遺愚草 白たへに月も夜さむに風さえてたれに衣をかりの一こそ
○三句なべは並なり

○新拾遺に爲信、雁なきて夜さむになれば初霜のおくてのいなばいろづきにけり

待ち出づる月は夜さむの有明にいひしばかりとうつ衣かな

正平廿年内裏三百六十首歌中に故郷擣衣

僧 正 慈 靜

見し秋の月にとはゞや故郷の人はかはらでころもうつやと

元弘三年九月十三夜三首歌講ぜられし時

後醍醐天皇御製

月前擣衣といふ事を

新拾遺下

聞きわびぬ葉月長月ながき夜の月の夜さむに衣うつ聲

延元三年九月十三夜内裏月三十首歌中に

前大納言光任

月前鴈

長月の月も夜さむになるなべに空にも雲の衣かりがね

妙光寺内大臣

おなじ心を

初霜のおくての稻葉かりぞ鳴く夜寒の月の明がたの空

○新勅撰に師季、待えても心やすむるほどぞなき山のはふけていづる月かげ

○五百番歌合に二百十六番○左光有ふけぬるか闇の秋風さむしるにもりくる月のかげぞかたぶく○右勝、太宰帥親王 よもすがら吹つる風や撓むらん云々○判者、山のはにかたぶくはうし村ぐもにまだあり明の月と知らずや

○拾遺愚草 いろかはる淺ぢがすゑのしらつゆに猶かげやどすありあけの月

○新千載に邦省親王、みや人のとよのあかりの目かげ草たもとをかけて霜むすぶなり

○秋浦歌、李白、不知明鏡裏、何處得秋霜

題しらす

權大納言公夏

秋の夜の有明の空になるまゝに山のはかへて出づる月かけ

五百番歌合に

式部卿惟成親王

夜もすがら吹つる風やたゆむらむら雲かゝる有明の月

月歌中に

前左近中將光實

淺茅生やかれゆく小野の霜の上に猶影やどす有明の月

思ふ事侍りける比秋霜をよめる

中務卿尊良親王

うきものと身をしらす露やこほるらむ袂にむすぶ秋の初霜

秋露のこゝろをよみ侍りける

右近大將長親母

いかにして鏡の影のふりぬらむ今日ぞことしの秋の初霜

○續千載に定家 かぎりなき山ぢの菊のかげなればつゆもや千代をちぎりおくらむ（増）「咲なむ」を國歌大系本に「咲きなむ」とせるは、いかゞは「咲かなむ」と希望する意なるべし

○延喜部寮式曰九月九日菊花宴神泉苑殿上供御座一及設參議已上座又幄下侍從文人等座一
○公事根源云九月九日は節日にて侍れば菊花宴行はる是を重陽宴と申す九月九日は月と日と九陽の數に叶ふが故に重陽とは云也昔は天子南殿に出御なりて節會行はる又群臣に菊酒を賜はる○六百番歌合に陰信 いづしかと袖をつらぬる百歌によろづ代めぐれ春のさかづき
○寶治百首に爲氏、九重に久しくめぐるもろ人のおいせぬあきのきくの盃

○新續古今秋下に後光嚴院 うつろふは見るもかはらでしら菊のまがきや月のいろはそむらむ

○古今秋下に素性 ぬれてほす山ぢのきくのつゆのまにいつか千年をわれはへにけむ

吉野の行宮におまし／＼ける比栽菊といふ

事をよませ給うける

後村上院御製

移しうゑば山路の菊も今年よりはや九重の色に咲なむ

年中行事三百六十首中に重陽宴を

權中納言長賢

百敷や袖をつらぬるもろ人のとる手も匂ふ菊のさかづき

元弘三年九月十三夜三首歌講ぜられし時

月前菊花といへる事をよませ給うける

後醍醐天皇御製

うつろはぬ色こそ見ゆれ白菊の花と月とのおなじ籬に

岸邊の菊といふ事を

最惠法親王

ぬれてほすひまや無からむ浪かゝる岸の岩ねの白菊の花

○萬葉七 いへさかり旅にしあれば
あき風のきむ夕に雁なきわたる
○圓珠卷雜記云露霜と云に二ツあり
一ツには露と霜と也常の如し二には
萬葉に詠露といふ題に露霜とよみ其
外露霜寒みなどあまたよめるは秋の
末に至りて露のこりて霜となるほど
の名也是をば霜を濁りて云ふべし
○玉勝間云萬葉の歌に露霜とよめる
卷々に多しこは後の歌には露と霜と
の事によめども萬葉なるは皆只露の
露といへる歌によめり多かる中には
露と霜と二つと見ても聞ゆるやうな
るもあれどそれも皆さにはあらず露
也云々

○千載に覺性法親王、初しぐれふる
ほどもなくしもとゆふかつらぎ山は
いろづきにけり

○新千載に近衛右大臣、高さごの松
このまにさく花やをのへにたてる
くもと見ゆらむ

○大日本史曰藤原清忠左近衛中將俊
輔子也云々尊氏進陪京帝遂再幸延曆
寺及尊氏乞降清忠從駕還京尋幸于吉
野延元三年薨

○新勅撰に資季 見るまゝにいろか
はりゆく久かたの月のかつらの秋の
もみぢ葉

妙光寺内大臣家百首に

權中納言長賢

雁なきて寒き夕べの山陰に木の葉色どる秋風ぞふく

秋歌中に

文 貞 公

風さむみ秋たけゆけば露霜のふるの山べは色づきにけり

度 會 通 詮

はつ時雨ふりにけらしも外山なる柞の梢色づきにけり

妙光寺内大臣

高砂の松の木の間の初紅葉尾上の秋はいつ時雨けむ

延元三年九月十三夜内裡三十首歌中に

月前紅葉

右大辨清忠

照まさる月の桂にならふらし時雨れぬ先の秋のもみぢ葉

題しらす

前左近大將公冬

○古今集 春のいろのいたりいたらぬ里はあらしさけるさかざる花の見ゆらむ

○千五百番歌合に通光、苔むしろあをねが峰は名のみしてたゞ白くものよそめなりけり

○拾遺愚草 さばかりに心のほどを見せそめしたよりもつらきなげきをぞする

○月詣集に慈辨、枝かはすは、そのもみちなかりせば松はいかでか秋を知らまし

○古今 ○大和物語、立田川もみぢみだれてながるめりわたらば錦中やたえなむ ○續古今冬に師繼、夕付日さすや岡べの木がらしに松をのこしてちるもみぢかな

そめ残す梢にぞ猶秋の色のいたりいたらぬ程も見えける

嶺紅葉をよませ給うける

中 宮

三吉野の青根が嶺は名のみして時雨に移る木々のもみぢ葉

千首歌奉りし時簷紅葉

右近大將長親

萩の葉のたよりもつらき嵐かな軒端の木ずゑ色かはる頃

百首御歌中に松間紅葉を

後村上院御製

枝かはす松はつれなき木の間より紅葉や秋の色を見すらん

建武二年人々題をさぐりて千首つかうまつり

ける次に秋植物といふ事をよませ給うける

後醍醐天皇御製

立田山嶺の錦も中たえぬ松をのこしてそむるもみぢ葉

新千歌秋下

に新千

○古今集 山ざくら我が見にくれば
はるがすみみねにも尾にも立かくし
つゝ

○五百番歌合に二百四十一番
左勝○經高 はつせ女がそでのしぐ
れの下もみぢ手そめのかたや猶まさ
るらむ○右頼武 しぐれ行くいそ山

かげのしたもみぢ云々○判者、はつ
せ女が袖のもみぢぞいろはこきしぐ
れし山は木々の下ぞめ○續後撰秋下

あき山はから紅になりけりいく
しほしぐれふりてそむらむ

○嘉喜門院御集云建徳二年九月の末
つ方ひはの大なる枝につたのもみぢ
のかゝりたりしをわきて染けるも何
と無く御めとまるこゝちしてとて女
御殿よりまゐらせられたりし御返事

に君がはや云々しと申されたりし御
返事を内の御かたより一ちらで猶云
々秋の宮の中宮の御事也西土に長

秋宮といふよりいへるなるべし玉葉
集に秋の宮人いかでをむらむ新千

あり源氏物語に秋の御方といへり
山以驗身貌射言ハ其幽渺といへり

こゝにはおりの帝を仙洞と稱し奉
るよりはこやの山と祝ひ奉るなるべ

し萬葉集にはこやの山を見まくちか
けむと詠るは今と異なり山海經東

山經の條に姑射之山無草木多水と云
り又海内北經の條に列姑射在二海河

題しらず

冷泉入道前右大臣

朝な〜時雨れぬかたも嵐山嶺にも尾にも染むるもみぢ葉

五百番歌合に

源頼武朝臣

時雨行く磯山陰の下紅葉いくしほまでとさしてそむらむ

中宮女御にておまし〜ける比紅葉の枝を

奉らせ給ひたりければ

嘉喜門院

君がはや秋の宮ぬに移るべきほどを紅葉の色にこそ知れ

御返し中宮にかはり奉りてよませ給うける

御製

ちらで猶千歳の秋も色そへよはこやの山の嶺のもみぢ葉

紅葉をよめる

右近大將長親母

染つくす秋の紅葉の錦もて手向にあける神なびのもり

洲中^一と云る地にても有べし注に山名也山有^二神人^一河洲在海中^二河水所^レ經者莊子所^レ謂瓠射之山也といへる地にや

○新編古今戀二に爲明、たのまじないのるにつけてうき中のたむけにあける神の心は

○後撰雜一に行平、さがの山みゆきたえにし芹川のちよのふる道あとは有けり

○風雅秋下に覺圓、庭のおもに萩のかれ葉はちりしきて音すさまじき夕ぐれの雨

○續後撰冬に信實、下折のおとのみ杉のしるしにてゆきのそこなるみわの山もと

○續後拾遺秋下に順徳院もみぢするみねのかけはし見わたせばくれなるくゝるあきの山人「増」新拾遺集春下に定家かすみたつ峰の櫻の朝ぼらけくれなるくゝる天の川浪

正平八年内裏千首歌中に山紅葉を

前中納言爲忠

さがの山紅葉の錦たちきてむ千世の古道いそぐ御幸に

題しらず

權中納言經高母

正木ちる音すさまじき夕暮のあらしにきほふ秋のむら雨

從三位行義

紅葉せぬ梢を杉のしるしにて秋やとはまし三輪の山本

正平十七年内裏百首歌中に

權大納言公夏

紅葉ちる山のすそ野の花薄くれなるくゝる浪かとぞ見る

暮秋霜といふ事をよみ侍りける

春宮大夫師兼

○新後撰秋下に院御製、長月の末野のまくず霜かれてかへらぬ秋をなほうらみつゝ

○新古今秋下に菅公、草葉には玉と見えつゝわび人のそでの泪のあきのしらつゆ

○玉葉集に能宣、さりともとたのむ心にはかられて死なれぬものは命なりけり

千首

はた千首

長月や末野の霜のあさぼらけ今だに秋のおもかげはなし

題しらす

前内大臣隆

したひえぬ袖の泪にくれてゆく秋はとまらでのこる白露

建武二年内裡千首歌の中に九月盡を

中務卿尊良親王

さりともと猶や慕はむ今日にのみ限らぬ秋の別なりせば

新葉和歌集 卷第六

冬 歌

こしの國に侍りし頃羈中百首歌よみて都なる
人のもとへつかはし侍りし中に初冬を

中務卿宗良親王

李花集
都にも時雨やすらむこしぢには雪こそ冬の始なりけれ

住吉社三百六十番歌合に冬天象

土御門入道前右大臣

かねて聞く日數ならずば定めなき時雨を冬と頼まざらまし

日前宮によみて奉りける五十首歌中に

冷泉入道前右大臣

冬きぬとけさは伊吹の嶺に生るさしも曇らぬ空ぞしぐるゝ

○住吉社歌合に佐、都にも思ひやす
らむ草まくら打しぐれたる宵のねぎ
めを

○後撰集冬 神無月ふりみふらずみ
さだめなきしぐれぞ冬のはじめなり
ける

○神名式下紀伊國名草郡十九座、日
前神社、名神大月次、相嘗、新嘗

○新古今戀二に家房、あふ事はいつ
といぶきの峰に生るさしもたえせぬ
思ひなりけり

○續拾遺冬に實兼、ふきまよふ風に
まかせて山のはにしがるゝくもはあ
ともさだめず

○新古今秋下に花山院、秋の夜はは
や長月になりけりことわりなりや
寝ざめせらるゝ

○新千載戀三に宗尊親王、とゞまら
ぬ我がよひちのかなしきにあかつき
ばかり關守もがな

○續拾遺冬に如願、けふも又くれぬ
と思へばあし引の山かきくもりふる
しぐれかな〔増〕六帖第一に貫之、
けさのあらし寒くも吹くか足引の山
かきくもり雪やふるらん

○古今集長歌に躬恒、ふる里のよし
野の山の山おろしもさむく日毎にな
りゆけば云々○詞花冬に瞻西、いほ
りさす楢の木かげにもる月のくもる
と見ればしぐれふるなり

初冬の心をよませ給うける

後村上院御製

夜やさむき時雨やしげき曉の寢覺ぞ冬のはじめなりける

木の葉ふりしぐるゝ雲の立迷ふ山のは見れば冬はきにけり

題しらず

從三位行義

秋だにも時雨しものをけさよりはことわりなりや村雲の空

入道前右大臣

此頃のねざめはものゝかなしきに曉ばかりしぐれずもがな

足曳の山かき曇り神無月けふもいくたび時雨ふるらむ

嘉喜門院

山里にすみける頃よみ侍りける

中院入道一品

いほりさす宿は深山の陰なればさむく日毎にふる時雨哉

千首歌中に

權中納言經高母

○續千載冬に承覺、ふきおろす嵐の末の山かげはふるほどよりもつる白雪

○才子傳云朝棟者朝親神主之長子也

外宮一稱宜號宮後弘訓云朝棟は公卿補任に藤朝棟と舉たるはいみじ

き誤なり朝棟は今の宮後二位朝榮卿の先祖にて三稱宜朝親男、永仁四年六月任二稱宜元年叙從三位同二年

爲二稱宜興國元年叙從三位同二年八月十七日薨七十七

○新古今冬に讚岐、世にふるはくるしきものをまきのやにやすくも過ぐる初しぐれかな

○龜山殿七百首に大納言、嵐ふくみねのうきぐもとにかくにたちもさだめずふるしぐれかな

○新千載戀二に爲定、吹まよふあらしのそらのうきぐもの行あふべくもなきちぎりかな

○古今戀三に業平、ねぬるよの夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

○後撰集戀一、君こふとぬれにし袖のかわかぬは思ひの外にあればなりけり

吹おくる嵐の末のうき雲やとをちの里にまたしぐるらむ

冬歌の中に

從三位朝棟

音づれて過ぎぬと聞けばまきのやに又廻りきてふる時雨哉

前内大臣隆

吹まよふ嵐につけてうき雲のゆくへ定めずふる時雨哉

住吉社三百六十番歌合に冬天象

權大納言顯經

吹まよふ嵐にさわぐうき雲のはや一かたはしぐれてぞ行く

百首御歌中に

後村上院御製

聞くたびに驚かさされて寝ぬる夜の夢をはかなみふる時雨哉

住吉社三百六十番歌合に冬天象

よみ人しらず

○躬恒集　さらしなの山より外にて
る月もなぐさめかねつ此ごろのそら

○古今○伊勢物語、さくら花ちりか
ひくもれ老らくのこむといふなる道
まがふがに

○壬二集　さびしさは冬のはじめぞ
なかりけるこのはちりかひしぐれ音
信

○白川殿七百首　かみな月ねやのい
たまのいたづらに袖ぬらせともふる
しぐれかな

○拾遺愚草　秋ならて誰もあひ見ぬ
をみなへしちぎりやおきし星合の空

○五百番歌合に二百六十四番
左○公長　いろいろに秋みし花はか
右勝○關白　ちりかおなじ霜のした草

はの時雨にや云々○判者　散かゝる
このはしぐるゝたび毎に松も干しほ
のいろをそへけり（新葉）新續古今冬
に後鳥羽院　立田山梢の紅葉秋くれ
てつれなき松に猶しぐるなり

○類題に經信、秋のいろもしばしぞ
した道　のこす山風のみちふきしくつたの

神無月われぞおもひの外にふる時雨はなべてこのごろの空

前大納言光有

神無月嵐につるゝ木の葉さへちりかひくもり空ぞしぐるゝ

權中納言經高

あらし吹く軒の板間の埋もれて木葉にもらぬむら時雨哉

冬歌の中に

二品法親王聖尊

染むるより契りや置きしもみぢ葉のちらば共にとふる時雨哉

新續古今

五百番歌合に

關白左大臣

散りかゝるよその木の葉の時雨にやつれなき松も色變るらむ

建武二年内裏千首歌に題をたまはりてよみて

奉りけるに冬植物を

正三位國夏

もみぢ葉をさそふとすれど神無月風にぞ秋の色は残れる

○古今集に索性、花ちらす風のやどりはたれかしのわれにをしへよ行きてうらみむ

○萬葉 ○續古今、田原天皇、たわやめの袖ふきかへすあすか風みやをとほみいたづらにふく

○新續古今秋上に龜山院あすか風いたづらにふくよひ／＼に秋ぞことふたをやめの袖

○金葉秋に顯仲、世の中をあきはてぬとやさをしかのいまはあらしの山になくらむ

○續後拾遺戀四に有忠うらみてもかひこそなけれあき風のふきとふきぬる岡のくす原

〔増〕 古今集戀五、秋風のふきとふきぬる武藏野はなべて草葉の色變りけり

○耕雲千首 梢をば風にわかれしもみちばを又さそひ行く谷川の水

○古今集十九 世の中のうきたびごとくに身をなげばふかき谷こそあさくなりなめ

題しらす

冷泉入道前右大臣

ちれば又行方知られぬ木の葉哉問はゞやさそふ風の宿りを

前中納言爲忠

あすか風いたづらにちる紅葉哉都をとほみ見る人や無き

權大納言具氏

散りぬれば秋の木ずゑの面影もいまは嵐のやまのみみぢ葉

前中納言實秀

なべて皆残らぬ山の木の葉哉ふきと吹きぬるよもの嵐に

度會盛行

梢をばさそひつくして山風の落葉に残るおとのさびしさ

最惠法親王

みむろ山深き谷さへ埋もれてあさくなるまで散る木の葉哉

○爲尹千首 山人のあとに嵐やおく
らむこのはみだるゝ谷のかけはし
〔増〕新續古今戀五に定家、人心を
だえの橋に立かへり木の葉ふりしく
秋のかよひ路

○風雅冬に頼氏、ふりつもる梢の雪
やこぼるらし朝日ももらぬ庭の松が
え

○新續古今冬に顯詮、さそひけるけ
さの嵐のほど見えて霜よりうへにち
るもみぢかな

○詞花集秋に雅光、しもかるゝはじ
めと見ずば白菊のうつろふいろをな
げかざらまし

谷落葉といふ事をよませ給うける

後村上院御製

山人の跡さへ見えなくなりけり木の葉ふりしく谷の下道

千首歌めされし時朝落葉

御製

風寒み朝日ももらぬ山陰に霜ながら散る木々のもみぢ葉

關白左大臣

けさのまに散りける程も顯はれて霜こそおかね庭のもみぢ葉

正平廿年内裏三百六十首歌中に殘菊帶霜

前大納言實爲

咲きそめし秋と見るまで白菊のうつろふ色を埋む霜かな

家に百首歌よみ侍りける中に

右大臣

○壬二集 思へども人のこゝろの淺
茅ふにおきまよふしものあへずけぬ
べし〔増〕 續古今冬に土御門院、お
き迷ふ霜の下草かれそめて昨日は秋
と見えぬ野べ哉

○續後拾遺に爲世、春きてもまだも
えいでぬ冬草のおなじ枯葉にあわ雪
ぞふる

○萬葉集十の卷 さを鹿のつまよぶ
山の岡べなるわき田はからじしもは
ふるとも

○後拾遺に顯季、鳴のふす刈田にた
てるいなくきのいなとは人のいはず
もあらなむ

○後撰雜二 なにはがた汀のあしの
おひ風にうらみてそふる人の心を

○師兼千首 港江や夕霜はらふしほ
風のよわればこほる芦のむら立

○夫木十二に兵衛内侍、いろかへぬ
ときはのりの下つゆにぬれて秋し
るさをしかのこゑ

あだに見し露のゆかりの草葉さへ置迷ふ霜の下に枯れつゝ

題しらす

後村上院御製

花に見し野べの千種は霜置きて同じ枯葉と成にけらしも

前中納言爲忠

朝なく霜置く山の岡べなる刈田の面にかるゝいなくき

江寒蘆をよませ給うける

嘉喜門院

難波江や汀の蘆のよもすがらむすべる霜をはらふ浦風

關白家三百番歌合に港寒蘆

前内大臣顯

港入りのしほや越しけんおく霜の又露となる蘆のむら立

題しらす

二品法親王聖尊

色かへぬ常盤の杜は木の葉ちる頃さへ月のもるとしもなし

○古今秋下に定文、秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつろふからにいろのまされば

○新拾遺雜中に邦省親王、身のうさのなぐさむとしはなけれどもよるはずがらに月を見るかな

○新拾遺○新後拾遺、義詮、とけてねぬすまの關守夜やさむき友よぶ千鳥月になくなり

○新拾遺雜中に善源、沖つ波たかしのはまの汐風に夜やさむからしたげぞなくなる

○五百番歌合に二百七十五番、左持春宮大夫顯統○風ふけば波もいはねをこゆるきの云々○右太宰帥親王

さえくらす雪けのくもをたよりにてまづぶり初る玉あられかな○判者、千鳥なくあらそ波による玉のあられみだれて浦風ぞふく

○古今集二十 ころぎのいそ立ならしいそなつむめざしぬらすな沖にをれ波

百首御歌中に

後村上院御製

影氷る霜夜の月ぞ秋を置きて時こそあれとさやけかりける
志賀の浦や月すみ渡るさゝ浪の夜はヨルすがらに千鳥鳴くなり

正平十六年内裏にて人々題をさぐりて百首

歌よみ侍りける時曉千鳥を

藤原伊實

さえわたる霜夜の月の有明に友よぶ千鳥聲聞ゆなり

住吉社三百六十番歌合に冬動物

左近大將公長

沖つ浪たかしの濱の濱風に夜や寒からし千鳥鳴くなり

五百番歌合に

前内大臣顯

風吹けば浪も岩ねをこゆるぎの磯立ならし千鳥鳴くなり

○現葉集に資冬、浦風のあらそ波にこゑそへてゆきかへりなく村千鳥かな

○續後拾遺に爲世、汐風のおとばかりしてさゝしまのいそこす波もかすむ春かな○新續古今に知家、風をいたみいそこす波のしばくもあととめがたくたつ千鳥かな

○新拾遺に公雄、山しなの管羽の川のさよ千鳥およばぬあとにねをのみぞなく

○ちか川はいづくにか和名鈔に肥前國松浦郡值嘉(知加)郷とあれば是にや又千賀の鹽竈のあたりならむには陸奥にてもあらむか考べし又萬葉集十二卷に眞菅よしそがの川原になく千鳥まなしわがせこ我こふらくはといふ歌によれば菅と千鳥は素我川に名あれば、ちかは「そか」の誤にや、ちとそと似たりされど是は試に云ふのみちか川をよめる歌猶有べし

題しらず

二品法親王聖尊

空にのみこゑは聞えて浦風のあら磯浪にたつ千鳥かな

文中四年内裏五十番歌合に寒夜千鳥

關白左大臣

夜もすがらしほ風さえてさゝ鳥の磯こす浪にたつ千鳥哉

題しらず

後村上院御製

古への跡見るわかたの浦千鳥およばぬかたにねをのみぞ鳴く

正平十六年内裏三十首歌中に千鳥を

冷泉入道前右大臣

眞菅たきちかの河風ふけぬとやしば鳴く千鳥聲ぞ淋しき

よき歌、松井本

千首歌奉りし時曉千鳥

春宮大夫師兼

曉の寢覺の千鳥なれをしぞあはれとは思ふ友なしにして

○古今雜上 千はやふるうちの橋守
なれをしぞあはれとは思ふとしのへ
ぬれば○風雅秋下に爲定、衣うつよ
その里人なれをしぞあはれとは思ふ
秋のよきむに

○古今集戀一 沖べにもよらぬ玉も
の波のうへにみだれてのみやこひわ
たりなむ

○古今戀二に貫之、まこも刈漣の澤
水雨ふればつねよりことにまさる我
こひ

○夫木冬二に爲家、廣澤の汀の水さ
えぬらしうきねの鴨の聲さわぐなり

○長秋詠藻 たなばたの絶えぬ契を
そへむとやはねをならぶるかさゞぎ
の橋

○續千載に新宰相、しぐれさへかゝ
る秋こそかなしけれなみだひまなき
ころのたもとに○しきたへは發語也
さるをかくさまによみたまへるは後
世のわざなり

題しらず

よみ人しらず

沖べにもよらぬ玉藻のとことにはにうきて聞ゆる水鳥の聲

太宰帥泰成親王

風さむみ淀の澤水こほるらしつねよりまさる蘆鴨の聲

上野太守懷邦親王

こやの池の玉藻の床や氷るらん浮寝の鴨の聲さわぐなり

池水鳥といふ事をよませ給うける

御製

池水の深き契りも知らるゝはねをならぶるをしのもろ聲

冬歌の中に

中務卿尊良親王

おのづからまどろむ程に氷るなり泪ひまなきしきたへの袖

よし野の行宮にてよませ給うける御歌の中に

○新拾遺雜上に經繼、冬の夜の月か
げさむき谷のとにこほりをたまく山
おろしの風
〔増〕 山おろしは萬葉に山下風と書
き「アラシノ風」と讀めり

○類題に右大臣 おちつもるこの葉
によどむ右川のおさせの水ぞまづこ
ほりける

〔增〕 深勝法親王を稽照篇本には深
衛と書き國歌大系本には源勝と書け
り共に誤れり松井本に依りて訂正す
○新古今春上に西行、岩間とぢし水
もけさはとけそめてこけのした水道
もとむらむ

○續後撰冬に長方、みなと風さむく
ふくらしたづのなくなこの入江につ
らゝゐにけり○奈吳は越中國射水郡
也津國住吉郡にも奈古あり

○和名抄曰考摩切韻云鮪白小魚名也
似三鮪魚長一二寸者也今案俗云水魚
是也○金葉冬に肥後、ひをのよる川
せに見ゆるあじろ木はたつ白波のう
つにやあるらむ

後醍醐天皇御製

臥わびぬ霜寒き夜の床はあれて袖に激しき山おろしの風

住吉社三百六十番歌合に冬地儀をよみ侍りける

二品法親王深勝

山川はちるもみぢ葉にせかれてや淀む方より且氷るらむ

題しらず

右近大將長親母

さゆる日は岩まの水も行なやみ氷のしたに道もとむなり

關白左大臣

さえくらしなごの入江はつらゝゐて風に流れぬ蜚ヌテの捨舟

二品法親王聖尊

寄るひをの色も分れず白妙に雪降かゝる宇治の綱代木

五百番歌合に

式部卿惟成親王

○五百番歌合に二百七十五番右、上に出たる風吹けばの歌の注併考べし
○續拾遺冬に具房、さえくれてあられふる夜のさゝまくらゆめをのこさぬ風のおとかな

○新拾遺秋下に邦省親王、いつのまに千入そむらむきのふよりしぐると見えし峠のみみぢ葉

○禁秘抄曰 初雪見參近代絶畢初雪日仰三位藏人令取所見參藏人東帶召朝餉仰之内侍傳仰藏人進見參給祿内藏寮絹大藏省布也
○公事根源云昔初雪のふる日群臣參内し侍るを初雪見參と申也桓武天皇延暦十一年十一月よりはじまる初雪なからす深雪の時は必諸陣見參をとるといへり此事たえて久し

○續拾遺冬に少將内侍、九重といふばかりにやかさぬらむみかきのうちのはのよはの白雪

○古今集二十、水くきの岡のやかたにいもとあれと寝ての朝けの霜のふりはも

さえくらす雪けの雲を便りにてまづふりそむる玉あられ哉

千首歌たてまつりし時山雪

關白左大臣

里よりはしぐると見つる山のはに雪をのこしてはるゝ浮雲

初雪見參の心を

後村上院御製

名をとへばつかさぐも心して雲井にしるきけさの初雪

百首歌中に雪

冷泉入道前右大臣

降そむるみかきの雪は浅けれどつかへてしるす跡や残らむ

題しらず

源頼武朝臣

通ひつる夢路は跡もなかりけり寝てのあさけの庭の白雪

住吉社三百六十番歌合に冬植物

よみ人しらず

○新古今集 今までに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまく年のへぬれば
○新後拾遺春下に前關白、風かよふをのへさくらちりまがひつもらぬほども雪と見えつゝ

○續後撰冬に鎌倉右大臣、夕されば汐風さむし波間より見ゆる小島に雪はふりつゝ

○新續古今集に此歌の作者幽提法師とあり成直老て後僧となれるなるべし

○和名抄曰近江國高島郡三尾(美乎)○新勅撰冬に家隆、たかしまやみをの柿山あとたえて水も雪もふかき冬かな

○萬葉集に卷目と書るに就てまきもくと云ふは非なり古事記に麻岐牟久とあるに従ふべし卷目も纏向と同じくまきむくなり卷向穴師共に大和國城上郡にあり

○新勅撰春上に好忠、卷向のあなしの檜原春くれば花か雪かと思ゆるゆふして

○新後撰冬に師重、よもすがらふりつむ雪の朝ぼらけにほはぬ花を木末にぞ見る

冬草のおのがさまく猶見えて積らぬ程の雪ぞ淋しき

嶺雪をよませ給うける

御製

み吉野は風さえくれて雲間より見ゆるたかねに雪は降つゝ

仁譽法親王家にて人々三十首歌よみ侍りける

右兵衛督成直

吹おろす嵐のおともたかしまのみをの柿山雪降にけり

百首歌よみ侍りける中に雪を

中院入道一品

まきもくの山にや雪の積るらむあなしの檜原風しをるなり

雪似花といふ事を

後村上院御製

春も見しおなじ梢と成にけり匂はぬ花の雪の明ぼの

天授二年内裏百番歌合に

○新古今冬に成通、冬深くなりにけらしななには江の青葉まじらぬ蘆の村立

○新拾遺に實敷、春はまだはつせの檜原かすめどもこの雪けにさゆる山風

○拾玉集 津の國のとほ里小野の萩がえに雪の花さく冬は來にけり

○新續古今に雅孝、そめのこすこすゑもあらじはつせ山いりあひのかねにくもぞしぐるゝ

○古今集 山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見はやさむ

冬がれの梢の雪の朝ぼらけ青葉まじらぬ花かとぞ見る

題しらず

二品法親王仁譽

春の色に洩れし檜原もおしなべて雪の花咲く小泊瀬の山

日前宮によみて奉りける五十首歌中に

冷泉入道前右大臣

うづもるゝ響もさびし泊瀬山入相の鐘にふれる白雪

天授二年内裏百番歌合に

中務卿宗良親王

山たかみ我のみふりて淋しきは人もすさめぬ雪の朝あけ

とほき國に侍りける頃百首歌よみ侍りけるに雪朝

中務卿尊良親王

○新勅撰雜四に行能、布引の瀧の白糸わくらはにとひくる人もいく代へぬらむ

○新勅撰秋上に信實、まねけとてうゑしすゝきの一本にとはれぬ庭ぞしげりはてぬる

○續千載冬○續後拾遺冬、しばしなどいとほざりけむとふ人のあとより消ゆる庭の白雪

○續拾遺雜春に光行、たづね来てふみ見るべくもなきものをくもゐの庭の花のしら雪

○李花集云雪かきくれふる日山里なりける人のなどやとはぬと申おこせ侍りしかば申つかはしける

○古今戀五に兵衛 しての山ふもとを見てぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて

○晋書云王徽之字子猷性卓犖不羈嘗居山陰一夜雪初霽月色清朗四望皓然獨酌酒詠左思招隱詩忽憶戴逵一時遠在剡便夜乘小船詣之經宿方至造門不而反人問其故曰本乘興而行興盡而反何必見安道邪

けさは又訪ひ來る人もありなましかゝらぬ宿の雪と思はゞ

題しらず

二品法親王仁譽

跡いとふ宿とや見えむ今日いくか訪はれぬ庭に積る白雪

入道前右大臣

よしさらば厭ふになして訪ふ人の跡をも待たじ庭の白雪

元弘二年百首歌中に

文 貞 公

つかふとてまづふみわけし九重の雲井のにはの雪の曙

雪ふり侍りし日山里なる人のもとよりなどや

訪はぬと申おこせて侍りし返事に

よみ人しらず

雪ふかき麓を見てぞ歸りにし山には道もたえぬと思へば

題しらず

後村上院御製

○月清集、里人のうの花かこふ山か
げに月と雪とのむかしをぞ思ふ雨ふ
○金葉集冬に兼房、かきくらし雨ふ
るよはやいかならむ月と雪とはかひ
なかりけり
〔増〕花鳥は櫻と郭公なりこれに月
と雪とを加へて四季の景物とせり猶
春歌上「花鳥の色にもねにもさきだ
ちて」云々の注に言へるを見よ

○草庵集、松がえのつれなきほども
あらはれてとしのさむきにつもるゆ
きかな

〔拾〕津守の浦は辨津住吉の邊なり
新編古今神祇に前内大臣、いくとせ
も津守の浦の松がえに神代久しき風
の音哉

○論語曰歳寒然後知松柏後凋
○續古今○雲葉集に慈圓、けさ見れ
げ雪もつもりの浦なれや濱松がえの
波につくまで

○風雅冬に重能、浪かゝるしづえは
消ていそのまつこずゑばかりにつも
る白雪

○古今集、神垣のみむろの山のさか
き葉はかみのみまへにしげりあひに
けり
○本集神祇に祥子内親王、わすれめ
や神のいがきのさか木葉にゆふかけ
そへし雪の明ぼの

誰か又こよひも友をたづぬらむ月と雪とのおなじ光に

入道前關白左大臣

花鳥のなれし名残も忘れぬに月と雪とをみよしの、山

住吉の行宮におまし／＼ける比うへのをのこ

ども題をさぐりて歌つかうまつりける次に松

雪といふ事をよませ給うける 後村上院御製

年さむきためしは誰もならふらむ松につもりの浦の白雪

正平廿年内裏四季歌合に

權大納言顯經

色かへぬ松は下枝シタエにあらはれて梢ばかりをうづむ白雪

題しらず

前參議持房

神がきやみむろの山の榊葉にゆふかけそへてふれる白雪

○風雅冬に貫之、みよし野の山より雪はふりくれどいつともわかぬ我やどの竹

○續千載冬に重經、千枝にさく花かとぞ見る白雪のつもるしのだのもりの木末は

○五百番歌合に二百九十一番

左勝○女房、星うたふこゑにもしるしちはやふる神のかぐみはたゞこゝにます、右○成直、かきくらしふれど波にはかつ消て云々○判者、くもられど君があたりになす鏡神代うつして星うたふなる

○夫木廿二に ふる雪にゐなのふし原うづもれてかるもかくべきかたやなからむ

○乗白かるもかく臥猪と云へり猪はおのが臥處にかるも搔寄て敷くをいへり心やすくねぬ物なれば歌に多く其意をよめりかるもは枯物の義なるべし蒹蕩は通じがたし

○拾遺集に能宣、わたつ海の波にもぬれぬうきしまのまつに心をよせてたのまむ

〔増〕浮島は陸前國鹽釜灣に在りしなり六帖第三に「鹽釜のまへにうきける」とあり

前大納言光任

降雪の埋みのこすやふじのねのいつとも分かぬ煙なるらむ

關白家三百番歌合に遠郷雪を

前内大臣顯

見わたせば里はありともしら雪の積るがうへにたつ煙かな

五百番歌合に

右兵衛守成直

かきくらしふれど波にはかつ消えて積れる方や雪の白濱

正平廿年内裏四季歌合に

妙光寺内大臣

港こす潮風寒しかるもかくゐなのは山のゆきのあけほの

住吉社三百六十番歌合に

中務卿宗良親王

○西宮記云關白詔内外奏請上下
大小雜事先自其人宣行
○職原抄云攝政關白者大臣兼之或
去大臣職帶之東三條入道攝政以
來例也關白者漢宣帝立霍公猶攝政
非幼主之故霍光選政宣帝猶重其
人令關白萬機關白之號自此而
始云々

○新後拾遺雜秋に攝政、時しあれは
今は降りつゝ、○關の白雪は關白なり
○五百番歌合に二百八十七番左勝
前關白たえざらむあとをしぞ思ふ
身にははや云々、右○太宰帥親王
沖つ風ふけひの浦の夕波にこゑもき
え行くむら千鳥かな○判者、藤川の
ながれ久しき跡なれば猶またたへよ
關の白雪

○古今集 かすが野はけふはなやき
り若草のつまもこもれり我もこもれ
○新後拾遺冬に寂寞、みかりばのつ
もるにぞしる
○鐘の響云久佐とは凡て鳥の足にと
らへ持木の枝を云へり草の事にはあ
らざ萬葉集に今草とれり見む人もか
も草とらむ花橘を宿にはうゑずて是
らに草取とよみたる即霍公鳥の木に
止れるを云へり後世にも鷹のとまる
木を草木と云事あり又中昔の鷹狩の
歌におちくさなびくなどよめりしも
本は木居の事にて手放れたる鷹の木

ふる雪の積るにぞ知るうき鳥の浪にも松のぬれぬものとは

家に千首歌よみ侍りける中に關雪

福恩寺前關白内大臣

かくしつゝ世にふるかひは無けれども跡をばつけつ關の白雪

五百番歌合に

入道前關白左大臣

絶えざらむ跡をしぞ思ふ身にははや二たび越えし關の白雪

千首歌奉りし時

中務卿宗良親王

大原や雪ふりつみて道もなし今日はな燒きそ嶺のすみ竈

千首選炭竈

題不知

前中納言爲忠

はしたかのかりばの鳥のおち草を吹きな亂りそ野べの夕風

入道前右大臣

かり衣日もゆふ暮にならしばやかれ葉が末に嵐吹くなり

の枝に止りける時其枝のしほしゆれ
 てなびくを云つる風雅集の比より
 もはら野草の事にのみ習はしたり
 ○新古今旅に定家、いづくにかこよ
 ひはやどをかりごころもゆふぐれ
 のみねのあらしに
 ○公事根源云豊明節會十一月中辰日
 是は今年の稻を奉らせたまひて
 今日君もきこしめし臣下にもたふ
 故に節會行はる新嘗の祭に参りたる
 上卿宰相に小忌をきける餘人は諸司の
 小忌を束帶の上に着たるをけふはう
 るはしく青摺を用ひたる上卿宰相外辨
 の上首をつとむ云々
 ○本朝月令云五節舞者淨御原天皇之
 所制也相傳云天皇御吉野宮二日暮
 彈琴有興俄爾之間前袖之下雲氣忽
 起疑如高唐神女二孿舞應曲而舞獨
 入三闕他人無見學袖五變取謂三
 之五節云々其歌曰乎度綿度乎度
 綿左備須茂可良多萬乎多茂度遇麻岐
 底乎度綿左備須茂○五節の事は猶江
 談抄江家次第年中行事歌合公
 事根源等に見えたり
 ○撰撰吟集に公條、少女子がかへす
 袂やしるからしよし野のみやの古き
 ためしも○豊明の事昭云日本紀に
 は眞の字をよみ古語拾遺によのあか
 書けり元日節會の宣命に所謂本朝月
 令に延暦八年正月一日云々今日正月
 踏歌重陽新嘗とこれのみならず白馬
 路歌重陽新嘗とこれのみならず白馬
 とよのあかりと書りさればとよのあ
 かりとは節會を申也云々○神武天皇
 紀に宴饗をトヨノアカリと訓り

正平廿年内裏にて人々年中行事を題にて三百六
 十首歌よみ侍りける時題を給はりてよみ奉りけ
 るに豊明節會を
 從三位國量

山あるの色を重ぬる今宵だにおほみの袖や變らざるらむ

元弘三年立后月次屏風に五節を

後醍醐天皇御製

新拾遺多
 上新拾
 袖かへすあまつ處女も思ひ出やよしの宮の昔がたりを

百首歌よませ給うける中に豊明節會の心を

後村上院御製

豊の^{アカリ}明天つ處女の袖までも代々の跡をばかへしてぞ見む

神樂をよみ侍りける
 冷泉入道前右大臣

わすれずよ雲井にさゆる六の緒のしらべをそへし星の光は

○永久四年百首に大進、くもりなき
 とよのあかりと見つるかな天つをと
 めの舞のすがたを○無名抄云或人云
 和琴の如こりは弓六張を引ならして
 これを神樂に用けるをわづらはして
 て後の人琴につくりうつけると申傳
 たるを上總國の濟物の古き法文中
 けり六張とかきて注に御神樂料とか
 けりとぞいみじき事也

○仕者其人把三和琴一着藤突一彈琴之人
 長云候三本方二即着三本方座上一云々
 ○神樂譜明星吉々々利々々リ々々
 やあか星はみやうじやはくはやくこ
 になりや何しかもこよひの月の只こ
 うにますやたごこに只こにます
 や○續千載冬に宣時にいにしへはい
 そぐばかりを心にてくれゆくとしを
 なげきやはせし

○千載集冬に廣言、かすならぬ身に
 はつもらぬ年ならばけふのくれをも
 なげかざらまし

○萬葉一に手弱女の袖ふきかへすあ
 すか風都をとほみいたづらにふく
 「指」ここに「あすか風」と云へるこ
 と其用を見ず只枕詞として置けるに
 や

○新後拾遺冬に尊圓親王、過ぎ來つ
 るいそぢの夢のほどなきをさらにお
 どろくとしのくれかな

題しらす

中院入道一品

歎きつゝくれゆく年を世にふれば猶急ぐとや人の見るらむ

二品法親王聖尊

人ごとに急ぐを見ても數ならぬ身にはのどけき年の暮哉

果尊法親王

なに事をなすともなくてあすか風徒らにまたくるゝ年かな

祥子内親王

何をして過ぎつるかたの月日ぞと更におどろく年の暮哉

○萬葉集一、三野連入唐時春日藏首
老作歌、在根良對馬乃渡渡中爾幣取
向而早還許年

○土佐日記 わたつみのちふりの神
にたむけするぬさのぢひ風やまずふ
かなむ

○齋王群行の事は江家次第十二卷に
委しく見えたり群行の御路の考は暗
語に見えたれど獨考ふべし

○催馬樂 すゞか川八十せのたきを
みな人のめかるもしるくや時にあへ
る時にあへるかもや

○雲葉集に好思、すゞか川八十せの
たきの音なきは氷やとちてむすびそ
めけむ(氷やせきて結びとめけん一
本)

○松風卷云葉侍りし世を今更に立か
へり思ひたまへ亂るゝを押はからせ
たまひければ命永さのしるしも思た
まへしらぬると打泣て荒いそかげ
に心苦しう思ひきこえさせ侍りし二
葉の松も今はたのもしき御生さきと
いはひきこえさするを淺き根ざしゆ
ゑやいかごとかたゝ心つくざし侍
るなどきこゆるけはひよしなからね
ば云々○明石入道の別をかなしむ事
は右の文の上に出たり

○後撰集 千代へむと契おきてし姫
松のねざしとめてし宿はわすれじ

新葉和歌集 卷第七

離別歌

家に百首歌よみ侍りけるに遣唐使餞といふことを

妙光寺内大臣

吹かへて又日の本のしるべせよもろこし舟のぬさの追風

齋宮群行の心をよませ給うける

後村上院御製

別れつる袖にかけゝりすゞか川八十瀬の瀧におつる白玉

源氏物語の所々をよませ給うける御歌の中に

御製

おひ出し磯の姫松ひきわかれあさき根ざしにぬるゝ袖哉

○李花集云人にわかれける時よめる
後撰哀傷に伊勢、ほどもなくたれ
をおくれぬ世なれどもとまるは行く
をかなしとぞ見る

○松の落葉云古き歌集の詞書に人を
わかると云へるは、みづからはとど
まりて人のわかれゆくをりの事なり
り、さるからに人にと云はず、古今

集にあふ坂にて人をわかれける時
よめる「相坂の關しまさしきものな
らばあかぢわかると、君をとどめよ」

又音羽山のほとりにて人をわかると
よめる「おとは山木だかくなきて
子規君がわかれを惜しむべらなり」

とあるを見ればし、君をとどめよ
君が別れをと云へる、皆人のわかれゆ
くさまなり

○北邊隨筆、左伎草、玉の緒練分な
どに「を」の論あり考ふべし

○櫻雲記云、妙法院尊澄法親王は讃
岐へ流さる長井左近大夫高路次を
警固す京を出る時雨降日はを詠ず
「うきほどはさのみ涙の」云々

○太平記天正本云一ノ宮モ妙法院モ
兵庫ニツカセタマヒケレバ御悦アリ
テ御音信アリケルニ一ノ宮カクゾア
ソバシケル

「イトセメテウキ人ヤリノ道ナガラ
オナシ泊トキクゾウレシキ」妙法院
宮返事細々トアソバシケルノオクニ

通フ心ヨシルベトモナレ」

李花
百首歌よみ侍りし中に離別を
中務卿宗良親王

露わけぬ人もや袖をぬらすらむとまるは行くを惜む涙に

人をわかるとよめる
よみ人しらず

是に猶まさるわかれもありやせむ旅は又くる道と思へば

元弘二年三月とほき方におもむかむ事もたゞけふ

あすばかりになり侍りしに雨さへふりくらしいて

とど心ぼそさもたぐひなくおぼえ侍りしかば
中務卿宗良親王

櫻雲
うきほどはさのみ涙のあらばこそ我袖ぬらせよそのむら雨

うちいでといふ所にとどまり侍りしに尊良親王よ

べこの所にしも、とまりけるよし聞くに、なにと

なくかたはらなるかべを見れば、ともなりける爲

明卿が筆にて「いとせめてうき人やりの道ながら
おなじ宿りと聞くぞうれしき」とあるを見て又見

○増鏡云先帝を隱岐國へうつし奉るべしとて三月始の七日都を出させたまふ又の日中務のみ土佐國へおはします御供に爲明中將まゐる同日やがて妙法院の座主尊澄法親王も讚岐國へおはします先帝今日湊川の宿につかせたまふに中務宮はこや野の宿におはしますまほどもまぢかく聞奉らせたまふもいみじう哀にかなし宮にいとせめてうき人やりの道ながら同じ泊と聞くぞうれしき

○弘濟云此歌天正本爲尊良與尊澄贈答恐非也今考新業集增鏡二月八日後醍醐帝至淡川尊良至昆陽宿而父子不能相見於是尊良思慕而作此歌使爲明書之於壁也尊良既發昆陽宿後尊澄亦至昆陽見書壁歌因有感又作此歌而書之壁增鏡新業集之所載其意可推知一

○古今集、人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていざかへりなむ

〔增〕此集春上に嘉喜門院、いきうしと思はぬ旅の空なれや人やりならぬ春のかりがね

○和名抄に 讚岐國阿野郡松山、萬都也萬

○古今集 このまよりもりくる月のかけ見れば心づくしの秋は來にけり

○葉云 さとのあま、里に住む蠶也又讚岐の名所にもいへり永久年中に人丸の影始行ありて此所を影供領として顯季に給はるとぞ依て其影を里の蠶の尊影と稱す

卷第七 離別歌

るべき事は知らねどかきそへ侍りし

末までも同じ宿りの道ならば我いきうしと思はましやは

讚岐國松山といふ所にゆきつきて月日を送り侍り

しに入道大納言爲世もとより「松山は心づくしに

ありとても名をのみ聞きて見ぬぞ悲しき」と申お

くりて侍りし返事に

思ひやる心づくしもかひなきに人まつ山とよしや聞かれじ

あづまのかたへ下り侍りける時きぬを女のもとへ

つかはすとて

文 貞 公

里のあまのしほなれ衣忍べとてからき別のかたみにぞやる

返し

妙光寺内大臣母

里の蠶の汐なれ衣留めてもながらへばこそかたみとも見ぬ

○續後拾遺春上に定家、里のあまのしほやき衣立わかれなれしも知らぬ春のかりがね

○新拾遺戀五に後西園寺左大臣、すまのあまの汐なれ衣なれきてぞまとほになるもうちみなりける

○類書纂要云巨海ノ中有二聚屈洲一乃仙境出ニ返魂香ニ人死燒レ之可ニ返魂而生一也

○香譜云司天主簿徐肇遇一蘇民子德歌者一自言善爲ニ返魂香ニ手持ニ香爐一懷中取ニ一貼白檀香末ニ撮ニ於爐中一烟氣幾々直上甚ニ於龍腦一德歌微吟曰東海徐肇欲一見ニ先靈ニ願此香煙用爲ニ引導一盡見ニ其父母曾高一德歌曰但死經ニ八十年已上一則不レ可ニ返矣○夢に見えけむたきものも返魂香のたぐひにや有けむ

○新續古今雜下に反魂香の心を行能みてもなほ身をこそこそがせ時のまのけぶりのうちにきゆるおもかけ

○山家集 さまざまにあはれおほかる別かな心を君がやどにとどめて

○新拾遺戀四に爲氏、おもひ出る心ひとつのかひもなしおなじせとだにしらぬ契りは

又たきものをつかはしてこれをたかばかならず夢になむ見ゆべきよしを申おくりてつゝみ紙にかきつけ侍りける

文 貞 公

なれくし夜半の移り香忘れずば煙にそはむ面影もがな

後にこれをたきて寝ける夜はかならず夢に見えけりとなむ

尾張國をすぐるとて都なる人のもとへ申つかはしける

標雲

海山を見る空もなしわが心さながら君にそへてこしかば

年久しくなれさせ給うける人の遠き所に侍りける

秋の頃月を御覽じて

中 宮

思ひ出る同じながめの空とだに知られぬ月の影ぞかひなき

○李花集云いづかたの風のたよりも
たえて、おぼつかなく侍る折ふし
住吉殿より御使ありてこのほどうち
つゞき御惱にて御心くるしかりつる
やうなどおぼせられし御文に「めぐ
りあはむかぎりぞ知らぬ命だにあら
ばとたのむほどのほかなさ」と有り
し御返事にめぐりあはむたのみ有べ
き云々

○新拾遺戀二に良意、つれなさの
かぎりもしらず同じ世にいのちあらば
とたのむほかなさ

○新後拾遺雜上に重基、かくばかり
老ぬる身にはいのちだにあらばとた
のむあらましもなし

○拾玉集に左將軍、けさはまた雪け
の空も霧はれてたのみあるべき世の
なげきかな

○南朝紀傳云其年もくれぬ又の年の
秋まで駿河國に御座有しかど御方に
まゐる兵もなしかくて信濃國へおほ
しますべきとて旅の御装などあそば
しければ狩野介其外の人々もさしつ
どひ終夜御名残を惜奉り向行末まで
二心有まじき由各申上ければ彼等が
無二の志を感じ思食て「身をいかに
云々」と仰られて、また夜深く越路
の旅に赴かせたまひけり

中務卿宗良親王あづまにすみ侍りし頃御心ち

例ならぬよしなどおぼせられしついでに

後村上院御製

標雲 李花 かぎり李花

たのむ標雲李花

廻りあはむ頼ぞ知らぬ命だにあらばと思ふほどのほかなさ

御返し

中務卿宗良親王

標雲 李花

廻り遇はむ頼みあるべき君が代に獨老ぬる身をいかにせん

おなじ頃中務卿宗良親王もとへ申あくり侍りし

遍照光院入道前太政大臣

標雲

日にむかひ月に忘れぬころをばたゝ半天ナカツラに思ひやらなむ

駿河國にすみ侍りしも猶いさゝかはじかる事あり
て信濃國に越えむとせし時かの國にありける藤原
貞長といふものなど夜もすがら名残をしみ侍りし

○駿河國貞長がもとにしばし立よりしに云々かくて又の年の半まで住侍りしかどもさすが又我世へぬべき處にもあらねばこゝをも立出侍らむとせしに狩野介貞長などやうのものども夜もすがらなごり惜みて杯たびくめぐり侍りしほど過ぎこしかた猶行末の事まで二心なき事など申あつめつゝはては酔泣などせしかばいづのほどよりのをしみにかとあはれにおぼえて出でまにそこのかへに書おきし

○拾遺物名にすけみ、思ふどちところもかへずすみなれむ立はなれなば戀しかるべし

○日本紀に急字倏忽之間をあからさまとよめり雄略天皇紀に暴、取急、取假をよめり書言故事に急請、假曰ニ取急一と見えたり假は暇と通ず左傳に昨を訓せり注に暫也といへり

○古今集 もがみ川のぼればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり

○夫木鈔八に廣言、もがみ川すだく螢はいなぶねののぼれば下るかゝりなりけり

○新後拾遺戀一に下野、もがみ川いなどこたへていな舟のしばしばかりは心をも見む

に出でざまに常に居侍りし所のはしらにかきつけ

侍りし

中務卿宗良親王

櫻雲 李花 南方

の李花

身をいかに駿河の海の沖つ浪よるべなしとて立離れなば

信濃の國にても又年月をおくり侍りしに行宮の御

しきもおぼつかなく思ひ給ひしかばあからさまに

よし野にまゐりてやがて下り侍らむとせし時内裡

にて人々百番歌合し侍りしに旅の心を

老の浪又たちわかれいな舟ののぼればくだる旅の苦しき

かくて思ひのほかにとどまり侍りしを又さがた

き事ありて次のとしの冬信濃へ思ひたち侍りしと

き申おくり侍りし

春宮大夫師兼

最上川又いな舟の下るせをしばしばかりもいかでとどめむ

○拾遺雜下に太政大臣、いかにせん我身くだれるいなぶねのしばしばかりのいのちたへずば

○此集雜上に(千首歌・更衣惜春)かへずとも人なとがめそ翁さびごとしばかりの花染のそて

○或書云、天授三年の冬宗良親王信濃へ御下向の時長谷寺にて御飾おろさせましけるが一首の歌を帝に奉らせ給ふ「君になど我をはつせのかねの音かくなるとだにしらせざりけむ」其後御かへし、今上「わするなよきそのあさ衣」云々「君になど」の御歌は雜下にいづ

○新後拾遺神祇に隆教、わすれずよみたらし川のふかき江になれてかけ見し山あるのそて

○續拾遺秋下に順徳院、さらしなの山の嵐もこゑすみて木曾のあさぎぬ月にうつなり

○拾遺○伊勢物語 わするなよほどは雲になりぬともそら行く月のめぐりあふまで

かへし

中務卿宗良親王

我をよに下しはてずば稲舟の又のぼるせもなどか無からん

道にて世をそむきけるよし聞召ければこの春の千首

歌中に「ことしばかりの花染の袖」とよみたりし事

などおぼし召出でらるゝよしおほせられしついでに

御製

忘るなよ木曾のあさ衣やつるとも同じ吉野の花染の袖

元弘二年百首歌よみて中務卿尊良親王のもとへつ

かはしけるつゝみ紙にかきつけ侍りける

文貞公

かたみとて残す水莖跡たゆな忘れぬなかのめぐりあふまで

文貞公あづまの方へおもむき侍りける時おなじや

○草菴集 逢ふまではをしみきぬれどわかれぢのうきにのこらぬ命ともがな

○大日本史曰元要入明求法云々元要上人は文貞公の孫妙光寺内大臣の子也

○古今戀二に小町、いとせめてこひしき時はむば玉のよるの衣をかへしてぞぬる

○新千載哀傷に大炊御門母、おもひきや六十あまりの坂こえてこのわかれぢにまよふべしとは

〔菊〕李花集下いとせめて惜しき此世の名残哉あひ見ぬさきのわかれと思へば

うにくだりける人々道にてあまたうせ侍りけるよ
しつたへ聞きてよめる

妙光寺内大臣母

廻りあふちぎりならずば中々にうきを見はてぬ命ともがな

元要上人入唐しける時思ひつゞけ侍りける

右近大將長親母

いとせめて老ぬる身こそ悲しけれこの別路を限りと思へば

○李花集云 霧中百首歌よみ侍りし中
 ○又云いとひきて侍るみちに出て
 よみ侍りし
 ○新拾遺冬に公雅、はれくもりうさ
 たつ雲の山のはにかげさだまらぬ冬
 のよの月
 ○同集秋下に師良、鹿のねぞそらに
 きこゆる夕ぎりのへだつるかたやを
 のへなるらん
 ○玉葉集に左大臣女、かへりみる我
 古郷のくもの波けふりもとほし八重
 の沙風

○太平記云 尹ノ大納言師賢卿ヲ下
 總國ヘ流シテ千葉介ニ預ラル此人志
 學ノ年ノ昔ヨリ和漢ノオチ事トシテ
 榮辱ノ中ニ心ヲ留メ玉ハザリシカバ
 今遠流ノ刑ニアヘル事ツユバカリモ
 心ニカケテ思ハルズ只時ニヨリ興ニ
 フンテ諷詠ナホザリニ日ヲタル年
 イマダ強仕ニミダズ髪ヲソリ世ステ
 人ニナリタマヒシガイクホドモナク
 元弘ノ亂出來シ始俄ニ病ニ犯サレテ
 寂シタマヒケルトカヤ

○古今集に業平、名にしおはばいざ
 言とはむみやこどりわが思ふ人はあ
 りやなしやと
 ○後鳥羽院御集 こととはむたれか
 はこゝにすみだ川なしおふ鳥はあ
 りやなしやと
 【増】 續後拾遺雜下に寂蓮、すみわ
 びぬいざさはわれも隠れなん世はう
 きものぞ山の端の月「いざさは」俗に
 ドリヤと云ふ意なり

新葉和歌集 卷第八

羈旅歌

題しらず

讀人不知

羈 旅ねしてわかるゝ嶺の曉を横雲のみと人や見るらむ

旅の空うきたつ雲やわれならむ道も宿りも嵐吹くころ

權大納言具氏
都敷 松井本

わけきつる跡さへ今は白雲のへだつるかたや靜なるらむ

藤原行房朝臣

かへり見る都のかたも雲とぢて猶遠ざかる五月雨の空

元弘二年世のみだれによりてしもつふさの國に

うつされ侍りける時尾張國より都なる人のもと

文 貞 公

○大日本史曰源具行從三位師行之子
 北條高時執三囚具行明年六月高時
 命曰高氏殺之於近江柏原一臨死書
 洞然
 ○新千載集云思ひの外の事によりて
 東のかたへ下りける時逢坂をこゆと
 と思ひつゞけ侍りける「かへるべき
 身にしあらねば」云々
 「橋」「ゆくをかぎり」とは古今集雜
 下「ゆきとまるをぞ宿と定むる」
 とある意に似たり新古今旅にも長明
 を「枕」といづれの草に契るらんゆく
 をかぎりの野への夕暮」とあり二の
 句は新千載に「身にしあらねば」と
 あるを可とす
 ○後撰雜一「これやこのゆくもかへ
 るもわかれつゝしるもしらぬもあふ
 坂の關
 「橋」此集秋上に幸子内親王たちか
 へり渡るもつらしたなばたの今朝は
 うきせの天の川浪
 ○源具行者具平親王之裔三品師行之
 第二子也正慶元年五月從洛在東
 州之間至近江國柏原六月十九日
 限二命於武臣之手臨期書頌及和
 歌二其所言慎二武臣跋扈之辭氣不可
 致遂握筆以終焉享年五十四爲朝
 致二命國悼之矣
 ○新後撰春上に爲家、にほの海やか
 すみてくるゝ春の日にわたるもとほ
 しめたの長橋
 ○元享釋書云釋聖寶好二修練二經二歷
 名山靈地金峰之嶮徑役君之後榛塞
 無二行路二寶授二爲高而踏開自是苦
 行之者相繼不絶又勤二悲濟二置二衛役

あふ圖書寮本

けふまではありと聞きてもたのむなよ猶行末もしらぬ命に

すみだ川のほとりにてよみ侍りける

こと問ひていぎゝはこゝに隅田川鳥の名聞くも都なりけり

おなじ頃あづまにもむき侍りけるにあふさかの

關を越ゆとて思ひつゞけ侍りける 權中納言具行

新千載離別

身にしあらねば新千

歸るべき道しなければこれやこの行くをかぎりの逢坂の關

せたの橋をすぐるとて

太平記

ものから太平記

けふのみと思ふ我身の夢のよに渡るもつらしめたの長橋

するがの國より信濃へ越えける時うきしまが原を

過ぎて車かへしといふ所より甲斐國に入りて信濃

路へかゝり侍りけるがさながら富士の麓を行廻り

けるに山のすがたいづかたよりもたぐひなく見え

ければ

よみ人しらず

于金峰山設渡舟于吉野河二行人類
之○大峰入の事は熊野發心門より人
を順といふ後小角ふみ初し也其後醍
醐聖寶吉野よりふみ初しを逆とい
ふ

〔増〕「す」は細竹なり信濃飛驒等
の高山に多く生ず新古今秋上に頼政
今夜たれす吹く風を身にしまして吉
野の嶽の月を見るらん

○萬葉集十一石根踏重成山雖不有不
相日數戀渡鴨

○才傳云平維繼者從三位宮内卿兼
親之孫從三位高兼之男也建武二年
正月爲文章博士曆應五年正月謝
官途三刺餐髮一號宴儀康永二年四
月十八日薨歲七十八

○新拾遺 たのめおくやどしなけれ
ば旅の空くるゝを道のかざりにぞゆ
く○惟繼卿の歌の轉なるべし
○古今集 世のなかはいづれかさし
てわがならむゆきとまるをぞやど
さだむる

〔増〕何か夕べは憂かりしとは旅に
出てゝのつらさを思へば都にての夕
べは何もつらき事は無かりしとなり

○萬葉集十卷に豊國のゆふ山雪とよ
めり木綿山は豊後國速見郡にあり
〔増〕此ゆふ山は豊國の木綿山には
あらで只夕方の山の意なるべし玉葉
集夏に前太政大臣秋近き谷の松風
音たてゝ夕山涼し岩の下水

李花櫻雲 南朝紀傳
北になし南になしてけふ幾日ふじの麓を廻りきぬらむ
行めぐり

百首御歌中に
後村上院御製

幾日かはふじの高嶺を見て行かむ分くる裾野の道かはるとも

大峯修行の事を思出てよめる
二品法親王仁譽

岩ねふみかさなる嶺に日數へてすゝわけし道ぞ今も忘れぬ

題しらず
前中納言惟繼

とまるべき宿をば知らずけふの日のくるゝを道の限にぞ行く

藤原行房朝臣

行とまる里の名ごとにかはる哉ゆふべはおなじ夕べなれども

よみ人しらず

都にてなにか夕べは憂かりしと宿とひかぬる心にぞ問ふ

草枕ゆふ山風のさむければこよひは更に寝むかたも無し
宗良親王千首橋中山

○古今集 夢のうちにあひ見むことをたのみつゝくらせるよひは寝むかたもなし

○續後撰 秋中に下野、秋の田のつゆいほりかな

○新拾遺 旅に爲教、かり枕夢もむすばずさゝのやのふしうきほどの夜は

○新續古今集に教親、くれてゆく秋のわかれの道ぞとや野はらの草も色かはるらむ

○本集 戀三に、思ひいでむ人の心はしらねどもかたみなるべき夜はの月かな

○續後撰 戀四に左大臣、心こそちぎりしまゝにかはるともおなじそらなる月や見るらむ

○續拾遺 旅に如願 わすれずばしほれて出でし春雨のふるさと人も袖ぬらすらむ

三善頼衡朝臣
小笹原露しく床のかり枕ふしうき夜半は夢もむすばず

右近大將長親母
枕ゆふ野原の草の露の上にかりねあらそふ月の影かな

中務卿宗良親王
後は又旅ねや月に思ひ出でむ今はみやこのかたみなれども

下總國にて月を見てよみ侍りける
文 貞 公

櫻雲
故郷のおなじ空とは思出でじかたみの月のくもりもぞする
題しらす
後醍醐天皇御製

これまでは猶も都のちかければおなじ空なる月をこそ見れ
ながむるをおなじ空ぞと知らせばや故郷人も月は見るらむ
中院入道一品

○新後撰上に後嵯峨院、山ふかきすまひからにや身にしむとみやこの秋の風をとばばや

○新千載釋歌に伊勢大輔、いにしへの契もうれし君がためおなじ光にかげをならべて

○山家集 柴のいほはすみうきこともあらしを友なふ月のかげなかりせば

○續拾遺旅に爲家、ながめつゝ思へば同じ月だにもみやこにかはる佐夜の中山

○千首に鞆中原、爾原伏屋ともに信濃國伊那郡也
○新古今旅に 信濃のみさかのかたかきたる繪にその原といふ所に旅人やどりて立あかしたる所を藤原輔尹立ながらこよひはあけぬその原やふせやといふもかひなかりけり

いく里の月に心をつくすらむ都の秋を見ずなりしより

後村上院御製

都をもおなじひかりと思はずば旅ねの月をたへて見ましや

月爲鞆中友といふ事を

前中納言爲忠

都より伴なふ月のなかりせばなぐさめ難き旅ねならまし

月前露といふ事をよませ給うける

後醍醐天皇御製

影やどす月さへいまはなれにけり都にかはる袖のしらつゆ

千首歌中に

中務卿宗良親王

忘れずよ一夜ふせやの月の影なほそのはらの旅ごちして

後醍醐天皇よし野の行宮におまし／＼ける頃

歌めされけるに月前旅

法眼 湛 助

○拾玉集 このごろはもとすむ人や
いとふらむみやこにかへる大はらの
さと

○大日本史曰源忠顯内大臣有房孫、
權中納言有忠子也延元元年削髮尋與
藤原雅忠拒尊氏于西坂戰敗而死

○續後拾遺旅に基任、都思ふたびね
の夢のせき守はよひくごとの嵐な
りけり

○古今集長歌に忠岑、九かさねのう
ちにてはあらしの風もきかざりき

○玉葉旅に洞院前左大臣、いつかわ
れなれしみやこに立かへりかゝる旅
ねを人にかたらむ

○同じ文字なき歌、古今集新勅撰集
などに見えたりいとかたきわざなれ
ば多くは見あたらず二首までめてた
くもよみたまへるかな

〔増〕「上下におきける」の「に」字、
諸本皆脱せり松井本に依りて補ふ

あくがる、心を月にさきだて、みやこにかへる道急ぐなり

題しらず

大藏卿在仲

故郷に立かへるとも今は又むかしをかたる友やなからむ

右衛門督忠顯

みやこ思ふ夢路や今の寢覺までいく曉のへだて來ぬらむ

羈中百首歌よみ侍りしに

中務卿宗良親王

きかざりし嵐をさむみ旅衣こゝのかさねのうちぞ戀しき

旅の心を

權大納言時經

君故と思はざりせばいかばかりかゝる旅ねも猶うからまし

下つふさの國に侍りける時三十一首歌よみて

上下におきけるおなじもじ無き歌

文 貞 公

○日本紀に常世郷といへるは皆僻遠の地を指し不變の意を祝していへり
 ○狹衣に逢萊をこよといへり
 ○大山は尾張國丹羽郡にあり
 ○和名抄云尾張國成海(奈留美)郷
 ○李花集云忍びて美濃國までまかり
 多く又ありしもかども都へもはどかり
 かく山といひし處よりなるみの浦ち
 海ついで待りしすまひにもめづらしくおぼえ
 侍りしかば
 〔増〕新後撰旅に爲相なれきつる山
 のあらしを聞きすて、浦ぢにかゝる
 旅衣哉、相似たる歌なり
 ○李花集云なるみをとほり侍りしに
 折ふし沙さしてこゝをばいかゞなど
 申侍りしかば
 ○新千載旅に爲氏、たび人はさぞい
 そぐらむなるみがたしほひのかたの
 道にまかせて
 ○萬代集に清輔、しほがまのうらか
 なしつり舟〔船〕霧の籬のとは霧深
 くして籬の嶋も見えざるよしなり
 ○金葉集秋に實光、月かげのすに
 まかせてゆく舟はあかしの浦やとま
 りなるらむ
 ○新後撰戀二に少將、よるべなきた
 ななし小舟〔舟〕ちもせておなじ入江に
 身はこがれつゝ
 ○玉葉集戀二に躬恒、さみだれのた
 そがれ時の月かげのおぼるげにやは
 われ人をまつ

卷第八 羈旅歌

東路やとこよのほかに旅ねしてうき身はさぞな思ふ行末
 夢の世にけふ生まれきて悔しさも一方ならず身を恥る頃

信濃より木曾路をはるくとのぼりけるにいぬ

山といふ所よりなるみの浦へ出で侍りけるとて

思ひつゞけゝる

よみ人しらず

櫻雲 李花

山路よりいそべの里に今日は來てうらめづらしき旅衣哉

李花

鳴海潟汐のみちひのたびごとに道ふみかふる浦の旅人

題しらず

前中納言爲忠

しほがまのうら悲しかる舟出哉霧の籬の島がくれして

前内大臣 隆

夜なくの月をしるべにこぐ舟はあけゆく浪や泊り成らむ

後醍醐天皇御製

○新後撰冬に法皇、あし鴨のたまか
 せてぞゆく
 集、山田さへ今はつくるを散る花の
 かごととは風におほせざらん
 ○續後拾遺集に行朝、うらみても身
 を袖ぬらすらん
 ○伯耆卷云 漫々たる海上にいづく
 ともなく漂ひて四日ばかりは過ぬ甘
 七日夕方にや杵築の浦にて西風は甘
 しく吹ていかなるべきにかと心さわ
 げせしかども風にまかせしに夜より
 海山も静に明ぬれば爰かしこも見
 ゆるに伯耆の湊につきぬ榎取ども今
 とは力つきぬといふをとかくして大
 だにも稀なり此處の主といふ者も都
 云處につきぬ爰はあら磯にて釣
 べきものばやしあしにひきかたな
 りふたり猶人もともの者なる人ひと
 獨り埋れる心あやしき苦の下に唯
 猶しなると引つくるひて今は限り
 待たんと舟つくるには人ひとり來り
 あるやしくもなきはかばかり來り
 やとあやしき忠顯を尋ねて御時
 めしを奏すうれはなんどはか
 心も及ぶべきか
 心毎にその氣味なほ思ひ出るは
 い毎にその氣味なほ思ひ出るは
 ねいたす輩の味なほ思ひ出るは
 めやよるべき波のあら磯を云々
 忘れ

吹く風の便り待つまをかごとにておなじ入江に泊るふな人

よみ人しらす

伊勢の海や浪高き浦の泊り舟おぼろげにやは夢をだに見し

幸子内親王

舟とむる浦ぢの浪のうき枕さだむとすれど見る夢もなし

後醍醐天皇御製

忘れめやよるべもなみの荒磯を御舟のうへにとめし心は

この御歌は元弘三年隱岐國より忍びて出でさせ

給ひける時源長年御むかへにまゐりて船上山と

いふ所へなし奉りけるほどの忠ためしなかりし

事などしるしおかせましくける物のおくにか

きそへさせ給ひけるとぞ

○關城書裏書云元弘三年二月廿四日
主上出御隱岐國、同日遷座伯耆國稻
津浦、同二十六日遷幸船上山

○伊呂波字類抄云玉串着木綿賢木名
○千載集に崇徳院、吹く風も木々の
枝をばならさねど山は久しきこゑぞ
きこゆる

○西京雜記云大平之世則風不鳴、餘
○元弘三年齋宮になりたまへる事秋
上卷に注り猶次にもいふべし

○徒然草云齋王の野宮におはします
有さまこそやさしく怜きことのかぎ
りとはおぼえしか經佛などいみて中
子染紙などいふなるもをかし

○廣田社歌合に資隆、はふりこがい
はふさか木の白ゆふにしてかけそふ
るけきの雪かも「増」此集冬に參議持
房、神垣やみむろの山の榊葉にゆふ
かけそへてふれる白雪
○日本紀萬葉集等に木綿をゆふとよ
めり榊樹の皮を剥て造れり梁塵抄に
紙に造る木なりといへり

○度會弘訓曰家行は外宮一ノ禰宜に
て度會神主なるを南朝公卿補任に藤
家行と擧たるは誤也家行は今家亡た
り三ノ禰宜有行男、嘉元四年三月三
日任三禰宜、興國二年八月十七日爲三
一ノ禰宜、同年叙三從三位二宮禰宜轉
補次第記山宮祭の祝詞等に見えたり

新葉和歌集 卷第九

神祇歌

題しらず

前中納言爲忠

神風や長閑なる世と白露の玉串の葉の枝もならさず

野宮より退下の後、雪を見て

祥子内親王

忘れめや神のいがきのさかき葉にゆふかけそへし雪の曙

題しらず

從二位隆基

おきゐつゝ君をいのれば神がきにこゝろかよはぬ曉もなし

從三位家行

神垣のみむろの榊さしそへて君をときはとなほ祈るかな

○續後撰集に實雄、神がきやみむろのさか木ゆふかけていのる八千代もわが君のため

○西陽雜俎云庚申日伏尸言人過一本

命曰天曹計人行三日三日三朝云々

○七守庚申三日滅三守庚申三日伏

寺開祖智證大師西渡時傳來謂人身中

有尸蟲一赤云三彭一紀二人隱隱每

庚申夜一乘三人睡二升告之天二謂是

夜有惡星一降入三人骸竊問二伺二察其

罪惡蓋本道家之教也於是俗間比隣

結社或鳴響念佛或置酒妓歌徹夜

守之新不寐不赤痴駭之甚耶

○新續古今集に匡房、八百萬そこら

の神のとしなみによるひるまもる君

が御代かな

○南朝紀傳云延元三年九月十一日

東國下向の舟も漂流す親王顯道於

難舟勢州一條舟悉も返す陸國内道此

御舟勢州一條舟悉も返す陸國内道此

舟を調る一條舟悉も返す陸國内道此

品着親王御舟親江并親良舟常結城内道此

澄宮親王御舟親江并親良舟常結城内道此

その法親王御舟親江并親良舟常結城内道此

又御詠に、井伊かた片敷袖の夜の浦波

衣御詠に、井伊かた片敷袖の夜の浦波

花宮懐仁親王御舟四國に著是時

西宮懐仁親王御舟四國に著是時

島野僧へ御下親意あるべしと也古勢國篠

神路山出づる月日や君が代をよるひるまもる光なるらむ

兵部卿親王家にて庚申七百首歌よみ侍りける中に
右兵衛督成直

延元三年秋後村上院かさねて陸奥の國へくだらせ
まし／＼けるに、いくほどなく御舟伊勢國篠島と
いふ所へつきたるよし聞えしかば勅使としてまゐ
りたりけるに、このたび大風なのめならずして御
供なりける舟ども多くそんじけるを、おなじ風の
まぎれに御舟ばかりは、ことゆゑなく、この國へ
しもつかせ給ふ事しかしながら太神宮の御はから
ひたるよし神づかさどもよろこび申ければ、やが
てこのよし奏し侍りけるついでに

前大僧正頼意

○又云、彌宜神人申すは此度の大風に舟數千艘破損する所に親王の御舟は無恙此浦に着御の事大神宮の御恵の故なりとなり頼意無限神慮の徳を感じ一首の歌を親王に奉る「神風や御舟よすらし」云々

○神皇正統記云七月の末いせに越させたまひて神宮に事の由を啓して御織し九月の始友綱をとかれしに十日餘の事にや上總の地近くより空のけしきおどろしく海上荒くなりしにかば又伊豆崎と云ふ方に漂はれ侍りしにいと波風夥しく成てあまたの舟行方知らず侍けるに御子の御舟はさはりなくいせの海につかされたまふ云々

○篠島を太平記には神風の濱といへり和訓葉云いせの國篠島とあるは志摩國孝生(チフ)の内の篠間なるべし俊頼の歌に、をふの海にしのみあまのかづくてふとよめる所也

○玉葉集に辨内侍、大かたの世はうつるともますかゞみたのみをかけしかげなわすれそ

○建保御百首に順徳院、夏の夜も涼しかりけり神風やみもすそ川にすめる月かけ

○延喜式曰凡齋内親王定畢即卜三宮城内便所爲初齋院二祀禊而入至于明年七月齋於此院一更卜三城外淨野二造野宮一畢八月上旬卜三定吉日一臨河祀禊即入野宮二自遷入日一至于明年八月齋於此宮一九月上旬卜三定吉日一臨河祀禊參入伊勢宮一

標雲

む標雲、南朝紀傳

神風や御舟よすらし沖つ浪たのみをかけし伊勢の濱べに

河月をよませ給うける

後醍醐天皇御製

照らし見よみもすそ川に澄む月もにごろぬ浪のその心を

野宮に久しく侍りける頃、夢のつけありて大神

宮へ百首歌よみて奉りける中に

祥子内親王

いすゞ川たのむ心はにごろぬをなど渡るせの猶よどむらむ

正平十八年内裏にて人々名所百首歌つかうまつ

りける時鈴鹿川といふ事をよみ侍りける

妙光寺内大臣

神も又あはれはかけよすゞか川八十瀬をかけし跡の白浪

○後鳥羽院御集 いすゞ川たのむ心
 しぶかければ天てる神ぞ空にしるら
 む
 ○新千載集に爲世、たえずこそつか
 へしものを我身世になどよどむらむ
 關の藤川
 ○玉葉集に俊成、そのかみにいのり
 し末はわすれじをあはれはかけよか
 もの川波
 ○詞花集夏に治部卿、さみだれの日
 をふるまゝにすゞか川八十瀬の波ぞ
 音まさりける
 ○沫は古事記日本紀などに阿和と見
 え阿恰は阿波禮と見えて假字たがへ
 りさるを新勅撰集に往水のあはれは
 かなきとよみ本集にも戀歌に逝水の
 あはれとだにもとよめりたゞよふ水
 のあはれも沫にいひかけたまへれば
 記組の假字にはかなはず
 ○風雅集に氏之、すむ月もいくとせ
 ながらぬいすゞ川とこよの波のきよき
 なりに
 ○續千載集に重家、よふともたえ
 ずぞすまん昔より流れ久しきほ川
 の水
 ○新後撰集に院、石清水にごらじと
 思ふわがこゝろ人こそ知らね神はう
 くらん
 ○神社考詳節云石清水清和天皇貞觀
 元年大安寺沙門行教奏聞之自豐前
 宇佐移之於山城國男山徳山一所謂
 八幡大神即應神天皇是也
 ○後拾遺雜六に増基、こゝにしもわ
 きていでけむいはし水神の心をくみ
 てしらばや

千首歌よみ侍りしに伊勢を

中務卿宗良親王

ともがな千首

いすゞ川その人浪にかけずともたゞよふ水のあはれとは見よ

題しらす

藤原有氏朝臣

跡たれし神代久しきいすゞ川きよき流れぞ今も絶えせぬ

大中臣爲量朝臣

神代より流れ久しくつかへ來て絶えじとぞ思ふ五十鈴川浪

中院入道一品

石清水きよき流れをたのむより濁らじとこそ思ひそめしか

入道前右大臣

いはし水濁れる末の世なりとも神の心はさぞな澄むらし

千首歌よませ給うける時石清水を

○風雅集に太上天皇、いのる心わたくしにてはいはし水にぎりゆく世をすませとぞ思ふ

○古今集に忠岑、君が代にあふ坂山のいはし水木がくれたりと思ひけるかな

○永久百首に常陸、君が代のもどけきかげをくみ見ればながれたえせぬいはし水かな

○名所圖會云萬代八幡宮は和泉國大鳥郡毛須莊赤畑村に在り昔は土師郡なり祭神應神天皇左住吉右春日神功和漢三才圖會云萬代八幡宮在三百舌鳥野俗作三萬代字有御廟山一曰三應

○神天皇陵三木詳應神陵在河州譽田二○納後拾遺に御製世治まり民やすかれといのるこそ我身につきぬおもひなりけれ

○續千載賀に一條内大臣、民やすく國ゆたかなる御代なれば君を千年とたれかいのらぬ

○公事根源云賀茂祭 中西日末の由先上卿陣に着て六府を召て警固の由を仰す當日の使は近衛の中少將つとむ昔夢の告侍りしより今日人々葵桂の葉をかくるなり 賀茂松尾の社司前日より然るべき所々へ奉る欽明天皇の御宇より此祭は始まる下鴨の御祖上賀茂別雷二柱の神祭也

御 製

なにとかくにぎりゆく世ぞ石清水人の國とは神も思はじ

あなじ心を

後村上院御製

神もまたあはれと思へ石清水木がくれてわがすめる心を

權大納言季修

よゝをへて流れ絶えせぬ石清水すめるも神の誓ひなるらし

和泉國萬代別宮に參籠し侍りける時よめる

二品法親王深勝

民やすく國をさまれと祈るかな人の人よりわが君のため

年中行事を題にて人々百首歌つかうまつりける

後村上院御製

葵草神もあはれはかけそへよよそにみあれのかもの瑞籬

○夫木鈔七に家隆、あふひ草秋のみ
の川水
○後拾遺集に選子内親王、みゆきせ
しかも川の波かへるきにたちやよる
とぞまぢあかしつる

○廿二社次第云平野第一今木神(日
本武尊)源家氏神第三古開神(仁徳天
天皇)高階氏神第四比賣神(天照大神)
大江氏神第五清原氏(菅原氏秋篠氏)
氏神(中原氏清原氏菅原氏秋篠氏)

○延喜式云平野神四坐祭、今木神、
久度神、古開神、相殿比賣神
○掛雲千首たのめたど平野の宮にた
つ杉の直き道をぞ神もろくなる
○拾遺集に元輔、おひしげれ平野の
原のあや杉よこきむらさきに立かさ
ぬべく

○公事根源云春日祭上申日二月十一
日に行る先末の日使たつ近衛の中少
將つとむ府の官人摺袴着て舞人つと
む使無名門の音にまみりて事の由を
奏す舞人物の前に出す藏人出で祿のち
ちき一くだりたまふ當日の曉内侍む
かふ藏人出車奉る上御辨も今日同九
日此祭は始る云々

○太平記云越前國ハ多年ノ守護ニテ
一國ノ寺社本所領チ半濟シテ家人共
ニゾ分行ヒケル其中ニ上南都ノ所領
河口莊ヲバ一圓ニ家中ノ料處ニゾナ

正平廿年内裏三百六十首歌中に神祇を

前中納言忠成

行幸せし鴨の川浪いにしへに立かへれとや神も待つらむ

同八年内裡千首歌中に平野

中院入道一品

昔見し平野にたてるあや杉のすぎにけりとて吾な忘れそ

元弘三年立后の屏風に春日祭

の儀式ある所を新千載

後醍醐天皇御製

新千載神祇
立よらばつかさぐもこゝろせよ藤の鳥居の花の下陰

年中行事百首御歌中におなじ心を

後村上院御製

二月や雪まを分けし春日野におく霜月も神祭るなり

シタリケル早ク當莊押領ノ儀ナ止テ
大會再興ノ禮ニ復セシメタマフベシ
ト公家ニ奏聞シ武家ニ觸訴フ然ドモ
公家ノ勅裁ハ成トモ人用ズ武家ノ奉
書ハ憚テ渡ス人ナシ之ニ依テ噉議ノ
若輩氏人ノ國民等春日ノ神木ヲ飾奉
リ道朝カ宿所ノ前ニ振捨奉ル其日ヤ
ガテ勅使參迎シテ神木ヲバ長講堂ヘ
ゾ入奉リケル

○歷代皇紀皇年代略記神明鏡云貞治
三年十二月春日神木入洛
○皇年代略記公家補任云貞治五年八
月十二日春日神木歸座
○春日神木御入洛見開略記云應安四
年十一月日奉振寄神木於六條殿今度
自西ノ路御入洛云々同七年十二月
十七日神木御歸座其儀如常○康曆元
年巳未八月十四日春日神木御入洛直
奉入六條殿長講堂畢同二年十二月十
日御歸座

○日本紀曰云々對曰吾欲レ住ニ於日本
國之三諸山ニ故即營ニ宮彼處ニ使就而
居此大三輪之神也

○夫木十五に蒸圓、いろふかき杉ま
のみみち尋ねきて秋のしるしをみわ
の山本

○公事根源云廣瀨龍田祭四月四日此
兩社は大和國にあり祭ノ日は陸務也
年に二度行る使は前の日たつ大忌風
神の祭といふ是也風水の難を除て年
數の豊なることを祈中さるゝにや天

正平廿年内裏七百首歌中に社頭暮といふことを

妙光寺内大臣

春日山時雨もはてぬ夕づく日二たび照らす影かとぞ見る

神木入洛のよし聞えし年の秋よみ侍りける

權大納言公夏

神も又ことしの秋は旅ねして思ひ出づらし春日野の月

天授二年の秋千首歌よませ給うける中に三輪を

御製

いつかさて祈るしるしをみわの山今年もなかば杉たてる門

年中行事三百六十首歌中に廣瀨龍田祭

妙光寺内大臣

ゆふかけて使もけふぞ立田山山路を遠みよるや越ゆらむ

武天皇四年四月に風神を龍田の立野にまつり大忌ノ神を廣瀬ノ川勾に祭

○神名式曰大和國廣瀨郡廣瀨座宇加

實命神社

○同日大和國平群郡龍田座天御柱國

御柱神社二座龍田比古龍田比女神社

○新古今集に慈國、君をいのる心の

いろを人とはいたすのみやの朱の

玉がき

○新千載に國夏、怠らずいのるも御

代のためなれば君と神とに身はつか

へつゝ

○神名式曰攝津國住吉郡住吉座神社

四座並名神大月次以相嘗新嘗

○南朝公卿補任云正平十五年二月廿

五日興良親王、親王反逆燒吉野居軍勢攻

幸住吉社今年賀名生皇居被造營

○乘云位山は朝廷をいへり飛驒の山

の名にも呼り六帖には信濃なる位の

山とよめり安曇郡飛驒と堺ひて見え

わたり

○後撰集に夏の夜ふかやぶが琴ひく

をきよて兼輔朝臣、みじか夜のふけ

ゆくまゝにたかさごの峰のまつ風ふ

くかどぞきく○琴曲に風入松といふ

あり

○白氏文集云第一第二絃々々秋風拂

松疎音落

〔繪〕從二位衡子の字、諸本脱せ

り松井本に依りて補ふ

題しらず

津守國貴

君をいのる道に急げば神垣にはや時つげて鳥も鳴くなり

從三位國量

あやめ草けふはみしめに引そへて君と神との恵をぞ知る

正平十五年十月住吉社に行幸ありて神主國量正

下の四位に叙せられる時思召つゞけさせ給う

ける

後村上院御製

位山こえても更に思ひしれ神もひかりを添ふる世ぞとは

從二位衡子立願の事ありておなじき社のかむた

ちにて箏の秘曲を手向け侍りける時忍びてまう

で給うけるをりしも松風すごくひびきあひて月

雪のひかりさへたぐひなく侍りければ思ひつゞ

○新古今集に太上天皇、契あればうれしきかゝる折にあひぬわするな神もゆく末の空

○神社考曰延喜式十神名帳近江國日吉神社名神大、同三名神祭部云日吉神社一座注云比叡神同、傳記云山王權現者磯城島金刺宮即位元年自天降于大和國磯城上郡而現大三輪神其後大津宮即位元年現老翁形一告曰我是大比叡大明神也

○千載集に慈圓、わがたのむ日吉のかげはおく山の柴の戸までもさゝぎらめやは

○延喜神名式曰、大和國吉野郡金峰神社、名神大、月次新嘗

○神社考曰世傳金峰山權現者勾大兄廣國押武金日天皇也是即安閑天皇也○拾玉集 神かきやおのがときはにたりぬらむけふのたむけをまつ風のこと

○神名式曰大和國吉野郡吉野水分神社、大月次新嘗

けさせ給うける

新宣陽門院

忘れじよわするな神も月雪の夜半にたむくる松風の聲

百首歌よませ給うける中に日吉を

後村上院御製

おしなべて照らさぬかたや無かるらむ頼む日吉の神の光は

元弘元年神無月の頃日吉社に歌あまたよみて

奉りし中に

中務卿宗良親王

いかにせむたのむ日吉の神無月照らさぬ影の袖の時雨を

金峰山野際の社に參籠しけるに梅花の咲きたるを

見てよみ侍りける

前大僧正頼意

二月キサラギのをりを忘れぬ神がきに今日の手向と匂ふ梅が香

延元の頃子もりの社へ參らせ給うて御祈願の事有り

○和漢三才圖會云龍守神社祭神三座
 高皇產靈尊栴檀千々命少名彥名命
 ○古事記云天之水分之條に云久麻
 理は分配なり即書紀に分を久婆留と
 もり古今六帖片戀の題にみこ
 もりの神と多くよみ清少納言が册子
 神はと云中にもみこりの神あり
 是等も水分を訛れる名か吉野なるを
 も後世には然いふ也
 ○金葉集雜上に忠盛 おもひきやく
 もあふの月をよそに見て心のやみにま
 どふべしとは
 ○續後撰集に 祝部允中、九十あま
 りかなしきわかれかなながきよはひ
 となたにたのみけむ
 〔增〕 此集賀に従三位俊文、秋の夜
 の長きよはひに見る月の明らけき世
 にあふがうれしき
 ○神名帳曰信濃國諏訪郡南方刀美神
 社、名神大○建御名所神の洲羽に鎮
 りたまふゆゑよしは古事記に詳かに
 見えたり○神社考曰信濃諏訪下野宇
 都宮專狩獵供鳥獸○上すはの祭三月
 酉の日なり鹿の頭を七十五組にのせ
 神前に供ふ別に肉を料理しても供ふ
 下社は鹿を供へず
 ○夫木抄廿三に爲家、すはの海の冬
 の里人我としや氷をふみて世をわた
 るらむ
 ○風雅集に後宇多院、天つ神國つや
 しろをいはひてぞわがあし原の國は
 をさまる

けるついでに思ひつゞけさせ給うける 新待賢門院
 名にしおふ神の誓ひのそのまゝに心の闇をてらせとぞ思ふ
 祈りおく心のやみもいつ晴れて雲井にすまむ月を見るべき

題しらず

從三位俊文

身にあまる恵を老てみしめ繩ながきよはひは神やうけゝむ

諏訪大明神に法樂し侍りし千首歌中に

中務卿宗良親王

あらたなる諏訪の祭のみかり人しかもありける神の誓ひか
 同 李花
 すはの海や氷を踏みて渡る世も神し守らばあやふからめや
 同 李花

百首歌よませ給うける中に寄社祝を

後村上院御製

行すゑを思ふも久しあまつ社くにつ社のあらむかぎりは

新葉和歌集 卷第十

釋教歌

正平廿年五月四天王寺金堂造立して、やがて供養の導師つとめ給へるに昔此寺にて天台座主明雲拜堂しける時遺身舍利を禮して、「つねならぬためしは夜半の煙にて消えぬ名残を見るぞうれしき」とよみ侍りける事を思ひ出でてよめる

前大僧正忠雲

わが世まで消えぬ煙の名残とも見るぞ昔の跡はうれしき

後醍醐天皇大納言典侍さまかへて後、住吉の西林院といふ所に住み侍りける時かの寺の梅花を

○大日本史曰正平二十年乙巳夏五月廿四日壬午慶四天王寺金堂皇代記係前年
○拾芥抄云四天王寺（聖德太子救世觀音）十大寺其一也
○明雲、久我太政大臣雅實公孫、顯通卿子也
○舍利此ニハ骨分或云ニ堅固一
○千載集釋教に 天王寺にまゐりて遺身舍利を禮して天台坐主明雲 つねならぬためしは夜はのけふりにて云々
○明雲座主相者に逢て兵仗の難やあると尋られし事徒然草に見ゆ壽永二年十一月十九日木曾義仲の將橋六郎が矢に中りて落けるを郎等御頭をとるよし源平盛衰記に出たり
○玉葉に爲子、かたばかりそのなごりとしてあり原の昔のあとを見るもなつかし

○攝津志住吉郡部云廢西林院在遠里小野鹽殿町礎石僅存

○此集哀傷部に大納言典侍、春ごとにとはれし君がなさけをば花もさこそはおもひいづらめ」とあるはこの西林院の梅なるべし
○千載集に快修、うれしくぞ名をたもつだにあだならぬみのりの花に身をむすびける

○南朝紀傳云建徳二年三月十一日先帝の第三回忌に就て宸翰の短冊を集め其裏に法華經を書き供養す導師大僧正頼意たり其時僧正の歌にかきおきし云々

○續古今集に時廣、わしの山むかしの春は遠けれどみりの花は猶ほひけり

○八講は法華經の要文を問者の問かくるを講師のひとつ／＼答へて講ずるなり一日の内に八座の間答ある故に八講と云ふ

めされけるに奉りたりければ

後村上院御製

わがたのむ西の林の梅の花御法の花のたねかとぞ見る

御返し

後醍醐天皇大納言典侍

頼みける君がめぐみの色そへて御法の花は猶ぞさかえむ

後村上院第三年の御佛事の次によみおかせ給ひ

ける短冊をつがれて、うらに宸筆にて御經かゝ

せ給ひたりける供養の導師つかうまつるとて思

ひつゞけ侍りける

前大僧正頼意

かき置きし昔の春の言の葉に御法の花を今日はそへつゝ

正平廿一年二月十七日莊嚴淨土寺にて御八講お

こなはれける日雪いたうふりて侍りければ妙光

○新續古今集に後龜山院、思ひやる人だにあれな住なれぬさが野の秋のつゆはいかにと

○新後撰集に道玄、こゝのへにふりしく雪はいにしへのりのむしるにあとや見ゆらむ

○新續古今集に元可、たかの山うき世の夢もさめぬべしそのあかつきをまつのあらしに

○新後撰に平親清女妹、しるべせよくらきやみぢにまよふともこよひかゝぐるのりのとしび

○新拾遺に傳教大師、あきらけく後の佛のみまでもひかりつたへよのりのとしび

○元享釋書云園城寺者大友與多之所建也珍問大友氏曰此寺曰御井何答曰寺之西岩有泉井二天智天武持統三皇降誕時汲此井水爲浴湯俗因而號御井寺乃改御井爲三井曰取三皇浴井之事也

寺内大臣のもとへつかはされける

後村上院御製

櫻雲
思ひやるさが野の春の雪にもや消えける罪の程は見ゆらむ

御返し

妙光寺内大臣

同
をしむなよ法の席の春の雪消ゆらむ罪のためしなりせば

題しらず

二品法親王深勝

高野山あかつき遠く松の戸に光をのこす法のとしび

前大僧正頼意

傳へ來しのりの灯トモシビかゝげてやあきらけき世を猶いのらまし

寄水釋教といへる心を

二品法親王仁譽

濁るなと世をこそ祈れ底深き三井の清水を汲みそめしより

千首歌よませ給うける時大日を

御製

○摩訶毘盧遮那此云大日
○大日經疏云梵音毘盧遮那者是日別名
○涅槃經云六塵、一色塵、二聲塵、三香塵、四味塵、五觸塵、六法塵
○阿毘達磨集異門足論云三世、一過去世、二未來世、三現在世
○新拾遺集神垣やちりにまじはる光こそあまねくてらすちかひなりけれ
○續古今集に左大臣、ゆく水にとどまるいろぞなかりけるこゝろの花にちりつもれども

○佛祖統記云緣覺界若根塵念起則了之從無明生復有觀物榮落悟世非常一聞空得道名爲獨覺
○如是行者名緣覺法界一○緣覺はヒトリサトル也慈圓獨さとの道と聞くこそうれしけれ立田の紅葉みよし野の花○宗良親王千首 緣覺界、花をながめもみちを見てぞしられける風もふきあへぬ世のはかなきは
○新千載集に宗秀、花にそめもみちにあだし世の中

○名義集云辟支迦羅此翻緣覺一觀十二因緣二無情悟故亦翻獨覺二出無佛世無師悟故○二乘は小乘大乘を云ふ
○大藏法數云小乘迦旃延於罽沙一明三藏二法華食著小乘三藏學者故大師指小乘爲三藏大乘通意融三故大別依二法性顯三故大圓三一無礙故大故三教名大乘○釋林僧寶傳云雲樹寺國濟三光國師諱覺明號二孤峰二奥州平氏子生而駭異甫七齡

六の塵あまねく照すひかりこそ三世に常なる悟りなりけれ
色にそむ心の花の散りてこそもとのさとりのねに歸りぬれ
上野太守守永親王

緣覺界の心をよみ侍りける

中務卿宗良親王

眺めつる花も紅葉もちりはてこゝろの色ぞ今はむなしき
新千載古今よみ人しらす
李花集

二乗を

右近大將長親新千載古
明親法師

かひなしな人をわたさぬ法の舟浮世の岸を漕ぎ離れても

三光國師入滅の時よみ侍りける

妙光寺内大臣

あまを舟のり知る人は先だちつくるしき海を誰か渡さむ

喪^レ母父使^レ讀^二書十七依^二講師良範^一得^レ度^一後醍醐天子遊幸時聞^二師名^一詔至^二行在^一問^二佛法^一允協^二聖情^一大駕還復詔^レ師至^レ賜^二號國濟國師^一後從居^二京師^一新天子踐祚尤^レ留^二神佛法^一以下師爲^二先帝^一所^レ敬^レ恩禮持^レ厚上與^二皇后太子^一俱受^二戒法^一加^二號三光國師^一○本朝高僧傳にも出たり

○拾玉集 つみ人はのりのみふねのなかりせばくるしき海をわたらましやは

○山城國名勝志云 保安寺元在^二伏見保安寺村^一今大龜谷五郎太町是也今遷^二泉涌寺内南側揚柳寺内^一

○大日本史曰 權子内親王曆應三年出^レ宮入^二保安寺^一爲^レ尼年時二十六

○大日本史曰 祥子内親王元弘三年爲^二伊勢齋^一後入^二保安寺^一爲^レ尼

卷第十釋教歌

世をのがれて後、保安寺に住みける頃その寺の

長老かくれ侍りければよみ侍りける

祥子内親王

残りゐておもふも悲し法の道尋ねし時はおくれやはせし

無明微薄智惠轉者如從初日月光垂闇々垂晝とい

ふ事をよめる

最惠法親王

秋の月いでゝ程なき影ながらあすの光りをなほ残すかな

一念不生前後際斷といふ心をよみ侍りける

前大納言定平

切れて後又もつゞかぬ白糸の其ふしくはさもあらばあれ

五戒歌とて人のすゝめ侍りし中に不偷盜戒の

中務卿宗良親王

定成子也定平亡_二匿河内東條_一至_二吉野_一拜_二大納言後爲_レ僧不知_二其終_一
○拾遺集 ひとぶるに死なばなにかはさもあらばあれいきてかひなきも
の思ふ身は

○増一阿含經云一不殺生戒、二不偷盜戒、三不邪淫戒、四不妄語戒、五不飲酒戒、二謂人若於_レ有_二主物_一不_レ與而竊取_レ之_二死墮_一惡道_二或生_二人中_一亦受_二貧乏報_一若不_レ作_二是事_一名_二不偷盜戒_一五謂人若飲酒則縱逸狂悖昏亂愚痴無_レ有_二智慧_一若不_レ飲者是名_二不飲酒戒_一

○新古今集に季廣、うきくさの一片なりともいそがくれおもひなかけそおきつしら波

○梵網經云菩薩十戒、七不自讚毀他戒者謂不_レ自矜伐_一不_レ謗他人_一也經云若自揚_二已德_一隱_二他人好事_一令_二他人受_レ毀者是波羅夷罪

○續後撰集に寂然、最上川人をくだせばいな舟のかへりてしづむものとこそきけ

○法華玄義云二性即性分性以_二據_レ內自分不_レ改謂始自_二地獄_一終至_二佛界_一其性各各不_レ同是名_二如是性_一

○新勅撰集に讚岐、すむとてもおもひもしらぬ身のうちにしたひてのこる有明の月

わたつ海の深き報いを知るならば思ひたゝめやおきつ白波

不飲酒戒

盃のうき世に廻る身を受けてわれからさめぬ迷ひとぞ聞く

千首歌よみ侍りける中に不自讚毀他戒を

春宮大夫師兼

のみを千首

我をのみ深きになして柚川や人を淺瀬にいかゞくださむ

如是性といふ事をよませ給うける

御製

ながきよの闇路の雲ははれねどもとの光りは有明の月

法花經品々歌を人のすゝめ侍りし中に序品入

於深山思惟佛道のこゝろを

中務卿宗良親王

○玉葉集に顯頼、ひとりのみたづね
いるさの山ふかみまことの道を心に
ぞとふ

○拾玉集 よしの山おくのすみかを
たづねつゝ佛の道はこれよりぞ知る
○新後撰集に俊成、入がたくさと
なりけり○長秋詠藻には二の句さと
りがたく四句ひらくは花のつあり
○五百弟子授記品云以三無價寶珠
繫三其衣裏一與之而去、其人醉臥都
不覺知一

○玉葉集に赤染衛門、酔のうちにつ
けし衣の玉ぞともむかしの友にあひ
てこそきけ

○新勅撰集に大僧心觀修、ねむごろ
に十のいましめうけつればいつゝの
さはりあらじとぞ思ふ

○拾玉集 三たびなで、契りし君の
勅なればけふまでたれもその示教利
喜

○提婆品云文殊師利言有婆竭羅龍
王女二年始八歳智慧利根善知三衆生諸
根行業得陀羅尼諸佛所說甚深秘
藏悉能受持深入禪定了達諸法
於利那頌發菩提心得不退轉慈
悲仁讓志意和雅能至三菩提一

李花

山深み尋ね入りてぞまよひ無き佛の道は知るべかりける

まがひ李花

方便品其智惠門難解難入を

李花

入りがたき草の戸ざしも秋風の吹はらふにぞ月はすみける

五百弟子品不覺內衣裏有無價寶珠

李花

なれど李花

いにしへもかけし衣の玉をなどうら珍らしく今思ふらむ

かな李花

提婆品皆遙見彼龍女成佛

同

わたつ海のあしまの浪をわけ來ても五の障り無きぞ嬉しき

屬藥品如世尊勅當具奉行

同

末の世を思ふ佛の勅なればわれらが爲ぞいともかしこき

法花經廿八品歌よみ侍りける中に提婆品の心を

中院入道一品

八とせ經しなみの枕のよるの夢さむれば花の臺なりけり

のすま

○涌出品之他方國土諸來菩薩摩訶薩
過三恒河沙數我娑婆世界自有三六
萬恒河沙等菩薩摩訶薩二一菩薩各
有三六萬恒河沙眷屬是諸人等能於
我滅度一誑二持讀誦廣說此經云々

○萬葉第四 八百日ゆく濱の真砂も
我戀に豈まさらじか沖つ鳥守

○隨喜功德品

○續古今 ○新後拾遺に後嵯峨院、
法の花今もふるえにさきぬとはもと
見し人や思ひいづらむ

涌出品

八百日行く濱の真砂の敷しらず悟れる人も有りけるものを

五十展轉隨喜の心をよめる

最惠法親王

法の花いく山風にさそはれてこゝまでもなほ匂ひ來ぬらむ

新葉和歌集 卷十一

戀歌一

題しらず

よみ人しらず

○古今集序に 今はふじの山も烟た
たずなり長柄の橋もつくるなりと聞
く人は歌にのみぞ心を慰めける
○後撰集 信濃なるあさまの山もも
ゆなればふじのけふりのかひやなか
らむ

○新千載集に伏見院、たちまがふか
たこそなけれふじのねやたえぬおも
ひにくゆるけふりは

〔増〕消えなでは消えはせて、消え
ずしてなどの意。追記に詳しく言へ
り。雲のはたては古今集戀一に「夕
暮は雲のはたてに物ぞ思ふ、あまつ
空なる人を戀ふとて」とあるに依り
しなり。

○續千載集に匿禰、夕ぐれは月待つ
とてもものぞ思ふくものはたての秋
の山の端

○古今集 人しれぬ思ひやなぞと芦
がきのまぢかけれどもあふよしのな
き

たれ松井本

誰故にふじの煙も立たずなり淺間の嶽も燃ゆるとか知る

李花集下

ふじのねや絶えぬ思ひの夕煙消えなでさのみ何くゆるらん

同

夕暮はまだ見ぬ人を戀ふる哉雲のはたてを面影にして

李花集下

浦にすむ思ひやなぞと蘆の屋の絶えぬ煙をとふ人の無き

李花集下

みさごゐる荒磯浪もかくばかり心一つにさわがれやする

同

わが心つたの細江を漕ぐ舟の君にぞ寄せし浦がくれても

宗良親王千首寄戀

戀と云へば仇なる浪のたはれ嶋戯ふれにくきまでにかけつゝ

李花集下

思ひ川流るゝ水のあはれとも云ふ人無しに消えかへりつゝ

○萬葉集三に赤人、みさごゐる荒磯
 に生るなのりそのよし名は告よおや
 は知るとも
 ○六帖五 みさごゐるあらいそ浪に
 袖ぬれたがため拾ふいける貝ども
 ○萬葉集六に赤人、風吹けば浪か立
 たんとさもらふにつたの細江にうら
 がくれゆく
 ○古今集十九 ありぬやと心見がて
 らあひ見ねばたはふれにくきまでぞ
 戀しき
 ○續拾遺戀二に前太政大臣、消えぬ
 べしさのみはいかゞ思川流るゝ水の
 あはれとも見よ○沫は阿和、憐は阿
 波禮なり
 ○新續古今戀一に直明王、吹く風の
 たよりありとも目に見えぬ心の色を
 いかゞたぐへん
 ○萬葉九に見菟原處女慕_二歌、つか
 の上の木の枝靡けり聞くがごと陳努
 男にし依るの歌あり大和物語生田川九卷に
 も追加の歌あり作れるものなり○
 は萬葉集に依りて作れるものなり○
 古事記に血沼とあるは河内國和泉郡
 和泉郡に和泉日根兩郡を割きて和泉
 國とせられしかば今は血沼は和泉國
 に屬せり
 ○後拾遺戀二に和泉式部、津の國の
 こやとも人を云ふべきにひまこそ無
 けれ慮の八重葦
 ○續後拾遺戀一に爲家、伊勢の海の
 あまのもしは木こりながら辛しや消
 たぬ同じ煙を
 【增】 萬葉集卷十一 しかのあまの
 煙を立て、燒く鹽の辛き戀をも吾は
 するかも

同
 吹く風の便りはありと聞くものを雲路なればやふみ見ざるらん

古へのちぬのますらを無かりせば戀のためしに吾ぞ成らまし
や李花集上

百首歌よませ給うける中に寄屋戀と云ふことを

後村上院御製

人知れず物をぞ思ふ津の國のこやのしの屋の隙も無きまで

寄木戀を

中務卿尊良親王

あまのたく浦のもしほ木吾なれや辛き思ひにもえこがれつゝ

題知らず

上野太守守永親王

すく藻たく難波のこやの夕煙たつ名も知らず身をこがす哉

前左近中將光實

いつも只空にのみして浮雲の迷ふ心を知る人ぞ無き

千首歌めされし時寄煙戀を

御

製

○白氏文集云愛喜皆心火榮枯是眼塵
 同云妬他心似火欺我鬢如霜人知れぬ
 ○新拾遺戀一に邦世親王、人知れぬ
 しのぶの浦の夕煙思ひたつより身は
 こがれつ
 「拾遺」後撰戀三に紀内親王、津の國
 の難波たまく惜しみこそすくもた
 く火のしたこがるれ
 ○古今戀五に業平、ゆきかへり空に
 のみなりてふる事わが居る山の風早
 早みうきたる雲のゆきかへり空にの
 みしてふる時雨哉
 ○古今物名煙たちもゆとも見えぬ草
 の葉を誰かわらびと名づけそめけん
 ○伊勢物語、新古今旅に業平、信濃
 なる淺間の嶽にたつ煙をちこち人濃
 見やはとがめぬ
 ○古今戀一、涙川何水上を尋ねけん
 物思ふ時、我身なりけり
 ○文選吳都賦曰淵客慷慨而泣、珠
 劉注云俗傳鮫人從水中出曾寄寓
 人家後日嘗網者竹竿、鮫也鮫人
 臨去從主人、秦器泣而出、珠滿盤
 以與主人一
 ○新古今戀一に好忠、ゆらのとを渡
 の舟人かちを絶えゆくへも知らぬ戀
 の道哉
 ○歌詞考云曾丹の歌は梶緒とて體を
 つなぐ緒の斷切れたるにて藻蘆草に
 かちをたえは梶緒の緒の切たる也と云
 へる説宜し梶緒今の世に「はや緒」に
 と云へりこれも古き名にて藻蘆草に
 「はや緒」は籠に附る繩なりと云へり
 ○禪林寺七百首に爲氏、わたつみも
 沙千の潟はあるものをほすま知られ
 ぬわがたもと哉

卷第十一戀歌一

煙たち燃ゆとは見ゆるふじのねも下にこがる、思ひならねば

同じ心をよみ侍りける

前中納言爲忠

わが思ひ淺間の嶽にあらぬ身の戀の煙は人を咎めそ

寄玉戀と云ふことを

中務卿尊良親王

わが心ちとくだけで散る玉は物思ふ時の涙なりけり

建武二年内裏千首歌中に

風にのみまかする舟のかちを絶え終ツヒによるべも知らぬ戀哉

正平八年内裏千首歌中に寄潟戀を 前大僧正頼意

満潮ミツシホもさすが干潟ヒガタはあるものを袖の涙のかわくまぞ無き

寄池戀

前大納言實清

池水シタの下に朽ちなばねぬなはの寝ぬ夜苦しき物は思はじ

關白家三百番歌合に寄鳥戀と云ふことをよみてつ

○才子傳云、藤原實清者、權大納言
公時之男也、實仕歷任爲頭中將、應
永十三年二月十六日薨、和歌一首載
于新古今集

○古今十九に忠降、かくれぬの下じ
り生ふるねぬ名は立たじ
くるないとひそ
○萬葉一志貴皇子、葦べゆく鴨の羽
がひに霜ふりて寒き夕べは大和しお
もほゆ

○五百番歌合に三百七十一番、左、
女房、なよ竹のよをや隔てんと思ふ
にぞうきふしよりも袖は濡れけり右
膝。師兼、長き夜をねにのみなきて
云々○判、なよ竹のうきふしよりも
庭つ鳥かけのたれ尾の長き夜半哉

○萬葉七、庭つ鳥かけのたれ尾のし
だり尾の長き心もおもほえぬかも
○萬葉三に湯原王、吉野なるなつみ
の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山陰にし
て

○風雅夏に宗尊親王、大井川鵜舟は
それと見えわかて山もとめぐるか
り火の朝

○山葉春に經信、水上に花や散るら
ん金川のあぐひにかゝるあだ浪も
○拾遺戀五、あらしをのかるやの浪
はじに立つ鹿もいとわればかり物は思
はじ

〔増〕あらしを、あらしをの轉な
り萬葉十七に安良志乎須良爾、同二
十に阿良之乎乃伊乎佐太波佐美云々
かるやは狩矢なり

かはしける
新釋古今戀二
歎きつゝひとりやさねん蘆べゆく鴨の羽がひも霜さゆる夜に

五百番歌合に
春宮大夫師兼

長き夜をねにのみ鳴きて庭つ鳥かけのたれをの亂れわびつゝ
戀歌中に
前中納言氏定

なつみ川山陰にのみ宿る鴨のながれてたゝぬ浮名ともがな
題しらず
よみ人知らず

宗良親王千首寄鵜戀
かゞり火の影には水もぬるまねど人を鵜舟ぞ浪にこがるゝ
同寄鵜戀
鷺のゐるぬぐひにかゝるあだ浪もおりたちてこそ淺しとは知れ

あらしをのかるやの先にたける猪も人の憂きにぞ身をば棄つなる
同寄鵜戀
千首歌よみ侍りける時寄雉戀と云ふことを

權中納言經高母

新釋古今には明鏡法師

○夫木五に寂蓮、狩人の入野のきぐす妻戀ひて鳴くねばかりに身をやかへてん

○萬葉四に廣河女王、戀草を力車に七車つみて戀ふらく我心から

○古今集離別、人やりの道ならなくに大方はいきうしと言ひていざ歸りなん

○新後撰釋教に順空、こゝにやりかしこによばふ道はあれどわが心より迷ふとを知れ

○新後拾遺戀一に左大臣、行末は猶いかならん思ひ入る今だにやがて迷ふ心は

○續後撰雜下に堀河院中宮上總、いづ方からき身を背く道ならん我心こそ知るべなるらめ

○壬二集 はかなくもよもぎの宿に迷ふ哉野にも山にも道は有るよに

狩人の入野の雉妻戀キニスに忍ばれぬねはわれもたてつゝ

戀御歌中に

後村上院御製

人知れぬわが戀草の七車思ひ亂れてやるかたも無し

百首歌よみ侍りける中に初戀

文 貞 公

人やりの道とは知らぬ戀の山わが心より迷ひそめつゝ

題しらず

二品法親王聖尊

行末は誰に問はまし思ひ入る昨日今日だに迷ふ戀路を

前參議長資

しるべとはわが心をや頼まゝし人に問ふべき戀路ならねば

住吉社三百六十番歌合に戀地儀

右近大將長親

思ひ入る心ひとつに迷ふ哉野にも山にもあらぬ戀路を

戀歌中に

前内大臣隆

○續後拾遺秋上に後二條院、白露の岡べのすゝき初尾花ほのかに靡く時は來にけり

○玉葉戀一に家隆、いかにしてゆきて亂れんみちのくの思ひ忍ぶの頃も經にけり

〔増〕流布本に「戀を忍び」とありて「忍び」とせるは非也、衞井本に依りて訂正す「忍ぶの衣」を兼たる言葉なるべし

○續後拾遺戀一に法印定爲、口なしの下ぞめ衣したにのみ言はでやつひに思ひくちなん

○新千載戀一に贈從三位爲子、いつしかと初山藍の色に出て思ひそめつるほどを見せばや

○續後撰戀一に鎌倉右大臣、我戀は初山藍のすりごろも人こそ知らね亂れてぞ思ふ

○新後撰戀一に常盤井入道、色見えぬこれや忍ぶのすりごろも思ひ亂る袖の白露

初尾花ほのかに見つる面影の忘れぬより濡るゝ袖哉

日前宮によみて奉りける五十首歌中に 冷泉入道前右大臣

袖の上につより露は亂るらん戀を忍ぶの頃も經ぬまに

正平十一年四月内裏にて三首歌講せられし時初戀を

前大納言實數

くちなしの色ならなくに戀しとも言はでぞ人を思ひそめぬる

戀歌中に

前左近大將公冬

見せばやな初山藍ハツヤマアヲキの摺衣スリヨロモ思ひそめぬる色の深さを

千首歌奉りし時

權中納言經高

はては又いかに忍ぶの摺衣いまだにかゝる露のみだれを

家にて百首歌よみ侍りける時初尋縁戀と云ふ心をよめる

入道前關白左大臣

○新續古今春上に定家、武藏野のゆかりの色もとひわびぬみながら霞む春の若竹

○新後撰戀一に爲氏、もらさばや山もとかけてせく池の言ひ出で難き心ありとも

〔増〕池水の言ひとは「言ひ」に械を兼ねて池水の械と續けたり械は池の水を流す繩なり追記に詳記す

○日本紀に無道無狀等をアヂキナシとよめり眞名伊勢物語に無味氣と書けり伊呂波字類抄に可耐アヂキナヤ無爲アヂキナシとあり

○師兼千首 今は又つらさも知らず言ひそめて後にや人の心をも見ん

○新續古今戀四に惟宗忠景、いかさまに恨みよとてか逢見ての後さへ人のつれなかるらん

○新千載戀二に爲遠、空にだに靡くと見えよ下むせぶ思ひの煙たちものぼらば

紫のゆかりの草をとひわびて露わけそむる武藏野の原

イマダイヒシテガル
未言出戀と云へる心を

冷泉入道前右大臣

問へかしの袖のみ濡れて池水の言ひ出で難きしたの心を

イヒイヒセントスル
欲言出戀と云ふことをよみ侍りける

福恩寺前關白内大臣

あぢきなくつゝむも苦し言ひ出で、なか／＼人の心をも見ん

兵部卿親王家にて人々歌よみ侍りける中に

權中納言經高

言ひ出で、後さへ人のつれなくば忍ぶにまさるものや思はん

百首歌よませ給うける寄煙戀と云ふことを

後村上院御製

せめてわが思ひの煙そらにだに立たばぞ人のあはれとも見ん

○五百番歌合に三百三十番、左女房また人の袖に宿らば月も見よかゝる涙のたぐひやはある○右藤關白、夏苳りの蘆火の煙したにのみ云々○判、よそに猶たつ雲も無き煙哉袖の涙はたぐひあれども

○李花集云霧中百首歌よみ侍りし中に戀の心を

○續拾遺戀一に右大臣、知られじなたく藻の煙したにのみむせぶ思ひのせめて憂き身は

○新續古今戀一に法印繼尊、いかにせん富士のねにこそ立てねども袖に思ひの絶えぬ煙を

○玉葉集戀一に行能、身にあまる思ひや空にみちのくの忍ぶかひなくつつ煙哉

○新拾遺戀一に忠度、戀死なん後の世までの思ひ出は忍ぶ心の通ふばかりか

五百番歌合に

關白左大臣

くも歌合

夏苳りの蘆火の煙したにのみ思ひこがれて立つそらも無し

題しらず

よみ人しらず

李花集下

知られじな富士の高嶺の雲がくれむせぶ煙は空にたつとも

住吉社三百六十番歌合に戀地儀を

中務卿宗良親王

身にあまる煙ばかりを思ふなよ泣きてぞ富士のねにたてぬべき

戀歌中に

前大納言光任

身にあまる思ひとならばいかゞせん忍ぶに弱る命ともがな

妙光寺内大臣家百首歌中に忍戀

右近大將長親母

戀ひ死なん後にも人に知られずば忍びはてゝもかひや無からん

○李花集云戀歌よみ侍りし中に
○新古今戀一に前關白、忍ぶるに心のひまは無けれど猶洩るものは涙なり

○李花集云寄琴戀を

○六百番歌合に信定、聞かじたとつれなき人の琴のねにいとはずかよふ松の風をば

○新千載に神祇伯資茂、神風やみもすそ川の玉かしは沈むみくづとなりやはてなん

○耕雲千首 人目のみ忍ぶの浦におくあみの心ばかりは引くかひも無し
○續後撰戀四に藻壁門院但馬、おくあみの繁き人目に事寄せて又こと浦に引く心哉

○新千載戀一に隆教 いかにせん忍ぶの浦のおきつ浪かけても袖の色に出でなば

○五百番歌合に三百二十一番左持、經高 はかなしな契らぬ中に長らへてあらば逢ふ夜のたのみばかりは○右太宰帥親王 かくとだにいはせの杜の下露の云々○判、はかなしなあらば逢ふ夜の契りさへ無しといはせの杜の下露

題しらす

よみ人しらす

李花集下
忍ぶるも猶人知れぬ心哉洩らさばかくや苦しかるべき

同下
知らせばや君がかきなす琴のねに松風ならでかよふ心を

寄石戀と云ふ心を

後村上院御製

知られじな入江がくれの玉かしは沈むばかりの思ひありとも

寄浦戀を

冷泉入道前右大臣

知られじな忍ぶの浦におく網アミの繁き人目を歎きわぶとも

人目をばばかりて物なども、え申さどりける人の

もとへ辛うじてふみつかはすとて 　　よみ人しらす

李花集下
いかにせん忍ぶの浦のもしほ草かきやる浪のひまだにも無し

五百番歌合に

式部卿惟成親王

かくとだにいはせの杜の下露の知られて消えんことをしぞ思ふ

○建保名所百首に知家、かくとだに
いはせの杜の初時雨今や梢も色に出
てなん

○續古今戀一に定家、戀わびぬ心の
奥の忍ぶ山露も時雨も色に見せじと

○神社考曰北野天神者右大臣菅原朝
臣之靈也其先出自天穗日命

○大鏡 流れ行く吾はみくづとなり
ぬとも君しがらみとなりてとゞめよ

○新後拾遺秋上に祝部行氏、萩の葉
の露をも袖にさそひきてあまる涙に
秋風ぞ吹く

○玉葉集雜五に藤原爲仲、ぬるがう
ちの夢ははかなきものと云へど思ふ
心の末は見えけり

○玉葉集雜五に大納言忠良、猶かく
て有り經む事は憂きよりもよその人
目の耻かしき哉

うへのをのこども題をさぐりて歌合し侍りけるつい
でに忍戀と云ふことをよませ給うける 御 製
散らすなよ心の奥の忍ぶ山そむる木の葉の色深くとも

北野社によみて奉りし百首歌中に

中務卿宗良親王

李花集下

いかにせんたぎつ涙のしがらみもかけてせくべき袂ならぬを

戀の歌の中に

よみ人しらず

君は見よ人は知るなとわが袖にあまる涙をせきぞわづらふ

右近大將長親母

誰故に思ふ心のすゑなれば君にもつゝむ涙なるらん

建武二年内裏千首歌中に

中務卿尊良親王

袖の上によその人目を思はずばせめて涙の限り見てまし

〔繪〕月前戀を流布本を字無し松
井本に依りて補ふ
○金葉集に隆源、女郎花咲ける野べ
にぞ宿りぬる花の名だてになりやし
ぬらん

〔増〕名だては俗に名折れと云ふ意
なり拾遺集秋に、秋の野の花の名だ
てに女郎花かりにのみ來る人に折ら
るな、新古今春上に、梅が枝に物う
き程に散る雪を花とも言はじ春の名
だてに」とあり

○續千載戀一に爲定、下もえの思ひ
の煙末つひに浮名ながらや空にたつ
らん

○續後撰戀一に源俊平、いたづらに
立つ名ぞ惜しき下もえの思ひの煙さ
ても消えなば

○五百番歌合に三百十八番○左持、
長親、知らせばやこもの若葉のみこ
もりに思ふ心の下の亂れを○右頼武

涙川戀のしがらみせきかねば云々○
判りみこもりの思ひを深くせきかね
て洩らさぬ淵に身をや沈めん

○六帖四涙川身をしがらみにせきか
ねて洩れ來るとは知らずやあるらん
○萬代集しはせくにせかかれ
ぬ涙川何そはありて戀のしがらみ

○續千載戀一に待賢門院堀川、わき
かへり岩間の水の言はどやと思ふ心
をいかで洩らさん

月前戀を

ながめつゝ落つる涙と言ひなさば月の名だてになりぬべき哉

延元三年九月十三夜内裏月三十首歌中に

右大辨季光

下もえの思ひの煙空に立たば月の爲さへ憂き我身哉

戀の歌中に

權中納言經高

思ひせく心にあまる涙川せめては袖の下に流れよ

五百番歌合に

源頼武朝臣

涙川袖のしがらみせきかねば洩らさぬ先に身をや沈めん

題しらず

冷泉入道前右大臣

人目せく岩間の水のわきかへりむせぶ心は行く方も無し

夏戀の心を

從三位行子

○萬葉八に大伴坂上郎女、夏の野の茂みに咲ける姫百合の知られぬ戀は苦しかりけり

○續拾遺戀五に實家、かひもなし訪はて年ふるよもぎふの吾のみ忍ぶもとの心は

○新後撰戀一に國冬、せきかぬる涙はあらじもるともに忍ぶは同じ心なりとも

○古今雜下に貞文、ありはてぬ命待つまの程ばかりうき事繁く思はずもがな

○五百番歌合に三百十九番左勝、實興、あらざらむ此世の外の浮名まで云々○右成直、煙だに立ちものほらで埋み火の下にくゆるを知る人ぞ無き○判、埋み火も昔の下にぞくゆるなる此世の外や立ちやまさらん

○後拾遺戀三に和泉式部、あらざらむ此世の外の思ひ出に今一度の逢ふ事もがな

夏草の茂みが下を行く水の知られぬ戀にむせぶ頃哉

相互忍戀と云ふことをよませ給うける

御製

これをさへつらき數にやかこたまし吾のみ忍ぶ思ひなりせば

新宣陽門院

さすが又忍ぶは同じ心ともまだ世に洩れぬ浮名にぞ知る

戀御歌中に

いかさまに忍びすぐしてありはてぬ命待つまの浮名洩らさじ

五百番歌合に

權中納言實興

あらざらむ此世の外の浮名まで昔の下にや猶つゝままし

前大納言實爲

新撰古今戀三よみ人しらす
あひ思ふ心までこそ難からめ浮名をせめて知らさずもがな

○新續古今云、戀歌の中に○五百番歌合に三百廿九番左、無品法親王、年を経てつゝむ心に許さねば思ひありやと問ふ人も無し○右勝、實爲、あひ思ふ心までこそ難からじ云々○判、洩らしてもたが爲ならじせめて身の浮名ばかりをあひ思はなん

○後拾遺夏に重之、夏苜りの玉江のあしをふみしだき群居る鳥の立つそぞろ無き

○續後拾遺戀一に後花山院内大臣、思ひあまり洩らしても又いかならん逢見むまでを知らぬ身なれば

○新續古今戀一に法印定爲、よしさらばおさふる戀の露ばかり洩らしそめてや心をも見ん

〔増〕つれなかるらめ流布本「つれなかるらん」とあり松井本に依りて訂正す

○續千載戀一に従三位宣子、洩らさじと心にはせく思ひをも袖に知らするわが涙哉

○いかにして知ると云ふらん云々、古今戀三に伊勢、知ると云へば枕だにせて寝しものを塵ならぬ名の空に立つらん、これを本歌にてよめるなるべし

住吉社三百六十番歌合に戀動物

中務卿宗良親王

夏苜りの蘆間に通ふ跡も憂し群居る鳥の立つ名思へば

忍戀の心をよみ侍りける

右近大將長親母

せめてその後の浮名は洩らすとも逢ひ見むまでとせく涙哉

入道前右大臣

よしさらば涙もせかじ今は世に洩らせとてこそつれなかるらめ

前中納言實秀

せけばまづ袖に知らるゝ涙哉枕ばかりと何思ひけん

百首歌よみ侍りける中に寄枕戀を

冷泉入道前右大臣

いかにして知ると云ふらん歎きわび宿る夜だに無き床の枕は

新葉和歌集 卷第十二

戀歌二

寄名所戀をよみ侍りける

妙光寺内大臣

たつ名のみ高師のあまの濡衣袖ヌレゴロモまきほさむ浪の間もがな

無き名たちける頃よめる

よみ人しらず

ほしやらて猶や重ねん草枕ゆふてばかりの露の濡衣ヌレギヌ

同

などて李花集

よそにのみいはれの池のねぬなはの寝ぬ名はいかで苦しかるらん

題しらず

入道前右大臣

いかにせん忍ふとすれどねにたて、浅野の雉ヒギスかくれ無き身を

前大納言宗房

世にははや流れにけりな名取川末の逢ふ瀬も知らぬ契りに

○後鳥羽院御集 戀すてふ名のみ高しの濱千鳥なくくかへる袖のあだ浪

○續千載秋下に爲氏、さゞ浪やにほてるあまのぬれごろも浦風寒く打たぬ夜も無し

○李花集云不逢戀とて

○契沖餘村抄云「かきくらしことはふらなん春雨に濡衣きてて君をとめん」濡衣とは無き名を云ふと言へどたしかならずされど後撰集に「春くればさくふことを濡衣にきするばかりの花にぞありける」よと共にわが濡衣となるものはわぶる涙のきするなりけり」是等無き事を云ひつくるやうに聞ければ今は只春雨に事寄せて君をとめんと云へるなるべし

○壬二集 片糸のよるかの池のねぬなはの寝ぬ夜は浪の下ぞ苦しき

○新續古今云寄雉戀と云ふことを

○萬葉集三 瀧の上の浅野のきゞしあけぬとし立動ぐらし云々

○新拾遺雜上に基氏、もえ出づる春も浅野の若草にかくれもはてずききす鳴くなり

○秋風抄に小宰相、いかにせんうき身に限る名取川逢ふ瀬も知らて命絶えずば

○續後拾遺戀一に從三位氏久、名取川逢ふ瀬に淀む流れ木の寄る方知らで濡るゝ袖哉

○名取川は陸奥國名取郡
○續千載戀二に大江廣茂、いかなれば浮名ばかりの名取川逢ふ瀬はよそに聞きわたるらん

○新古今秋下に家隆、露時雨もる山蔭の下紅葉ぬるとも折らん秋の形見に

○新古今冬に法眼慶算、時しもあれ冬は葉守の神無月まばらになりぬ森のかしは木

○金葉戀下に一宮紀伊、音に聞けたかしの濱のあだ浪はかけじや袖のぬれもこそすれ

○五百番歌合に三百五十四番左、前關白、何故に深き思ひとなりぬらん契りは浅き山の井の水○右勝、頼武せく袖にあまればやがて流れけり云々○判、山の井の浅きためしを何故か深き涙の川にくらべん

正平二十年うへのをのこども題をさぐりて三百六十首歌

つかうまつりけるついでに寄名所戀を 後村上院御製

せめて其浮名なりとも名取川逢ふと云ふ瀬のなど無かるらん

妙光寺内大臣

浮名のみもる山陰の下紅葉ふり出てぬるか露も時雨も

戀の歌中に

かしは木の散るや葉守の神無月たのみし蔭も洩る時雨哉

關白家三百番歌合に顯戀 右兵衛督成直

音にだに立てじと思ひしあだ浪のあだなる名をも流しつる哉

五百番歌合に 源頼武朝臣

せく袖にあまればやがて流れけり涙の川や浮名なるらん

戀歌中に よみ人しらす

○拾遺集戀一 湊出づるあまの小舟のいかり細苦しきものと戀を知りぬる

○玉葉戀一に永福門院、涙川浮名ばかりを流しても身はうたかたのまづや消えなん

○李花集云戀百首歌とてよみ侍りし中に顯戀

○古今集哀傷に宗子女、さきだゝぬくいの八千度悲しきは流るゝ水のかへり來ぬなり

○玉葉夏に俊成女、大井川くだす筏のみなれ竿見なれぬ人も戀しかりけり

○勝地吐懷編云小墾田の板田の橋のごぼれなば桁より行かむ戀ふなわきもこ、續日本紀云神護元年十月朔、是日到三和國高市小治田宮とあれば板田の橋これに引かれて在處知られたり今按に板は書誤りにて坂田の橋なるべし其故は元享釋書に小墾田坂田尼寺と云へり此寺法名は金剛寺と云ふ推古天皇鞍作の島に近江の坂田

色に出て苦しきものと知りぬれば今より後や涙つゝまん

寄川戀を

新待賢門院

浅き瀬に思ひ絶えずば涙川後は浮名を猶や流さん

題しらず

よみ人しらず

李花集下クイ 涙川悔のやちたび思へども流れし名をばせくかひも無し

正平八年内裏千首歌中に寄筏戀

前大僧正賴意

柚川の筏の床のみなれさをなれてもなか袖はぬるらん

題しらず

前中納言惟繼

わが中は板田の橋のいたづらに思ひ渡れどかひや無からん

二品法親王聖尊

いかにせん同じ渚ナギサのかたし貝逢はでなるゝも契りなれども

郡の水田を給ひける時、鳥、天皇の御爲に此寺を建立せりされば坂田寺と云ふにや南淵山細川山より河落合て坂田寺の方にも流ると申せばそこに渡せる橋を坂田の橋と云へるなり坂田と云へる事はあまた見えたれど坂田と云へる事は此歌ならでは見えたること無し

○李花集云程近く侍りし人のもとへつかはしける

○古今集雜上に貫之、かつ見れどとうくもある哉月影の至らぬ里もあらじと思へば

○六百番歌合に家房、蘆垣の間近き程に住む人のいつか隔てぬ中となるべき○古今集戀一人知れぬ思ひやなぞと蘆垣の間近けれども逢ふよしの無き

○李花集云越中國にて羈中百首歌よみ侍りしに戀を

○新古今戀一に是則、そのはらやふせやに生ふるはき木の有りとは見えて逢はぬ君哉

○新古今雜上に守覺法親王、風そよぐしのゝをざさのかりの世を思ふ寢覺に露ぞこぼるゝ

近くはありながら物など申すまでは無かりける人

のもとへ申つかはしける

よみ人しらず

李花集
蘆垣の間近き程にかつ見れどときは人の心なりけり

寄墻戀と云へる心を

後村上院御製

隔てける心を知らず蘆垣の間近しとのみ何たのみけん

李花集下
羈中百首よみ侍りし中に

中務卿宗良親王

今ぞうき同じ都の中にては心ばかりの隔てなりしを

戀の歌中に

前中納言氏定

尋ねてぞ逢はぬもつらきよしさらばよそにや人を峰のはき木

祥子内親王

いかにせんしのゝをざさのかりにだに逢ふ夜は知らぬ中の契りを

權中納言經高母

○拾遺愚草員外、井筒よりなれこし
かみの長き夜を獨かきやる秋の手枕
のよると云へば只いつはりにすくば
かりなり

○古今集十九よそながら我身に糸
の續後拾遺戀三に爲家、うつゝとも
おほえぬものは逢ふと見し夢路に似
たる今夜なりけり

○續千載哀傷に僧正道性、おもかげ
を心に残す思ひ寢の夢こそ人の形見
なりけれ

○古今集戀一戀ひ死ねとするわざ
ならしむば玉のよるはすがらに夢に
見えつゝ○同戀三、夢路には足もや
すめず通へどもうつゝに一目見しこ
とはあらず

○風雅戀一に大納言公重、おのづか
らわが思ひ寢に見る夢や人は許さぬ
契りなるらん

○續古今戀二に源俊平、思ひわび獨
や寢なんさ夜ごるもかへすならびの
夢をたのみて○古今戀二小町いとせ
めて戀しき時はむば玉のよるの衣をか
かへしてぞぬる○打聽云夜の衣をか
へして寢れば戀しき人の必ず夢に見
ゆと云ふ諺あればかくよめり萬葉に
は袖かへすとあり卷十一に「わぎも
こに戀ひてすべなみ白妙の袖かへし
しは夢に見えきや」後撰には「白露
のおきて逢ひ見ぬ事よりはきぬかへ
しつゝ寢なんぞ思ふ」ともよめり

思ひやれ獨りかきやる黒髪のとけて寢られぬさ夜の手枕

よみ人しらす

はかなしな我身に糸のよるの夢逢ふとはすれどうつゝならねば

權大納言公夏

逢ふと見る夢路を今は頼む哉せめてうつゝのつらきあまりに

上野太守守永親王

うつゝには逢ふ夜も知らず思ひ寢の夢こそ人の契りなりけれ

中務卿宗良親王家京極

戀死ねとするわざならば夢よりもうつゝに一目見ゆべきものを

右兵衛督成直

はかなくぞうつゝになして忍びける人は許さぬ夢の契りを

夢中逢戀と云へる心をよみ侍ける 妙光寺内大臣家中納言

○伊勢物語云昔世心づける軀いかで情あらむ男に逢ひ見てしかなと思へど呼び出でんもたより無き三人は情無くいらへてやみぬ三郎なりける子なん善き御男ぞ出て来んとあはするに此女けしきいとよし云々

○五百番歌合に四百二番、左勝、實興年へたるそのかよひちほ君や來し吾年行きつとたどらるゝ哉○右頼武、歎きあまり見もせぬ夢を語りても云々○判、年經ぬる其通ひ路はたどるとも見もせぬ夢にいかにくらもん

○續後撰戀二に太宰權帥爲經、あまのたくもしほの煙我方に靡かぬ戀の身をこがす哉

○五百番歌合に三百五十九番、左持、實興あま人のたく藻の煙いたづらに云々○右實爲いつまでぞあはでの浦のあだ浪を袖にかけてもすぐる月日は○判、夕煙靡くに立つや月日ふるあはでの浦の沖つ白浪

【注】「たむむ名」とあるを用ふべし。いたづらにと云ふは「たむむ」にかゝる言葉なればなり

○五百番歌合に三百二十番、左勝、經高死ぬばかり思ふ心や見えざらん云々○右資氏いつまでか知られぬ中に亂れまし忍ぶの山の露の下草○判、同じ世の根みや猶も深からん忍ぶの山も露の下草

○續後撰戀三に右近大將公相、はかなくも思ひ慰む心哉同じ世にふるたのみばかりに

歎きわび宿^ヌる夜の夢に見えつるはかへす衣の關守や無き

不逢戀を

二品法親王聖尊

夢にだに逢ふと見えぬや夜な〜にかへす衣の恨みなるらん

五百番歌合に

源頼武朝臣

歎きあまり見もせぬ夢を語りても思ふ方には誰か合はせん

權中納言實興

あま人のたく藻の煙いたづらに靡かて立たむ名こそ惜けれ

題しらず

大藏卿在仲

たちそはむ煙とならば君故に惜しかるまじき我命哉

五百番歌合に

權中納言經高

死ぬばかり思ふ心や見えざらん同じ世にふる我身なりせば

つれなく侍りける人につかはしける

よみ人しらず

○李花集云人を恨みわびてよみける
○新勅撰雜二に平行盛、流れての名
だにも止まれゆく水のあはれはかな
き身は消えぬとも
○泡は安和、哀は安波禮なること上
文に云へり

○續古今戀二に權律師隆昭、死ぬば
かり思ひけりとも逢ふ事に身をかへ
てこそ人に知られぬ

○新後拾遺戀二に橘遠村、後の世の
契りの程も知らぬ身に戀ひ死ぬばか
り何慕ふらん

○新千載戀五に心阿法師、忘草おふ
なる野への枯れしより後を頼まん言
の葉も無し

○續後拾遺戀二に爲道、報いあらば
つれなき人も思ひ知れうきには後の
世こそ待たるれ

李花集下

浮身まづ消えましものをゆく水のあはれとだにも人に聞かれば

同 題しらず

中務卿宗良親王

吾ばかりまづ戀ひ死なば來む世にも人を待つまや久しかるべき

坂上瀬澄

戀ひ死なむ後にや人に知られまし命にかへて思ひけりとも

祥子内親王

いかにせん後の世とだに契らねば戀ひ死ぬとても頼み無き身を

天授二年四月内裏にて人々題をさぐりて百番歌合

し侍りし時不逢戀の心を 中務卿宗良親王

身をかへて後を頼まんつれなさも來む世までとはさすが思はじ

戀の歌中に

文 貞 公

身をかへば忘れもぞする同じ世につらき報いをいかで知らせん

○拾遺戀四に源經基、雲居なる人を
逢に思ふにはわが心さへ空にこそな
れ

○類題和歌集に雅親、せめて只今の
命を後の世の逢ふにかふとも身を惜
まめや

○拾玉集 あながちに何厭ふらん前
の世の報いにてこそ戀しかるらめ

○續後拾遺戀二に法印長舜、思ひわ
び猶こそ憂けれ前の世の報いは人の
咎ならねども

報いとて吾つらからば後の世も又や逢ひ見ぬ中となりなん

李花集下不逢戀を

よみ人しらず

後の世にこの報いとてつらからむわが心さへ憂き契り哉

春宮大夫師兼

戀死ぬと言ひし後しもつらければ人の惜しまぬ身とは知りなき

右近大將長親母

せめてたゞ命の程の戀路にて後の世までは迷はずもがな

入道前右大臣

後の世の報いを知らば身を思ふ爲にもなかつれなかるらん

中務卿尊良親王

よしさらば只つれなかれ戀ひ死なむ報いは人の爲にしあらねば

權中納言經高

○五百番歌合に三百七十五番左、顯
統つらきをもうきにもたへて戀ふる
身の云々○右勝、太宰帥親王、淺か
らぬ心の程は夜な／＼の夢のたゞち
に思ひ合はせよ○判、つれなしと人
や見るらん夜な／＼の夢のたゞちの
契り知られば

○草葺集 うき身にも猶こそたのめ
前の世の契りは知らぬならひばかり
を

○玉葉集戀三に能宣、さりともとた
のむ心にはかられて死なれぬものは
命なりけり

○新續古今戀三に權中納言雅世、夜
な／＼を重ねてぞ猶知られぬる恃ち
弱る身も心強さも

○新千載戀三に院御製、沈むべき身
をば思はず涙川流れて後の名こそ惜
けれ

〔增〕法親王深勝を流布本に源勝と
あるは誤なり松井本に依りて訂正す

つれなさも限りあらばと思ふこそ猶身に残る頼みなりけれ

五百番歌合に

をも歌合

前内大臣 顯

つらきにも憂きにも堪へて戀ふる身を猶つれなしと人や見るらん

題しらず

妙光寺内大臣

しひて猶頼みやせましさきの世の契りあればぞ思ひそめけん

中務卿尊良親王

さりともと行末頼む命さへ長かるべくも無き契り哉

文 貞 公

ためし無く歎かむ爲の報い哉つらさにまけぬ心強さは

嘉 喜 門 院

御集
行末を猶や頼まん涙川流れて後の逢ふ瀬ありやと

二品法親王深勝

○夫木に定家、涙川春の月なみたつ
 ごととに身はしづみ木の下に朽ちつゝ
 ○李花集云寄夢戀を、しきたへの枕の
 ○古今戀二に友則、しきたへの枕の
 下に海はあれど人をみるめはおひず
 ぞありける
 ○李花集云 思へどもつらき人に申
 つかはし侍りし
 ○續後拾遺戀三 さりとともと思ふ今
 夜も更け行かば心のうらや又たがふ
 らん〔誓〕 古今集戀四 かく戀ひん
 まのとは吾も思ひにき心のうらぞま
 さしかりける
 ○古今集物名に忠峰、たもとより離
 れて玉を包まめやこれなんそれとら
 つせみんかし

○李花集云 祈戀とてよみ侍りける
 ○拾遺春に元方、春くれば山田の水
 打解けて人の心にまかすべらなり
 ○古今集及伊勢物語、大幣のひくて
 あまたになりぬれば思へどえこそ頼
 まざりけれ○續古今雜上に土御門院
 みそぎするたもとにふるゝ大幣のひ
 くてあまたに靡く川風

○拾遺戀四 吾や憂き人やつらきと
 ちはやふる神てふ神に問ひ見てしが
 な

涙川枕も床も浮くものを身はいかなれば沈みはつらん

よみ人しらす

李花集下

思ひ寝の夢ばかりこそ海となる枕のしたのみるめなりけれ

かな李花

同 さりとともと思ふ心のうらさへに逢はてはつべき身の契りかは

同 同戀歌の中に

せめて只身を離れゆくわが魂もこれなんそれと知られだにせよ

祈不逢戀をよませ給うける

後村上院御製

よしさらば思ひ絶えねと祈らばや憂きには神もつれなかりけり

題しらす

よみ人しらす

李花集下

はかなくぞ人の心にまかせける祈るにだにも難き逢ふ瀬を

同 吾ぞ祈る人の心の大幣を引くてあまたに神は受くなど

同 ちはやふる神てふ神も憂き人の同じ心になりける哉

興國五年七月内裏にて人々題をさぐりて歌よみ侍

○古今戀一 戀せじとみたらし川に
せしみそぎ神はうけずぞなりにつら
しも

○拾遺愚草 ことわりや打臥す程も
夏の夜はゆふつけ鳥の曉の聲

○新古今神祇 夜や寒き衣や薄き片
そぎのゆきあひのまより霜やおくら
ん

○續後拾遺戀四に關白、忘らるゝ浮
名は立たじ夕煙つひに靡かぬ契りな
りせば

○建保名所百首に康光、今はとてい
はせの杜の下露もあらぬ色にやおき
まざるらん

りける中に

祈り來し神だに受けぬ身の憂さを何の頼みに猶慕ふらん

四條贈左大臣

戀歌の中に

祈り來し契りはいづら神垣のゆふつけ鳥のよそのあかつき

妙光寺内大臣

よみ人しらず

わが祈る千木の片そぎ難からばゆきあひのまの名をも頼まじ

前中納言爲忠

祈れどもつひに靡かてつれなきも憂きも我身の辛崎の松

嘉喜門院大藏卿

思ひつゝ堪へず消えなばあはれとも誰かいはせの杜の下露

住吉社三百六十番歌合に戀植物

右近大將長親

○後拾遺雜四に橘季通、たけくまの松は二木を都人いかにと問はば見きと答へん○草菴集 何事を見きと言はん數ならて我身いそちにたけくまの松

○後拾遺誦詠に僧正深覺、たけくまの松は二木を三木と云ふはよくよめるにはあらぬなるべし

○山家集 枯れにける松無き宿のたけくまは、みきと言ひてもかひ無からまし

○古今集第二十 をふの浦に片枝さし覆ひなる梨のなりもならずも寝て語らはむ

○萬代集に範宗、色かへぬときはの山の榊葉をいはひかざしつ萬代の爲
○新勅撰戀一に清輔、年ふれどしるしも見えぬ我戀よときはの山の時雨なるらん

○土御門院御集 谷深みふすゐのかるもかき絶えてなれし都ぞうとくならぬ

○類和歌集に尊道親王、待ちわびてふすゐのかるもかくばかり亂るとだにも思ひやは知る

よそながら見きとばかりを契りにてつひにつれなき武隈の松

寄木戀をよませ給うける

後村上院御製

つひにきて見きとは言はて武隈の松ならぬ身も年ぞ經にける

正平十八年内裏にて人々題をさぐりて五十首歌よ

み侍りける中に同じ心を

妙光寺内大臣

つひにきて寝て語らはぬ世語りになりはてぬるかをふの浦梨

同二十年内裏三百六十首歌中に寄名所戀を

左近中將顯氏母

色かへぬときはの山や年ふれどつれなき中のためしなるらん

關白家三百番歌合に寄獸戀

前中納言實秀

いつまでか伏猪フスネのかるもかくばかり憂き中へのみ思ひ亂れん

寄鴛戀をよめる

前中納言爲忠

○續拾遺冬に宜秋門院丹後、片しきの霜夜の袖に思ふ哉つらゝの床の鶯の獨寝

○古今集戀二に友則、命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへば惜しからなくに

○千載集戀二に寂超、命をば逢ふにかへむと思ひしを戀ひ死ぬとだに知らせてしがな

○古今戀二に小町、いとせめて戀しき時はむば玉の夜の衣をかへしてぞ寝る○千載集戀一に右京大夫季能、つれなきに言はて絶えなむと思ふこそ逢ひ見ぬさきの別れなりけれ

うち解けぬ人はつらゝのことにはに憂きねのみ鳴く駕の獨り寝

千首歌よみ侍りける中に被^{イトハセ}厭戀

春宮大夫師兼

つれもなき命と人は厭^{イトハ}ふとも逢ふにしかへば又や惜しまん

不逢戀を

新宣陽門院

逢ふ事にかへぬとだにも思はゞや只いたづらに戀ひ死なむ身を

こゝち例ならず侍りて、いと心細うおぼえける頃人

のもとへ申つかはしける

よみ人しらず

いとせめて惜しき此世の名殘哉逢ひ見ぬさきの別れと思へば

李花集下

新葉和歌集 卷第十三

戀歌三

正平二十年内裏三百六十首歌中に寄名所戀と云ふ

ことをよみ侍りける

前内大臣 隆

せめて待つ一夜なりとも逢坂の關越えて聞く鳥の音もがな

千首歌たてまつりし時寄關戀を

中務卿宗良親王

東路にゆきかふ身とはなりしかど知らずよ君に逢坂の關

春宮大夫師兼

よしやそのゆふつけ鳥も鳴かば鳴け吾が逢坂の關路ならねば

戀歌中に

兵部卿師成親王

○新拾遺集旅に大納言有忠、都をば夜深く出で、逢坂の關に待たる、鳥の聲哉○續後撰戀三に平忠盛、逢坂の關越えてこそなか、にゆふつけ鳥のねは泣かれけれ、○古今集にいとせめて戀しき時はとありて「せめて」はせまりての略にて切なる戀なり神代紀に假徵、急責などを「セメハタル」と讀めり

〔附〕「セメハタル」とは別なり季吟は「アマリニ」と云ふ意なりと言ひ富士谷成章は「ツキツメテ」なりと言へり後拾遺戀二に赤染衛門「恨むとも今は見えじと思ふこそせめてつらさのあまりなりけれ」とあり

○後撰集戀三 東路にゆきかふ人にあらぬ身は何時かは越えん逢坂の關
○新拾遺戀三 逢坂のゆふつけ鳥も心せよ又も越ゆべき關路ならぬに

○古今集、伊勢物語、人知れぬわが
かよひ路の關守はよひ／＼とにう
ちも寝なむ○新後拾遺戀二 よひ
よひにゆき歸るさへはかなきはうち
ぬる程の夢のかよひぢ

○後撰集雜一 これやこの行くも歸
るも別れつゝ知るも知らぬも逢坂の關

〔増〕 沼水は池水に同じ「流れて」に
人と云ふ意をこめたり新拾遺戀二、
人知れぬ心のうちの思ひ川流れて未
の頼みだに無し

○五百番歌合に三百五十一番、左女
房年なみの猶越えゆくはいかゞせん
言ひし契りの末の松山○右藤、光資、
長らへばかはりもやせん契りおく云
々○判者、契りおく末の松山まつに
こそげにこそ浪のうきも知らるれ

〔増〕 たのみけるは松井本に「たの
めける」一とある方宜しからん新拾遺
戀三に「行末をたのめても猶ねをぞ
泣く知らぬ命の心弱さに」とあり
〔増〕 此集雜下に御製「如何にせん
しぐれわたる冬の日の短き心曇り
易きを」とあり「絶えなで」は絶え
はせでと云ふ意「なで」と云ふ助辭
についで追記に詳しく云へるを見
るべし

○古今集哀傷に忠岑、時しもあれ秋
やは人のわかるべきあるを見るだに
戀しきものを

よひくに行きてぞ歸る關守のうちぬる程のひまし無ければ

福恩寺前關白内大臣

これやこの苦しき戀の道ならん行きてとまらぬ逢坂の關

よみ人しらす

宗良親王千首寄沼水
沼水の今こそ深く契るとも流れて頼むまでや無からむ

民部卿光資

五百番歌合に
長らへばかはりもやせん契りおく行末待たぬ我身ともがな

行末をのみたのみける人に申つかはしける
たのみ 孝花集 松井本

よみ人しらす

孝花集下
待てと言はゞ待つべきものか玉の緒の短き心思ひ絶えなで

契ノチノヨ後世戀と云へる心を

中 宮

戀ひ死なん後の契りも頼まれずあるを見るだにつらき心を

〔增〕過去、現在、未來を三世とし、過去を前世、現在を此世又は今の世、未來を來世又は後の世と言へり佛敎より出づ、源氏物語に「さきの世にも御契りや深かりけん」とあり

○類題和歌集 生れあはむ身をこそ知らね來む世にも忘れはせじと契りおきても

○新千載集戀三 いつまごの命とてかは行末を頼むばかりは契りおきけん

○新拾遺集戀二 逢ふまでは結ばざりけるさきの世の報い知られてうき契り哉

○谷川土清云なほざりは等閑をよめり千家詩の註に尋常也と見えたり直ぞ有りの義也「なほ」は即よの常の義たゞ人をなほ人とも云ふが如し心に深く思はぬを言ひも爲しとするを云ふ又謾言を註して等閑也と云へり

○後撰集春上に「なほざりに折りつるものを梅の花濃き香に吾や衣染めてむ

〔增〕風雅戀四に戀命といふことを造子内親王、空の色草木を見るも皆悲し命にかくる物を思へば

○式部卿親王は懷良親王なるべし
○古今集第十九 初瀬川古川のへにふたもとある杉年をへて又も逢ひ見む二本ある杉

契ニ來世一戀と云ふことをよみ給うける 御 製

來世にはめぐり逢ふともいかがせん契りおきける身とも知らずば

契戀をよみ侍りける 前内大臣 顯

行末を頼まずながら契ることまづ偽りの我身なりけれ

題しらず 正三位 國夏

さきの世は知られぬものと知りながら命の後を猶や契らん

中院入道 一品

なほざりの言の葉ならばいかがせん命にかけて頼む契りを

式部卿親王家にて人々題をさぐりて歌よみ侍り

ける時寄木契戀と云ふことを 春宮大夫師兼

たのまめや又逢ひ見むと契るとも人の心の二もとの杉

五百番歌合に 前大納言 光有

○五百番歌合に三百十六番、左勝、
光有、はかなくも猶こそたのため云々
○右具氏、洩らすなよおさふる袖の
涙川した行く水のせきはかぬとも○
判者、人心上には頼む契りにて涙は
袖の下の浦風

○續古今戀四 吾ながら變る心の行
末を知らでや人の契りおきけん

○千載集戀二 はかなしな心つくし
に年を経て何時とも知らぬあふの松
原○あふの松原は長門國阿武郡に在
り一説に播磨と云へるは非也

○拾遺集戀二 何せんにむすびそめ
けん岩代の松は久しきものと知る
く○岩代は紀國日高郡なり結び松
は萬葉第二の歌より出でたり

○續古今戀二に爲教、秋山の松の木
末のむらしぐれつれなき中はふるか
ひも無し〔増〕新後拾遺雜春に、
よしさらば只つれなかれ時鳥待つと、
うき身のなぐさめにせん、又新勅撰
戀一に後京極攝政「吉野川早き流れ
をせく岩のつれなき中に身を碎くら
ん」とあり

はかなくも猶こそ頼め契りおく人の心の末は知らねど

契久戀と云ふことを

よみ人しらず

かくばかり堪へて待つある李花集下べき命とも知らでや人の頼めおきけむ

正平十八年内裏百首歌中に旅戀を

妙光寺内大臣

思ひたつ心づくしの行末にあればと頼むあふの松原

戀歌の中に

上野大守守永親王

いかさまに結びおきてか岩代の松とばかりの契りなるらん

正平二十年内裏三百六十首歌中に寄名所戀

妙光寺内大臣

高砂の松をうき身の命にてつれなき中に世をやつくさん

名所五十首歌よみ侍りける中に

○伊勢物語 大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪哉

○續拾遺神祇、住吉のきし方遠き松がねに神代をかけて寄する白浪○新撰戀二に小侍従、住吉の神に祈りし逢ふ事の待つも久しくなりにける哉

○後撰戀五 來ずやあらんきやせんとのみ川岸の松の心を思ひやらなん

○古今雜上貫之、沖つ浪高師の濱の濱松の名にこそ君を待ちわたりつれ
○夫木抄に信實、逢ふ事をとふや夕けのうらまきにつげのをぐしもしるし見せなん○拾芥抄云問ニ夕占歌フナトサヘユフケノ神ニ物問ヘバ道行ク人ヨ、ウラマサニセヨ、兒女子云持ニ黄楊ノ櫛ニ女三人向ニ三辻ニ問レ之又午歳ノ女午ノ日問レ之、今案三度師ニ此歌作レ堺散レ米鳴ニ櫛ノ齒ニ三度、後壇ノ内ニ來ル人ノ答ヲ爲ニ内人一言語ヲ聞テ推ニ吉凶ヲ

關白左大臣

大淀の浦見よとの契りかは松もつれなの心づくしや

戀歌の中に

嘉喜門院大藏卿

住吉のきし方遠く頼め來て松も久しき身の契り哉

よみ人しらず

川岸の松の心やいかならん契りもなみのかけて訪はずば

前大納言守親

たのめこし人に心をおきつ浪高師の濱の待つぞ苦しき

寄櫛戀を

御製

夕占とふ黄楊の小櫛も引く方に思ひなされて待つぞはかなき

待戀を

妙光寺内大臣

偽りを待つらんとだに思ひやれ言ひしばかりの夕暮の空

○内裏歌合に季雄、たのめてもかはる契りはあるものを偽り知らぬ星合の空

○新後拾遺戀三に後光嚴院、偽りのある世を知らぬ身になしてさはるやかこつ言の葉にせん

○五百番歌合に三百四十七番、左前關白、露なして結ぶ契りも無かりけり人を忍ぶの山の下道○右勝、師兼

こりずまに又頼まるゝ夕べ哉云々○判者、身にたへぬ忍ぶの露もいかならん猶こりずまの浦の松風○古今集戀三、こりずまに又も無き名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住まへば

○五百番歌合に三百三十六番、左光有、さりととも猶も逢ふ瀬をまつら川よるべも浪のうき身なれども○右勝頼武、たのまじと言ひてもさすが云々○判者、それは猶心づくしぞまつら川わが言ひおきし逢ふ瀬頼ま

○下に嘉喜門院「はかなくぞ人の契りを頼みけるわが偽りも知らぬならひに」とあるを合せ見るべし

正平十九年七月七日内裏にて三首歌講せられし時

七夕戀と云ふことを

權中納言長資

偽りの末こそ知らねたのめつる夕べは同じ星合の空

戀歌の中に

前大納言光任

さりととも猶ぞ待たるゝ偽りのある世とまでは思ひ知れども

五百番歌合に

春宮大夫師兼

こりずまに又頼まるゝ夕べ哉人のまことも身には知らねど

源頼武朝臣

たのまじと言ひてもさすが待たるゝやわが偽りの夕べなるらん

題しらず

源重春朝臣

さりとともわが偽りの無きまゝに人の契りを猶たのむ哉

中原章言朝臣

○新拾遺戀三に爲冬、偽りのうきにもたへて待たれけり身はならはしの夕暮の空

○類題に實光、さりともと契りしままに頼まれてくるゝ待たるゝ今日の空哉

○續古今雜下に俊頼、吳竹のうきふし繁くなりけりさのみはよもと思ひしものを

○日本紀 わかせこがくべき宵なりさゝがねのくものおこなひ今夜しるしも

○五百番歌合に三百三十四番、左前關白、浪かくる磯への松を見ても知れつれなき色もねにあらはれやせぬ○右勝、具氏、人もまだ頼めしまゝの云々○判者、浪かくる松はつれなき色なればたのめしまゝの月をこそ見れ
〔寄〕人もまだを「人も亦」とせる本見ゆれど此「また」は俗語「また」の方なるべし又「たのめしまゝ」の「とあるが「まゝ」は新古今の頃より見えたるがこれは「まに」が「まにま」又「まゝに」となり終に「まま」となりし俗語なれども多く使用せられつゝあり

偽りのうきになれぬる夕暮も思ひ放たずなど待たるらん

二品法親王深勝

さりともと思ふ心を契りにて又此暮も猶ぞ待たるゝ

毎夜待戀と云へる心を

嘉喜門院

偽りもさのみはよもと思ふこそ又此暮のたのみなりけれ

題しらず

前大納言光任

待つ人も來べき宵かと山のはの木の間を出づる月に問はゞや

五百番歌合に

權大納言具氏

人もまだ頼めしまゝの暮ならば同じ心に月や待つらん

百首歌中に待戀の心を

前内大臣隆

待てと言ひし程よりも猶更けぬやと幾度月の影を見つらん

連夜待思を

中宮

○續拾遺戀三に權大納言經任、たのめても空しく更くる程見えてよそなる月の影さへぞ憂き

○古今集、大和物語、わが心なぐさめかねつ更科やをばすて山に照る月を見て

○新拾遺戀三に邦省親王、うき人の面影そへて頼む夜もこぬ夜も獨り月を見る哉

○古今戀四 君やこん吾や行かむのいざよひに横の板戸もさゝず寝にけり

○新勅撰戀三に小侍従、いかなりし時ぞや夢に見し事はそれさへにこそ忘られにけれ○萬葉に副添等をサへ

頼めても空しき夜はにならひきて更けゆく月に袖ぬらす哉

元弘三年九月十三夜三首歌講ぜられし時、月前待戀

と云ふことを 後醍醐天皇御製

いとゞ猶待つ夜更けゆくつらさへ慰めかねて見つる月哉

中務卿尊良親王

さりとともと頼むに更くる月影をうき人よりも猶や恨みむ

題しらず

前大納言光任

訪へかしと心に頼む夜もすがら來ぬ面影を月に見る哉

右近大將長親

こぬ人の面影ながら更けぬなり吾や行かむのいざよひの月

從三位行義

待ちわびて吾や訪はむと思へどもそれさへ今は夜ぞ更にける

にあてたり並兼共などもサへと讀めり桐壺の卷に此君さへかくおほしそひぬれば云々とあり

○關岡野州良云「すさび」は、なぐさむ意と怠りすさむと兩義ある語なり怠る方は荒の義にて、なぐさむ方は遊の字、骰の字などなり口號とも書けるは口進む意にもやあらん○すさびと云ふ語、山彦册子、鐘の響などにもあり考ふべし

○新千載戀五に前右大臣、思ひわび幾夜の空にかこつらん契らぬ月の忘れがたみを

○後拾遺哀傷に式部命婦、思ひやれかねて別れしくやしさに添へて悲しき心づくしを

百首歌中に待戀

權中納言經高母

なほざりに頼めおきてし夜はならば更けゆく鐘に待ちや弱らん

同じ心を

新宣陽門院

さりともと思ふ心もつきはてぬ待つ夜更けゆく鐘の響きに

住吉社三百六十番歌合に戀天象

中務卿宗良親王

待ち得ては眺むる程の暇もあらじ月ぞ來ぬ夜のすさびなりける

家にて三百番歌合しける時待戀をよめる

關白左大臣

待たれつる今夜もつひに更けはて、契らぬ月や涙とふらん

同じ心を

最惠法親王

おのづからさても訪はれば語らまし待つ夜更けゆく心づくしを

○千載集戀四 忘れぬや忍ぶや如何に逢はぬまの形見と聞きし明暮の空

○上に源重春、さりともとわが偽りの無きまゝに人の契りを猶頼む哉

○古今集東歌、君をおきてあだし心をわが持たば末の松山浪も越えなし

○顯註云末の松山浪越ゆとは昔男、女に末の松山を指して彼山にまこと

さむつぞ忘るべきと契りけるが程無

く異心つきにけるより人の心變るを

浪越ゆと云ふなり彼山にまこと

浪越るにはあらずあなた海の遙か

に越ゆるやうに見ゆるをあるべく

も無き事なれば、まことに浪の山越

り能因歌枕には有るべしと契れるな

三重に在りと申すさればにや山とは

あらん時浪と申すさればにや山とは

○夫木抄二十八 みちのくのとふの

すがごも七ふには君を寢させて吾三

ふに寝む○袖中抄云すがごもとは營

こととは廣からん料なりされば綺語む

にはとふとは、十ふあみたるを云ふ

りに言へり慕ふ意なり追記に詳解す

兵部卿親王家百首に

權中納言經高

忘れぬやかはるや如何に松の風更けはてゝとは契らざりしを

題しらず

嘉喜門院

御集
はかなくぞ人の契りを頼みけるわが偽りも知らぬならひに

參るべきよし申ける人の俄にさはる事ありて參ら

ざりければよませ給うける 後醍醐天皇御製

たのめつる人の心の末の松浪越さねども憂き契り哉

住吉社三百六十番歌合に戀雜物を

よみ人しらず

しきしのぶとふの菅薦みふにだに君が來ぬ夜は吾や寢らるゝ

スガゴモ
千首歌たてまつりし時寄鴛戀

中務卿宗良親王

○宗良親王千首 いかにもせん寝に行
く鴛の契りだに「解け難き池の水を
○新勅撰冬ねや寒き寝亂れ髪長のき
夜に涙の水むすばほれつゝ

○新千載戀三に進子内親王、下紐の
解けても解けぬ心こそありしより猶
むすばはれけり

○草葺集 おのづから枕ばかりを川
島の水の心は猶ぞ知られぬ○川島は
いづくにもあれ河中に在る島と聞ゆ
宇治の横島を宇治の川島とも云へる
にて知るべし

〔増〕新拾遺戀二に壽成門院、戀ひ
死なぬ命ばかりを同じ世の契り有り
とや猶頼ままし

○續古今戀四に定家、忘るなよ三と
せの後の新枕さだむばかりの月日な
りとも〔増〕萬葉十一、若草の新
手枕をまきそめて夜を隔てむに
くあらなく、隨子載戀三、忘るな
と結ぶ一夜の新枕夢ばかりなる契り
なりとも新拾遺戀二、紫のこぞめ
の帯の片結び解けてぬる夜の限り知
られずなどあるを合せ見るべし

今夜とて寝に行く鴛の契りだに解けぬつらゝにむすばほれつゝ

正平八年内裏千首歌中に寄紐戀と云へる心を

前大納言光任

めぐり逢ふ夜はさへなどか下紐のしたには解けぬ心なるらん

乍レ臥無レ實戀と云へる心をよめる

妙光寺内大臣

徒らに枕ばかりを川嶋のよ所に逢ふ瀬の名にや流れん

百首歌よみ侍りける中に初逢戀を

前中納言忠成

今夜こそ思ひ知りぬれ戀ひ死なぬ命を人の契りなりとは

同じ心を

權大納言光有

忘るなよ新^{ニヒシクテ}手枕の袖の露解けて寝^ヌる夜はまだ隔つとも

入道前右大臣

○拾遺戀四に經基、雲居なる人を遙かに思ふには我心さへ空にこそなれ〔智〕續古今雜中に光俊、いつまでか袖打濡らし沼水の末も通らぬ物思ひけん、新後撰戀四に知家、いかにせん岩間を傳ふ山水の淺き契りは末も通らず

○續後拾遺戀二に爲子、憂きながら行末をのみ頼むるは長かるまじき身とや知るらん

○新後撰雜中に道洪法師、世の中を恨むるとしは無けれども身の憂き時ぞ涙落ちける

○伊勢物語 春日野の若紫のすり衣 忍ぶの亂れ限り知られず

○千載集雜中 うき世にもうれしき世にも先にたつ涙は同じ涙なりけり

逢ふ事をせめて一夜と思ひ來しわが心さへ末ぞ通らぬ

ヒノクニ 日前宮によみて奉りける五十首歌中に

前中納言爲忠

うきに堪へて慕へばこそ逢ひ見つれ長かるべきは心なりけり

興國五年七月内裏にて人々歌つかうまつりし中に

四條贈左大臣

何事を恨むるとしは無けれども逢ふ夜は袖の濡れまさる哉

文中四年内裏五十番歌合に逢増戀を

民部卿光資

恨みこし若紫の摺衣かさねて古き色を見せばや

題しらず

權大納言公夏

逢ふ事のうれしきにさへ先だつは憂きにも落ちし涙なりけり

○五百番歌合に三百七十六番、左光有、戀ひ〜て重ぬる夜半の唐衣うらめづらしき身の契り哉○右勝關白歎きわび猶こそたどれ云々○判者、唐衣重ぬながらも打かへし見し夜の夢を猶やかこたむ

〔増〕 新後撰戀一に知家、知るや如何にいはたの小野のしの薄思ふ心は穂に出てずとも、拾遺集戀三、春くれば柳の糸も解けにけりむすほほれたるわが心哉、合せ見て心得べし

○續千載冬 さえわたる夜半の浦風音ふけて傾く月に千鳥鳴くなり〔増〕 新勅撰秋上に定家、明けば又秋のなかばも過ぎぬべし傾く月の惜しきのみかは、新續古今夏に後嵯峨院、傾けば山陰暗き大井川月にもくだす鷓舟なりけり、などを合せ見るべし

○續千載戀二 徒らに涙をかけてき夜ごろも重ぬ床に年ぞ經にける

五百番歌合に

關白左大臣

歎きわび猶こそたどれ逢ひ見ても見し夜の夢に似たるうつゝは

正平九年三月内裏にて三首歌講ぜられける時忍逢戀

を

前大納言實爲

下紐の解くる夜はさへ洩らさじと思ふ心はむすほほれつゝ

延元三年九月十三夜内裏月三十首歌中に月前逢戀

左大將清忠

まれに逢ふ夜はの月影心せよ傾けばこそ鳥も鳴くなれ

正平十二年内裏にて人々題をさぐりて百首歌よみ侍

りける中に

從三位周子

袖の香や形見ならましきよ衣又重ぬべき契りならずば

題しらず

新待賢門院

○續拾遺戀三 有明の猶ぞ悲しき逢ふまての形見とてこそ月は見れども〔増〕此集旅に宗良親王 後は又旅寝や月に思ひ出でん今は都の形見なれども

○古今集離別に秋霧の共に立出で、別れなば、はれぬ思ひに戀ひやわたらんとあり「面影の共に」秋霧の共に「に」などの「の」はすべて「と」に通ひて聞ゆ 萬葉に天地の共に卯の花の共になどよめり皆とと重なりたるは上の「と」を「の」と云ふ例なり

○續拾遺旅に玄覺、行末を急ぐ心に寢覺して鳥のね待たぬ曉も無し

○新後拾遺戀三 道芝の露と消えなばきぬぐの別れや長き別れならまし〔増〕續古今離別に爲家、かへりこん又逢坂とたのめども別れは鳥のねぞ泣かれける

○新拾遺雜中に爲世、のどかなる老の寢覺のさびしきに鳥の八聲を數へてぞ聞〔増〕實治元年歌合に女房、あかしかね待たるゝものとなりけりさしも厭ひし鳥の八聲を

○現葉和歌集に實陰、心こそやる方無けれ小車のひき別れつる今朝のなごりに

思ひ出でむ人の心は知らねども形見なるべき夜はの月哉

別戀を

中務卿宗良親王

春花集下面影の共に立ち出で、別れなば何か身にそふ形見ならまし

戀歌の中に

前中納言忠成

吾ぞまづねは泣かれける曉の鳥をも待たぬ人の別れに

中務卿尊良親王

我袖の涙かりてやきぬぐの別れに鳥のねをば鳴くらん

よみ人しらず

かね春花集下慕ひわび別れもやらぬきぬぐに鳥の八聲を重ねてぞ聞く

入道前關白左大臣

小車の別れはあまたなれしかど此曉ぞやる方も無き

福恩寺前關白家にて三十五番歌合し侍りける時

○新後拾遺戀三 今よりやつらき形見となりもせんわがきぬくの袖の月影

○五百番歌合に三百八十六番、左顯統、潮なるゝあら磯崎の岩根松つひにつれなき色も恨めし○右勝、關白、心をば飽かぬ袂にとめおきて云々
○判者、潮なるゝあら磯松にかゝる浪かへる恨や猶まさるらん

○新續古今集戀三に澄覺母、はかなくてきめにし夢の別れまで思へばつらし有明の月○續千載戀三に遊義門院、行末の深き契りもよしや只かゝる別れの今無くもがな

○あかつきは日本紀に鶏明を訓じ萬葉には旭曙と書けりアカトキとも讀めり明時の義なり新撰字鏡云暎、向曙色、阿加止支

○古今集、伊勢物語、今日來ずば明日は雪とぞふりなまし消えずばありとも花と見ましや

寄月別戀とある心を

關白左大臣

忘れずばたが別れにも思ひ出でよわがきぬくの袖の月影

五百番歌合に

とめおきて歌合

心をば飽かぬ袂にとめおきてかへるとも無き明暮の空

延元三年九月十三夜内裏月三十首歌中に月前別戀

前大納言實數

月までも思へばつらし何としてかゝる別れの有明の空

いかなる時にか女のもとにつかはしける 文 貞 公

一夜だにくやしと言ひし曉のとりかさねつる空の悲しさ

兵部卿親王家百首に後朝戀と云ふことをよみ侍り

ける 民部卿光資

今はとておき別れぬる袖の露消えずはありとも誰に問はまし

○新千載戀三 鳥のねの二たびつら
き別れ哉又寝の夢のさむる名残に

○金葉雜上に小式部内侍、大江山い
く野の道の遠ければまだふみも見ず
天の橋立

○五百番歌合に四百十三番、左持辨
内侍、別れにし其面影を形見にて云
々○右實爲逢ひ見しは夢かとたど
る手枕に拂はぬ塵のなごつもるらん
○判者、面影のいく有明になりぬら
んふりし枕に塵つもるまに
○續千載雜上に源親長、秋を経て人
もこぬみの濱風に幾夜の月の獨りす
むらん

○續古今戀四 面影はたちも離れず
唐衣別れしまゝの袖の涙に

○古今集二十 近江より朝立ち來れ
ばうねの野に鶴ぞ鳴くなる明けぬ此
夜は

建武二年内裏千首歌中に

中務卿尊良親王

今朝のまは猶身を去らぬ面影ぞ添へて苦しき形見なりける

百首歌中に後朝戀を

文 貞 公

別れつる面影ながらまどろめばさぞな又寝の夢も見えける

歸無書戀と云ふことを

妙光寺内大臣母

急ぎつる今朝の心の末なれやまだふみも見ぬ道芝の露

五百番歌合に

歌合には辨内侍とあり
兵部卿師成親王

別れにしその面影を形見にて幾夜の月を猶見つるらん
いくありあけを歌合

戀歌の中に

前大納言光任女

きぬくの涙ながらや残るらん別れしまゝの袖の月影

よみ人しらず

うねの野に鶴カササギの一聲鳴き別れ又も逢ふ身とたのめてぞこし
李花集下別戀

新葉和歌集 卷第十四

戀歌四

家にて人々題をさぐりて千首歌よみ侍りける中に

寄瀬瀨と云へることを

福恩寺前關白内大臣

○新後撰戀四に従二位行家、思ひ川あふ瀨の如何に變りてか又は涙の淵となるらん

○新續古今戀四に爲秀、飛鳥川變るつらさのうき瀨よりやがて涙の淵となりぬる

〔着〕新後撰戀四に院大納言典侍、悔しくぞ結びそめけるそのままにさて山の井の淺き契りを

○玉葉雜五に新宰相、飛鳥川あすとも知らぬはかなきによし流れての世をも頼まじ

いかにして人の契りの淺き瀨におつる涙の淵となるらん

遇後悔戀と云ふことをよませ給うける

中 宮

汲そめて淺き契りの悔しきを如何に言ひてか山の井の水

題しらず

入道前關白左大臣

飛鳥川あす知らぬ身のはかなくも後の逢ふ瀨を猶頼む哉

百首歌よませ給うける中に

後村上院御製

○師兼千首 思ひ絶えてあらましのををり／＼の言の葉さへも憂き契り哉○金葉戀上 待ちし夜のふけしを何と歎きけん思ひ絶えてもあられる身を

○新拾遺釋教 一むらは猶しぐれつる空舞れてさはる方無くすめる月影

○榮花物語珠衣卷 かへす／＼世語りにもしつべき年の有様とぞ、源氏若紫卷、世語りの人や傳へむ類ひ無きうき身をさめぬ夢になしても

○新古今戀三に鏡永 つらかりし多くの年は忘られて一夜の夢をあはれとぞ見し

○古今戀四 堀江漕ぐ棚無し小舟漕ぎ歸り同じ人にや戀ひわたりなん
○草菴集 漕ぎ歸る棚無し小舟今更に同じ蘆間に何さはるらん

○現葉集に後西院、いかにせん人の心の海深み浪のすて舟浮き沈む身を

逢ひ見ずば思ひ絶えてもあるべきにつれなからぬも憂き契り哉

依忍難逢戀と云ふことをよませ給うける

御 製

逢ふ事のさはる方にもなれとてや忍べとのみは人の云ふらん

戀の歌の中に 掌侍 敦子

洩れぬべき身の世語りをいかがせん見しは夢ぞと思ひなしても

中院 入道 一品

そのまゝに絶えなばいとどうかるべき一夜の夢を人に語るな

掌侍 頼子

いかにせん蘆間の小舟漕ぎ歸り同じ江ながらさはる契りを

中務卿 尊良親王

いかにせん浦の棄て舟浮き沈み又逢ふ事も浪に朽ちなば

○新千載戀二に信實、思ふ事湊にちがふ早舟の泊りもあへぬ戀もする哉和名抄云舸漢語抄云波也布禰、高尾舟一云戰士可乗之輕舟也

○新續古今戀四に後京極攝政、誰と無く寄せては歸る浪枕うきたる船の跡もとまらで「増」新古今雜下に匡房 さすらふる身は定めたる方も無しうきたる舟の浪にまかせて

○古今戀五 すまのあまの鹽やき衣をさを荒み間遠にあれや君が來まさぬ

○新後拾遺戀四に尊道親王、すまのあまの鹽たれ衣朽ちぬまや間遠ながらも取ね來ぬらん

千首寄舟戀

わたの原浪間にちがふ早舟の逢ふかとすれば遠ざかりぬる

春宮大夫師兼
千首

正平十八年内裏にて人々題をさぐりて百首歌よみ

侍りける時寄遊女戀

妙光寺内大臣

いかにして結び定めん浪枕浮きたる舟のよるの契りを

寄衣戀と云ふことをよませ給うける

後村上院御製

すまのあまの鹽たれ衣重ねても間遠にしあれば濡るゝ袖哉

題しらず

冷泉入道右大臣

絶えはてばいかかはすまのあま衣間遠なりとてさのみ恨みじ

太宰帥泰成親王

うきながら猶偽りの言の葉もある世に絶ゆる命ともがな

〔増〕 續古今戀三に平政村、ならはねば逢ふ夜もおつる涙哉うきになれにし袖のなごりに

〔増〕 袖の時雨は新千載哀傷に眞昭法師「冬枯のは、その木の葉散りしより袖の時雨は今もかわかず」とある如く落涙の事なるを時節の物に取りなして袖の時雨とのたまひしなり又「身のみ」とは我身のみなり風雅集雜下以後深草院隠れ給ひての又の年の春伏見院へ梅花を折りて奉らせ給ふとて遊義門院「故郷の軒端に句ふ花だにも物うき色に咲きすさびつ」御かへし伏見院「花は猶春をもわくや時知らぬ身のみ物うき頃のながめを」とありユガラシは秋より冬にかけて吹く疾風なり

○新古今秋下に疾風なり、秋風に山飛び越ゆるかりがねのいや遠ざかり雲隠れつゝ

○新千載戀三に右大臣、逢ひ見ても又行末の敷かれて絶えぬ思ひぞ身に知られける

言の葉を頼みし程のなぐさめもうきになれては無き契り哉

たのめし季花集下

よみ人しらす

文中四年うへのをのこども題をさぐりて五十番歌合

し侍りけるついでに稀驚戀と云ふことを 御 製

何とかは又木枯ユガラシのさそふらん身のみ物うき袖の時雨を

千首歌よませ給うける時寄驚戀

あしびきの山飛び越えて行く鷺のいや遠ざかる人に戀ひつゝ

題しらす よみ人しらす

宗良親王千首器原戀

かよひぢなほさはれとや千首

蘆根はふ汀隠れの鳩鳥のしたの通ひも絶えはてよとや

上野太守懷邦親王

厭はるゝ身はくり返し歎かれて絶えぬ思ひをしづのをだまき

權中納言經高母

○新勅撰戀五、伊勢物語、忍ぶ山忍
びて通ふ道もがな人の心の奥も見る
べく○續後撰戀一に攝政左大臣、道
絶えて我身に深き忍ぶ山心の奥を知
る人も無し

○新續古今戀三に前參議教長、思へ
ども身をしわけねば一かたは心の外
の夜かれをぞする

〔増〕續千載戀五に法眼行濟、心引
く方こそ知らね忘らるゝ身をば浮田
の杜のしめ繩

○續古今戀四に定家、色變る美濃の
中山秋越えて又遠ざかる逢坂の關

〔増〕數ならぬ身を美濃に言ひ寄せ
し修飾語なり追記に詳記す

○拾遺愚草員外 よそ人は何なかな
かの夢ならでやみのうつゝの見えぬ
面影

ふみ見しは今ぞ悔しき忍ぶ山人の心の奥のつらさに

右近大將長親母

歎かじな人目にさはる契りにて心の外の夜かれなりせば

冷泉入道前左大臣

心ひく方には寄らで梓弓猶遠ざかる身の契り哉

新待賢門院

末は又遠ざかるべき東路と知らでや越えし逢坂の關

度會行治

數ならぬ美濃の中山なかゝに隔てはてなば戀しからじを

百首歌中に逢不逢戀を

文貞公

今更になこそその關を逢坂の山のあなたに誰かすゑけむ

又も見ぬ闇のうつゝの通路は何なかゝの夢の浮橋

○續後撰戀三に平長時、頼むるを又
偽りと思ひても猶忘られぬ夕暮の空

○古今戀二に忠岑、命にもまさりて
惜しくあるものは見はてぬ夢のきむ
るなりけり

〔増〕續千載雜中に往事如夢と云へ
出も夢なればうきをうつゝの身と思ひ
かじ

○新拾遺戀三に花園院、ありし世の
契りよせめて夢ならば思ひ寢をだに
待たましめものを

〔増〕新續古今戀三に嘉陽門院越前
おのづからまどろむ程に忘らるゝ戀
を夢こそ驚かしつれ、深勝を流布本

源勝に誤る松井本に依りて訂正す
○五百番歌合に四百四番、左勝、公

長に契りきや見し夜ばかりのうつゝ
にて云々○右具氏、今よりは夢をぞ

頼む逢ふ事のうつゝとも無き夜半の
夜契りに○判者、夢よりはさすが見し

つながらも○詞花戀上に左兵衛督公
能なぐさむる方も無くてややみな

○五百番歌合に四百二十八番左、辨
内侍、そのまゝとはれぬ人のつら

意をば忘れや只同じ心に○右勝頼
逢ひ見しは一夜の夢のなごりに

へて思ひなむ一夜の夢のなごりにか
りは〔増〕新後撰戀四に法印聖勝、

逢ひ見しは一夜の夢の草枕結ぶも假
の契りなりけり

戀の歌の中に

面影ぞ猶忘られぬあだなりし契りは夢のうちになしても

幸子内親王

契らずようきをうつゝになしはてゝ見はてぬ夢に猶迷へとは

二品法親王聖尊

夢ならば又思ひ寢もありなましうきは一夜のうつゝなりけり

二品法親王深勝

忘らるゝ暇こそ無けれおのづからまどろめば又夢に見えつゝ

五百番歌合に

左近大將公長

契りきや見し夜ばかりのうつゝにて夢にも人のつれなかれとは

前大僧正頼意

逢ひ見しは一夜の夢の名残にてうつゝにつらき年ぞ經にける

○新千載戀三に伏見院、あぢきなく
一夜の夢の契り故さめぬ思ひの世を
や盡さん

○古今戀一 よひくに枕定めん方
も無しいかに寢し夜か夢に見えけん

○風雅雜下に壽成門院、あらましの
心のまゝに見る夢を思ひ合はするう
つゝともがな

○金葉冬に源兼昌、あはぢ嶋通ふ千
鳥の鳴く聲に幾夜寢さめぬすまの關
守

○李花集云紅葉のうつろひたるを人
のもとへつかはすとて

過不過戀を

祥子内親王

ほのかにも見しは夢かと迎^{むか}られてさめぬ思ひやうつゝなるらん

從二位儀子

吾ばかりなどさめやらで歎くらん獨やは見しうたゝねの夢

題しらず

よみ人しらず

夢とだに思ひ定めん方も無しいかに寢し夜の人の契りぞ

右近大將長親母

いかに寢て見えし夢ぞと驚けど思ひ合はする曉ぞ無き

妙光寺内大臣家中納言

別れ路にうつりし鳥の同じねを幾夜寢覺の床に聞くらん

紅葉を折りて人のもとへつかはすとて

よみ人しらず

○後撰戀五 何時までのはかなき人の言の葉か心の秋の風を待つらん
【拾】古今集戀五 しぐれつゝもみづるよりも言の葉の心の秋に遭ふぞわびしき
【言】新後撰戀四に公雄女「變らじと言ひしは何時の契りにて夜かると床に月を見るらん」續千載戀四に中納言公循「色變る人の心の淺茅原何時より秋の霜はおくらん」などあるに似たり

○續拾遺雜秋に大納言基良、思ひおく涙の露は幾秋か言の葉ごとに數つもるらん

○新千載戀四に大僧正良信、逢ふまでと云ひし命の長らへて變るつらさを又や歎かん

○新千載戀三に聖統法師、とはずともせめてたのめぬ暮ならば變る心は知られざらまし

○和名抄云武藏國入間郡麻羽郷（安左波）

李花集下

かはり行く言の葉にこそ色見えぬ心の秋もまづ知られけれ

題しらず

治部卿經方

變らじといはせの杜の言の葉よ何時より秋の色に染めけん

李花集下等露屋を

移ろはむものとぞ誰も白露の言の葉ごとに心おかれし

よみ人しらず

中 宮

つれなくて過ぎこし方の報いにや變るつらさを身に歎くらん

權 大 納 言

かねてより人のつらさにならはずば變る心や猶うからまし

權 大 納 言 公 夏

今ははや變る契りのあさは野に人もこそすげの亂れわびつゝ

女のもとへつかはしける

よみ人しらず

○新千載戀四に覺助法親王、絶えずこそ心にかゝれ玉かつらはふ木あまたの人のつらさは

〔増〕古今集戀四 玉かつらはふきあまたになりぬれば絶えぬ心のうれしげも無し

○源氏物語禰の巻、神垣はしるしの杉も無きものをいかにまがへて折れる榊ぞ

○古今集秋上 秋萩にうらびれをれば足曳の山下とよみ鹿の鳴くらむ

〔増〕續拾遺秋上に春宮大夫實兼、色變る小萩がもとは露散りて秋の野風をじか鳴くなり、萩は色の移ろふものなれば「色變る小萩」と續け言へり

○古今集雜下 木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬべらなり

○續古今戀四に中務卿親王、何とか色變るらん木にもあらず草にもあらぬ人の言の葉

○新勅撰戀二、伊勢物語、秋かけて言ひしながらもあらくなく木葉ふりしくえにこそありけれ

移ろふは我身一人か玉かつらはふ木あまたの色を知らばや 見せばや 李花集

寄榊戀と云ふことをよませ給うける

後村上院御製

つらさをばいかにまがへて榊葉の變らぬ色と頼みそめけん

千首歌奉りし時寄鹿戀を

中務卿宗良親王

色變る小萩がもとにうらびれていつ鹿のねに鳴くと知らせむ 聞くらむ千首

住吉社三百六十番歌合に

よみ人しらず

木にもあらず草にもあらぬ契りだにうら枯れてゆく人の秋風

戀歌中に

前大納言光任女

いとど猶もとこし人や訪はざらん木の葉ふりしく蓬生の宿 ヨモギ

中務卿宗良親王

○源氏物語蓬生の巻、惟光も更にえ
わけさせ給ふまじき蓬の露けさにな
ん侍る露少し拂はせてなん入らせ給
ふべきと聞ゆれば「尋ねても吾こそ
訪はめ道も無く深き蓬の本の心を」と
と獨ごちて猶おり給へば御さきの露
を馬のむちして拂ひつゝ入れ奉る云
々

○月清集 かくてしも消えやはてむ
と白露のおき處無き身を惜む哉

○五百番歌合に四百十九番、左持實
興、移ろはん後忍べとや云々○右成
直いかにしておのが物から心にもま
かせぬ袖の涙なるらん○判者、心に
もまかせぬ色やなほざりにあらぬ袂
の涙なるらん

○同四百十一番、左女房、しるし無
きねのみ泣かれてうき人の心の花ぞ
色變りゆく○右勝太宰帥親王、變る
ともまづ逢ひ見むと云々○判者、行
末を知らず頼みし身のうさや心の花
に猶まさるらん

〔増〕詞花集雑下に太政大臣「思ひ
やれ心の水の淺ければ書き流すべき
言の葉も無し」玉づさは文書の意な
り

新羅古今戀三よみ人知らず

此暮も訪はれんことは蓬生の末葉の風の秋の烈しさ

權中納言長賢かれくになりける秋の頃よみ侍り

ける歌中に

妙光寺内大臣家中納言

さらぬだにおき處無き身のうきに秋となかけそ袖の白露

五百番歌合に

權中納言實興

移ろはん後忍べとやなほざりにあらぬ心の色を見せけん

式部卿惟成親王

變るともまづ逢ひ見んと思ひしやうきにならぬ心なりけん

人に賜はせける

後醍醐天皇御製

書き流すわが玉づさの言の葉に争ふものは涙なりけり

元弘二年百首歌よみ侍りける中に寄雲戀を

中務卿尊良親王

○源氏物語橋姫の巻、世を厭ふ心は山に通へども八重たつ雲を君や隔つこと〔誓〕新續古今雜上に尋花と云ふの香に八重たつ雲をわけや盡さん

〔増〕玉葉雜三に權大納言典侍、吹き慣れにける峯の松風

○源氏物語明石の巻云まことや吾ながら心より外なるなほざりごとや出づうとまれ奉りしふしんを思ひ出づるさへ胸痛きに又あやしうもはかなき夢をこそ見侍りしかかう開ゆる問はず語りに隔て無き心の程はおぼし合はせよ契りし事もなど書きて何事につけても「しほ」とまづぞなかるゝ假初のみるめはあまのすさびなれども」とある云々

○新題林に仙洞、うしやその里のしるべも誰ならでみるめ茹らせぬあまのすさびは

○拾遺雜上、伊勢物語、忘るなよ程は雲井になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで

○新千載離別に上東門院、思ひ出よ雲居の浪は隔つとも形見に添ふる影は離れじ

わが中は八重たつ雲に隔て來て通ふ心や道迷ふらん

寄風戀

人ははや忘れやすらん驚かす風のたよりも吹きたゆむ頃

源氏物語の所々をよませ給うける御歌の中に

御製

みるめなき恨みは猶や増るらんあまのすさびの問はず語りに

月前祈戀をよませ給うける

後醍醐天皇御製

面影は雲居のよそになりぬれど月にぞ祈るめぐり逢ふ世を

寄月戀を

中務卿宗良親王

思ひ出よ形見はおのが物ならぬ雲居のよその山のはの月

月は見るやと申おこせて侍りける人の返事に

よみ人しらす

○李花集云人のもとより今夜の月は見るかと申侍りし返事に
○續拾遺戀三に前太政大臣、うしとても今はあだなる名残かは忘れがたみの有明の月〔增〕新續古今戀五に爲氏、面影は忘れがたみに長らへてわが爲つらき夜半の月哉

○五百番歌合に三百九十九番、左實興したふぞと思ふからにやなかくにつらき別れを猶急ぐらん○右勝師兼、思ひ出はたが涙にも曇るらん云々○判者、別れにし其面影の變らねば契りし月ぞつらき添へつる

○續後拾遺戀四に藤原泰宗、見るかに袖こそ濡るれ月をだに形見なれとは契らざりしを○續千載戀三に道義法師、面影も涙にはては曇りけり月さへ人の契り忘れて

〔增〕「五首歌講せられける」の講字を流布本讀に誤る國歌大系本は、それを假名書にして「五首歌よませられける」とせり松井本に依りて訂正す
○續拾遺戀四に正三位顯家、ながむれば戀こそまされわきもこがつらき心や月に添ふらん

李花集下

これならぬ忘れがたみもあるものを月は眺めじ曇りもぞする

五百番歌合に

春宮大夫師兼

新續古今戀四よみ人しらす
思ひ出はたが涙にも曇るらん契りし月の同じかたみは

正平二十年閏九月十三夜に内裏にて人々題をさぐりて月百首歌よみ侍りけるに寄月戀を

權大納言公夏

面影をさそへば曇る月をしも形見なれとはなど契りけむ

建武元年八月十五夜内裏にて五首歌講せられける

時見月増戀と云ふことをよみ侍りける

前大納言季繼

見るからに猶かきくらす涙哉月にもつらき影やそふらん

戀の歌中に

兵部卿師成親王

○新後撰戀四に大納言基良、さても又いかなる夜半の月影にうき面影をさそひそめけん

○續千載雜上に藤原忠能、面影ぞ猶残りける妹が嶋形見の浦の有明の月
○五百番歌合に四百二十四番左勝、公長、何と只見し面影の云々○右頼武、つらくてはよも山科の音羽川音にはたてし袖は濡るとも○判者、音羽川音に聞きてもいと猶見し面影や目にうかぶらん○續千載戀五に鴨祐教、契らずようき面影を残しおきて忘らるゝ身の形見なれとは
○五百番歌合に四百十八番左勝、長親、思ひ出て心に忍ぶ云々○右頼武、行末の頼みもいさや白露の玉の緒ばかり残り契りは○判者、面影を人の契らぬ形見ぞと思へばいとどたのみなの身や○新後拾遺戀四に三善頼秀面影を忘れもやらぬ心こそ人の残さぬ形見なりけれ

○新千載戀五に瑤子内親王、面影も忘るばかりの年月をうき身にそひて歎かずもがな

○續後拾遺戀四に源重泰、面影の變るよりこそ増鏡うつる心の程も見えけれ

月を見ばさても心のなぐさまでうき面影の何うかぶらん

延元三年九月十三夜内裏月三十首歌中に

吉田前内大臣

たち返り又こそ歎け面影の残る形見の有明の月

五百番歌合に

左近大將公長

何と只見し面影のうかぶらん忘らるゝ身の袖の涙に

右近大將長親

思ひ出て心に忍ぶ面影や人の残さぬ形見なるらん

契らぬ歌合

題しらず

前内大臣隆

厭はるゝうき身にそひて遠ざかる心にも似ぬ人の面影

寄鏡戀を

後村上院御製

面影も變るや如何に増鏡人の心のよそにうつらば

○拾遺集戀四 津の國のいくたの川の幾度かつらき心を吾に見すらん

○新續古今戀二に兼好、いかにせん神のうけゝるみそぎとて見し面影も忘れはてなば(増)新後拾遺戀四に前關白左大臣、遠ざかる人の心にまかせなば見し面影も身を離れん

○拾遺集別 散る花は道見えぬまで埋まなん別るゝ人もたちやとまると

○續古今雜下に平政村、寝ざめする夜半の心のまゝならば思ひ定めぬ身とは歎かじ

忘れれば面影變れ増鏡吾ぞあらぬと思ひなしてん

題しらず

よみ人しらず

などつらき心の吾に變るらん人を見るこそ鏡と思ふに

李花集下書戀戀

心にもあらで離れ侍りけるをそのまゝにて年月も

多く積りにける女のもとへ申つかはしける

いかにせん別れは年を隔つれど見し面影は身をも離れず

かへし

かくばかり猶面影は添ふものを別るゝ人に見えけるぞ憂き

題知らず

從三位朝棟

うき人はありし其夜を限りとや思ひ定めておき別れけむ

久戀と云ふことをよませ給うける

○伊勢物語 くらべこし振分髪も肩
過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき

後村上院御製

くらべこし振分髪そのまゝに思ひ亂れて年ぞ經にける

寄源氏物語戀と云ふことを

文 貞 公

○後撰集夏 ゆきかへる八十氏人の
玉かつらかけてぞ頼むあふひてふ名
を

玉かつらかけてぞ忍ぶ夕顔の露あかざりし花の形見に

新葉和歌集 卷第十五

戀歌五

戀の御歌の中に

後醍醐天皇御製

我戀は久米路の橋の中絶えて契り空しき葛城の神

寄_ニ忘草_一戀を

新宣陽門院

かよひこし人は軒端の忘草露かゝれとは契りやはせし

忘草を一葉包みて人のもとへつかはずとて

李花集下

忘らるゝ身を同じ名と思はずば何か軒端の草とうからん

も李花集

題しらず

前大納言光任女

枯れはてし人には誰か住吉の岸なる草の名を教へけん

〔増〕久米路の橋は久米の岩橋とも云ふ新拾遺戀四に實方「わがごとやくめぢの橋も中絶えて渡しわぶらんかづらぎの神」など見えたるは後撰集以後の事にて佛法を尊きものにせん爲め僧侶等が作りたる俗説なるよし古事記傳四十二に言へり

○爲尹千首 なさけ無く人は軒端に秋ふけてしのぶにかこつ夜半の月影
○伊勢物語 或やんごとなき人の御局より忘草を忍ぶ草とや云ふとて出させ給へければ、忘草おふる野べとは見るらめどこは忍ぶなり後も頼まん

○古今集二十に貫之、道知らばつみにも行かん住のえの岸に生ふてふ戀忘れ草

○萬葉集第十 道のへの尾花がもとの思ひ草今更々に何か思はむ○續後撰戀一に祝部成茂、知らせばや尾花がもとの草の名におきゐる露の消えぬべき身を〔誓〕新古今秋下に寂蓮、ひとめ見し野への景色はうらがれて露のよすがに宿る月哉。同戀五に通具、とへかした尾花がもとの思ひ草しをるゝ野への露は如何にと

〔誓〕 金葉集戀上來テモ不レ留と云へることを俊賴 思ひ草葉末に結ぶ白露のたまゝ来ては手にもたまらず

○續後拾遺戀三に下野、石川やあわに契りや結び置きしはなだの帯の移り易きは

○源氏物語蓬生の卷 尋ねても吾こそ訪はめ道も無く深き蓬のもとの心を

〔誓〕 新續古今戀五 通ひ來し跡だに見えぬまくず原猶我方は秋風ぞ吹く、かるれば茂るとは通ひ來ねば庭には蓬が茂る意なり

寄思草戀と云へる心を

式部卿惟成親王

枯れね只尾花がもとの草の名よ露のよすがもあらずなる身に

右兵衛督成直

あだならんものとはかねて思ひ草葉末の露のかゝる契りは

正平八年内裏千首歌中に寄思草戀を

前中納言爲忠

移りゆく人の契りは月草のはなだの帯の結び絶えつゝ

寄蓬戀

前大納言實爲

蓬生のもとし道は變らぬにいかにかれゆく契りなららん

戀の歌の中に

前内大臣隆

かよひこし人の契りの末つひにかるれば茂る庭の蓬生

五百番歌合に

右近大將長親

○五百番歌合に四百二十三番、左殿、長親、うかりける身のならばはしの云々

○右成直、なほざりに思ひけりと思はれん忘らるゝ身の生きてありせば

○判者、忘れじな生きてある世の思ひ出は入相の鐘の夕暮の空

○新拾遺戀四に左大臣、待ちし夜に又立かへる夕べ哉入相の鐘に物忘れせて

○風雅集戀二に尊氏、よしさらば待たじと思ふ夕暮を又驚かす入相の鐘

○新續古今秋上に家長、よしさらば身を秋風にすてはてゝ思ひも入れじ夕暮の空

○壬二集 偽りの無き世にあはむ時も猶同じ心や君に残らん

○續千載旅に土御門院、岩がねの枕はさしもなれにしを何驚かす松のあらしぞ

○後拾遺春上に小大君、いかに寝ておくるあしたに言ふことぞ昨日を去年と今日を今年と

うかりける身のならばはしの夕べ哉入相の鐘に物忘れせて

題しらず

坂上頼澄

今はたゞ待たれじものをとばかりにうち歎かるゝ入相の鐘

妙光寺内大臣

あぢきなく行くらん方の空までは思ひも入れじ入相の鐘

よみ人しらず

偽りも無き世とのみや思ひけん待たれし頃の夕暮の空

從三位周子

訪はるべき人も頼まぬ夕暮を何松風の驚かすらん

正平十八年九月十三夜内裏にて人々題をさぐりて

歌よみ侍りける時寄嵐戀を

冷泉入道前右大臣

いかに寝てあかすとか知る頼めこし契りも今は嵐吹く夜を

○古今春下に素性、花散らす風のやどりは誰か知る吾に教へよ行きて恨みむ

○後撰集雜四 吾も思ふ人も忘るなありそ海の浦吹く風のやむ時も無く

○新後撰戀五に衣笠内大臣、白浪のかけても人に契りきやこと浦にのみみるめかれとは

〔増〕みるめ、みるめ、みるめを流布本「菀るらむ」とあり松井本に依りて訂正す

○五百番歌合に四百四十番、左持、經高、數ならぬ身にも恨みは云々
○右關白、里のあまの浪かけ衣いつまでかほさぬ恨にしほりかねけむ
○判者、數ならば恨も誰か里のあまの浪かけ衣ほすひまも無き

題しらず

李花集下恨戀の歌中に

秋と吹く風の宿りは憂き人の心なりけり行きて恨みむ

よみ人しらず

天授二年内裏百番歌合に恨戀の心を

中務卿宗良親王

ありそ海の浦吹く風も弱れかし言ひしまゝなる浪の音かは

戀歌の中に

文 貞 公

我方に藻鹽たるとも知らでこそこと浦人のみるめ菀るらめ

右近大將長親母

うきを知る心の何とありそめてつらきたびには袖濡らすらん

五百番歌合に

權中納言經高

數ならぬ身にも恨みはあるものを言はゞや人の思ひ知るまで

題しらず

正三位國夏

○拾遺愚草 思ひ川あはれうき瀬の
まさりつゝいかばかりなる涙とか知
る

○續後撰戀五に基俊、浪寄する磯べ
の蘆の折れ伏して人のうきにはねぞ
泣かれける

○玉葉集戀五に俊成、恨みても戀し
き方やまさるらんつらさは弱るもの
にぞありける

○續千載戀五 忘らるゝうき身の程
を知らぬ哉人をつらしと思ふばかり
に

○「かごと」はかちごとと云ふ説宜
し。「かこつ」は「かこつけ」にて俗
に云ふかづけごとなり

〔増〕 續千載雜上に藤原親範、かつ
晴るゝ霧の絶えまの秋風をたよりに
なして出づる月哉

うくつらく習ひこし身の恨むるはいかばかりなる心とか知る

妙光寺内大臣

今はたゞ身を知るまでの涙にて人のうきには濡れぬ袖哉

中務卿宗良親王家京極

戀しさにつらさは變るものなれど言はねば同じ涙とや見る

前内大臣 隆

さのみやはことわり知らで恨むべき身の憂ウレにこそ人もつらけれ

後醍醐天皇御製

恨みじと思ふ心をやがて又かごとになして濡るゝ袖哉

恨絶戀を

四條贈左大臣

おのづから思ひや知ると恨みしを便りになして遠ざかるらん

戀の歌の中に

京極贈左大臣

○新後撰雜中に天台座主道玄、行末の何かゆかしきこし方にうき身の程は思ひ知りにき〔増〕千載戀三に道因法師、思ひわびきても命はあるものをうきに堪へぬは涙なりけり。續後撰戀五に藤原成宗、今は只訪はで年ふる君よりもうきに堪へたる身をぞ恨むる、此集雜下に守永親王、かくばかりうきに堪へてもあるものをいかで昔を恨み來つらん

○古今集戀五 あまの苅る藻に住む蟲のわれからとねをこそ泣かめ世をば恨みじ〔増〕千載集雜中に大納言宗家、身の程を知らずと人や思ふらんかく憂きながら年を経ぬれば

○新後拾遺戀五に爲明、恨みのみ深き難波のみをつくししるしやいづら寄る船も無し

○新古今戀五 大淀の松はつらくもあらなくに恨みてのみもかへる浪哉

○新千載戀一に爲道、いかにせん言はねば胸の夕煙心一つにくゆる思ひを

身の程は思ひ知れどもげに人のうきには堪へず恨みわびつゝ

建武二年内裏千首歌中に戀動物を

中務卿尊良親王

人ぞ憂き猶身の程を知らぬまは藻に住む虫の理りも無く

正平八年内裏千首歌中に寄江戀を

前中納言爲忠

難波江の深き恨をつくしても猶しるし無き我思ひ哉

恨戀の心を

中務卿宗良親王

知るらめや君がつらさは大淀のうらみて歸る浪を數へて

題しらず

よみ人しらず

いかにせん言はねば胸にみつ潮の心のうちに辛き恨みを

從三位行義

○續千載戀四に平時元、知られじな
あまのもしほ木こりずまに猶したも
えの絶えぬ思ひは

○古今戀四に小町、あまの住む里の
しるべにあらなくに恨みんとのみ人
の言ふらん

○古今戀五 すまのあまの鹽焼衣を
さを荒み間遠にあれや君が來まさぬ

○新古今秋上に永縁、秋萩を折らて
は過ぎじ月草の花摺衣露に濡るとも

○五百番歌合に四百三十一番、左勝
女房、秋はつる御室の山の云々

○右實爲、今も猶袖こそ濡るれその
まゝに渡り絶えにし中川の水○判者
音高き御室の葛の山風に濡るとも袖
は恨みざらまし

いかにせんあまの藻鹽木こりずまの恨みても猶もゆる思ひを

相互恨戀の心を

妙光寺内大臣

中空に思ひやけなむあまの住む里のしるべの煙くらべは

題しらず

新宣陽門院

すまのあまの鹽焼衣間遠にも重ねし程は恨みやはせし

從二位理子

いかにせんわが心のみ月草の花色衣恨みわびつゝ

前中納言爲忠

恨みわび身にしむものは言の葉の末野にかるゝ葛の秋風

五百番歌合に

御製

秋はつる御室の山の葛かつら恨みし程の言の葉も無し

題しらず

前大納言實爲

○續後拾遺戀四に蓮生、祈りこし御室の山の葛かつら神代かけても恨みつる哉○新古今戀四に寂蓮、里はあれぬ空しき床のあたりまで身はならはしの秋風ぞ吹く

○新拾遺戀五に大納言公蔭、かつ墓ふ心弱さは中々に恨みて何のかひかあるべき

○源氏物語蓬生の巻 尋ねても吾こそ訪はめ道も無く深き蓬のものと心を

○伊勢物語、新古今戀五、出て、來し跡だにいまだ變らじをたが通ひ路と今はなるらん

今ははや身のならはしのつらさにて恨むるまでも無き契り哉

百首歌よみ侍りける中に

入道前關白左大臣

つひにかく絶えはてけるをなかくに恨みてこそはやむべかりけれ

怨絶戀と云ふ心を

從二位 儀子

今は又悔しき程になりにけり恨みざりせば絶えもはてじを

正平二十年内裏七百首歌中に寄松虫戀を

右兵衛督成直

人ははや通ひ絶えにし蓬生ヨモギヲのものと心に松虫の鳴く

百首歌よみ侍りける中に寄庭戀を

中務卿尊良親王

今は又たが通ひ路となりぬらん夜な〜分けし庭ヨモギヲの蓬生

家に三百番歌合しける時絶戀を

〔増〕 新後拾遺秋上に爲兼、蓬生の露のみ深き古里にもと見しよりも月ぞすみける

〔増〕 もずの草ぐきは萬葉第十なる春柑間に「春さればもずの草ぐき見えねども吾は見やらむ君があたりをば」とありて、モズは小鳥の名、クキはくどり歩くこと草むらの中をくどり歩くので見えざる意、こゝは草の名と心得てよみ給ひしやうに開ゆ
○續千載戀四に定家、かりにだに訪はれぬ里の秋風に我身うづらの床はあれにき

○萬葉第五と第九に和久良婆爾とあり稀なることにて、たまさかの童なり古今集雜下に行平、わくらばに問ふ人あらばすまの浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ

〔増〕 さゝがには蜘蛛の別名なり古今集戀五に、今しはとわびにしものをさゝがにの衣にかゝり吾をたのむる、後撰集戀一に、絶えはつるものとは見つゝさゝがにの糸をたのめる心細きよ、とあり

○新勅撰雜四に前太政大臣、春秋の雲居の雁もとゞまらずたが玉づさのもじの關守

尋ねても訪はれしことは昔にて露のみ深き蓬生の宿

關白左大臣

同じ心を

妙光寺内大臣

尋ねても跡だに見えれば訪ふべきに枯れはてぬるかもずの草莖クキ

題しらず

冷泉入道前右大臣

はては又かりにも訪はず忘らるゝ我身鶉のねをば鳴けども

妙光寺内大臣家百首歌中に寄虫戀

右近大將長親母

わくらばに來る夜を何と歎きけむ絶けるものをさゝがにの糸

關白家三百番歌合に

前中納言實秀

かき絶えて通はぬ中となりにけり見し玉づさのもじの關守

題しらず

中務卿宗良親王

○白氏文集云秋雨梧桐葉落時○玉葉
秋下に永福門院、夕暮の庭すさまじ
き秋風に樹の葉落ちて村雨ぞふる

○かりほ萬葉に借廬と書けり初尾花
かりほにふきてとよめり後世にかり
ほのいほとよめる多し

○新續古今戀三に爲子、長らへて又
も逢ひ見んこのまゝの契りにかへぬ
命ともがな

○古今戀二に友則、命やは何ぞは露
のあだものを逢ふにしかへば惜しか
らなくに

○古今雜上 古への野中の清水ぬる
けれどもとの心を知る人ぞ汲む○續
古今雜下に俊成女、忘れぬもとの
心のありがほに野中の清水影をだに
見じ

千首寄桐戀
松に吹く夕べの風は昔にて桐の葉落つる故郷の雨

右近大將長親

忘れめや假菴カキカのさゝのふし處さてだに有りし夜半の契りを

權中納言經高母

つれなしと人には見えじありはてぬ契りにかへし命なりせば

天授二年四月内裏百番歌合中に

前内大臣顯

長らふる命を今はかこつ哉逢ふにしかへばかゝらましやは

正平二十年内裏三百六十首歌に寄名所戀

右近大將長親

思ひ出よ野中の清水そのまゝにまだ影も見ぬ契りなりとも

戀歌の中に

從二位儀子

○續古今秋上に慈圓、夕まぐれ鳴た
つ澤の忘れ水思ひ出づとも袖は濡れ
なん

○古今戀三 浅みこそ袖はひづらめ
涙川身さへ流ると聞かば頼まん
「増」「うきせ」はうき瀬なり「うき

世」また「愛世」とあるは誤りなり後
拾遺戀一に榮子内親王よしさらば
渡りもそめじ思ひ川うき瀬に袖の濡
れもこそすれ

○古今戀五 みなせ川ありてゆく水
無くばこそつひに我身を絶えぬと瀬
はめ○新千載戀五 みなせ川逢ふ瀬
はよそにありて行く流れの末をいか
が頼まん

○風雅秋中に從三位賞名、秋の雨の
はれゆく跡の雲間よりしばしほのめ
く宵の稻妻

○五百番歌合に三百九十番、左勝女
房 慕ひわび長らふべくもあらぬ身
に又よと契る程のはかなさ○右頼武
さらにも又よそになりてや云々○判者
よしさらば忘れぬきに聞かれればヤ
長らふべくもあらぬ我身ぞ
「増」さらにも又よそに聞かれれば
又」とあり松井本及五百番歌合に依
りて訂正す

ありとだに人に知られぬ忘れ水絶えての後も袖は濡れけり

後村上院御製

逢ふ事はさて山川の浅みこそ袖のみ濡れてうきせなりけれ

右近大將長親母

今ははや逢ふ瀬もよその水無瀬川誰に契りの有りて行くらん

よみ人しらず

頼まめや吾を秋田の露の上に又稻妻のほのめかすとも

五百番歌合に

源頼武朝臣

更に又よそになりてや言ひそめん有りし身とだに忘れはてなば

名所五十首歌よみ侍りける中に

關白左大臣

今はよも思ひも出でじいきて世にありその浦の恨みわぶとも

○公事根源云朝賀これを朝拜とも申也辰の時に天皇大極殿に行幸なりて行はせ給ふ群臣皆禮服を着して御即位の儀式に同じ、めしの鼓を打たしむれば群臣列して門に入る天子高御座につかせ給へば兵庫寮鉦をうつ執翳出て帳を八字にかゝり近仗警蹕を稱し圖書主殿香をたく典儀再拜を唱ふ群臣此時再拜す神武天皇元年正月一日橿原宮をたて始めて位につかせ給ひける時宇摩志麻治命天瑞を奏せらるゝよし日本紀に見えたり是などをや始と申すべき

○年中行事歌合註云臨時の客と云ふは攝政關白の家に春の初大臣以下の上達部を招きて遊給ふ事有也定まれる公務にてもあらねば臨時の客とは申す也

○催馬樂、青柳を片糸によりて鶯の籠ふと云ふ笠は梅の花笠

○漢の文帝の子、竹園に居給ひしより親王を竹園と云ひ來れり○新後拾遺雜下きもこそは竹の園生の末ならめ身にうきふしのなど茂るらん

新葉和歌集 卷第十六

雜歌上

年中行事を題にて人々百首歌つかうまつりけるついでに朝拜の心を
後村上院御製

高御座タカミイダとばかりかゝげて橿原の宮の昔もしるき春哉

臨時客

春はまづ來る諸人の代々を経て歌ふも絶えぬ青柳の糸

春の歌中に

中務卿宗良親王

春をごとくに櫻笠記經てあひ宿りせし鶯も竹の園生に吾忍ぶらん

中院入道一品

鶯の鳴きて出でてつる谷かげに猶時知らて残る山人

文 貞 公

○詩經曰伐木丁々鳥鳴嚶々、出レ自二幽谷一遷三于喬木一○朗詠曰鷓鴣鳴々忠臣待レ且、鶯未レ出分遺賢在レ谷○金葉集に顯季、鶯の鳴くにつけてやまがねふく吉備の山人春を知るらん

○古今集 折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯の鳴く

○枕草子 こゝにのみ珍らしと見る雪の山所々のつぼにける哉○續拾遺冬に台盤所のつぼに雪の山作られて侍りける朝よめる周防内侍あだにかみつもりし雪の如何にして雲居にかゝる山となりけん

○拾遺愚草員外、いかならんたえて櫻の世なりとも曙霞む春の心は

〔増〕 なにはとは難波門なり萬葉二十に「奈爾波刀を漕ぎ出て見れば神さる伊駒高嶺に雲ぞたなびく」宗尊親王御集「伊駒山花咲きぬらし難波門を漕ぎ出て見ればかゝる白雲」

○關城書裏書云、元弘二年三月八日尊良親王遷三土佐國一

○太平記云、三月八日一の宮中務卿親王をば佐々木時信を路次の御警固にて土佐の如へ流し奉る武士ども参りて中門に御輿を寄せたれば御涙の中へせきとむるしがらみぞ御涙の川いかに流るゝうき身なるらん○新古今戀一に攝政太政大臣、梶を絶え由良の湊に寄る船のたよりも知らぬ沖つ潮風

うれへあれば聞くこと厭ふ我身とも知らでやこゝに鶯の鳴く

元弘二年百首歌よみ侍りける中にここの春内裏にて雪の

山作られて御遊アソビなどありし事を思ひ出で、春雪をよめる

百敷や都のふじと見し雪のやまず戀しき春の面影

建武二年内裏千首歌に題を賜はりてよみて奉りけるに春天象を

正三位 國夏

なにはとの曙霞むおきつ浪漕ぎ出る船のゆくへ知らずも

土佐國にて百首歌よみ侍りける中に海邊霞を

中務卿尊良親王

春霞かすむ浪路は隔つとも便り知らせよ八重の潮風

うへのをのこども年中行事を題にて三百六十首歌

〔増〕「あがた」は縣なり田舎の義なり古今集雜下に文屋康秀が三河のぞうになりてあがた見にはえ出で立たじやと言ひやれりける云々土佐日記に或人あがたの四とせ五とせはてゝ例の事ども皆しをへたとあるは土佐の任國をさして「あがた」と云へり公事根源に正月十一日縣召除目外官をむねと任ぜらるゝなりとあり外官とは諸國の司、即ち地方官の事なり〔増〕外記は太政官中の官なり職原抄に太政官中有三局「左右辨官、外記、是也」とあり

○古今集序 難波津に咲くや此花冬ごもり今は春べと咲くや此花

○新後撰戀六に寂超法師、昔見し古野の澤の忘れ水何今更に思ひ出づらん

○新千載雜上に爲世、聞きおきし言の葉ごとに忘れぬは庭の教への秋の白露

よみ侍りけるついでに縣召除目と云ふことをよま

せ給うける

後村上院御製

縣見に出で立つ人のいかなれば名國共にと今年かふらん

外記政始

前大納言實爲

雲の上をささまる春のまつりごと出で立つ庭にまづ知られつゝ

題知らず

權中納言經高母

蘆火たき冬籠りせし難波女も今は春べと磯菜つむなり

若菜をよみ侍りける

妙光寺内大臣

わが身はや古野の澤の忘れ水思ひ出無しに若菜をぞつむ

日前宮によみて奉りける五十首歌中に

前大納言爲忠

いかにせん教ふる庭にまだ咲かぬ若木の梅の花の遅さを

○續古今哀傷に光明峰寺攝政、ねをぞ泣くやよひの花の枯れしより教への庭にあとを眺めて、類書纂要云家訓曰二庭訓一

○畠山匠作亭十二月會に雅永、山ざくら今ぞ開くる枝かはす柳の眉も花の心も○宋雅千首 春のくる道のしるべに我門の柳の眉もはや開けなむ

○師兼千首 身の春よいつとか待たん我門に代々經しものを青柳の糸

○萬葉第一 うぢま山朝風寒し旅にして衣かすべき妹もあらなくに

○草庵集 山越ゆる程も知られず霞む夜の有明の月に歸るかりがね

○師兼千首 歸るべき時とは誰にならひてか來る春ごとに雁の行くらん○玉葉春上に大納言資季、古里に今か待つらん歸るさの時を忘れぬ春のかりがね

望む事かなひ侍りける頃よめる

度會朝英

君が代の春にあはずば青柳の糸かく眉は開けざらまし

正平八年内裏千首歌中に門柳を

冷泉入道前右大臣

いかにして春をも知らぬ我門にうゑし柳は蔭靡くらん

住吉社三百六十番歌合に

春宮大夫師兼

春も猶朝風寒みうぢま山霞の衣かりぞ鳴くなり

曉歸鴈を

嘉喜門院大藏卿

きぬくの別れもかくや慕はれん有明の月に歸る鴈がね

歸鴈知春と云へる心を

前大納言實清

歸るべき時來ぬとてや故郷に雲居の鴈も春は行くらん

○雁に玉章をよむ事は古今集にたが玉づさをかけて來つらんとよめるや始めならん、もろこしの蘇武が故事より出でしにや

○李花集云興國三年越中に住み侍りし頃歸雁を聞きて○二の句の「を」は「ぬれてを行かん」見てをゆくらんなどの「を」に同じく休め辭に置きたるなり

○陵墓一隅鈔曰吉野山麓塔尾陵在二大和國吉野郡吉野町之東、如意輪寺後山一

○太平記曰延元三年八月十六日丑刻崩御、奉_レ葬_二吉野山ノ麓、藏_二王堂ノ良林ノ奥、延元三年北朝曆應二年也時御年五十二○今按山陵在_二子如意輪寺ノ後_一圓丘方十餘丈拱木叢生寂々傷_レ心

〔増〕此集哀傷部に次の年の春塔尾の御陵に詣て給はんとて彼山に登らせ給ひけるに藏王堂を始めてさならぬ坊舎ども、皆煙となりにけれど云々とあり

○拾玉集 よそに見てなぐさみやせむ山ざくらまだしき程の臺の白雲

元弘二年の春假初に侍りける所にてよみ侍りける

歌の中に歸鷹を

文 貞 公

歸る鷹同じ都の程だにもわが玉づさを君につてなむ

こしの國に住み侍りける頃歸る鷹の鳴くを聞きて

よめる

よみ人しらず

李花集
同じくは散るまでを見て歸る鷹花の都の事語らなむ

正平七年二月の十日あまり吉野にまうで、塔尾の御陵

など見奉りけるに花はまだ咲かぬ頃にてよろづ物あは

れにおぼえければ思ひ續け侍りける 祥子内親王

咲く花の散る別れには遭はじとてまだしき程を尋ねてぞ見る

題知らず

參 議 仲 盛

咲きそめて後こそあらめ待つ程は花にもまがへ峯の白雲

○續古今雜下に右近大將通忠、一筋に人やはつらき世の中のうきにつけては身をぞ恨むる

○新續古今春下に小宰相、世を厭ふ心ながらも住みぬべし花のさかりの三吉野の奥

○續古今雜上に爲家、古への犬内山の櫻花おもかげならで見ぬぞ悲しき

○古今戀五に小町、色見えて移るふものは世の中の人の心の花にぞありける

述懷百首歌よみ侍りける中に

關白左大臣

おのづから慰むやとて世の中の憂につけても花ぞ待たるゝ

大嶺修行して又の年の春花の歌よみ侍りける中に

二品法親王仁譽

いざさらば花を便りに尋ね見ん又と頼めし三吉野の奥

花百首歌よみ侍りける中に

民部卿光資

もゝしきや大内山の櫻花咲きてや君の御行待つらん

花の歌の中に

中院入道一品

咲きそむる花に知らせじ世の中の人の心の移り易さを

千首歌めされしついでに花挿頭と云ふことをよま

せ給うける

御製

○新古今春下に赤人、も、しきの大
宮人はいとまあれや櫻かざして今日
も暮しつ

○花山院は文貞公の家なり○前漢書
曰元鳳四年正月昭帝加三元服、師古云
元首也、冠者首之所_レ着、故曰三元服、

○拾遺集賀に能宣、ゆひそむる初も
とゆひのこむらさき衣の色にうつれ
とぞ思ふ○元服の時の髪は紫の組糸
にてゆふなりこれを初もとゆひと云
ふ

○大日本史曰延元四年三月還吉野立
爲皇太子、新葉和歌集月日闕、然據
僧頼意和歌、蓋在是月也○帝皇略
譜云延元四年八月九日立太子

○類題集に行宗、花の色鳥の聲をば
さておきつ老ぬる身をば誰か惜しま
ん

〔増〕續千載春上に九條左大臣女、
吹き迷ふよその梢の梅が香に我袖匂
ふ春の夕風

治らぬ世の人言の繁ければ櫻かざして暮す日も無し

建武の頃花山院を内裏になされて侍りける時御元
服ありし事などおぼしめし出で、よませ給うける

後村上院御製

花山の初もとゆひの春の庭わがたち舞ひし昔戀ひつゝ

延元四年吉野の行宮にて後村上院立坊ありし頃よ

み侍りける

前大僧正頼意

花の色鳥の聲まで時にあふ春の宮居ぞ光りことなる

中納言に侍りける時文章博士を兼ねて準備の宣旨
をかうふりける頃家に花五十首歌よみ侍りけるに

林花と云ふことを

右近大將長親

櫻雲記
思ひきや筆の林の花の香を我袖にさへうつすべしとは

○風雅雜下に院御歌、言の葉に色は無けれど思ひやる心を添へてあはれとや見る

〔増〕風雅雜下に伏見院、あだし色に心はそめじ山風におつる紅葉の程も無き世に、新續古今雜中に覺譽法親王、遁れ來て人目を厭ふ心にもあまりさびしき山の奥哉

○新古今春上 いそのかみ古き都を來て見れば昔かざし、花さきにけり

○五百番歌合に八十七番、左公長、吉野川岩こす浪も早き瀬にしがらみかけて咲ける山吹○右勝頼意なれきつる八十の春も云々○判者、吉野川しがらみかけて花も咲く三代の昔の影やとまると

○新續古今雜上に大納言實躬、忘れめや六代に仕へて春ごとになれし雲居の花の面影

天授三年の春千首歌よみて奉りし包帯に花をさし

加へて

中務卿宗良親王

一枝の花をぞ添へて奉る此言の葉に色の無ければ

千首歌よみ侍りける中に山家花

權中納言經高母

あだし世の色にそまじと遁れ來て身を奥山の花の下庵

題しらず

法印行祐

いそのかみ古き都に咲く花は昔の春や思ひ出づらん

五百番歌合に

前大僧正頼意

なれ來つる八十の春もあはれ知れ三代の昔の花の面影

前大納言光有

思ひきや三代に仕へて吉野山雲居の花に猶なれんとは

○五百番歌合に六十六番、左勝光有、思ひきや三代に仕へて云々○右太宰帥親王、咲きぬとはよそにもしるく匂ふなりかつらぎ山の花の下風○判者、あはれなり三代に仕へて三吉野の雲居の花に飽かぬ心は○同歌合に關白、吉野山名もかひありて三代までの御幸かさなる花の白雲○三代は後醍醐天皇後村上天皇後龜山天皇三帝を申奉るなり

○嘉喜門院御集云天授二年やよひの始つ方如意輪に御こもりありし頃御影堂の前の花につけて内の御方へ奉られける云々

〔増〕 新續古今雜上に大僧正賢俊、飽かずして別れ、袖の花染に心をかへぬ夏衣哉、續古今雜上に權律師仙覺、面影のうつらぬ時も無かりけり心や花の鏡なるらん

〔増〕 新後撰春下に家隆、久方の光りのどかに櫻花散らてぞ匂ふ春の山風

○續拾遺雜春に天台座主公豪、かりがねは秋と契りて歸るとも老の命をいかが頼まん

題しらす

幸子内親王

今も猶變らぬ花の色見てぞなれし雲居の春は戀しき

花の頃嘉喜門院入内ありしに急ぐ事ありとてたび

く〜とどめ申されしかどやがて還御ありける又の

日花を一枝奉らせ給ひけるついでに 御 製

嘉喜門院御集 惜しむにも依らぬ別れはうきものと君故花や思ひ知りけむ

御かへし

嘉喜門院

同

よめおきし御集

飽かずして別れしまゝにとどめおきし心や花を誘ひ來ぬらん

題知らず

源 頼 爲

いかばかり花には風の待たれまし散らてし匂ふ習ひなりせば

從三位朝棟

明日知らぬ老の命にくらぶれば花は頼みのある日數哉

○古今雜下に深養父、光り無き谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思ひも無し

〔増〕此集春下に嘉喜門院、さくら花咲きてとく散るならひこそ我身の春の物思ひなれ

○玉葉春上に太宰大貳高遠、獨のみ眺むる宿の春の日はさも暮れ難きものにぞありける

○新古今戀一 みるめ苅る方や何處ぞ棹さして吾に教へよあまのつり舟

〔増〕續古今雜下に俊頼、古への面影をさへさしそへて忍び難くもすめる月哉、新勅撰春下に國信、花咲かぬ外山の谷の里人に問はばや春をいかと暮すと

○古今戀五、伊勢物語、月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

花だにも咲きてとく散る山里に惜まれぬ身の猶や残らん

滋野宗興

前大納言光任

暮れ難き春の日數もわきて猶爲す事も無き身に知られつゝ

望む事侍りける頃雲雀をよめる

源頼武朝臣

道知らば吾に教へよ夕雲雀やすくもあがる雲の上哉

權大納言時經

春月の心を

古への面影かよふ雲の上の月に見し世の春を問はゞや

權中納言經高

霞めたゞ春や昔の形見とて見れば涙の古里の月

荒木田季長

○新千載雜上に雅孝、我袖に老の涙のかゝらずば霞むばかりの月は見えてまし

○古今雜上 世の中にふりぬるものは津の國のながらの橋と吾となりけり

○續古今雜中に前太政大臣、世をてらす月日の光り見るたびに曇らじと思ふ心こそつ

○堀河院百首に紀伊、賤のをが苗代水もひき、詔詞に己が心の比岐々々ありヒキとは今云ふヒイキなり新勅撰雜二に後京極攝政、さてもきはすまはすむべき世の中に人の心の濁りはてぬる

〔拾〕續拾遺神祇に正三位知家「そのかみやふりまざるら男山代々の御幸の跡を重ねて」男山は山城國綴喜郡木津川の南岸に在り川を隔て、天王山と相對し京師の關門をなす山上に官幣大社男山八幡宮あり一に石清水八幡宮と云ふ歴代皇室の尊信篤く天下の大事あることに必ず祭式を執行せらる

○拾芥抄云縣井戸一條北東洞院西角蛙鳴く縣の井戸の山吹の花

我袖に涙も何時か春の夜の霞むを月のならひと見ん

前中納言爲忠

世の中に光り無くてもすむものは霞める月と吾となりけり

前大納言守房

霞む夜の月を見るにも曇らじと思ふ心を猶磨きつゝ

春の歌の中に 中院入道一品

小山田の苗代水のひきくゝに人の心の濁る世ぞ憂き

男山昔の御幸思ふにもかざし、花の春ぞ忘れぬ

百首歌よみ侍りける中に山吹を

妙光寺内大臣家中納言

山吹の花もてはやす人も無し縣アガタの井戸は都ならねば

題知らず 祥子内親王

○千載集春下に源仲綱、身のうさも花見し程は忘れき春の別れを歎くのみかは

〔増〕 やよひの末頃までも生存するや否やおぼつかなく思ふ身の上ならば今年のみは春に暮はれんとなり

○後撰雜一に行平、翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞ鶴も鳴くなる〔増〕 此集離別に御製、忘るなよ木曾の麻衣やつるとも同じ吉野の花染の袖

○更衣の御歌と作者同じければこゝの御名は削るべき歟又尊良親王の誤りか○長秋詠藻山がつの垣ほあたり宿る哉世をうの花のさかりなる頃

○此集哀傷部に後醍醐天皇かくれさせ給ひて後御硯のなかり葵に二葉變らぬ同じかざしはなど書かせ給ひて入られたりけるを御覽じて新待賢門院かれつゝも二葉變らぬ云々とあり、もろかつらは二葉葵の事なり

程も無き月日を添へて歎く哉くれゆく春を慕ふのみかは

元弘二年の春百首歌よみ侍りける中にくるゝ春の

心を

文 貞 公

惜みこし春にや今年暮はれん三月ヤヨヒの末も待たぬ身ならば

千首歌奉りし時惜更衣と云へることを

中務卿宗良親王

かへずとも人な咎めそ翁さび今年ばかりの花染の袖

百首歌中に卯花似月

中務卿宗良親王

よしさらば月と見つるになぐさめん世は卯の花の籬なりとも

題知らず

後醍醐天皇御製

年を経てあはれとぞ見るもろ葛カッラ二葉變らぬ同じかざしはひきかけし契り變らて葵草同じかざしの末ぞ遙けき

○狭衣物語 よそにやは思ひなるべきもろかつら同じかざしはさしも離れず○拾遺集雜下に爲頼、盗人の立田の山に入りけり同じかざしの名にやけがれん

○古今集夏 今朝來鳴きいまだ旅なる郭公花橋に宿はからなむ

○續古今雜上に爲家、古へを思ひ出づれば郭公雲居遙にねこそなかるれ

○古今集旅に業平、名にしおはゞいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありや無しやと

○同集雜下、世のうきめ見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれ

〔增〕 詞花集雜下に賢智法師、涙川其水上を尋ぬれば世のうきめより出づるなりけり此集春下に嘉喜門院

あらし吹き花散る頃は世のうきめ見えぬ山路もかひ無かりけり

○五月雨の御歌に信濃國伊那と申す處に侍りし頃とあれは此御製も伊那

大原と云ふ深山にもおはしましたればいづれとも知り難し○古今集夏

やよや待て山郭公言づてむわれ世の中すみわびぬとよ

○鳴きても告ぐなどは鳴而勿告曾の意なるべし〔增〕新後拾遺雜下に西行世の中を背きはてぬと言ひ置かん思

ひ知るべき人は無くととも

郭公共に語らへ都出て、いまだ旅なる友と聞くまで
二品法親王聖尊

中院入道 一品

忘れずばいざ語らはん時鳥雲居になれし代々の昔を

古き歌の言葉を探りてよみ侍りける歌の中にいざ

言問はんと云ふことを
前中納言爲忠

時鳥いざ言問はん世のうきめ見えぬ山路をなどか出でしと

中務卿宗良親王世を逃れて後、信濃國に侍りし頃

賜はせ侍りし
御 製

郭公そなたの空に通ふならばやよや待てとて言づてましを

御かへし
中務卿宗良親王

今更に鳴きても告ぐな時鳥われ世の中を背く身なれば

○新續古今夏に權大納言爲遠、立寄りて中々今やうつさまし袖ふれざりし軒の橋

〔増〕續千載雜中に逃懷の心を法印榮算、徒らにすぐる月日は早瀬川老の浪にぞしがらみは無き

○新勅撰夏に前太政大臣、幾千代と岩垣沼のあやめ草長きためしに今日や引かれん○續拾遺夏に太上天皇、あやめ草いつの五月に引きそめて長きためしの根をもかくらん

○萬葉第二 橋の蔭ふむ道のやちまたに物をぞ思ふ妹に逢はずて

〔増〕「立てられける頃」原本たてまつられける頃とあり松井本に依りて訂正す

百首歌よみ侍りける中に

冷泉入道前右大臣

つひにわが袖ふれざりし橋の木末をならす霍公鳥哉

題しらず

從三位俊文

君が代に我身古江のあやめ草老の浪にぞ長き根を引く

妙光寺内大臣右大將に侍りける時五月五日さうぶ

の根につけて賜はせける

後村上院御製

袖ふるゝ花橋のをりを得てかざすあやめは長きためしぞ

御かへし

妙光寺内大臣

橋の蔭ふむ今日のあやめ草長きためしの恵みをぞ知る

吉野の行宮にて五月雨晴間無かりける頃雨師の社

へ止雨の奉幣使など立てられける頃おぼしめし續

けさせ給うける

後醍醐天皇御製

○大和吉野郡丹生川上神社を三代實
録文德實錄などに丹生川上雨師社と
あり新儀式云八九月ノ間淫雨不霽
必有_三祈_三舞_三之事云々仁明天皇紀曰承
和七年十月奉授丹生川上雨神社正五
位上

○新千載夏に僧正公朝、淵は瀬に變
ると開きし飛鳥川たが偽りぞ五月雨
の頃

〔増〕新拾遺旅に家隆、立田山夕越
えくれに大伴の御津の泊りに舟や待
つらん

○後撰雜一に行平、嵯峨の山御幸絶
えにし芹川の千代の古道跡は有りけ
り○新續古今夏に後小松院は御幸せ
し千代の古道跡とちて只徒らに茂る
夏草

○古今集雜上 老らくのこんと知り
せば門さして無しと答へて逢はざら
ましを

○公事根源云供醴酒一夜酒とは今日
作れば明日は供するなり一夜を隔つ
る竹葉の酒なれば一夜酒と申す也此
酒は造酒司六月一日より七月卅日ま
で日毎に奉る也應神天皇の御時より
始まる云々

こゝはなほ丹生の社に櫻雲記

此里は丹生の川上程近し祈らば晴れよ五月雨の空

百首歌中に五月雨を

中務卿尊良親王

さらば身のうき瀬も變る飛鳥川涙加はる五月雨の頃

正平二十年内裏七百首歌中に舟中五月雨を

妙光寺内大臣

日數ふる御津の泊の五月雨に月待ち戀ひてあかす舟人

夏の歌の中に

冷泉入道前右大臣

夏草のことしげかりし嵯峨の山思ひぞ出づる千代の古道

中務卿宗良親王

老らくの道は外にもあるものをうたて門さす八重葎哉

年中行事百首歌中に獻醴酒と云ふことをよませ給

うける

後村上院御製

○古今集 夏の夜の臥すかとすれば
郭公鳴く一聲にあくるしのゝめ○新
後拾遺雜上に淨阿、老が身の寢覺の
後や曉のゆふつけ鳥も八聲鳴くらん

○五百番歌合に百四十番左勝、女房、
集めては國の光りと云々○右實爲、
水の面にもゆる澤邊の螢哉何にけつ
べき思ひなるらん○判者、かすかな
る澤の螢も集むれば國の光りとなり
けるものを

○晋書曰車胤字武子南平人、恭勤不
倦、博覽多通、家貧不常得油、夏
月則練囊盛數十螢火以照書以
夜繼日
〔增〕さまかへてとは尼の姿になり
給ひてなり

○夫木に兼宗、五月雨はまやのかや
ぶき軒朽ちて集めぬ窓も螢飛びかふ

いかにして一夜ばかりの竹の葉にみきと云ふ名を残しそめけん

夏夜と云ふことを

御製

一聲にあくる夜ならば曉のゆふつけ鳥はいかゞ鳴くらん

五百番歌合に

集めては國の光りとなりやせん我窓照らす夜半の螢は

關白家三百番歌合に螢過窓と云ふことを

前内大臣顯

集めしも今は昔の我窓を猶すぎがてに飛ぶ螢哉

さまかへて後螢を見てよめる

祥子内親王

集めねど寝ぬ夜の窓に飛ぶ螢心を照らす光りともがな

夏雜物と云ふことをよめる

從三位行子

燈火の影は残りてあくる夜の窓に消ゆるは螢なりけり

○續古今戀四に前太政大臣、なきくらす涙の露も空しくて身をうつせみのあるかひも無し

○夫木十に前太政大臣、かきつくる梶の七葉に思ふ事猶あまりある秋の夕暮〔増〕新勅撰秋上に家隆、草の上の露とる今朝の玉づきに軒端のかぢのもとつ葉も無し

○白氏長慶集長恨歌、七月七日長生殿、夜半無_レ人私語時、在_レ天願作_二比翼鳥_一、在_レ地願爲_二連理枝_一

〔増〕新拾遺雜下に信實、墨染の袖のちしほにまとはるゝ我身もて心の花の色や何ぞも

土佐國にて百首歌よみ侍りけるに杜蟬を

中務卿宗良親王

せめてげに杜の空蟬諸聲に鳴きてもかひのある世なりせば

下つふさの國にて七夕七首歌よみ侍りける中に

文 貞 公

背く身は梶の七葉も書き絶えて今日手に取りぬ草の上の露
棚機に今日こそ獨りかこつらめはねを並べし古き契りを

萩移袖と云ふことを

二品法親王仁譽

秋萩の花には摺らじ墨染の今一しほと思ふ袂を

秋の歌の中に

京極贈左大臣

うれへある老の袂の露けさは昔にまさる秋の夕暮

松間月を

二品法親王深勝

○新拾遺旅に宜秋門院丹後、松が根の枕に庵の聲はして木の間の月を袖に見る哉

〔増〕 光明臺院入道の下の前の字諸本に無し松井本に依りて補ふ

〔増〕 續拾遺秋下に前内大臣、獨り住む門田の庵の月影にわがいねがてを訪ふ人も無し

○新續古今旅に度會行忠、旅衣裾野の尾花露わけて袖に亂るゝ月の影哉
○公事根源云釋奠これは年に二度二月と八月に上の丁の日に大學寮にて孔子並に十哲の像を祀らる文武天皇の大寶元年二月に始まり釋も奠も物を置く義なり禮記の王制に菜を釋き幣を奠きて先師を禮すとあり此故に釋奠と云ふ

〔増〕 昔の影をうつすとは孔子の肖像を畫くなり萬葉第十九にから人も舟を浮べて遊ぶ云々これは曲水宴なり新千載賀に、萬代も色は變らじ此君と仰げば高き園の吳竹

松陰を便りにすめる山人は何時も木の間の月や見るらん

山家月をよめる

光明臺院入道前關白左大臣

山陰に庵を何か結びげん月待つ宵は任みうきものを

題しらず

治部卿經方

獨住む深山がくれの柴の庵に秋を重ねて見つる月哉

簷月をよみ侍りける

右近大將長親母

影しあればさながら袖に亂れけり月もる軒の忍ぶもぢぢり

年中行事三百六十首歌中に釋奠を

妙光寺内大臣

から人の昔のかげをうつし來て仰げば高き秋の夜の月

同じき百首御歌中に牽^{ヒッ}穂坂御馬と云ふことを

よませ給うける

後村上院御製

○年中行事歌合に甲斐の駒引の時來ぬと民も賑ふ秋の田の穂坂の駒引、時來りぞ引ける駒を引來たるを左近少將を日貢上として逢坂にて迎ふるを駒迎と勅使として逢坂の兩牧より三十疋、七日前、眞衣の六疋、貢るなり、駒引とも云へり甲斐國より八月、坂より三十疋合せて六十疋、御馬廿疋、望月には信濃望月の公事根源云廿三日には信濃望月の御馬拾遺集に貫之逢坂の關の清水場に見えて今や引くらん望月の駒、堀河院百首に國信、逢坂の關の駒むら葉を茂み絶間に見ゆる望月の駒むら夜者、天至滯月、至明之時也、故古之玩月多在、此宵。

〔増〕皇后宮を漢名に長秋宮と云ふより秋の宮居とも言ひ新秋上、の深山にかけても言へり頃禁中月と云ふに中宮權亮に侍りける頃禁中月と云ふに九重の秋の宮居なる、月影、千載宮上の御方へよみて奉らせり、永福門院の御方へよみて奉らせり、○禁秘抄の御持僧事於、僧侶無二、撰也古抄曰、御持僧三人、次、二、大、七、人云々、みかど、大御身及、國家を護持し奉る僧職なり、延暦十六年、最澄はじめに補せらる新後撰雜下、御持僧に於ては、二間に侍りける、禪助の天の下に、千代に八千代と祈、そよむの昔に、髪長ざりけれよ、禁秘抄の東寺一長者多候、夜居、山寺、各一人必可候、源氏物語によるの加

秋の田の穂坂の駒を引つれて治れる代のかひもある哉

信濃國に住み侍りし頃駒迎の心を

中務卿宗良親王

都へと急ぐを聞けば秋を経て雲居に待ちし望月の駒

嘉喜門院女御と申しける頃八月十五夜家に十五番歌

合し侍りける時禁中月と云ふことをよみ侍りける

福恩寺前關白内大臣

同じくは秋の宮居にすみのぼる光りを添へよ雲の上の月

護持僧に加はりて後八月十五夜月を見てよみ侍りける

二品法親王仁譽

我名をも君の光りにあらはして今夜のよゐの月ぞさやけき

題知らず

遍照光院入道前太政大臣

持の僧とある是なり
 ○千載夏に崇徳院、さみだれに花橘
 のかをる夜は月すむ秋もさもあらば
 あれ○さもあらばあれ和訓采曰遮莫
 又総他任他をよめりかくあるべきを
 さも無くてせん方無ければよしや此
 上はと一任する意なり〔増〕ソレハド
 ウアラウトモカマハヌと云ふ意なり
 新古今雜上に、大納言經信さもあら
 ばあれ暮れゆく春も雲の上に散る事
 知らぬ花し句は

○萬葉第三に人麿、ものゝふのやそ
 うち川のおじる木にいさよふ浪のゆ
 くへ知らずも

○千載集賀に俊頼、おちたぎつやそ
 うち川の早き瀬に岩越す浪は千代の
 數かも

○續拾遺雜上に權律師定爲、和歌の
 浦の浪の下草いかにして月に知らる
 の名を殘さまし〔増〕續後拾遺雜中に
 法印隆洲、身はかく埋もれぬるを
 敷嶋の道にぞ世々の跡は見えける

〔増〕新古今雜上に藤原業清、山の
 はを出てゝも松の木の間より心盡し
 の有明の月

○五百番歌合に二百十四番左勝、前
 關白、宿るとて月は知るらん云々
 右成直なには江や蘆の下をれ茂けれ
 ど宿れる月の影はさほらざ○判者い
 づくにも月は宿れど袖の上の涙をわ
 きてあはれとぞ見る

大方の月だに空に曇らずば我身の秋よさもあらばあれ

入道前關白左大臣

住みわぶる世は宇治川の網代木にいさよふ月も影ふけにけり

中務卿尊良親王

かくばかり世は宇治川の早き瀬にしほしも月のいかですむらん

身はかくて沈みはつとも和歌の浦に名をだに照らせ秋の夜の月

前中納言爲忠

和歌の浦や松の木の間の夜半の月心盡さて身を照らさばや

五百番歌合に

入道前關白左大臣

宿るとて月は知るらん我袖に昔を忍ぶ涙ありとは

正平二十年内裏四季歌合に

前左近大將公冬

○續後拾遺春上に爲道、さくら花さ
きぬと見えてよし野山ありしにもあ
らぬ雲ぞかゝれる

〔増〕源氏物語東屋、里の名も昔な
がらに見し人の面變りせる聞の月影
此集雜下に御製、松に吹く風は昔の
秋ながらなればの月や面變りせし

○新拾遺戀三、忘れずよ今はと言ひ
しきぬくの面影殘す有明の月

○玉葉雜一に近衛太皇后宮、知らざ
りきうき身ながらにめぐり來て同じ
雲居の月を見むとは

〔増〕續古今戀五に新院少將内侍、
契りあらば又も結ばん山の井のあか
てわかれし影な忘れそ

○古今雜上、伊勢物語、老いぬればさ
らぬ別のありと云へばいよく見ま
くほしき君哉

〔増〕ありあけを原本に晨明と書け
りこれを「朝あけ」とせる本は誤れ
り「さらぬ別のあり」と云ひかけた
る歌なり

ありしにもあらぬうき身の秋の空面變りして月や見るらん

春宮にて人々五十番歌合し侍りける時

權中納言經高母

忘れぬ雲居の秋の昔まで面影さそふ夜半の月哉

題しらず

中務卿尊良親王

めぐりあひて同じ雲居に眺めばや飽かて別れし九重の月

百首歌よみ侍りける中に月を

右近大將長親母

世に住めばさらぬ別れの有明にいよく惜しき月の影哉

元弘元年八月俄に比叡山に行幸なりぬとて彼山に

のぼりたるけるに湖上の有明ことにおもしろく侍

りければ

文 貞 公

○増鏡云坂本には行幸を待ち聞え給ひけるに引違へ南さまへおはしましぬればそのよし衆徒に聞かれなば悪しかりぬべし云々大納言は都へまぎれおはすとて夜深く志賀の浦をすぎ給ふに返る浪の音もきくすみわたりしに思ふ事無くてぞ云々千載集旅よきの海の天のはしだて都なりせば

〔増〕新古今秋下に大井川にまかりぞ紅葉見侍りけるに思ふ事無くてならざば

〔増〕新綴古今秋上に大納言伊平きりんす老の寝覺をあはれとや枕の下に鳴き弱るらん

○公事根源云御燈三月三日九月三日これは天子の北斗に燈明を奉り給ふなり昔は北山靈岩寺にて高き峯に火をともして北辰に供せられけるよし一條院御記などに見えたり

〔増〕古今集秋上、物ごとく秋ぞ悲しきもみちつらうつろひゆくを限りと思へば、續後拾遺雜中かくてしる身をば何時まで小倉山老の命のありてうき世に

増鏡
思ふ事無くてぞ見ましほのくと有明の月の志賀の浦浪

同じ頃の事にやありけん或野原の中にて夜をあか

しけるに秋の末つ方なれば虫の聲々きほひ鳴くを

聞きて思ひ續け侍りける

古へは露わけわびし虫のねを尋ねぬ草の枕にぞ聞く

題知らず

前大納言定平

あはれなり八十あまりの老が身に涙を添へて弱る虫のね

年中行事百首御歌中に御燈を

後村上院御製

長月や今日みか月も光り添へて星にたむくる夜半の燈火

題知らず

平惟材朝臣

物ごとの秋のあはれぞまさりける老の命の長月の空

○拾遺集哀傷に天曆御製、時ならて
柞の紅葉散りにけりいかに木のもと
さびしかるらん
〔増〕初句、松井本には「かげかは
る」とあり

○續千載旅に前太政大臣、旅衣かさ
なる袖の露しぐれ昨日もほさず今日
もかわかず

○新續古今秋下に寂蓮、くれてゆく
秋のなごりも山のはに月と共にや有
明の空

○詩經云葦葭蒼々白露爲霜○續拾
遺冬に爲教女、色見えぬ枯野の草の
跡までも露のなごりと結ぶ初霜

〔増〕我身朽ちぬとは徒らに年老い
たる意なり拾遺集雜春に躬恒いたづ
らに老いぬべらなり大荒木の杜の下
なる草葉ならねど

思ひの外なる處に侍りける時從三位師子いたう思

ひ歎くよしを聞きてよめる

文 貞 公

かげよわる柞ハハの紅葉いかならん木の下道のあれはてしより

題知らず

後醍醐天皇御製

秋ごとのならひと思ひし露時雨今年は袖の上にぞありける

吉田前内大臣

くれてゆく今日の名残も惜まれずさも憂かりつる秋ぞと思へば

紀 淑 俊

浅茅生の露の名残もまだひぬにはや置かふる庭の初霜

百首歌中に谷落葉を

中務卿尊良親王

谷陰につもる木の葉のそれならで我身朽ちぬと歎く頃哉

正平二十年内裏七百首歌に杜時雨

妙光寺内大臣

○大和物語に監命婦、柏木の杜の下草老いぬとも身をいたづらになさずもあらなむ

○増鏡云中務の宮は正成がもとにおはしましつれどみかどのかくならせ給ひぬれば今はかひなしとて云々

○増鏡云十月三日都へ入らせ給ふと思ひしに變りていとすさまじげなる武士ども御輿近く打圍みたり云々

○梅松論云君いまだ六波羅に御座の時板屋に時雨のはら／＼と過ぎけるをきこしめして一住み慣れぬ板屋の軒の云々

○増鏡云「あだなるは、はかなき意、後拾遺冬に能宣、霜がれの草の戸ざしはあだなれどなべての人を入るゝものかは終句原本に「結ぶばかりは」とあり松井本に依りて訂正す

○李白詩云沈憂能傷人、緣髮成霜蓬

○續後拾遺雜下に前攝政左大臣、蓬の霜の蓬は、霜の影衰へまさる霜の蓬は

○増鏡云「年を経ていたゞく霜とは、年老いて白髮の多く交れる意、堀河院百首に仲實、年ふればわがいたゞきに置く霜を草葉の上と何思ひけん、すさまじくは物凄く荒涼なる意、玉葉集冬に西行、冬枯のすさまじげなる山里に月のすむこそあはれ也けれ

かしは木の森の梢の夕時雨身を徒らにふるさずもがな

元弘元年百首歌よみ侍りける中に

中務卿尊良親王

世のうさを空にも知るや神無月ことわり過ぎてふる時雨哉

題しらず

後醍醐天皇御製

まだ慣れぬ板屋の軒の村時雨音を聞くにも濡るゝ袖哉

よな／＼のなぐさめなりし月だにも待ち遠になる夕暮の空

寒庭霜と云へる心をよみ侍りける

遍照光院入道前太政大臣

庭はあれてあだなる草の戸ざし哉よな／＼霜の結ぶばかりに

題しらず

冷泉入道前右大臣

年を経ていたゞく霜の蓬生に影すさまじくふくる月哉

〔增〕板屋の軒は粗造なる板圍ひの小舎なるべし新續古今冬に大納言經繼、川風にふけゆく月の影さえて霜夜の千鳥空に鳴くなり

〔增〕續千載雜下に前左大臣、昔をば思ひ出づやと古里の軒もる月に言や問はまし

○新後撰冬に前關白、見しまゝに思ひやりてぞ忍ばるゝ豊のあかりの月の面影

○續拾遺雜上に藤原泰朝、和歌の浦に昔を忍ぶ濱千鳥跡思ふとてねをのみぞ鳴く

○玉葉雜一に前關白、其名のみ形見の浦の友千鳥跡を忍ばぬ時のまも無し

中務卿尊良親王

住みなれぬ板屋の軒のひまもりて霜夜の月の影ぞ寒けき

土佐國にて百首歌よみ侍りける中に冬月

わが庵は土佐の山風さゆる夜に軒もる月も影氷るなり

百首歌中に

文 貞 公

夢ならて又やは見んと悲しきは春のあかりの夜半の月影

正平八年内裏千首歌中に

冷泉入道前右大臣

忍ばるゝ昔の和歌の浦千鳥跡は變らぬねをも聞く哉

冬歌の中に

權中納言經高母

思ひ出て誰か形見の濱千鳥これぞ昔の跡とだに見む

花山院贈太政大臣百首歌よみて贈りたりける返事

に 中務卿尊良親王

○新續古今冬に多々良持世、さらでだにほさぬ袖師の浦千鳥いかにせよとて寢覺とふらん

○拾遺戀四に右近が「忘らるゝ身をば思はず」と言へるは誓言立てし男の命を惜めるにて、いとあはれなるに、天皇の埋もるゝ御身をば歎かせ給はず天の下の曇るを歎きおぼしめしける御述懐のほど、いとかしこしともたふとし此二首は吉野にての御製なるべし

○夫木十九に俊成、空にたつうれへの雲のかさなりて冬の雪ともつもるなりけり

○後柏原院御集 訪ふ人をたのめおかねど今朝のまの雪にもあとや猶待たるらん

戀しさも如何にせよとて和歌の浦になれし千鳥の跡を見すらん

かへし

文 貞 公

君だにも戀ふなる和歌の友千鳥如何にねを鳴く恨みとか知る

題しらず

後醍醐天皇御製

埋もるゝ身をば歎かずなべて世の曇るぞつらき今朝の初霜
待ちなれし跡はよそなる山の奥に身も埋もるゝ庭の白雪

文 貞 公

むべしこそ雪も深けれなべて世のうれへの雲の空に満ちつゝ

思ふ事侍りける頃山里に住み侍りけるに雪のふり

ける日思ひ續けける

妙光寺内大臣母

跡をだに世にとゞめじと思ふ身の雪には人のなど待たるらん

題しらず

後村上院御製

〔増〕 終句松井本には「分けし心は」とあり

○孫氏世録曰康家貧無_レ油常映_レ雪讀_レ書少_レ清介交遊不_レ雜後至_二御史大夫_一

○師兼千首 集めこし窓の白雪いたづらに身の光り無き年ぞつもれる

○續拾遺雜秋に權少僧都圓勇、神無月しぐるゝ空をながめてもいたづらにふる身を歎く哉

○神樂其駒 その駒ぞや、われに草乞ふ、草はとりかはむ、くつわとり、草はとりかはむや、水はとりかはむや

〔増〕 曆は推古天皇十年十月百濟の僧觀勤來朝して曆本を貢れるよし日本書紀に見えたり上古年月に干支を配するは漢土の曆法に依りしなり

我末の代々に忘るな足柄や箱根の雪を分けし心を

正平二十年内裏四季歌合に

前大納言光任

君が代に獨ふりゆく我身哉あつめし雪の跡は無けれど

寄雪述懷と云ふ心を

右近大將長親

千首
代々の跡と思ふばかりにあつめ來て吾も年ふる窓の白雪

兵部卿親王家百首に同じ心を

民部卿光資

あつめよと教へし人は昔にていたづらにふる庭の白雪

神樂の心をよめる

右衛門督維教

代々を経て仕へし道の跡しあらばしるべともなれ此駒の聲

曆術など習ひ傳へ侍りける時、見行草の第四段の

進退と云ふ所にてよみ侍りける

前内大臣顯

年なみの進み退くこともあらし流るゝ月日道しかへずば

新葉和歌集 卷第十七

雜歌中

土佐國にて百首歌よみ侍りける中に曉を

中務卿尊良親王

鳥の音の驚かさずばよと共に思ふさまなる夢も見てまし

題しらず

後村上院御製

鳥の音に驚かさされて曉の寢覺しづかに世を思ふ哉

前大納言宗房

いつよりか驚かされし鳥の音を寢覺の床に待ちて聞くらん

五百番歌合に

二品法親王仁譽

怠らぬ曉おきの身になれて鳥の初音は待つとしも無し

○三の句よと共には夜と共にの意にや古今集に「よと共に流れてぞゆく涙川」とあるは世と俱にの意なるべし

〔増〕新續古今雜下に前參議通敏、鳥の音の驚かさずば徒らにぬる夜のうさも思ひ知らじを

○續後撰秋下に伊勢大輔、風の音に驚かれてやわぎもこが寢覺の床に衣うつらん

○五百番歌合に四百五十二番左勝無品法親王、怠らぬ曉おきの身になれて云々○右具氏、見渡せば松に潮風吹きたて、浪の花散る磯の松原○判者、潮風の松に吹けばや目もあはて曉おきの數つもらん

○新續古今雜下に前内大臣、今も猶心のやみに驚きぬつかへてなれし鳥の八聲を○續拾遺雜上に爲氏、鳥のねぞ曉ごとになれにける君に仕ふる道急ぐとて

〔増〕拾遺集二十 山寺の入相の鐘の聲ごとと今日も暮れぬと聞くぞ悲しき

〔増〕安居とは僧侶が四月十五日より九十日間一所に靜居して修業するを云ふ夏ごもりの意なり天武紀下卷十二年七月の條に是夏始請禪尼安居于宮中とあり入相は入相の鐘なり

○古今集秋上 ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞ有りける

世を遁れて後百首歌よみ侍りける時曉を

文 貞 公

今よりは佛の道に急ぐ哉つかへなれにし鳥の初音を

夕を

古へはいかゞ聞き見し身をせむる入相の鐘の夕暮の空

題しらず

右近大將長親母

何ならぬ草木の色もあはれなり思ひある身の夕暮の空

吉野に侍りける頃其寺のならひにて安居中には

いまだ晝より入相をつきけるを聞きてよめる

よみ人しらず

日は暮れぬと思ふならひの山陰はげに急ぎけり入相の鐘

題しらず

左大辨時長

○後拾遺秋上に齋宮女御、さらでだにあやしき程の夕暮に萩吹く風の音ぞ聞ゆる、さらでだにはサウ無クテサへたり

○古今集戀一 夕づく夜さすや岡べの松の葉の何時ともわかぬ戀もする哉

○古今集二十 を黒崎三の小嶋の人ならば都のつとにいざと言はましを

〔増〕千載集旅に道因法師、月見ればまづ都こそ戀しけれ待つらんと思ふ人は無けれど、續後拾遺戀四に大納言通顯、何故に又立返り歎くらん待つらんとだに思ひ出でじを

初瀬山檜原吹きしく風の音にたぐひて響く入相の鐘

中務卿尊良親王

さらでだに涙こぼるゝ夕暮にねなうちそへそ入相の鐘

薄暮松風と云ふことをよみ侍りける

民部卿光資

松の葉のいつともわかぬ風の音もげにさびしきは夕べなりけり

百首歌よみ侍りし中に

中務卿宗良親王

いざとだに云ふ人無くて數ならぬ三の小嶋の松はふりにき

正平二十四年の春吉野の行宮におましましけるを

年月を経て後又彼山に行幸ありける頃名所松と云

ふことをよませ給うける

中 宮

契りあれば又み吉野の峰の松待つらんとだに思はざりしを

○此集神祇部に正平十五年十月住吉社に行幸のよしあり同じ時なるべき歎又雜下に正平十九年三月行幸の事見ゆ○後撰雜一に索性、音に聞く松が浦嶋今日ぞ見るむべも心ある海人は住みけり
〔増〕 續千載旅に大納言有房、言の葉も及ばぬふじの高嶺哉都の人にいかゞ語らん

○千載神祇に右大臣、ふりにける松物言はゞ問ひてまし昔もかくやすみの江の月〔増〕新拾遺神祇に前太政大臣、あはれとや荒人神もみつ葉さす老木の松の年經ぬる身を

〔増〕 目に近き哉とは岸の老松を見れば過ぎし世の事も目前に見ること、ちすとなり玉葉春下、目に近き庭の櫻の一本のみ霞み残れる夕暮の色

○續後拾遺神祇に平時香、住吉の岸なる草は茂るとも神よ昔の跡を忘るな〔増〕岸なる草とは忘れ草なり忘ると云ふ草に習はずば過ぎし世の事を思ひ出づらんと云ふ意なり拾遺集戀四住吉の岸に生たる忘草見ずやあらまし戀はしぬとも

住吉社の神館カシタチに行幸ありて浦の方御覽せられける

に松の姿などたぐひ無かりければよませ給うける

後村上院御製

言の葉も及ばぬ松の木陰哉むべも心ある神や植ゑけん

同じ時人々題をさぐりて百首歌つかうまつりける

中に名所松と云ふことをよみ侍りける

前大納言光任

ふりにたる姿とのみや住の江の老木の松も吾を見るらん

題しらず

津守國久

住の江の岸にふりぬる松見れば過ぎし昔も目に近き哉

權中納言經高

住吉の岸なる草にならはずば松も見し世や思ひ出づらん

○本朝神仙傳云大師於唐授三鉢
 杵一本朝勝地一八一落二東寺一一一
 戶山一紀國高野山一八一落二東寺一一一
 古松在二西院一世一云三鉢杵一八一落二東寺一一一
 大師於唐授三鉢杵一八一落二東寺一一一
 則此所云々一伊呂波字類抄云東寺弘
 仁十四年正月十九日永結大師勅使民
 部卿藤原良房往來法文曼茶羅等納二
 大經藏一

○此集賀部に權大納言顯經、君が經
 千歳の春のためしとや二葉の松の
 みどりそふらん一増二二葉の松は若き
 を云ふ拾遺集賀に藤氏の産屋にまか
 りて能宣二葉よりたのもしき哉春
 日山木高き松の種ぞと思へば金葉
 集賀に周防内侍かばかり神もあは
 れと三笠山二葉の松の千代のけしき

○類題に後柏原院すなほなる心を學
 ぶ根ざしにはかねて千尋の窓の吳竹
 「増」すなほは此卷の末にも「すな
 ほなる昔に歸れ」云々とあり素朴な
 意、古今集の序にははやふる神代
 には歌のまじも定まらずすなほにし
 て言の心わきがたかりけらしとあり
 こゝは竹の直なる其一節をだに學ぶ
 事もやと庭に植ゑたりと云ふ意なり

元弘三年六月後醍醐天皇隱岐國より還幸のついで
 に勅願に依りてまづ東寺へ行幸ありける時松子坊
 にて此松の事など御尋ありければ事のよし奏し侍
 りけるほど松風涼しく吹きければ思ひ續けける

前大僧 正頼意

うゑおきし昔やかねて契りけむ今日の御幸を松風の聲

音櫻堂記

題知らず

中務卿宗良親王家京極

うゑおきし二葉の松の深みどり木高かるべき陰ぞ待たるゝ

妙光寺内大臣家に百首歌よみ侍りける時窓前栽竹

と云ふことをよみてつかはしける

すなほなる其一ふしも習ふやと植ゑてや見まし窓の吳竹

○漢の文帝の御子が竹苑に居給ひしより今も竹の園生と言ひて親王の事に用ふ○新千載雜中に尊胤法親王、軒近き竹の園生の代々の風つらなる枝に吹きぞ傳へん〔誓〕書き葉つる言葉なれども宗良親王は歌道の長者なれば其判に從ひて見ると云ふ意

○新續古今雜下に爲氏、吳竹の身のうきふしの數々に我世の程を思ひ知る哉○續古今雜下に祐盛、思ひ出も又待つ事も無けれどもさすがに世こそ葉てもやられね〔誓〕竹の節を「ヨ」とも云ふより吳竹の幾代、吳竹の我世など續け言へり幾年も生き長らふるものにあらねば身のうきふしなどは歎かずにありたしとなり

○續後拾遺雜中に大納言俊光女、風わたる窓の吳竹うきふしにさも安からぬ世を歎く哉

○玉葉雜三に前太政大臣、世の中は和泉の杣木とる民の古きを更に引おこさなん

うへのをのこども題をさぐりて百番歌合し侍りし

に宗良親王判者つかうまつるべきよし仰せられし

時、竹と云ふ題にてよませ給うける

御 製

書きすつる言の葉なれど吳竹の園生の風にまかせてぞ見る

題しらず

新待賢門院

吳竹の幾代もあらしもの故に身のうきふしは歎かずもがな

入道前右大臣

うきふしの無きにはあらず吳竹の世をばさすがに捨ぬばかりぞ

中務卿尊良親王

うち靡く窓の吳竹とにかくに世のうきふしの繁き頃哉

山人のとるや杣木のかくばかり苦しき世にもひく心哉

家に七百首歌よみける時、隱士出山と云ふことを

○漢書曰漢興有東園公、綺里季、夏黃公、角里先生此四人者當秦之世避而入商洛深山以待天下之定也高祖聞而召之不_レ至云々○新續古今雜下に四皓を源業清、數ならぬ身を商山に入りしかど又治まれる世にぞ出てぬる

○五百番歌合に四百七十二番、左勝無品法親王み吉野の山の奥には云々右頼氏いはねふみ危き峯を越え過ぎて安きに歸る道は迷はじ○判者、いはねふみ危き峯のすゝ分けて身の爲ならぬ世を祈るらし

○拾遺集冬に能宣、我宿の雪につけてぞ古里の吉野の山は思ひやらるゝ

○新拾遺雜中に源氏經、治まれる時をぞ告ぐる我君の代に逢坂の關の鶏のね

花を待つ春の都に出てにけり入りにし月の商ノキの山人
妙光寺内大臣

五百番歌合に
二品法親王仁譽

み吉野の山の奥には入りぬれど猶世を祈る名をば逃れず

名所山と云ふことをよませ給うける
後村上院御製

年ふれば思ひぞ出づる吉野山まだ古里の名や残るらん

百首歌よませ給うける中に

我が代にはさゝぬ關路と思はゞや明けよと告げて鳥は鳴くとも

關鶏をよめる
冷泉入道前右大臣

治まれる世に逢坂の關の戸は明けながらこそ鳥も鳴きけれ

權大納言公夏

○新千載雜中に大納言公蔭、位山の
ぼりもやらで急がれぬいそぢの坂を
越えんとすらん〔増〕なこそその關は常
磐線勿來驛より十町ばかり登りたる
山上に其址あり後拾遺春上、東路は
なこそその關もあるものをいかでか春
の越えて來つらん

○雜藝 伊豫の湯の湯げたはいくつ
いさ知らず數へずよまず君は知るら
ん

○古今集二十 美濃の國關の藤川絶
えずして君に仕へむ萬代までに

○五百番歌合に四百七十九番左實興
かりそめのあらましにのみ年も經ぬ
さて何時までぞひなのすまひは○右
勝光資つかへ來て怠らぬ身の云々○
判者、かりそめのあらましならぬ末
なれば名さへとめけり關の藤川

我君の世に逢坂の關の戸はさゝぬを告げて鳥や鳴くらん

住吉社三百六十番歌合に雜地儀と云ふことを人に

かはりてよめる

右近大將長親母

急がれぬいそぢの坂も越えにけり老はなこそその關守もがな

名所歌よみ侍りける中に伊豫の湯を

前大納言季繼

神さぶる伊豫の湯げたのそれならで我老らくも數ぞ知られぬ

題しらず

冷泉入道前右大臣

命あれば三代に仕ふる名もとめつむそぢの今の關の藤川

五百番歌合に

民部卿光資

仕へ來て怠らぬ身の名をだにも後までとめよ關の藤川

題しらず

後村上院御製

○續千載賀に從三位爲信、君が代の千歳をかけて龜の尾の岩根に絶えぬ瀧の白糸〔増〕 龜の尾は丹波國桑田郡大堰川の近くに在る龜山なり古今集賀、龜の尾の山の岩根をとめて落つる瀧の白玉千代の數かも

〔増〕 よそめは遠くより見ることなり千載集夏に賀茂政平、卯花のよそめなりけり山里の垣根ばかりにふれる白雪

○庵崎は駿河なるよし勝地吐懷篇に見えたり伊勢物語、時知らぬ山は富士の嶺いつとてかかのこまだらに雪のふるらん

○草庵集 さみだれにもとの汀や變らん浪間になりぬしかの濱松

○萬葉第一 わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜明らけくこそ○新千載雜上に前參議經宣、入日さす鹽瀨も遠しわたつみや豊旗雲の末の白浪

○千載集旅に頼輔わたの原鹽路遙に見わたせば雲と浪とは一ツなりけり

龜の尾の瀧の白糸幾代經て末まですめる流れなるらん

千首歌奉りし時山眺望を

中務卿宗良親王

信濃路や見つゝわが來し淺間山雲は煙のよそめなりけり

海眺望

庵崎や松原沈む浪間より山は富士の嶺雲もかゝらず

住吉社三百六十番歌合に

前大僧正頼意

夕潮や磯山かけてみちぬらん浪間に見ゆる松の村立

眺望の心をよめる

坂上頼澄

わたの原入日も見えず暮れはて、豊旗雲にかゝる白浪

前左近中將顯氏母

わたの原雲と浪との隔てにはほのかに見ゆる淡路嶋山

○源氏物語夕顔の巻、心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

○新古今春上に俊恵法師、春と云へばかすみにけりな昨日まで浪間に見えし淡路嶋山

〔増〕古今集夏にふかやぶ、夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲の何處に月宿るらん

○新續古今雜上に前左大臣、住吉の沖つ潮あひは見えわかて霞に浮ぶ淡路嶋山

〔増〕おまへは御前の義、住吉神社に對して敬語を用ひしなり潮あひは潮の打合ふ所、古今集雜上にわたつみの沖つ潮あひに浮ぶ泡の消えぬものから寄る方も無し

〔増〕續千載戀四に藤原雅朝、たちかへり幾度袖をぬらすらんよそにたるみの興津白浪

正平二十年十二月うへのをのこども題をさぐりて

七百首歌つかうまつりける時名所嶋を

後村上院御製

心あてにそことはしるし淡路嶋まだ見ぬ人は雲かとや見む

眺望春と云ふことを

朝日影さすが浪間にあらはれて霞めば消ゆる淡路嶋山

題しらず

前大納言宗房

宵のまは雲のいづくに有明の月にぞ見ゆる淡路嶋山

前中納言爲忠

住吉のおまへの沖の潮あひに浮び出でたる淡路嶋山

名に高き難波の浪の立返り幾度見つと人に語らん

權中納言經高母

○續後撰戀三また六帖第三、わが思ふ心もしるく陸奥のちかの鹽釜近づきにけり

○新後撰秋下に今上御製もしほ焼く煙も絶えて松嶋や雄嶋の浪にはるゝ月かけ〔増〕新古今旅に俊成たちかへり又も来て見む松嶋や雄嶋のとまや浪にあらすな、これを本歌にてよみ給ひしならん

○古今集冬に紀秋岑、白雪の所もわかずふりしけば岩ほにも咲く花をこそ見れ

○攝津志住吉郡古蹟の條云、後村上帝行宮、正平七年足利義詮伴而降、帝亦陽許之、二月廿六日出_二賀名生宮_一幸_二住吉_一以_二三神官津守國夏第一爲_二行宮_一

○催馬樂櫻人さくら人其船ちどめ、鳥津田を十町作れる見てかへり來んやそよや、あすかへり來んやそよや

○和名抄云尾張國愛知郡作良郷○萬葉集三に櫻田へ鶴鳴きわたるあゆち潟とあるも作良なりこれを紀國と云ふは誤なり〔増〕「まかでさまに」とは退出の時になり

行きて見し昔は遠き陸奥も思ひ出づればちかの鹽釜

住吉社三百六十番歌合に雜地儀を

土御門入道前右大臣

松嶋や雄嶋の浪に言問はん立返るべき時もありやと

百首御歌中に

後村上院御製

磯の浪寄せてかへれば岩ほにも咲なる花の散るかとぞ見る

後村上院住吉の行宮におましましける時御遊びな

どありて上達部殿上人に大御酒賜はせ侍りしに新

宣陽門院いまだ一品宮と申しけるが櫻人の心ばへ

など作りて出されたりけるを左大臣のもとへつか

はさるべきよし沙汰ありければまかでさまに女房

の中へ申し侍りける

妙光寺内大臣

〔増〕 こと、浦は他所の浦なり

○古今集雜上に敏行、玉だれの小瓶やいづらこよろきの磯の浪わけ沖に出でにけり

○續後拾遺雜中に大江高廣、白浪の寄るべも知らでいたづらに漕ぎ離れたる和歌の浦舟

○新千載雜中に權大僧都宗縁、年經ぬる松は知るらん昔より吹き傳へたる和歌の浦風

○新千載旅に法印定宗、はるかなる沖の小嶋の旅寢にも心にかゝる志賀の浦浪

○五百番歌合に四百八十九番左持、無品法親王、位山今一坂を越えかねて代々に及ばぬ身を耻づる哉○右成直和歌の浦の玉を磨ける云々○判者、和歌の浦の猶人なみに立ちながら世々に及ばぬ身と思はめや○風雅集雜下に大江宗秀、和歌の浦に心を寄せて年ふれど藻くづらづもる玉は拾はず

こと浦に其船寄すな櫻人飽かぬ色をば明日かへり見む

磯船を

宵のまは磯の浪わけ漕ぐ舟の沖に出でたる海人のいさり火

題しらす

從三位俊文

代々の跡に名をのみつりてかひなきは寄べも知らぬ和歌の浦舟

祭主 隆昌

いにしへの跡を残さば言の葉を吹きも傳へよ和歌の浦風

中原 重綱

玉拾ふ數に洩れなば老の浪あはれかひ無き名をや流さん

述懐歌の中に

坂上 頼澄

何事を思ふとは無き老が身の心にかゝる和歌の浦浪

五百番歌合に

右兵衛督成直

〔増〕雜地儀を諸本地字を脱せり松井本に依りて補ふ

○新千載夏に前關白左大臣、玉川の里の垣根の卯の花は及ばぬ浪の越すかとぞ見る

○玉葉集雜五に爲子、わかぬ浦に沈むみくづよ磨かれん玉の光を見るよしもがな〔増〕新千載雜中に達智門院、玉ならぬ藻くづながらも和歌の浦に君磨かばと書集めつる

○古今集序云やまと歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける
○玉葉集雜五に爲家、秋津嶋人の心を種として遠く傳へしやまと言の葉

○續後拾遺雜中に大納言經繼もしほ草かき集めずば何をして老の心のなぐさめにせん

和歌の浦の玉を磨ける人浪に藻くづばかりをかきや置くべき

中務卿宗良親王人々にすゝめてよませ侍りし住吉

社三百六十番歌合に雜地儀をよめる

權中納言實興

和歌の浦やかゝるしるべを待ち得ても及ばぬ浪にぬるゝ袖哉

百首歌よませ給うて前大納言爲定のもとへつかは

されける中に

後村上院御製

あはれはや浪をさまりて和歌の浦に磨ける玉を拾ふ世もがな
おろかなる言葉の花も昔より吹き傳へたる風にまかせん
すなほなる昔に歸れ種となる人の心のやまと言の葉

題しらず

前大納言光任

敷嶋のやまと言葉の花無くば老の心を何にそめまし

○新千載雜下に大納言實歌、見し事のさだかなぬはかきくらす涙に忍ぶ昔なりけり〔增〕かきくらすとは雨雪などの降る時曇るを云ふ古今集戀二に忠岑かきくらしふる白雪の云々此集冬に成直かきくらしふれど浪にはかつ消えて積れる方や雪の白濱、こゝは落涙するを雨ふるさまに言ひなしたるなり「かきくもる」とも言へり新千載旅に土御門院、あかし湯大和鳥根も見えざりきかきくもりにし袖の涙に

○詞花集雜下に源義國妻、木のもとにかき集めつる言の葉を柞の杜の形見とは見よ

○拾芥抄云續後拾遺集二十卷千三百四十三首、元亨三年七月二日奉給編旨二民部卿爲藤撰之、而不_レ終_レ篇正中元年七月薨去之間、子息權中納言爲定相續、正中二年十二月八日奏覽之、風雅集二十卷二千二百十首萩原法皇御自撰之、貞和二年十一月九日被_レ行_レ竟宴一

元弘二年の春、中務卿尊良親王のもとより歌よみて贈りて侍りける返事に
文 貞 公

かきくらす涙のひまのあらばこそ定かにも見ぬ君が言の葉

前大納言爲定のもとへ千首歌よみてつかはし侍り

し時、贈從三位爲子の事など思ひ出で、申しつか

はし侍りし
中務卿宗良親王

散りはてし柞ハヅの杜の名残とも知らるばかりの言の葉もがな

續後拾遺集撰ばれし時は名字につきていさゝか仔細ありて作者に洩れ侍りしを世の中改まりて後、

風雅集などとして撰集の事あるよし聞えしを今はまかど松井本

して作者に加はるべきにてもあらぬ事など思ひ續

けて同じく書き添へ侍りし

○古今集十九に忠岑、あはれ昔べありきてふ人磨こそはうれしけれ身はしもながら言の葉を天つ空まで聞えあげ云々

○「とても」は、とてもかくてももの「かくても」を省きたる言と心得べし新拾遺哀傷に祝部成光とてもかく假の世ならばかりにだになど無き人のかへらざるらん

○櫻雲記中巻云正平十一年正月二條爲忠歌二首天野行宮へ捧げ奉る「君すめば云々」世に出でば云々

「増」古今集春上、山ざくらわが見にくれば春霞峯にも尾にも立隠しつ

○新古今雑中に天智天皇、朝倉や木のまろどのに我居れば名のりをしつつ行くは誰が子ぞ

○櫻雲記下巻云行脚の僧二首の歌を南朝の内裡の門に書付送電「世に出でば云々」これぞこの云々前後違へはおぼつかなし
○佐紀宮、咲山など萬葉集に見えたり同所にや

櫻雲記

いかなれば身はシモ下ならぬ言の葉の埋もれてのみ聞えざるらん

家に三百番歌合し侍りける時、深山幽居と云ふ題を

とりて山深く住みなれぬる事など思ひ續けてよめる

關白左大臣

厭はねどとても深山の奥の庵心ひとつをかへて住まばや

天野の行宮にてよみ侍りける歌中に

前中納言爲忠

君住めば峯にも尾にも家居して深山ながらの都なりけり

世に出でば光そふべき月影のまだ山深き雲の上哉

ぞ櫻雲記

これやこの木の丸どのと思へども名のらで行けば知る人も無し

此二首の歌は天授六年秋の頃、修行しける僧の、

さき山の行宮のあたりを過ぎ侍りけるが物に書き

つけけるとぞ

○山深いきは山深き處と云ふ意なるべし〔増〕拾遺集に夏草の茂みに生ふる丸小首、萬葉集八に夏の茂みに咲ける姫百合などは茂き處と云ふ意なれど、此「山深み」は「山深く」なり萬葉に例多し吾に仕ふべき人が猶残り居るかと思ふと尋ね入ると云ふ意「とざし」は戸締りなり

「増」住む人のあるとは云々「ある」の下に「こと」と云ふを略せり古今集戀四に「絶えず行く飛鳥の川の淀みなば心あるとや人の思はむ」とあるも「心ある」の下に「こと」を略せり

○風雅雜中に後嵯峨院、思ひ入る深山の里のしるしとてうき世隔つる窓の吳竹〔増〕山里のまがき流布本に「深き」とあるは違へり松井本に依りて訂正す

○此集雜上に經高母あだし世の色に染まじと逃れ來て身を奥山の花の下庵〔増〕新續古今雜中に前攝政左大臣人なみに世をや波らん佐保河のすむも濁るもわかぬ身にして

○新古今戀五に辨、過ぎにける世々の契りも忘られて厭ふ憂き身のはてぞはかなき〔増〕續古今雜中に大納言忠良、うしとて又はいづちかあくがれん山より深きすみか無ければ

百首歌よませ給ひける中に

後村上院御製

仕ふべき人や残ると山深み松のとざしも猶ぞ尋ねん

住む人のあるとはよそに知られつゝ煙ぞ靡くをちの山本

題しらず

新宣陽門院

このまゝにうき世隔てよ山里のまがきと頼む庭の吳竹

右近大將長親母

數ならぬ身を奥山の埋れ水すむもすまぬも知る人ぞ無き

述懷歌中に

二品法親王聖尊

世をすつる山より山の奥無くば厭ふ憂き身を何に隠さん

百首歌よみ侍りける中に

果尊法親王

○續拾遺雜中に衣笠内大臣、其事に心とまると無けれども背くとならば世をや惜しまむ〔増〕新後撰雜中に賀茂在藤、うき事の聞え來ざらん山陰を誰に問ひてか身を隠さまし

〔増〕前左近を流布本に右近と書けり松井本に依りて訂正す

○新續古今雜中に大納言重資、庭の松めぐれる竹を垣ほにて風のみ絶えぬ山陰の庵

○古今集雜下 いざこゝに我世は經なむ菅原や伏見の里のあれまくも惜し

〔増〕新千載旅に賀茂景久、苦むしる只一重なる岩が根の枕に寒き床の山風、同哀傷に大納言長家すみなれし古里人も無き床にかたしく袖は露もかわかず「かたしく」は獨寝するに云ふ古今集戀四さむしろに衣片敷き今夜もや吾を待つらん宇治の橋姫

世の中を背くとならばうき事の絶えて聞えぬ山里もがな

正平八年内裏千首歌の中に

前左近大將公冬

たち交る友をも何か松の霧竹の煙の山陰の庵

題しらず

祥子内親王

たちのぼる煙の末を餘所に見ばさびしかるべき柴の庵哉

津守國貴

逃れても又世は經なむ深山への嵐の庵のあれまくも惜し

紀淑俊

山里は岩根の枕苔むしろかたしく袖のかわく間も無し

二品法親王深勝

幾歳を重ね來ぬらん山深み苔のころものあるに任せて

〔增〕昔の衣は僧の服なり新古今雑中に安法々師、世を背く山の南の松風に昔の衣や夜寒なるらん、風雅集雜下に伏見院うれへ無く樂しみも無し我心いとなまぬ世はあるにまかせ

○古今集雜下 三吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時の隠れがにせん

〔增〕あらましは豫定なり

○南朝紀傳云元弘元年八月廿二日東使上洛して今上を配流し奉り并に近臣大塔宮を誅すべしとなり大納言師賢長尾山を出て、歌をよみて都へ歸る

〔增〕風雅集雜下に從二位宣子、をりくの身のあらましも變りけり我心きへ定めなの世や

○新千載戀一に玄勝法師、思ひたつ戀路の末のしるべこは迷ふ心をいかゝ頼まん

○李花集云ことに深き山路に引籠り侍りし頃よみ侍りし○古今集十九ありぬやと心見がてら逢ひ見ねばたはふれにくきまでぞ戀しき

吉野の奥なる山里に住み侍りける頃よみける

前參議持房

み吉野の山のあなたのあらましもかゝるうき世はかひ無かりけり

元弘元年北長尾の山莊にこもり居侍りけるを世の

亂れによりて、かしこをも又たち出で、後よみ侍

りける歌の中に

文 貞 公

應雲記南朝紀傳 庵結ぶ山の下柴をりくのあらましに似ぬ身のゆくへ哉

思ひかね入りにし山をたち出で、迷ふうき世も只君の爲

題しらす

よみ人しらす

李花集 山深み暫時もかくてありぬやと心見がてら月日をぞふる

世のうきにたへぬ心のまゝならば猶山里も住みやうからん

住みなれて人目を旅と思ふだにさびしき堪へぬ松の風哉

〔増〕此「山深み」は山深き故と云ふ意、古今集に「山高み人もすさめぬ」金葉集に山深み訪ふ人も無き宿なれどと同例なり

前大僧正忠雲
さびしとて又は何とか厭ふべき尋ねし山の松のあらしを

山家風をよませ給うける

御製

さびしさも聞き慣れなばとなくさめて思ひも入れぬ松風の聲

新葉和歌集 卷第十八

雜歌下

題知らず

中院入道一品

山深く結ぶ庵りもあれぬべし身の憂きよりは世を歎くまに

よみ人しらず

かひなしな人に知られぬ塵の身の山とし高くつもる齡は

妙光寺内大臣

あはれなりわがもとゆひにおく霜の振分髪は昨日と思ふに

從三位行義

黒髪の霜となるまで長らへて世にありつゝもあるかひぞ無き

從三位俊文

○續古今雜中に權大僧郡定圓、山深く何か庵りを結ぶべき心の中に身は隠れけり

○續千載雜上に法眼行濟、今は世にふりはてにける老が身の山とし高くつもる白雪「雪」かひなしなの「な」は歎辭なり續拾遺戀五に爲家かひなしな言ひしに變る同じ世にあればと頼む命ばかりは、新千載雜上に法印長舜、枯れ残る霜の下草ありとだに人に知られぬ憂き身なりけり

○古今集戀四 君來ずば聞へも入らじ濃紫わがもとゆひに霜は置くとも「増」伊勢物語くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき

○萬葉第二 ありつゝも君をば待たむ打塵く我が黒髪に霜の置くまでに「増」新古今戀一 あるかひもなきさに寄する白浪の間無く物愚ふ我身なりけり

○風雅集雜上に爲相、花鳥に猶あく
がる、心哉老の春とも身をば思はで
〔増〕古今集十九に紀元方、何をし
て身の徒らに老ぬらん年の思はん事
ぞやさしき

○新後拾遺戀五に尊圓親王、身のう
さを思ひ知らずば如何に猶心のまゝ
にうらみはてまし

○櫻雲記云北畠大納言守親、奥州國司
に任ず、於是白川彈正と合戦、守親歌
を詠ず、陸奥のあだちの眞弓云々
○古今集二十、みちのくのあだちの
眞弓わが引かば末さへ寄りこ忍び忍
びに

○江戸名所圖會第四に正平七年新田
家信濃の宮宗良親王を供奉して武藏
野に合戦ありし時の陣、の舊趾は寶
林寺の山林也云々○櫻雲記云宗良親
王、補中務卿征夷大將軍の宣旨あり、勅
使由良入道信阿彌也、宗良親王年を經
て遠國に住みて都の手ぶりを忘れ
弓矢の業のみにて征夷將軍の宣旨を
蒙りしも不思議に覺えて「思ひきや
手もふれざりし」云々

○古今集戀二に貫之、手もふれで月
日經にけるしらま弓おきふし夜はい
こそ寝られぬね

○大日本史曰宗良進軍武藏野、勒兵勵
士作歌曰岐美能多迷云々○李花集云
戰場に出で侍りし道すがらいさみあ
るべき事などつはものどもに言ひ合

花鳥のすさびならでは何をして老ぬる身とか人に語らん

源頼武朝臣

引そめし心のまゝに梓弓思ひかへさで年も經にけり

陸奥國に住みける頃百首歌よみ侍りける中に

前大納言守親

陸奥のあだちの眞弓取りそめし其世につかぬ名を歎きつゝ

あづまの方に久しく侍りてひたすらものゝふの道に

のみたづさはりつゝ、征東將軍の宣旨など下されしも

思ひの外なるやうにおぼえてよみ侍りし 中務卿宗良親王

櫻雲記 李花集

思ひきや手も觸れざりし梓弓起き臥し我身慣れむものとは

同じ頃武藏國へ打越えて、こてさし原と云ふ所にあ

り居て手分などし侍りし時いさみあるべきよしつは

川圖誌云新安手簡に小手差原は北野
 物部天神より西北の方六七里四方
 の地にして武藏野地名考云間川の條
 に小手差原は此邊なりと云へり江戶
 名所圖會に豊島郡下練馬村に其舊地
 あるよし云へるは誤なり
 「管」建武年間新田義貞が北條高時
 の將櫻田貞國を此地に破り正平七年
 義貞の子義宗義興等が足利尊氏の兵
 と戦ひし小手差原は所澤町の西南に
 在りと云ふ

○續千載戀三に藤原利行、ひく方は
 あまたありとも梓弓もとの心の變ら
 ずもがな

「管」懸レ車齡とは年七十に至りて
 官を辭するに云ふ、漢籍より出でし
 語なり俊賴集に「數ふれば車をかく
 り齡にて猶も此世にめぐり來にけ
 り」漢書薛廣德傳に俱乞三骸骨一皆
 賜安車駟馬黃金六十斤罷、廣德東
 歸沛、太守迎之界上沛以爲榮
 懸三其安車一傳三子孫云々、隋書に韋
 世康謂三子弟曰、吾開功遂身退、古
 人常道、今年將三耳順三志在懸車、白
 虎通に臣七十懸レ車致仕など見えた
 り

○易繫辭傳云黃帝堯舜垂ニ衣裳一而天
 下治、蓋取三諸乾坤一

○公事根源云定考八月十一日、大方
 は二月の列見に同じ式兵の兩省より

ものどもに、めし仰せ侍りしついでに思ひ續け侍りし

君の爲世の爲何か惜しからん棄てゝかひある命なりせば

正平二十年内裏三百六十首中に寄弓述懷

前内大臣 隆

君が爲わが取り來つる梓弓もとの都にかへさざらめや

寄車述懷

妙光寺内大臣

今はとて車をかけむ齡^{ヨハヒ}まで仕ふる道に迷はずもがな

同年内裏七百首歌中に寄衣述懷

前大納言光任

命あれば衣をたれし古へに立かへりてぞ又仕へける

年中行事三百六十首歌中に定考を

前大納言實爲

諸司の輩の上日を選成する事を列見と云ふそれをかき集めて奏するを擬階の奏と云ふ此人々を撰出して定め侍るを定考とは申也

○親長卿家歌合、更に又日に三度もやかへり見ん一方ならぬおろかなる身は○論語曰曾子曰吾日三省吾身〔省〕新千載雜中に右大臣、忘れじな代々にもこえて君にわが仕ふる道の關の藤川

○大日本史曰藤原師賢事三花園帝一爲三參議兼左大辨一超二拜權中納言一聽三帶劍、後醍醐帝即位兼三中宮權大夫、右衛門督彈正尹一陞三正二位大納言一○源氏物語權卷 年ふれど此契りこそ忘れね親の親とか言ひし一こと

〔省〕拾遺集雜下 親の親と思はましかば問ひてまし我子の子にはあらぬなるべし

仕へてし去年の日數の其まゝに品を定むる道ぞかしこき

題知らず

入道前右大臣

日に三度おろかなる身をかへり見て仕ふる道も我君の爲

正平八年内裏千首歌中に寄山述懷を

前中納言爲忠

君が代にあへばぞ越ゆる仕ふべき道や位の山路なるらん

文貞公例として三位中將にて左大辨を兼侍りける除書

右近大將長親

親の親のためしを見つる我身哉君の君なる世に仕ふとて

内大臣に任じ侍りける頃、内裏にて人々題をさぐり

て百番歌合し侍りける時、山と云ふことをよめる

前内大臣 顯

○風雅集雜下に爲定、今更にのほりぞやらぬ位山苦しかるべき代々の跡かは

〔増〕新千載雜中に左近中將義詮、世の中の人のうれへのあるにこそおろかなる身の程は知らるれ

〔増〕萬葉第四 碁檀越往伊勢國時留妻が作歌、神風の伊勢の濱荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き濱べに、此集春下に御製、ふく風もをさまる春の花ざかり飽かぬ心にまかせてぞ見る、伊勢國に在りて治國平天下を願はれし時の歌なるべし

〔増〕續後撰戀二に慈鎮、身にかへて思ひげりとは知らるともさて戀死なばかひや無からん、風雅雜下に太上天皇、てり曇り寒き暑きも時として民に心のやすむ間も無し

身にあまる御代の光りに位山苦しかるべき峯は越えにき

關白家三百番歌合に筆寫人心と云へることを

おろかなる程や知られむ水莖の跡を心のしるべとも見ば

百首歌中に

入道前右大臣

いかにして伊勢の濱荻吹く風のをさまりにきと四方に知らせん

建武二年うへのをのことも題をさぐりて千首歌つか

うまつりけるついでに

流國の歌とてよませ給うける新千載

後醍醐天皇御製

新千載雜中

身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心の治め難さを

正平八年うへのをのことも題をさぐりて千首歌よみ

侍りけるついでに寄日述懷をよませ給うける

後村上院御製

○千載集戀一に太皇太后宮肥後、ま
だ知らぬ人をはじめ戀ふる哉思ふ
心よ道しるべせよ〔増〕續古今春上
中務卿親王、大伴の御津の濱〔増〕霞む
なりはや日の本に春や來ぬらん

○此集戀三 待てと言はゞ待つべき
ものか玉の緒の短き心思ひ絶えな
て〔増〕續古今冬に前内大臣、ゆく末は
いづれの山にかゝるらんしぐれてわ
たる空の浮雲

○續拾遺戀二に爲氏、ぬぬなのはね
ぬなはかけてつらさのみますだの池
のみづからぞうき〔増〕續千載集釋歌
に從三位宣子〔増〕にどり江の水の心は
すまづとも宿れる月の影は曇らじ
とあり濁り江の水をみづからに言ひ
かけて修飾語とせり「片糸のよるか
の池」〔數ならぬ美濃の中山〕など云
ふ類なり

○古今集戀五 流れては妹背の山の
中におつる吉野の川のよしや世の中

○玉葉集夏に權中納言公雄、きみだ
れに浮木流れて大井川くだす筏の數
ぞ添ひぬる

曇らじと思ふ心よ同じくははや日の本の光りともなれ

千首歌めされし時同じ心を 御 製

いかにせんしぐれてわたる冬の日の短き心曇り易さを

寄江述懷

すみやらぬ世の理りを思ふにも猶濁り江のみづからぞ憂き

正平八年内裏千首歌中に寄河述懷を

前中納言爲忠

うき瀬には沈みもはてじ吉野川よしや世の中歎かざらなむ

同二十年内裏七百首歌に題を賜はりてよみて奉りけ

る時、寄筏述懷を 紀 種 文

河浪の高きにのぼる道ならてくだす筏も安からぬ身を

題知らず 法 印 實 源

○新續古今哀傷に從三位行能、頼み
來し法の御舟のつなで繩引く人も無
き跡の悲しき[増]つなで繩は一つな
なりとのみも云へり舟や筏を挽く繩
なり新後拾遺雜言に「引く人の無き
につけてもあやめ草うきに沈めるね
こそなかるれ」とあるに意同じ

〔増〕風雅集戀三に伏見院、變りゆ
定め無の世やはれ今日の恨み人に心の
○續後拾遺戀一に紀俊文、數ならぬ
水無瀬の川にゆく水の深き思ひぞあ
りてかひなき

〔増〕白居易五絃彈詩云夜鶴憶レ子
籠中鳴、詞花雜上に高内侍、夜レ鶴
都の内にとめられて子を戀ひつゝも
鳴きあかす哉、此集哀傷に妙光寺内
大臣母ねに立てば吾劣らめや夜の鶴
の子を思ふ事も君獨かは、この終
句は湊入りの葦わけ小舟障り多みな
と言へど子を思ふ道は障らずもがな
と云ふ意なり

〔増〕金葉集戀上に春宮大夫公實、
葦根はふ水の上とぞ思ひしをうきは
我身に在りけるものを

○和訓栞云兒齒は老人齒落更生と見
えたり瑞別天皇の御名に依れば兒

吉野川くだす筏のつなで繩引く人無しに身を歎きつゝ、

二品法親王聖尊

飛鳥川淵瀬にはあらぬ世の中の變るは易き昨日今日哉

望む事とてこほり侍りける頃よみ侍りける歌中に

右兵衛督成直

此儘に沈みはてなば水無瀬川ありてかひなき名をや流さむ

題しらず
權大納言公夏

難波江や蘆間の浪の夜の鶴子を思ふ道はさはらずもがな

前中納言氏定

さのみなど思ひ知らでは過すらん憂は我身に限りける世を

老後述懷を
從三位國量

うき事にさらでももろき我涙みづはぐむ身と袖濡らしつゝ、

齒は長壽の相なれば瑞齒と云ふべし
「ぐむ」は芽ぐむと云ふが如し
「増」玉ゆらは暫時の意なりと言
へり堀河院百首に師時、かきくらし
玉ゆらやまらずふる雪の幾重つもりぬ
こしの白山

○新後拾遺雜下に禪要法師、よしき
らば棄てられぬ身をあだし世のうき
にまかせてはてをこそ見ぬ、新古今
雜下、世の中はとてかくても同じ
事宮も葦屋もはてし無ければ

○續後拾遺戀三に順徳院、あすも又
同じ夕べの空や見んうきに堪へたる
心長さは

「増」風雅集雜下に爲守女、無きに
のみ身をなしてはてし心より有るにま
かする世こそ安けれ

○五百番歌合に四百七十番、左勝女
房、今こそあれすむべき代々の云々
○右具氏、なれて聞く松のあらしや
白雲のかゝる深山の友となるらん○
判者、白雲のかゝる山にも都鳥あり
や無しやと昔をぞ問ふ
○新後拾遺雜下に權僧正良憲、頼む
べき身にはあらねど行末のあらまし
にこそしばし慰さめ

題しらず

前中納言爲忠

玉ゆらもよにおき難き白露の消えなば消えね光り無き身は

福恩寺前關白内大臣

よしさらばとてかくても住まれけり憂ウレにまかせて世をば過さん

前内大臣 隆

よしあしを思ひ知らぬぞ此頃のうきにたへたる心なりける

中 宮

かねてより知られぬものの悲しきはあるにまかする行末の空

五百番歌合に

御 製

今こそあれすむべき代々の都鳥わが行末の事や問はまし

題しらず

世泰親王家右京大夫

行末のあらましにのみ慰めて今のうき世に厭はでぞふる

○才子傳云紀俊長者紀州日前國懸宮之祠官也、應永四年叙從三位、爲人不可慕、榮利不好、紛冗、其居植梅竹、乃以之爲軒之號、又貯書萬軸、讀之而樂焉、玩和歌、風流情超、時輩、新後拾遺、新編古今之兩集、探其綺語者不亦美乎

○玉葉集雜五に大僧正深惠、あらましの心に身をぞまかせぬる頼ひかひある御代のしるしに〔増〕新千載雜下に法印實性、うつゝかと思へども猶ぞたどらるゝ定かに見つる夢の名残は「あらましの心」は豫想の意なり

○新拾遺雜中に邦省親王、いつまでも世を思ふにも袖ぬれて老のしるしぞ涙なりける

〔増〕新後拾遺雜下に法印宗信、あらましの叶ふ世ならば棄てかぬる身の行末を猶や頼まん、續千載雜上に藤原基任、老となるつらさも知らで急がれし昔の年の暮ぞ戀しき、などに其意通ふ所あるべし

〔増〕風雅集雜下に邦省親王、身のうきを心ひとつに慰めてわがあらましを待つぞはかなき

紀 俊 長

さてもわが身の思ひ出に何をして今行末の人に語らん

新宣陽門院

あらましの心のまゝに見る夢のさめて變らぬうつゝともがな

從三位朝棟

いつまでも思へば身をも歎かぬに何と涙の老を知るらん

源 重 泰

老となる身をば歎かて行末のあらましをのみ急ぐはかなさ

前參議長資

とにかくにわがあらましの變ること世のうき時の心なりけれ

住吉社三百六十番歌合に雜地儀を

中務卿宗良親王

○新古今戀一に重之、筑波山は山し
けり山繁けれど思ひ入るは障らざり
ばは山し樹木の茂れるとを聞かせた
り新後撰秋上は後醍醐院、暮れゆけ
妻を戀ふらんものかはをちの折らぬ
奥山夜は越ゆともあり山々重なり
り樹木茂りて障り多からんともわが
○後撰雜一に射恒、伊勢の海のつり
沈めり
【増】「厭はでも」は、うき世を厭は
でもなり續後拾遺雜下に安嘉門院四
條、何事もわかぬ心にさしもなど身
のうきばかり思ひ知りけん
【増】新千載雜中に覺譽法親王、家
の風絶えず恨へて天の下なべて仰ぐ
と聞かざしこそ「惜しければ」と
はわが家の名の斷絶せん事の惜しき
なり國歌大系本の「惜しければ」と
せるはいかゞ、版本も寫本も「惜し
ければ」とあり、結局は「棄てぞ兼
ねも云ふは後世の言葉づかひなり」
○櫻雲記云頃年懷良親王鎮西に在り
て謀策をめぐらすと雖朝敵を敢て治
伐する事ならずいたく世を恨みて宗
良親王へ歌二首送るに「日にそへて
まゝ知るや如何に世を秋風の吹か
かに露もとまらぬ我心哉」其年の十
二月に此歌を見て返歌を宗良「とに
かくに道ある君が御代ならば事繁く

道知らぬは山しげ山障るとも猶あらましの末はとほさむ

千首歌奉りし時寄海述懷

伊勢の海に沈まば沈め身のはてよつりのうけなるさまも恨めし

題知らず

大中臣清胤

厭はでもさてや止みなむ世の中のうき理りを思ひ知らずば

日前宮によみて奉りける五十首歌中に

前大納言宗房

世々を経し我家の名の惜しければ惜しからぬ身を棄てぞ兼ねる

建徳二年秋の頃中務卿宗良親王のもとへ申送り侍り

し 式部卿懷良親王

日にそへて遁れんとのみ思ふ身にいとゞうき世の事繁き哉

世を遁れんと思ひ立ちける頃常に居侍りける所の壁に

とも誰か迷はん」。「草木も靡くぞ聞く此頃の世を秋風と靡かざらな

○大日本史曰懐良後不知所終世稱西宮或九州宮阿蘇宮肥後宮相傳懷良屏居八代郡小野一覽即葬焉

○續古今哀傷に雅成親王、壁に生ふる草の中なるきりくすいつまで露の身を宿すらん○枕草子云いつまで草は生ふる所とはかなくあはれ易り岸のひたひよりも、これは崩れ易げなり

○後拾遺雜一に源爲善、山の中に入りぬる月ならばうき世の中に入りぬる月を

○和漢三才圖會云三島大明神在伊豆國賀茂郡三島祭神一座大山祇命、崇峻天皇庚戌年出現神陸貞觀九年七月從三位社前有池十六夜日記あはれとや三島の神の宮柱たごこにしもめぐりに在る川又は池を云ふ續拾遺戀五に土御門院山鳥のをるの鏡にあらねどもうき影見てはねぞ泣かれける

○大日本史曰權子内親王後醍醐帝長女也、正慶二年入宮爲妃、建武二年號曰宣政門院曆應二年出宮入二保安寺爲尼、時年二十六

○群書類從所載の李花集の標注に權子新葉集作三祥子とあるはいかゞ宣政門院と祥子内親王と御同女ならべきにあらず

○古今集雜下 世にふれば言の葉繁

書きつけける

前大納言信賢

壁の上に生ふなる草の名を聞くも今何時までの露の宿りぞ

題しらず

祥子内親王

山のはに猶入りやらでつれなくもうき世の中に有明の月

下シモツツサ總國へくだり侍りける道にて三島大明神によみ

て奉りける歌中に

文 貞 公

契りありて今日は三島のみたらしにうき影うつす墨染の袖

題しらず

宣 政 門 院

墨染の袖の涙のたま〜も思ひ出づるはうき昔哉

祥子内親王

吳竹のうきふしづくの積りしぞ世を背くべき始なりける

平惟材朝臣

「き吳竹のうきふしごととに鶯ぞ鳴く
 の山のあなほに宿もがな世のうき時
 のかくれがにせん」とあるに依りて
 よめる歌なるべし「かくれが」とは
 隠れ住む所、遠鏡には引込所と言へ
 り隠家と書くは俗間にて充てたる文
 字ならん所載千載雜下に大原にま
 大臣一庵の所など置きて、前太政
 見し世の憂き時の宿求むとてなり
 るも「かくれが」を求むとてなり

○玉葉雜五に宗尊親王、いかにせん
 背きて後のうき世をば棄てなばと思
 ふ慰めも無し○南朝紀傳云元弘元年
 春山正尹前大納言師賢卿遁世、北長
 尾山師賢が許へつかはす、更に又住
 大夫師賢が許へつかはす、更に又住
 わぶる身を「云々」○大日本史曰藤原
 師賢雜號三素貞（公卿補任）
 ○風雅集雜下に大僧正道意いかにせ
 きは此世なりけり
 ○續拾遺雜上に藤原爲綱、契りあれ
 ば身の思ひ出のひかげ草此世をかけ
 て又結ぶ哉
 ○南朝紀傳云天授三年の冬宗良親王
 信州へ下向、長谷寺にて御飾りを落
 させ給ひ歌をよみて帝に奉り給ふ
 「君になど我世初瀬の云々、其後御
 返し御製「忘るなよ木曾の麻衣や御
 も紀傳に同じ吉野の花染の袖」櫻雲記
 離別部に出づ

うき世をば棄てし身なれどカクレガ隠家とげに定むべき山陰ぞ無き

世を背きて後春宮大夫師兼がもとへ申つかはしける

文貞 公女

南朝紀傳 櫻雲記
 更に又住わぶる身を歎くこそ棄て、も同じうき世なりけれ

かへし
 春宮大夫師兼

更に又歎くと聞けばかくばかり厭はしき世も棄てぞ煩らふ

出家の後百首歌よみ侍りける中に述懐の心を

文貞 公

いとさなき此世をかけて棄つる身を獨背くと君や知るらん

初瀬にて世を遁れ侍りしことを後にさこしめして

内より其程の事など仰せられし御返事のついでに

中務卿宗良親王

○新編古今雜下に狛秀房いたづらに此世もさてや初瀬山鐘の音にも驚かぬ身は

「増」「さまなどかへ」とは尼となり給ひしを云ふ

○草庵集 人は皆うきを忍びてすぐす世にうらやましくぞ思ひすてける

○大日本史曰瓊子内親王藤原爲子所生也、出家爲レ尼 ○尊良親王の御妹れり

○後撰集離別に伊勢、君が代は鶴の郡にあえてきね定め無き世の疑ひも無く

○仁智要錄云水調角徵之間隔二律此調呂也本調トハ相違也○拾芥抄云水調汎舟龍重光樂拾翠樂无樂舞平燈樂无舞

○夫木抄に如覺、琴のねに水のしらべや通ひけむさもほしがたき今朝の袖哉

○御集云此水のしらべと云ふ事をいかいと思ひて寝たる夜父の伯夢にいらずとなんありし云々

櫻盛記

君になど我世初瀬の鐘の音のかくなるにだに知らせざりけり

元弘のはじめつ方世の中亂りがはしく侍りしに、

思ひわび、さまなどかへけるよし聞きて瓊子内親

王のもとへ申つかはしける

中務卿尊良親王

いかで猶吾もうき世を背きなむうらやましきは墨染の袖

かへし

瓊子内親王

君は猶背きなはてそとにかくに定め無き世の定め無ければ

頃しらず

宣政門院

今ははや水の調べも忘れにきむすびしまゝの跡はあれども

嘉喜門院御飾りあろさせ給うて後は御琴なども打

棄てられて年月を送らせ給うけるに天授三年七月

七日内裏にて御遊などありし時御聽聞のため入内

○御集奥書云此松風の御贈答まめやかに目を驚かし心を惑はし候ひぬる代々の集どもにも恐らくはかゝる類は少くぞ候はむずらんと覺え候云々

○大日本史曰嘉喜門院善琵琶帝崩哀慕感愴不復親彈天授三年七月七日張樂於吉野行宮門院入觀之樂闋後龜山帝數請門院彈琵琶門院當一彈之帝感奮不自勝作和歌曰加久氏能美云々門院和曰阿波禮斗毛云々宗良親王撰新葉和歌集一請和歌於門院一門院使大納言藤原實爲書和歌百餘首贈宗良一宗良閱之批其當載集者一奉書謝之且曰七夕松風唱和使人目駭神奪不堪感愴咏嘆殆不愧歷朝選集豈忍與吉野紅葉俱理委山谿哉臣不願譴恕一展請之者於是爲得

ありけるに御樂はて、後御琵琶ばかりにてたびたびすゝめ申されしかば小樂ども少々引かせ給ひけるに年々の御遊の式など只今のやうにおぼしめし出でられて

御 製

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの秋おもほゆる嶺の松風

御かへし 嘉喜門院

あはれとも君ぞ聞きける今ははや吹絶えぬべき嶺の松風

次の日夜べの式など申されし御返事ついでに東大寺の鐘ばかりぞ昔にも變らぬこゝちして思ひ出さるゝ事多う侍りしまゝに猶しひても遁れ申されざりし悔しさなど申されて

四の緒の調べにそへし松風は聞きしにもあらぬねにやありけむ

○源氏物語稱卷、かけまくもかしこ
 けれどもそのかみの秋おもほゆるゆ
 ぶだすき哉
 ○玉葉雜五に爲家玉津島あはれと見
 ずや我方に吹絶えぬべき和歌の浦風
 ○釋名云琵琶ハ本胡中馬上所_レ鼓也
 推手前_ヲ日琵琶引手却_ヲ日琵琶因以爲_レ名
 ○風俗通云琵琶ハ長三尺五寸、法_二天
 地人與五行_一又四絃象_二四時_一
 ○玉葉雜五に延子内親王家大夫、四
 の緒のしらべにつけて思ひ出よ半の
 月にわれも忘れじ
 ○歷代皇紀云元弘三年十月六日後京
 極院藤禧子崩
 ○今井弘濟云後醍醐帝皇后後京極院
 禧子帝遷幸隱岐之後光嚴帝上院號爲
 禮成門院後醍醐帝還幸後去院號又爲
 中宮及崩追號後京極院
 ○女院小傳云後京極院太政大臣實兼
 女禧子元弘三年十月十二日院號
 ○増鏡久米の更山云元弘二年の春に
 もなりぬ永き暮もいと暮れ難き御
 慰めにとや聞え給ひけむ中宮より御
 琵琶奉らせ給ふついでにいさゝかな
 り物のはしに「思ひやれ塵のみ云々」
 げにとおぼしやるにいと悲しくて玉
 水の流るゝやうになん御返し「かき
 絶えしねを立出で、君戀ふる涙の玉
 の緒とぞなりける」
 ○今井弘濟云按新葉集後醍醐帝歌與

御かへし

御 製

松に吹く風は昔の秋ながらなかばの月や面^{オモガハ}變りせし

いかなる時にかありけむ御琵琶をめされけるを奉

らせ給ふとて

後 京 極 院

思ひやれ塵のみつもる四の緒に拂ひもあへずかゝる涙を

御かへし

後醍醐天皇御製

涙ゆる半の月は曇るとも慣れて見し世の影は忘れじ

月前懷舊を

後村上院御製

其事と思はでしもぞ忍ばるゝ見ぬ世の秋を月や見すらん

うへのをのこども歌合し侍りけるついでに思往事

と云ふことをよませ給うける

忘ればや忍ぶも苦し數々に思ひ出でゝも歸り來ぬ世を

太平記同増鏡所載之歌新葉集不載蓋
増鏡誤乎○かき絶えしの御歌は拾遺
集なる蓑衣はつるゝ糸は君戀ふる涙
の玉の緒とやなるらんと云ふに似た
りまことの御返しは「涙故半の月は
の御歌なるべし

○續拾遺雜秋に帥、月ならで又誰に
かは言問はん見ぬ世の秋の昔語りを
○續千載戀五に左大臣、數々にうき
より外は何をかは思ひ出でゝも人を
忍ばん

○續拾遺戀二に辨内侍、逢ふまでの
命を人に契らずばうきに堪へてもえ
やは忍ばん
○新勅撰賀 うれしさを昔は袖につ
ゝみけり今夜は身にもあまりぬる哉

○新後拾遺雜下に昌算、長らへてあ
るさへ厭ふ老らくの身のあらまはしは
末も頼まじ

○千載集冬に光行、惜しめどもはか
なく暮れて行く年の忍ぶ昔にかへら
ましかば

懷舊歌の中に

上野太守守永親王

かくばかりうきに堪へてもあるものをいかで昔を恨み來つらん

前中納言爲忠

思ひ出づる袖に涙をつゝむまでうれしかりしは身の昔哉

昔せし身のあらましの末の露變れば袖のしづくとぞなる

後村上院とりわき御めぐみありし事など忍ばしく

思ひ出されさせ給うければよめる

關白左大臣

今は又涙になしてつゝむ哉袖に餘りし君がめぐみを

題しらす

菅原爲基

いかにせん忍ぶ昔は歸り來で涙に浮ぶ代々のふること

二品法親王聖尊

○古今集哀傷に閑院、先だぬ悔の
やちたひ悲しきは流るゝ水の還り來
ぬなり〔増〕「かへり來る」と書け
る本見ゆるは非也

○伊勢物語 月やあらぬ春や昔の春
ならぬ我身ひとつはもとの身にして

○櫻雲記文中三年の條云今年の冬宗
良親王信州大河原より南朝へ來る去
る延元の頃東國にくだりて遙に年月
を経て今こゝに至りて其見し人も失
せはてゝ最愁を催し獨懷舊と云ふこ
とを詠す「同じくは共に見し世の云
々先帝在世の時信州より來るべしと
數度勅有りといへども戰場に間無く
遂に果さず今吉野に來て愁傷一方な
らず

○千載集戀四に師時、立返る人をも
何か恨みまし戀しさをだにとゞめざ
りせば

○草庵集 語りても慰むばかり老が
身の忍ぶ昔を知る人もがな

何とたゞ袖のみ濡れて忍ぶらん流るゝ水の還り來ぬ世を

後村上院御製

月やあらぬ花やあらぬと歎き來て忍ぶ昔ぞ身につもりぬる

懷舊非一と云ふことを

我忍ぶ同じ心の友もがなその數々を言ひ出でゝ見む

延元の頃東國へくだり侍りし後多くの年月を経て

文中三年の冬吉野の行宮に參り侍りしかども見し

世の人も無くよろづ昔思ひ出でらるゝことのみ多

く侍りしに獨懷舊と云ふことを

中務卿宗良親王

櫻雲記

同じくは共に見し世の人もがな戀しさをだに語り合はせん

千首歌奉りし時老後懷舊を

世語りに誰傳ふらん老が身の只目の前に過ぎし昔を

○續古今哀傷に右大將通雅母、身まかりての頃云々、同じ思ひにて粟田口の山莊にこもり居て侍りし春の花の頃つかはし侍りし太上天皇、雨となり雲となりし形見にも紛ふ櫻の色や見るらん、法皇外記に右大臣藤定雅號三粟田口入道又後花山院とあり通雅の大將は右大臣定雅の男なり文貞公も花山院の庶流なれば同じ山莊なるべし

○後撰集に「たゞに忘れね」王葉集に「とひて歸りね」などあり「忘れね今は」の「ね」は仰する辭なり

○古今集雜下 つくばねのこのもとごとくに立ちぞ寄る春の深山のかけを戀ひつゝ

○類題に長明思ひ出で忍ぶもうしや古へをさは東の間も忘るべき身か

〔増〕續千載戀一に今上御製、忍べばと思ひなすにも慰みて如何にせよとて洩れし浮名ぞ

○新後拾遺雜上に經定女、思出の無き古へを忍ぶるは身のうき事や猶まさるらん

〔増〕思ひ出とを國歌大系本に「思ひ出も」とせるは非也

シモツツサ
下總國に赴き侍りける時、粟田口の山莊を過ぐと

て思ひ續け侍りける
文 貞 公

櫻雲記
此里に御幸せし世の面影ぞ今日は涙と共に先だつ

題しらす

よしやその折々事の思出も忘れね今はかゝる憂き身に

中院人道一品

いかにせん春の深山の昔より雲居まで見し世の戀しさを

從三位行義

思ひ出で慰みぬべき古へも忍べば老の涙とぞなる

右衛門督維教

思ひ出と思はで過ぎし古へを忍ぶに今のうさぞ知らるゝ

正平十九年三月住吉社に行幸ありて人々百首歌つ

○續古今雜中に藤原基政、見し世こそ思ひ出でゝも忍ばるれ知らぬ昔のなぞや戀しき

○類題に雅親、昔思ふうつゝの夢の浮橋はぬるがうちこそとだえなりけれ〔増〕續千載雜上に藤原基任、老となるつらさも知らで急がれし昔の年の暮ぞ戀しき、續後拾遺雜下に禪心法師ともしればかこち顔なる涙哉老となる身は人の咎かは、などを合せ見るべし

○後撰集哀傷 うつゝにもあらぬ心は夢なれや見てもはかなきものを思へば

○續後拾遺雜下に爲道、はかなくも今をうつゝと頼む哉過ぎにし方の夢にならして

かうまつりけるに老後懷舊と云ふ題を賜はりてよ

みて奉りける

從三位俊文

老いてこそ今思ひ出はある身なれさても昔のなどや戀しき

往事如夢

前大僧正忠雲

昔思ふうつゝやいと夢ならむ老となりゆく身のはかなさに

題知らず

正三位國夏

あやにくに老は寢難くなりけり夢路ならでは見えぬ昔を

前大納言光任女

いたづらに過ぎ來し方は夢なれやうつゝに残る思ひ出も無し

入道前關白左大臣

はかなしな過ぎにし方の世語りを夢と知りても忍ばるゝ身は

右大臣家の百首歌中に

前中納言實秀

○古今集戀二に敏行、戀ひわびて打ぬるなかに行き通ふ夢のたゞちはうつゝならなん○同集戀三に業平、寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさる哉

○古今集戀二に小町、思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを

○拾遺集戀四 たらちねの親のいさめしうたゝ寢は物思ふ時のわざにぞありける「増」萬葉第九不禁行事

「増」萬葉第十二 ぬば玉の夜を長みかもわがせこが夢に夢にし見えかへるらむ

「増」續古今戀三 見る夢のさめてもさめず悲しきは如何に寝し夜のなごりなるらん

思ひ寢の夢のたゞちに通ひ來ていやはかなゝる身の昔哉

千首歌めされし時夢中懷舊

御 製

思ひつゝ寢れば見し世に歸るなり夢路やいつも昔なるらん

右近大將長親

あはれにぞ無き面影も通ひける親のいさめしうたゝ寢の夢

百首歌中に

文 貞 公

夢に夢さてもうつゝに見なさばやあるにもあらず移りゆく世を

懷舊の心を

後醍醐天皇御製

物思はで過ぎぬる方の年月はいかに寝し夜の夢にかあるらん

新葉和歌集 卷第十九

哀傷歌

舊遊零落半歸泉と云ふことをよみ侍りける

文 貞 公

見し人のなかばは歸る泉河おくるゝ浪もあはれ何時まで

後醍醐天皇かくれさせ給ひし頃よみ侍りし

中務卿宗良親王

李花集 櫻雲記
おくれじと思ひし道もかひなきは此世の外のみよし野の山

前大納言爲定身まかり侍りし頃かの遺跡によみて

つかはし侍りし哀傷五十首歌中に

李花集
別れ路にありと云ふなるしての山越えて歸らぬ旅ぞ悲しき

○白氏長慶集云往事渺茫都似夢、舊遊零落半歸泉

○李花集云 先帝崩御の後はいとゞ吉野の奥の同じかざしもゆかしう思ひやられ侍りしかども今はそれも又何のかひ有るべきなどさまゝに歎かれ侍りてよみ侍りし
○又云正平十五年三月十四日御子左大納言入道身まかりけるよし聞えしかばあはれとも中々言の葉も無きこゝちし侍りて月日をのみ歎き暮し侍りし程に都へ便宜ありしかば哀傷五十首歌よみて爲遠朝臣のもとへつかはし侍りし
○拾遺集哀傷に伊勢、しての山越えてや來つる時鳥戀しき人のうへ語らなむ

○古今集戀三 思へども人目づゝみの高ければかはと見ながらえこそ渡らね〔増〕かはと見ながらの「かは」は彼はと云ふに川を添へしなり
 ○古今集旅に業平、名にしおはどいざこと問はん都鳥わが思ふ人はありや無しやと

○住み侍りける寺は住吉の西林院なり釋教部なる「わが頼む西の林の花」云々の御贈答考へ合すべし〔増〕此集釋教に西林院と云ふ處に住み侍りける時かの寺の梅花をめされけるに奉りければ後村上院御製「わが頼む西の林の花」云々、御返し後醍醐天皇大納言典侍「頼みける君がめぐみの色そへて」云々とありこゝに寺の梅とあるは西林院の梅なり
 ○續拾遺雜春に權少僧都嚴雅、古へのあるじ忘れぬ古里に花も幾度思ひ出づらん〔増〕君が情、原本「君の情」とあり松井本に依りて訂正す

李花集 わかれ李花集
 さばかりにつらき渡りを三瀬河かはと見ながらなど歸り來ぬ
か歸らぬ李花集
 思ふ人無しとは聞きつ都鳥今は何てふ事か問ふべき

住み侍りける寺の梅を後村上院常にめされけることを思ひ出でてかくれさせ給うて又の年の春、新宣陽門院いまだ一品宮と申しけるに奉るとて

後醍醐天皇大納言典侍

春ごとに訪はれし君が情ナサケをば花もさこそは思ひ出づらめ

百首歌よませ給うける中に春月を

新宣陽門院

つらかりし三月ヤヨヒの夜半の涙より袖にや月の霞みそめけむ

信濃國に侍りし頃、後村上院まかりのぼるべきよし度々仰せられしを、とにかくにとゞこぼる事あ

○或書云將軍の宮信濃國より吉野へ御のぼりありて故院の御弔ひありける時よませ給ひける「數足らぬ歎きに鳴きて」云々と詠じ今上に奉り給ひ又信濃國に御下向ありし云々

○古今集旅 北へ行く雁ぞ鳴くなるつれて來し數は足らでぞかへるべらなる

○李花集云御子左大納言いまだ中納言と聞えし頃あはれなる世の中の事ども申おこせ侍りしついでに法印俊慶さへ無くなりぬるよしなど言ひて「思へたゞ花咲く春を」云々「うたてなど吾もあるにはあらぬ世にはかなき夢を重ね來ぬらん」と申侍りし返事に「つらなりし枝もあらばと」云々「よそに猶はかなき夢を見る程ぞうつもの吾もあるこゝちする」

○千字文云孔懷兄弟同氣連枝、註云此言甚念兄弟之義同受父母之氣一如樹之有枝相連而生

○後撰集戀六 いかにしてこと語らはむ郭公なげきの下に鳴けばかひなし「増」歎きの「き」に木を添へて「もとに」に續け云へり

りて、かくれさせ給うて後、吉野の行宮に參りて
又やがてかの國へと思ひ立ち侍りしに歸る雁の鳴
くを聞きて
中務卿宗良親王

體雲記 南朝紀傳

數足らぬ歎きに鳴きて吾はたゞ歸りわびたる雁の一つら

法印俊慶身まかりにける頃前大納言爲定のもとよ

り「思へたゞ花咲く春を待ちかねてつらなる枝の

枯れし歎きを」と申送りて侍りし返事に

つらなりし枝もあらばと思ひ出て花咲く春は猶や歎かん

後醍醐天皇かくれさせ給ひて又の年の春花を見て

よませ給うける

新待賢門院

時知らぬ歎きのもとにいかにして變らぬ色に花の咲くらん

つはものゝ亂れによりて吉野の行宮をも改められ

○李花集云塔尾の御廟の花なん昔な
がらの色香にて、なつかしくおぼし
めされければ同じ心にも見よとて一
房御文の中につゝみ具せられて「み
吉野は見しにもあらず」云々、御返
事に「今見てもおもほゆる哉」云々
「尋ね見る人の爲にや残りけん同じ
かざしのみよし野の花」と申侍りし
に幾歳も隔てざりしに女院も御かく
れありしかば更に又世の中暮れ悲ひ
ぬることちして後の春又かの御文を
取出して見侍りしにしほめる花もさ
ながらつゝみ加へられて見しまゝな
れば、いとゞあはれにて「尋ねても
今はた誰かみよし野の花の昔を吾に
語らん」

○新續古今春下に深守法親王、慕ふ
ぞよありてはて憂きことわりもあだ
なる花の色に忘れて○古今集哀傷に
篁、水の面にしづく花の色さやかに

て次の年の春、塔尾の御陵にまうで給はんとて、

かの山に登らせ給ひけるに藏王堂を始めて、さな

らぬ坊舎ども、皆煙となりにけれど御陵の花ばか

りは昔に變らず咲きて、よろづあはれにおげえ給

ひければ一ふさ御文の中に入れて賜はせ侍るとて

李花集 櫻雲記
み吉野は見しにもあらずあれにけりあだなる花は猶殘れども

御かへし
中務卿宗良親王

同 同
今見てもおもほゆる哉おくれにし君がみかげや花にそふらん

同じ御陵のほとりに櫻を千本植うべきよし思ひ立

ちて年々に植えけるが、やうく花も咲きければ

よめる
粟田久盛朝臣

櫻雲記
植え置かば苔の下にもみ吉野の御幸の跡を花や殘さん

も君がみかげのおもほゆる哉、散り
 つもる昔の下にも権中納言通親、散り
 残るらん
 〔増〕此巻の下に、なれて見し十とせ
 あまりの秋の月苔の下にも思ひ出づ
 らん
 下に妙光寺内大臣あはれてふ事を
 あまたに袖濡れて無きが數そふ世を
 歎く哉、〔増〕續千載哀傷に式乾門院
 御匠、鳥部山はれせぬ峯や無
 きか數そふ煙なるらん、無きが數そ
 ふふ」とは死人の數が増加する意なり
 新千載哀傷に、鳥部山峯に絶えせぬ
 浮雲やおくれ先だつ煙なるらん」と
 言へり同義なり
 古今集春下り、残り無く散るぞめて
 たき櫻拾遺ありて世の事、草深き夏
 野の道に迷ひても世のことわりぞ更
 に知らるゝ、〔増〕第三の句「背かれ
 んぬ」松井本には「ありはてぬ」とあ
 り同義なりいづれにても可ならん
 ○正平二十三年三月十一日南帝崩御
 吉野の如意輪寺に葬、後村上院十一
 奉る村上天紀傳云、二年三月十一
 日、後村上天紀傳云、二年三月十一
 意寺にて大法會あり、導師日野大僧正頼
 意に給ふ、其時宗良親王歌あり、二十
 三年崩御、忠順按、天授二年は御和二十
 三當れり、に七回忌とあるは非也
 櫻雲記に九回忌とあるは非也
 尾山如意輪寺は吉野勝手社、の塔

寄花無常と云へることを

右近大將長親母

見し人の無きが數そふ春を経て花もあだなる世とや知るらん

二品法親王仁譽

残り無く散るにつけても背かれぬ世のことわりぞ花に知らるゝ

吉野の行宮にてよませ給うける御歌の中に

後醍醐天皇御製

あだに散る花を思ひの種として此世にとめぬ心なりけり

天授二年三月十一日如意輪寺にて御佛事行はれけ

る時、前大僧正頼意のもとへ申つかはし侍りし

中務卿宗良親王

南朝紀傳 櫻雲記
 幾春か散りて見すらんつらかりし花も昔の別れながらに

○新續古今秋上に後元嚴院、秋を経て古枝に咲ける萩の戸の花も昔の色や變らぬ、同集春下に深守法親王、慕ふぞよありてはてらきことわりもあだなる花の色に忘れて

〔増〕かへりこで、原本にも松井本にも「うつりきて」南朝紀傳には「かへりみて」とあるを紀傳の寫本に「かへりこで」と書けるを善しとす〔増〕「あかれ」は離れ去るなり源氏物語などに多く見ゆ

○後村上院正平二十三年崩御より天授二年まで九年なり○古今集序云かゝるに今すべらぎの天の下知るしめすこと四の時九かへりになんなりぬる

○此集雑上 年を経てあはれとぞ見るもろかつら二葉變らぬ同じかざしは○新千載夏に藻壁門院少將、水の面におのが思ひをかつ見つゝかけ離れぬや蝨なるらん

○千載集哀傷に鳥羽院、常よりもむつまじき哉郭公しての山路の友と思へば

かへし 前大僧正頼意
南都紀傳 櫻雲記
慕へども見し世の春は歸り來てあだなる花に残る面影

次の日おのゝまかりあかれ侍りける程懷舊の歌
つかうまつりけるを聞こしめして 御 製

同 同
四の時こゝのかへりになりにつけり昨日の夢も驚かぬまに

後醍醐天皇かくれさせ給ひて後、御硯のなかより
葵に二葉變らぬ同じかざしはなど書かせ給ひて入

櫻雲記
これられたりけるを御覽じて 新待賢門院
かれつゝも二葉變らぬ草の名をかけ離れぬる吾ぞ悲しき

次の年の夏よませ給うける御歌の中に

今年こそいとゞ待たるれ時鳥しての山路の事や語ると

金光院入道右大臣身まかりにける頃郭公を聞きて

○源氏物語補卷 大方の秋の別れも悲しきに鳴くねな添へそ野邊の松蟲

○鳩嶺雜事記云應安元年（正平二十三年）三月十一日住吉御所崩御、御年四十一、奉_レ號_二後村上院_一

○大日本史曰據_二嘉喜門院集、新葉集_一後村上院崩年五月五日寄_二菖蒲_一和歌似_レ有_二母子之情_一其叙一品遂爲_二門院者亦或以_二母尊之故_一也、然無_二明證_一今闕_レ之○椎柴の袖は喪の服にしびの色を用ふるなり

○拾遺集哀傷に粟田右大臣、忍べとやあやめも知らぬ心にも長からぬ世のうきに植えけむ

○徒然草云諒闇の年ばかりあはれなる事はあらじ倚廬の御所のさまなど板敷をさけ廬の御簾をかけておのもかうあらしく御調度ども、布のそかに皆人のそぞく太刀の平緒まで異様なるぞゆゑしき

○書云高宗諒陰三年不_レ言、朱註云諒陰天子居_レ喪_一之名

○大日本史曰藤原康子生皇太子恒良及後村上帝、成良親王、祥子内親王、惟子内親王、正平六年十二月上_レ號

曰_二新待賢門院_一十四年四月薨_二於吉野_一年五十九、後村上帝爲喪服三年

よめる

更に又鳴くねな添へそ時鳥無き人忍ぶ頃の寢覺に

後村上院かくれさせ給ひける年の五月五日あやめ

につけて奉らせ給うける

御集には一品の宮よりとあり
新宣陽門院

今日は又あやめの草に引かへてうきねぞかゝる椎柴の袖

御かへし

嘉喜門院

思はずよあやめも知らぬ椎柴の袖すみぞめの御集にうきねのかゝるべしとは

新待賢門院かくれさせ給うて後三とせまで諒闇の

儀にてありけるを御ぶくはてける年の五月五日さ

うぶにつけて前大納言實爲に賜はせける

後村上院御製

櫻雲記
今更にねにこそたつれ三年まで菖蒲アヤメも知らて過ぎし悲しさ

○新古今哀傷に上西門院兵衛、今日くれどあやめも知らぬ袂哉昔を戀ふるねのみかゝりて

○或書云右大將長親父内府逝去の後三とせの喪いまだ終らざりし内に故院かくれさせ給ひしかば一方ならぬ思ひにて「三とせまでつきぬ涙の藤衣」云々○和名抄云綾喪服也和名不知古路毛、古へは葛布を以て素服とす賤人の服なるを以てかく言へど實は君も臣も喪には白き麻布也萬葉集令義解などに見ゆ紀に素服をアサノミツとよめり拾遺集二十に服ぬぐとて藤衣はらへてすつる涙川岸にもまさる水ぞ流るゝとあれば赦へして衣を棄てしにや

○後撰集離別に伊勢、さらばよと別れし時に言はませば吾も涙におほれなまし

○拾玉集 いかばかり露けかりけんわしの山苔のむしろの跡のくれがた
○攝津志云住吉郡淨土寺後村上帝車駕駐于此親製和歌永留于寺庫〔增〕
御八講は法華經八卷を八人して講ず

御かへし

前大納言實爲

櫻雲記
菖蒲をも知らず過ぎ來し程よりも今日こそ更にねをば添ツッつれ

妙光寺内大臣身まかりて後、三年の服いまだはた

さざりけるに又後村上院の素服を賜はりて思ひ續

ける
右近大將長親

南朝紀傳 櫻雲記
三年までほさぬ涙の藤衣こは又いかにそむる袂ぞ

從三位行子身まかりける頃人のとふらひ侍りければ

遍照光院入道前太政大臣

無き跡のあはれを人の問ふ度に吾も涙の露ぞ落ちそふ

同じ頃かの墓所にまかりて月を見てよみ侍りける

おくり置きし露のありかを來て見れば苔の莖に月ぞ宿れる

正平十八年八月十六日莊嚴淨土寺にて御八講など

る事なり續後撰釋教に上東門院御さま變りて後八講行はれけるとあり

○新千載戀三に左大臣、あけぬとはなど急ぐらん別れ路の涙にくるゝきぬくの空

○新後拾遺雜下に伏見院、數ふれば十年あまりの秋なれど面影近き月ぞ悲しき

○千載集釋教に寂蓮、曉を高野の山に待つ程や苔の下にも有明の月

○續古今雜上に東三條院いとゞしく物思ふ夜半の月影に昔を戀ふる袖の露けさ

○新拾遺雜上に左兵衛督基氏、もえ出づる春も淺野の若草に隠れもはてずきゞす鳴くなり

〔増〕古今集哀傷に篁朝臣、水の面にしづく花の色さやかにも君が御影のおもほゆる哉「しづく」は本居翁物の水中に見ゆることなりと言へり「みかげ」は御姿なり

行はれける夜、月曇りて侍りければよませ給うける

後村上院御製

秋を経て月やはさのみ曇るべき涙かきくるゝいざよひの空

女の思ひに侍りける頃月を見てよめる

權中納言經高

なれて見し十とせ餘りの秋の月苔の下にも思ひ出づらん

題知らず

新待賢門院

無き影をさそひて宿れ夜半の月音を戀ふる袖の涙に

新宣陽門院

村雲にかくれもはてぬ月見てもまだ見ぬ影ぞ更に悲しき

千首歌よませ給うける時懷舊涙を

御製

○後醍醐天皇在位二十一年、延元四年八月十六日於金峰山行宮崩御、寶算五十二

○大日本史曰興國元年高師泰磨井伊城宗良收傳者後據井伊又爲二節泰所破○櫻雲記云延元三年閏七月二十五日義良親王尊澄法親王宗良以下皇子及北畠親房顯信結城入道源秀欲赴東勢州至勢州一八月十七日勢州より出帆、九月十一日於伊豆崎途難風而舟漂或は没す宗良親王并尊良一宮の舟遠州白羽湊に至り則井伊の城に入興國元年の春宗良親王の城に在りて濱名の橋松原などを見て詠ず一夕暮は湊もそこも白沓の入海かけて霞む松原○延喜式云遠江國引佐郡渭伊神社増延喜式社井伊谷神社宗良親王を祀る明治四年造營

○風雅集旅に寂然、なぐさめに見つゝも行かん君が住むそなたの山を雲な隔てそ

○續千載哀傷 消えはてし露のかたみの言の葉に涙をそへて濡る、袖哉増歎く事とは宗良親王の御子興良が北朝にとらはれしが病死し給ひしなり此卷の下に「親に先だつ道芝の露」吾こそは荒き風をも防ぎしに」云々、御親子御贈答の歌見えたり
○新後撰別に靜仁法親王、立返り山路も深き白露のおくる、袖は濡れまさりけり

思ひ出る昔の御影ミカゲかき曇り涙にしづく袖の上の月

後醍醐天皇かくれさせ給ひし頃、遠江國井伊城に

こもりて、ひま無く侍りしかば參ることも叶はぬ

よしなど四條贈左大臣のもとに申つかはすとて、

かの城の紅葉にそへてつかはし侍りし 中務卿宗良親王

櫻雲記
思ふには猶色浅き紅葉哉そなたの山はいかゞしぐるゝ

かへし 四條贈左大臣

此秋の涙をそへてしぐれにし山はいかなる紅葉とか知る

中務卿宗良親王歎く事侍りし神無月の頃常よりも

時雨がちにて物あはれに侍りし夕つ方申送り侍り

し 關白左大臣

よそに聞く吾だにほさぬ涙哉おくる、袖は猶やしぐるゝ

〔増〕よそに聞くとは親族ならぬ吾だにこれを聞きて歎くに子に先だれし親の身は如何に悲しきことならんとなり

○南朝紀傳云元弘二年十月廿九日師賢卿配所にて逝去同三年七月墓所へ文貞公とおくり給ふ

○或書云尹の大納言（師賢内大臣、藤原師信の子なり）は千葉介に預けられて下總國へ下られる時人々あはれがりて名残惜しみければ師賢卿「わかるとも何か歎かん君すまで憂き古里となれる都を」二心無きありさまいみじくあはれに覺え侍る終に千葉にて失せ給ひけるとぞ

〔増〕玉葉集雜四に枇杷皇太后宮かくれ給ひて御忌の程に月あかき夜よみ侍りける少將「さやかなる月ともいさや見えわかず只かき暗きこゝちのみして」
○古今集戀五に兵衛、しての山麓を見てぞ歸りにしつらき人よりまづ越えじとて

○女院小傳云達智門院大覺寺殿第一御女孺子、母參議忠經女談天門院
○博物志云堯之二女舜之二妃曰湘夫人、舜崩二妃啼以涕揮、竹竹盡班

かへし

中務卿宗良親王

時雨より猶定め無くふるものはおくるゝ親の涙なりけり

シモツツサ
下總國に侍りける頃、神無月の末つ方病ひ重くなりて今は限りとおぼえけるに思ひ續け侍りける

文 貞 公

櫻雲記

雲の色に時雨雪けは見えわかで只かきくらす今日の空哉

同
しての山越えむも知らて都人猶さりとともと吾や待つらん

かくて次の日身まかりにけるとなん

後醍醐天皇かくれさせ給ひける年の冬雪のいたう

ふりける日よませ給うける 達 智 門 院

古への涙もかくや吳竹の色變るまでふれる白雪

雪ふりける日塔尾の御陵に參りて思ひ續け侍りける

○大和に諸陵多し皆南面なり只吉野後醍醐天皇の陵のみ北面なりと言へり遺勅のよし太平記に見えたり塔の尾の陵とて如意輪寺の堂のうしろに在り

○古今集雑下に業平、忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を

見むとは
〔増〕古今集夏に紀俊貞あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれの無きが數そふ春を經て花もあだなる世とや知るらん

○千載戀五に圓位法師、歎けとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙哉〔増〕玉葉雜一に建禮門院右京大夫あらずなる憂き世のはてに時鳥いかで鳴くねの變らざるらん

○半花集云法印俊慶が事を四條一品除資卿申おこせ侍りし文の奥に

○風雅集雑下に院冷泉、厭へども身はあやにくにつれなくてよそのあはれを聞きつもの哉

〔増〕新拾遺雜中に述懐の歌、大僧正忠性いつまでと思ふにつけて老が身は慰む程のあらましも無し

○壬二集 友無くて浪の枕に鳴く千鳥人のあはれも思ひ知りぬや
〔増〕頭おろすとは髪を剃りて佛門に入る意なり

前大納言光任
思ひきや山路の深雪ふみわけて無き跡までも仕ふべしとは

題しらず
妙光寺内大臣

あはれてふ事をあまたに袖ぬれて無きが數そふ世を歎く哉

中院入道一品

歎けとて老の身をこそ殘しけめあるは數々あらずなる世に

法印俊慶身まかりし頃申おこせ侍りし

四條贈左大臣

〔李花集〕いつまでと身を頼みてか聞くたびによそのあはれと猶思ふらん

かへし
中務卿宗良親王

同
いつまでと身を思ふにぞよそに聞く人のあはれも悲しかりける

吉田前内大臣身まかりける時頭カシラおろすとしてよみ侍

○續古今哀傷に道命法師、時鳥鳴く
澤聞かばまづ問はんしての山路を人
や越えしと

○古今集十九 ふじのねのならぬ思
ひにもえばもえ神だに消たぬむなし
煙を「増」空しき煙と云ふべきを
「むなし煙」と言ひて「し」の尾辭
を體言に續け云ふは古格なり今も
「友無し千鳥」「目無し達磨」など
云ふは同例なり「かくだに」とめぬ
とは皆煙となりて原形を留めざる意
なり

○伊呂波字類抄云高野山弘仁七年建
寺是也○新勅撰雜一に世を遁れて
高野山に住み侍りける時よめる參議
成頼「高野山奥まで人の訪ひ來ずば
しづかに峯の月は見てまし」成頼は
中納言顯頼の男なり

○新勅撰雜二に光俊、忍ぶるもわが
ことわりと言ひながらさても昔を問
ふ人ぞ無き、光俊は按察使光親男也
○續後撰冬に定家、あられふる賤男也
さよやのそよ更に一夜ばかりの夢を
やは見る

「増」無きは無き跡にて參議成頼が
無き跡なり又水莖の跡とは光俊朝臣
の書かれし筆跡なり此卷の下に「涙
催す水莖の跡」とあり

○櫻雲記云興國元年八月九日帝御不
豫、十五日義良親王踐祚、主上御腦
風氣故程無く平復せむと奏する人あ

りける

源 重 泰

おくれじと家をば出でぬ同じくはしでの山路も共に越えばや

題しらず

權中納言經高母

空蟬のむなし煙の末終にかくだにとめぬ人の世ぞ憂き

高野山にのぼり侍りける時參議成頼が住みける跡

など見侍りける、かの庵室の柱に光俊朝臣が手跡

にて「ふみわくる谷の木の葉のそよ更に見ぬ古へ

の人ぞ戀しき」と書きつけて侍りける 傍カタラに書き

添へける

四條贈左大臣

尋ね來て無きを訪ひける水莖の跡さへ苔の下になりぬる

吉野の行宮におましましける頃御こゝち例ならざ

りけるを御風のけなれば、さだめて早くおこたら

り于時御製「露の身を草の枕に」云々同十六日帝崩す御年五十一
○續千載秋下に今上御製「露深き夜寒の秋のきりくす草の枕に恨みてぞ鳴く」

〔増〕 風にはよもとの「よも」は俗にヨモヤと云ふ語、風を引きたるやうなればヨモヤ心配する程の事はアルマイと云ふ意なり

○月清集 ならべこし夜半の枕も夢なれや苔の下にぞはては朽ちぬる〔増〕 九重の玉のうてなは皇居なる宮殿の意なり李花集上巻、露しげき草の薈りも月影のみがけば玉のうてななりけり

〔増〕 新千載雜下に道賢法師さびしきさもうき世よりはと慰めて心ぞとまる山里の庵

○藤原清忠ハ左近衛中將俊輔子稱二坊門一、歴官任三左大辨參議一遷三從二位、延元三年薨○大日本史曰清忠在左官與三藤原定房一並爲三帝所寵待、屢蒙三顧問一及三二人相繼薨逝、帝尤悼惜作レ歌曰古等登波牟比等佐倍麻禮仁云々

○玉葉集秋下に二條院讀岐、長月の有明の月も更けにけり我世の末を思ふのみかは

後醍醐天皇御製
せ給はんずらんなど人の申しければ

露ツキの身を草の枕マクラに置きながら風にはよもと頼むはかなさ

同天皇の御陵にまうで給ひてよませ給うける

新待賢門院

九重コウジュウの玉タマの臺ウツテナも夢なれや苔の下にし君を思へば

引つれし百ヒャクの司ツカサの一人だに今は仕へぬ道ぞ悲しき

さびしさも終ツヒのすみかと思ふには心ぞとまる峰の松風

吉田前内大臣右大辨清忠など打續き身まかりにけ

ス頃おぼしめし續けさせ給うける

後醍醐天皇御製

言問はむ人さへ稀ヒツになりにけり我世の末の程ぞ知らるゝ

妙光寺内大臣一周品の佛事しける時つかはされける

○拾玉集 言の葉に色を添へつるけしき哉いとゞ涙のしぐれせよとや〔増〕世の爲にも長らへてあらましかば如何に善からんと云ふ意、新千載釋教に法皇御製めぐり逢ふ今日の御法の筵にもあらましかばの昔をぞ思ふ

○玉葉集戀三に後深草院少將内侍、よしなしと思ふ心のかねてよりありましかばと今ぞ悲しき

○續千載雜中に源有長、知るらめや子を思ふやみの夜の鶴わがよふけゆくしにも鳴くとは

○毛詩云鶴鳴于九臬聲聞于天

○六百番歌合に女房、君故も悲しきことのねはたてつ子を思ふ鶴に通ふのみかは

〔増〕此集雜下に權大納言公夏、難波江や葦間の浪の夜の鶴子を思ふ道は障らずもがな

〔増〕和名抄に切韻云疾へ琵琶ノ撥名也

○玉葉集雜三に前太政大臣、道をゆづる君にひかれて四の緒の其音も高き名をぞあげぬる

後村上院御製

世の爲もあらましかばと思ふにぞいとゞ涙の數は添ひける

御かへし

右近大將長親母

歎きわび無きをば夢と思ふ身にあらましかばと聞くぞ悲しき

權中納言長賢内より預りおきける夜の鶴と云ふ御

琵琶を身まかりて後返し奉るとして思ひ續けける

雲居まで通はば告げよ夜の鶴の鳴くねにたくふ思ひありとは

これを聞きて又よみ侍りける

妙光寺内大臣母

ねにたてば吾劣らめや夜の鶴の子を思ふことも君ひとりかは

かの御琵琶のばちに宸筆にて梵字などあそばされ

て、かへさせ給うける包紙に

後村上院御製

〔増〕兼盛集に琵琶の法師「よつの緒に思ふ心をしらべつゝひき歩けども知る人も無し」契沖云琵琶を「よつの緒」とよめるはこれ始めなるべし

○古今著聞集に孝道塵をだにすゑじと思ひし四の緒に老の涙をいごひつる哉

○理趣經は大般若經理趣品なり

〔増〕新古今戀四に攝政太政大臣、言はざりき今こんまでの空の雲月日隔て、物思へとは

いける世にいかに契りし四の緒のかけ離れてもあられける哉

御かへし

右近大將長親母

思ひきや行末かけし四の緒の引わかれてもあらるべしとは

後醍醐天皇かくれさせ給うて後常にひかせ給ひけ

る御琵琶を御覽じて

新待賢門院

見るまゝに涙ぞかゝる四の緒の行末長きねに傳へても

同じ頃かの宸筆の裏に理趣經を書かせ給うておぼ

しめし續けさせ給うける

達智門院

言はざりき此水莖の流れても残る形見の跡と見よとは

新待賢門院かくれさせ給うて後御日數の程の事な

ど記しおきたるものを程經て後見せ侍りけるを返

○源氏物語若紫卷 吹き迷ふ深山お
ろしに夢さめて涙催す瀧の音哉

○山家集 涙をや忍ばん人は流すべ
きあはれに見ゆる水莖の跡

〔増〕病ひ重くなりて云々、興良親
王の御事なり上にもこれについて關
白左大臣と御贈答の歌見えたり○興
朝紀傳云天授三年宗良親王の御子興
良、北朝のときははれとなり給ひしこ
と年久し今重き病を受け給ひて歌一
首をよみて父親王におくり給ふ一如
何に猶涙をそへて云々御かへし」吾
こそは」云々其後つひに身まかり給
ひぬ
○新後撰雜中に丹波長有、傳へ置く
言の葉にこそ残りけめ親のいさめし
道芝の露
○源氏物語桐壺の卷 荒き風防ぎし
蔭の枯れしより小萩がうへぞしづ心
無き○「こそ」を「し」にて結べるは
金葉集に「古へは月をのみこそなが
めしに」續千載集に「時鳥一聲とこ
そ思ひしに」など多かり
〔増〕をさめは葬りしなり源氏桐壺
の卷に限れば例の作法にをさめ
奉るを母北の方向じ煙にものぼりな
んと云々

しつかはすとて顯氏卿の母のもとへ申おくりける

遍照光院入道前太政大臣

其儘に忘れんとすれば更に又涙もよほす水莖の跡

かへし

左近中將顯氏母

うき程はえも書きやらでなか／＼にあはれや淺き水莖の跡

長月の末つ方病ひ重くなりて今は限りになりぬる

よし申おこせ侍りしついでに

よみ人知らず

いかに猶涙をそへてわけわびむ親に先だつ道芝の露

かへし

中務卿宗良親王

吾こそは荒き風をも防ぎしにひとりや苔の露はらはまし

これを見て次の日の朝つひに無くなりけるとなん

世泰親王かくれ給ひて如意輪寺にをさめ侍りし又

○大日本史曰後村上帝八皇子宮人教子生二世泰親王、親王先帝薨、葬、如意輪寺、帝作和歌悲之

○風雅集賀に前關白太政大臣、大原や神代の松の深みどり千代もと祈る末の遙けさ

○大日本史曰教子失其姓氏一叙二位、世泰親王薨、葬、如意輪寺、明年教子往如意輪寺修冥福、後龜山帝賜和歌慰之、教子奉答歌一益哀之

○後撰集哀傷に貫之、植えおきし二葉の松はありながら君が千年の無きぞ悲しき
〔増〕新續古今戀一に藤原基任、白露ももるてふ山の下染にたえぬ歎きの色や見ゆらん

○新千載雜下に永福門院、こし方を忍ぶ涙の玉くしげ二たび逢はぬ時ぞ悲しき

の年、從二位教子かの寺にこもり侍りけるに夜更くるまゝに佛事の聲など松風にたぐひて聞えければ賜はせける

御 製

松蔭を思ひやるこそ悲しけれ千代もと言ひし君が心に

御かへし

從二位教子

思はずよ松は千年の友ならでたえぬ歎きの蔭と見むとは

隆量朝臣身まかりて年經て後高野山にのぼりて佛

事などしけるついでによみ侍りける

四條贈左大臣

無きを訪ふ涙の露の玉くしげ二たび濡るゝわが袂哉

右近大將長親いときなき子におくれて侍りし頃し

をれたる撫子につけてつかはし侍りし

○後撰集夏 我宿の垣根にうゑしな
てしこは花に咲かなむよそへつゝ見
ん

○新古今雜上に惠子女玉よそへつゝ
見れど露だに慰まずいかにかすべき
なでしこの花「増」こゝの下旬は源
氏若菜の卷に「身を投げん淵もまこ
との淵ならでかけじや更にこりずま
の浪」とあるを用ひしにや

中務卿宗良親王

よそへつゝ思ひやるこそ悲しけれかくやしをれし撫子の花

かへし

右近大將長親

よそへつゝ見ればしをるゝ我袖にかけじや更に撫子の露

新葉和歌集 卷第二十

賀 部

建徳元年正月松契退年と云ふ題を講ぜられ侍りし

ついでに

御

製

十かへりの花咲くまでと契る哉我世の春にあひおひの松

天授七年正月内裏にて春松契久と云ふことを講ぜ

られし時序奉りて

春宮大夫師兼

契りおく今日を千年の始にて行末遠し春の若松

正平十二年十二月後村上院御方違カタタガヘのため家に行幸

侍りける時、人々題をさぐりて五十首歌よみ侍り

けるに松と云ふことを

光明臺院入道前關白左大臣師基公

○類題に後柏原院十かへりの花も見
てしか二葉より百枝さしそふ松に契
りて〔増〕松は百年に一度常ならぬ
花咲くと言へり千年の間には十遍咲
くよしなり新拾遺賀に大納言經顯、
久に經む友とや君に契るらん十かへ
りの松の花の咲くまで「あひおひ」
は相生にて古今集の序に高砂住の江
の松もあひおひのやうに覺えとあり
○後拾遺雜六に源兼澄、ちはやふる
松のを山のかげ見れば今日ぞ千年の
始なりけり
〔増〕方違とは古へ陰陽家の説に方
ふたがりと云ふことあり其時他家に
宿り方角を違へて行くを方たがへと
言へり古今集雜上に方たがへに人の
家にまかれりける時にとあり家に行
幸とは我家に行幸ありしなり

○類題に頓覺ししほのみどりこそへて高砂の松は老木も春を知りける
〔増〕 新拾遺雜上に伏見院、色添へんみゆきをぞ待つともみぢ葉もふりぬる宿の庭のけしきに

○後鳥羽院御集 長き世の友とや契る春日野のまだ二葉なる松のみどりを〔増〕此集雜中に宗良親王家京極うゑ置きし二葉の松の深みどり木高かるべき蔭ぞ待たるゝ

〔増〕 松の落葉云「みぎり」と云ふを近世の歌人は庭の事のやうに心得て歌によめるあり、ひがことなり、これは軒の下に限れり

○古今集雜上に興風、誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなく

○風雅集賀に康資王母、かくしあらば千年の數もそひぬらん二たび見つる箱崎の松

えたる體記
まちにたる君が御幸に色添て老木の松も春や知らまし

同十九年正月内裏にて松有喜色と云ふことを講

ぜられし時

權大納言顯經

君が經ん千年の春のためしとや二葉の松のみどり添ふらん

關白家三百番歌合に砌下有松と云ふことをよめる

右兵衛督成直

此宿の庭にさかゆく松がえはあるじと共に萬代や經む

祝の歌としてよめる

果尊法親王

誰をかも君より外は住吉の松のよはひを知る人にせん

正平十五年九月重ねて住吉社に行幸ありて三首歌

講ぜられし時、社頭松を

入道前關白左大臣

體記
千代を又重ねて契れ御幸して二度なる、住吉の松

○太宰帥親王は泰成親王なり

○後拾遺賀に藤三位、思ひやれまだ鶴の子のおひさきを千代もとなづる袖のせばさを

○五百番歌合に四百九十四番、左前關白きし方に又千代添へて行末を君とし契れ住吉の松○右勝關白、玉椿二たびかげは云々○判者、住吉の神めづらしく思はまし松も花咲く御代にあひつゝ○後拾遺賀 君が代は限りもあらじ玉椿二たび色はあらたまるとも○師兼千首 神路山白玉椿君が代に幾度蔭の改まらまし○本朝文粹第九に後江相公、徳是北辰、椿葉之影再改、尊猶南面、松花之色十廻カヘリ

○宗良親王千首 千年ふる君がみかげの玉椿うゑて名だゝる宿とならん
○續拾遺春下に大納言資季、九重の間近き宿の八重櫻春を重ねて君ぞ見るべき

同じ行宮にて太宰帥親王むまれ給ひし頃うへのを
のこども題をさぐりて歌つかうまつりけるに鶴を

權大納言公夏

住吉の松より巢だつ鶴の子の千年は今日や始なるらん

五百番歌合に

關白左大臣

玉椿ふたゝび陰は改まり松は花咲く御代の久しさ

千首歌奉りし中に寄椿祝を

中務卿宗良親王

千代までとみかく臺ウテナの玉椿うゑて名だゝる宿は此宿

正平十三年正月内裏にて春竹添色と云ふことを講

ぜられける時

福恩寺前關白内大臣

萬代の春を重ねる九重にわきて色添ふ庭の吳竹

○新拾遺賀に關白太政大臣、世々を經し御垣の竹の種なれば末も千年の色ぞ添ふべき

〔増〕 四の句原本「御垣の竹も」とあり松井本に據る

○新續古今雜下に後小松院、九重や庭の川竹變らねば世々の跡あるしるべとぞ思ふ○徒然草云吳竹は葉細く川竹は葉廣し御溝に近きは川竹仁壽殿の方に寄りて栽られたるは吳竹なり

○大日本史曰後龜山ノ一ノ皇子小倉不_レ知_二母氏_一按_二新葉集_三有_下光有爲_上今上第二皇子_二求_三乳母_一文_ハ由是觀之帝ノ子_ハ不_レ止_三于此_一今無_レ所考

○親王を竹の園生と云ふ事前に註せり

○晉書云王徽之性卓犖不羈、嘗寄_二居空宅中_一便令種_レ竹或問_二其故_一徽之但嘯詠指_レ竹曰何可_三一日無_二此君_一耶

○新千載集賀に平貞時、萬代も色は變らじ此君と仰げば高き園の吳竹

前大納言宗房

君が經ん千代をこめてや春くれば御垣の竹の色ミカキの異なる

同十八年正月春竹契久と云ふことを講ぜられける

ついでに

後村上院御製

九重に絶えぬ流れを契り來て春も幾世の宿の川竹

今上第二の御子御乳父の事うけ給はりける頃百首

歌よみ侍りける中に竹と云ふことを

前大納言光有

仕へつゝ吾見はやさん吳竹のさかゆく園の千代の行末

太宰帥親王家にて人々題をさぐりて歌よみ侍りける

の中に同じ心を

右近大將長親

此君とわきてぞ仰ぐ雲居まで生のオホぼるべき園の吳竹

○後拾遺旅に式部大輔資業、急ぎつゝ船出ぞしつる年の内に花の都の春にあふべく

○續千載集賀に伏見院、玉しきの庭の吳竹幾千代も變らぬ春の鶯の聲

○續後撰賀に正三位成實、紫の藤坂山に咲く花の千代のかざしは君が爲かも

○續後拾遺神祇に後嵯峨院、明らかき日吉の影を頼みつゝのどけかるべき雲の上哉

文中元年正月内裏にて鶯千春友と云ふことを講ぜ

られし時

前左近大將公冬

千代經べき花の都にしるべして御幸ともなへ春の鶯

皇子みこにあましましける時、内裏にて人々題をさぐ

りて百首歌つかうまつりける時梅を

御 製

幾千代も變らず匂へ植ゑ置きて我が春知らん庭の梅がえ

正平十一年正月内裏にて梅花久薫と云ふことを講

ぜられける時序奉りて

與喜左大臣

君が爲玉しく庭に植ゑ置きて千代のかざしと匂ふ梅がえ

遍照光院入道前太政大臣

春日影のどけき雲の上なれば梅も千年の香に匂ふなり

冷泉入道前右大臣

○こり、さくとは凝華舎の事なり飛香舎の北に在り續後撰春上に凝花舎の梅盛なるを見て前太政大臣いろくこりにこりさく庭の梅の花幾世の春を匂ひ來ぬらん

○古今集賀に興風、いたづらにすぐる月日はおもほえて花見て暮す春ぞすくなき

〔増〕雲の上は禁中の意、續千載春上に前太政大臣をさまれる御代の始に立つ春は雲の上こそどのかなりけれ

○續古今集賀に土御門内大臣も、しきは龜の上なる山なれば千代を重ねよ鶴の毛衣〔増〕玉葉集賀に後嵯峨院、吹く風もをさまりにける君が代の千年の数は今日ぞかぞふる

○古今集二十、筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにますかげは無し

○正治百首に鏡光、雲の上の露のうてなは影近く月を宿さむ爲にぞありける○江家次第云仁壽殿露臺○崑玉集云露臺は内裏にて關白殿の御直に参らせ給ふ處なり
〔増〕題を賜はりてよみて奉りける流布本「よみて」の三字無し松井本に依りて補ふ

色も香も千代まで匂へも、しきやこりさく梅は今盛なり

同じ年の三月内裏にて風靜見花と云ふことを講ぜ

られ侍りけるに

民部卿親忠

吹く風の長閑なる世も知られけり花見て暮す雲の上人

前左近大將公冬

雲の上は吹くとも見えぬ春風に花ものどけき色ぞ久しき

前左近中將光實

吹く風もはやをさまりぬ今年より千代を重ねよ九重の花

題知らず

前中納言爲忠

曇り無き露の臺ウツタナの月はあれど君が御影は猶まさりけり

正平二十年内裏三百六十首歌に題を賜はりてよみ

て奉りける時、秋夜を

從三位俊文

○新勅撰神祇に源公忠、月よみの天にのぼりて闇も無くあきらけき世を見るが樂しき〔増〕此集神祇に従三位俊文〔増〕長にあまるめぐみを老いてみしめ細身〔増〕あはるうれしきとあり結句原本に「あへるうれしき」とあり松井本に依りて訂正す

○新續古今秋上に前太政大臣、曇り無き雲居の月をみかほ水共にすむべき千代の行末、古今集源氏物語などに「みかほ水」見ゆ御溝水なり四時祭式に御川水祭あり禁溝とも書けり年中行事歌合に寄「御溝水」戀の歌あり

○續千載賀に後嵯峨院、久方の天のいはとのあけしより出づる朝日ぞ曇る時無き

〔増〕新古今離別 もろこしも天の下にぞありと聞くてる日の本を忘れざらん、新拾遺賀に基後、萬代に萬代添へて増鏡君がみかげにならべてぞ見ん

〔増〕新千載雜上に兼好法師、久方の雲居のどかに出づる日の光りに匂ふ山櫻哉

〔増〕わりごは食物を入るゝ器なり土佐日記正月七日の條に今日わりご持たせて來たる人云々、和名抄に裸子中ニ有レ障之器也

秋の夜の長き齡ヨハヒに見る月のあきらけき世に遭ふが嬉しさ

禁中月と云ふことを

中 宮

君すめば千年の秋もみかほ水曇らぬ月の影宿るなり

皇子ミコにあましましける時、内裏にて三百首歌講せ

られけるに寄日祝と云ふことを

御 製

久方の天の岩戸を出でし日や變らぬ影に世を照すらん

前内大臣 顯

大空に照日ナルの本の名もしるし君がみかげは曇らざらん

前中納言 惟季

久方の雲居長閑に照らす日も光りを添ふる君が御代哉

任吉の行宮にあましましける頃、人々いろくの

心ばへを盡して風流の破子ワヤゴども奉りける中に神主

○新勅撰賀に後白河院御時八十嶋の祭りに住吉にまかりて權中納言長方神垣や磯邊の松に言問はん今日をば世々のためしとや見る、江家次第云八十嶋祭大嘗會次年行_レ之

〔増〕 いましはやは今し早の意歟、原本には「いましめや」國歌大系本には「いましもや」とあり松井本に據る

○古今集賀 わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ君が千年の有り數にせん
○南朝紀傳云延元元年帝三種神器を御拜ありて御製「四の海浪もをさまる云々」「九重に今もますみの」云々或書には興國二年四月太神宮奉幣の時よみて奉らせ給ふとあり

國量、八十嶋の祭りの形を造りて奉りけるを御覽

じて

後村上院御製

御被_レする八十嶋かけて今しはや浪をさまれる時は見えけり

此御製をうけたまはりて

從三位國量

君が代のあり數なれや御被_レする八十嶋廣き濱の眞砂は

題知らず

後村上院御製

四の海浪もをさまるしるとして三の寶を身にぞ傳ふる

九重に今もますみの鏡こそ猶世を照す光りなりけれ

被^リ綸^ル言^ヒ傳^フ、和歌撰集者、源出^ハ平城^ニ、皇都^{ヨリ}流^レ至^ル正
 中、聖朝^ニ源流寔繁、修撰世燭、而頃年以來依^リ有^ル
 四海風塵之警、久^シ空^ク六義採擇之席^ニ、誠是朝廷之
 缺典、斯道之凌替者歟、爰新葉集、衆篇鏤^レ金、每
 部飾^レ玉、翡翠之羽毛採而無^ク遺^ト、犀象之牙角抽
 而必舉、可謂拔^ク萃^ラ乎近代、豈特推^キ美^ヲ於上世乎、
 叡感之餘^{アリ}、所被^レ擬勅撰集^ニ也者、綸言如此、以^ニ此
 旨^ニ可^ク令^レ洩^シ申^ニ入^ル入道中務卿宮給^ニ、仍執達^ス如件、

十月十三日

右少辨資茂

謹上二條少將殿

村上忠順翁の事蹟について

深 見 愛 子

私の實父忠順の事蹟について御話申上げたいと存じます。三河國碧海郡堤村なる村上忠順は文化九年四月朔日誕生天性溫順沈重で敬神愛國の志深く、幼き頃より讀書を好み、四歳にして唐詩選を暗誦、五歳にして孝經を讀み、六七歳の頃四書五經を讀みました。それより種々の書を閱覽し、十五歳の頃名古屋へ往きまして祖先以來の家業醫學を研究し、傍ら和漢の書を繙き、特に皇國の學に熱心で、和歌も好む所で十名以上の師について學びました。

十九歳の春祖父忠幹は同郡刈谷の城主土井大隅守に醫業を以て召出されましたから、忠順は家業を營みながら、學事を怠ること無く、食事の間も傍に書を置き、夜も僅の間眠るのみにて、朝は日の出と共に起き出でて身を淨め神を拜し、家業にいそしみました。寸陰を惜みて學事を勵み、世に得難き書を読むごとに寫し置たる書物は一千餘卷に及び、文庫に秘藏して御座います。其中に書入の無い書籍は珍らしいと申す程意を盡しました。宮内省内務省大藏省より數百卷御借入れになりましたこともありましたが、國學和歌の子弟も多くありました。著述又は編纂せられたる書物にして世に公になりましたものも數十部ありますが、いまだ櫻木に物せざる稿本も數多御座います。

祖父忠幹は三代の主君に仕へ、六十九歳で歿しました。始め召出されました大隅守の御相續人は堀田様より御養子にて土井淡路守利祐侯と申されましたが、御若年で御逝去になりました。御姫様が一人ありまして御相續人は遠州濱

松の城主井上河内守より入らせられ、土井大隅守利善侯と申されました。此御方の時代に祖父が歿しました故、父忠順に相續を仰せつけられ、學問師になりました。毎月殿中にて和漢の書を始め、治亂興廢の事などを講義申上げ、和歌も御指南致しました。春は花の時、秋は紅葉の頃、堤の里の實家へ御乘馬にて御出で遊ばされ、御歌遊はさるゝことも御座いました。御一新前の事にて世間が騒がしく、各藩いづれも勤王佐幕の二派に分れて互に争ひました。わが刈谷藩の如きは家老をはじめ勤王を唱ふるものは雨夜の星の如く僅かでありました。尤も大和十津川の一擧に戦死を遂げました松本鎌三郎、宍戸彌四郎などは、刈谷藩士で私の習字の友でありましたが、此人たちを除きましては勤王を唱へます者は殆ど無い位でした。其前より父忠順は君侯始め諸士にわが國體の尊き事、皇祖の天壤無窮なる事、尊王愛國の正理なる事を、時につけ折にふれて御話申上げました。然し藩侯は兎に角、諸士の中には幕府の恩義を云ふのみにて勤王を唱ふるものは僅少で、父忠順が勤王を唱へて一藩の人心を騒がすからとて、城下に囚屋を作り、父を幽閉せんとしましたが、もとより惡事を犯したと云ふ譯ではありませんから、役人が父を呼出して一藩佐幕説に傾いて居るのに、勤王を唱ふるはよろしからざる故、謹慎致すべきやう申渡されましたが、父は其主義とする所は少しも素志を曲げません。其後勤王に志を寄する人たちが増加致しまして、數名相議して國家老二人と江戸家老一人が御殿へ出仕したる歸途大手御門より出づる所を十人ばかりの勤王の士が待ち受けて家老三人の首を斬りましたが、何の御咎めもありません。それより御一新になりました頃利善侯と申す君公が御亡くなりになりました、播州林田の建部侯から御養子を御迎へになりて、土井利則侯と申しましたが、明治二三年の頃に御亡くなりになりました。夫人は堂上の平松家より御入りになりましたが、其御方も忠順を御慕ひなされて堤の家へ度々御出でになりました。忠順が親に

事へて孝行でありました事は、刈谷の城下と堤の實家とは三里ほど隔たつて居りますが、刈谷に居ります祖父が少しでも病氣の時は、三里の道を歩いて祖父の許に至り、夜もすがら枕邊にありて看病を致し、明くれば登城をし暮るれば又看病をすると云ふ次第でありました。

慶應戊辰の三月二十日頃、大河内潜（北畠治房男爵）が御出でになりました。有栖川宮熾仁親王の仰せに、扈從者の中に古典に明らかなものが無いから、忠順に出仕すべきやう御申傳へになりましたが、田舎の一書生にして、王佐の才などは勿論無き事なれど、御辭退申すも失禮の事と存じ、姻戚鈴木保を従へて駿府の城へ参着致しました。

昔景行天皇の御代に日本武尊が御東征の時、伊勢の神宮を参拜あらせられた例にならひて、任務冥助の祈願使を御遣はしになる其願文を、忠順に起草せよと御命令になりました。忠順は感泣して台意の御趣旨を諒し、至誠純一皇運の隆盛と賊徒誅滅の奏功について冥助を垂れ給はんことを起草して奉りました。宮様は御覽遊ばして余の心を得たりと御嘉納遊ばされ、三日の間齋戒沐浴して御親書を御認めになり、それを松浦主膳と廣田彦丸の兩人に持たせて伊勢の兩宮と熱田の宮へ御遣はしになりました。

西の丸御在城中は日々宮様の仰せ言を承り、何くれと仕へて居りましたうちに、夏の初より秋の末までに東北戦争も平定し、世の中も穩かになり、江戸は東京と改まり、明らかに治まる御代となりました。其年即ち慶應四年九月、天皇陛下は東京へ御幸あらせられ、十二月二日大總督宮は御参内遊ばされました。宮様の御詠に

武藏野にかばねさらさむと思ひしを御幸かしこく仰ぐ今日哉

それから十二月五日に宮様は凱陣し給ふ事になり、私の親族鈴木保は御旗衛士に、亡夫藤十は御馬衛士の命を蒙り

まして、御供の人々は、いづれも御下賜になりました黒羅紗の三才羽織、紫吳呂の袴を着け、葦山笠を用ひたと申す事御座います。其月の十八日に岡崎の本陣に御着になりました、長くも私の子供まで拜調仰せつけられ、御手づから御菓子などを賜はりました事は、一族の光榮とする所で御座います。翌日熱田へ御着、宮様は海藏門から御下馬し給ひて神前へ御進みの上、御参拜遊ばされました。二十三日に鏡驛の本陣に御宿り遊ばされし時、親族兒島基隆を御前に召出され、御言葉賜はりました。親族どもは其喜びにとて酒酌みかはしました時、肴の中に氷魚がありましたさうで父忠順が

官軍にひを経て君が仕へこし今日のことほぎ萬代までに

兒島基隆が

ひを経て忘れむものか萬代の家づとにせむ君が言の葉

亡夫藤十も

とりぐにかぐはしき哉ひを経つゝ仕へし君が言の葉の花

とよみました。其時に矢張親族で軍事目付を仰せつけられました丸茂經忠が参りました、

かねてより君が心を磨きつゝ月日を経たるかひはありけり

とよみましたさうで御座ります。かくて二十五日に宮様は御道中御恙無くめでたく京都へ御着になりますと、堂上方は騎馬にて御出迎へになります、三條橋より木屋町を上つて御進みになりました。軍務官から建てられました。稽古場の前では火筒の音喧しく、丸太橋の上には兵士が整列して凱聲を三度挙げますと拜觀の群集がこれに和して、其

聲天地にとどろきわたる勇ましさは何とも譬へやうの無い位で、其時のやうに喜ばしく嬉しかつた事は無かつたと父が常々申されました。其日の凱陣を祝ひ奉りて父が、

千萬のいくさことむけかへらせる今日のよごとは國もとどろに

亡夫藤十が

國のあたうち平らげてかへります都大路は賑はひにけり

とよみまして二首とも短冊に記してたてまつりました。かくの如く天下御平定になりましたから、御暇を願ひましたら、御前に召されて懇なる御言葉を賜はり且白縮緬などの御下賜品が御座りました。眞に感泣に堪へ無かつたと父が申しました。

猶忠順の事について申上ぐべき事が御座ります。維新前より正義の有志者が折節参りましたが、弟忠淨は此人たちに親密に交はりしもの幾人もありました。此人たちが國家の爲に種々事を謀りました中に伊勢の神宮を他へ移轉したと云ふ企てがありましたさうで、大和一擧の時、浪士たちを潜伏致させました事について徳川氏より嫌疑を受けましたが、明治五年三月額田縣から捕方が四十餘人参りまして、私の弟忠淨を縛しまして、父忠順をも捕縛せんと致しました時、父が申しますには何事の罪で御座りますか、一向其意を得ません。此多勢の捕方は更に合點が行きません。私は逃げも隠れも致しません。まだ今朝の食事を致しませんからと申して食事をする間に家の内を始め土藏や文庫に至るまで嚴密に搜索したる上、皆封印を致してしまひました。手紙などを取出して調べましたが、何も怪しい事が無かつたさうで、其日の暮方に兩人に手錠をかけまして、駕籠に乗せて額田縣へ送られました。私の妹婿鈴木保の家は

隣にて家屋敷が廣かりし故、潜伏の疑があつたものか、共に捕はれて行きましたが、これは間も無く放免になりました。父と弟は日々札問を受けて忠淨は十三日に京都府へ送られました。同府には同事件のものが多人數拘留せられて居りました。忠順は忠淨より前に京都へ送られ、二日間拘留になり事實取調の結果無罪にて放還せられました。忠順は京都より還り、忠淨は京都へ送らるゝ其途中で駕籠がすれ逢つたさうです。忠淨は明治五年三月四日から翌六年九月廿一日まで京都に留め置かれまして、いよゝ無關係の事がわかり謹慎三十日の申渡があつて京都の親族に引渡されました。忠淨の友人中に關係者がありましたので嫌疑が深く、かくの如く長く留め置かれました。

前に申上げました如く所有の書物が澤山ありました故文庫を建て、又忠順の履歴を碑に彫りつけたら善からうと云ふ事で、深見篤慶、即ち亡夫藤十が文庫並に碑を建てました。篆額は畏くも有栖川大將の官より御染筆を賜はりました。かくて明治十七年十一月の初め頃より病氣になりました。二十三日に七十三歳で死去致しました。有栖川宮より玉串料を賜はりました。其死去の四五日前まで机に倚りかゝつて書き物などを致して居りました。自分の肖像を存生中に書かせまして、それに題しました歌は、

ますらをの磨く心の白玉はいてりとほらむ天地のむた

事しあらば我身ひとつは君のため火にも水にも入らむとぞ思ふ

世の事は聞かじ求めじしめやかにひとり書見るよもぎふの庵

明治十八年神道管長より少致正を贈られました。これで忠順の御話は終りましたが、本會の御趣旨に叶ひますか如何、宜しく皆様の御取捨を願ひます。(史談會講演)

新葉和歌集増註別記

品 田 太 吉

新葉和歌集について

新古今集の頃は、わが敷島の道の高嶺とも云ふべく、それより後は此道下りに下りゆきて、又見るかげも無しと云ふ人あれど、新古今を距ること百八十年ばかりの後に、すぐれたる撰集が生れ出でたり。新古今は必ずしも斯道の高嶺にあらざるが如し。

「海行かばみづくかばね、山行かば草むすかばね、大君のへにこそ死なぬ。かへり見はせじ」とは、大伴氏祖先傳來の言葉として知られたるが、それにならべて劣らぬ歌が、新葉和歌集に見えたり。中務卿宗良親王の「君の爲世の爲何か惜しからん棄てゝかひある命なりせば」とよみ給へるは、懦夫をして立たしむべき名歌。又「道知らぬ葉山しげ山さはるとも猶あらましの末はとほさむ」何たるをゝしき心ぞや。これ即ち日本精神。又文貞公が「思ひかね入りにし山を立ち出でゝ迷ふうき世もたゞ君の爲」とよみ給ひしは、世を憂ひ君を思ふ心のあらはれとや言はん。

かくの如き歌どもを集めたる新葉和歌集は、南朝君臣の詠、千四百餘首を二十卷に撰び載せて奉りしに、勅撰にならずらふべきよし、みことのりを蒙りて、老の幸はひ望みに超え、喜びの涙袖に餘れり。これによりて所々改め直し

て、弘和元年十二月三日これを奏すと序文に言へり。

勅撰になすらふべきよし仰せ言ありし程の撰集なるに、二十一代集などにこれを除外して載せざりしは、南朝に仕ふる人の撰定なればなるべし。水戸にて扶桑拾葉集三十巻を撰ばれし時、これを歴代の勅撰に加へて、風雅集の序の次に此集の序文を載せ給ひしは、まことに當然の事なりと言ふべし。

此集に作者の名をあらはして載せたる歌が、新續古今集によみ人知らずとして入りたるもの數首見ゆるも、亦同じ意味によりての事なるべし。たとへば秋歌上に中務卿宗良親王「淺茅生の小野の篠原」云々、此歌新續古今雜上に入りたるはよみ人知らずとあり。又釋教の歌に中務卿宗良親王「ながめつる花も紅葉も」云々、これも新續古今には、よみ人知らずとあり。又戀歌一に前大納言實爲「あひ思ふ心までこそ」云々、これも新續古今にはよみ人知らずとして載せたり。

此集中に御製と記せる御歌五十餘首見えたるが、村上忠順氏は、すべて後龜山院の御歌とせり。そは大日本史の所記に従はれしものならん。賀部に前大納言光有が「仕へつるわれ見はやさん吳竹のさかゆく園の千代の行末」とよめる詞書に、今上第二の御子、御乳父の事云々とある頭註に大日本史曰、後龜山一皇子小倉不_レ知_ニ母氏、按_{スル}新葉集_ニ有_ル光有爲_ニ今上第二皇子_ニ求_ル乳母_ニ文、由是觀_ニ之帝子不_レ止_ニ于此、今無_レ所_レ考と見えて、今上とあるを大日本史には後龜山院の御事とせり。又此集春歌上に五百番歌合に御製「春は又わが住む方に歸るなり」云々とあるを、新續古今春上に載せたるは、後龜山院御製と記し、天授元年五百番歌合に出し給へるは、すべて女房と書けり。永享十年に撰進せる新續古今と新葉集とは僅か五十年ばかりの隔たりにして、近き間の歌集なれば、此御事について撰者が誤り給ふ

べくも覺えざるに、近頃出づる本どもに、長慶天皇の御事とせるは、八代國治博士の所説に依りしなり。されど新續古今の記載は重きが上に、異説も見ゆるやうなれば、猶有力なる證據の出づるまでは、村上氏所記のまゝにさし置く事とせり。

上記の如く此集は久しき間よそ／＼しく取扱はれ居たるを、村上氏の頭註が出でてより世人の注目する所となれり。それは明治二十五年三月本郷區元町なる魚住長胤氏の稽照館より活版本一冊として出版せられたれど、早く絶版となりて、極めて得難き書となりしを遺憾とし、三河國なる村上氏方より原稿本を借り得て、嚴密に校正し、いさゝか増註をも加へて改造社より、發行することゝなれり。幾多の誤脱を訂正したれども、猶洩れたるもあらん。そは再版の時に補ふべくなん。頭註に「増」と標せるは皆予が加へし蛇足なり。

古寫本の徳

此集の版本數種あれども、いまだ古寫本を以て校訂せられたるものを見ず。村上氏の頭註本には、校合せられし所も見ゆれど、それは南朝紀傳などの寫本にして、此集の古寫本を得られたるにあらず。飽かぬ事ども多かりしに、文學博士松井簡治先生より借り得たる古寫本は、いと宜しき本にて、これに依りて日頃の疑團が氷解せる事少からず。そのよしを次に記す。

卷一春歌上に二品法親王深勝とあるを、國歌大系本には源勝と記し、卷五秋歌下、卷六なる冬歌にも源勝と記し、稽照館本には深衛と書けり。いづれも誤れり。松井本に深勝とあるを正しとす。深は深甚の意、源勝と云ひては意義

を成さぬやうなり。戀歌二、戀歌三、戀歌四、雜歌上には稽照館本も源勝と誤る。

卷三、夏の歌に、上野太守懷那親王「一聲もをしほの山の時鳥」云々とある懷那の二字、松井本には懷那と書けり冬の部又戀歌四にも上野太守懷那親王とあれば、懷那と書けるを正しとす。又其續きに、

夏草を

後醍醐天皇御製

茂るとも庭の夏草よしさらばかくてや秋の花を待たまし

とある四の句、松井本には「からでや秋の」とあり。萬葉集卷十一に「わがせこにわが戀ふらくは夏草の刈り除くれども生しくがごと」とよめる如く、庭の夏草は刈り取るべき事なれど、其中には萩や薄や女郎花などもあれば、これを刈り取らず、其儘に置きて、秋の花咲く時を待たんと云ふ意なるべし。「からでや」と云ふ方、風情ありて、いとおもしろく聞ゆ。只一字の事なれど、古寫本の有り難さに感じ入りぬ。夏草の歌として此御製は、萬葉にも後の集にも見ざる秀歌なるべし。

卷四秋歌上に、萩將散と云ふ心をよませ給うける、後村上院御製「萩が花うつるふ色に高砂の尾上の風は吹かずもあらん」とある高砂の二字、松井本には高圓と書けり。「高圓の野べの秋萩」などよめる歌、萬葉に幾首も見えれば、高圓とある方宜しからん。但し高圓を高砂と誤りし歌も、古くより見えたり。そは續古今集秋上に、中納言家持「秋風は夜ごとに吹きぬ高砂の尾上の萩の散らまく惜しも」とあるは、家持が歌にはあらで、流布本の家持集より採りしなり。もとは萬葉集卷十なる秋雜歌に、秋風者日異吹奴高圓之野邊之秋芽子散卷惜裳とある作者未詳歌の轉訛せるなり。此家持集は古今集時代の物なれば、高圓を高砂と誤りしは、其頃よりの事なりと知るべし。

又同所に、左大辨時長「松風の音は聞えて高砂の尾上をこむる秋の夕暮」とある夕暮の二字、松井本には夕霧と書けり。尾上をこむるは霧が立ちこむる意なれば、夕霧とあるを用ふべし。卷五秋歌下に妙光寺内大臣「鹽釜の浦の煙もたゆむ夜に月のくまなき浮島の松」とある「くまなき」を、松井本には「くまなる」と書けり。紀氏六帖第三に「鹽釜の前に浮きたる浮島のうきて思ひのある世なりけり」と見えて、陸前國宮城郡鹽釜の浦に浮島の有るを、月のくまと見たる歌なるべし。これを「くまなき」と言ひては意義を成さぬやうなり。

卷六、冬の歌に冷泉入道前右大臣「ますげたきちかの川風更けぬとや、しば鳴く千鳥聲ぞさびしき」とある「ちかの川風」について、村上氏の頭註に、「和名抄に肥前國松浦郡值嘉（知加）とあれば是歟。萬葉集十二に「ますげよしそがの河原に鳴く千鳥」云々に據れば、菅と千鳥は素我川に名あれば「そか」の誤りにや」と言へり。松井本には「そか」と書たれば、それに決すべし。又松井本には「ますげたき」の傍に「よき歟」と注せり。此前右大臣の歌は、萬葉集卷十二なる眞音吉宗我乃河原云々に依りしものと見ゆれば、これも「ますげよき」と訂正すべし。眞音吉は「マヌゲヨシ」と讀めど、古訓は「ヨキ」と讀めり。續古今集旅に二條院讚岐「千鳥鳴くそがの川風身にしみて、ますげかたしき明かす夜は哉」玉葉集夏に藤原隆祐「ふりそむるそがの川原のさみだれにまだ水淺しますげ荇らなん」など見えたり。卷八羈旅歌に、權大納言具氏「わけ來つる跡さへ今は白雲のへだつる方や靜なるらん」とある靜の字、松井本に都歟と注せるは、まことにさる事と聞ゆ。都の字の草體を靜と見誤りしならん。又卷十釋教歌に、中務卿宗良親王「ながめつる花も紅葉もちり絶て心の色ぞ今は空しき」とある「ちり絶て」を、松井本には「散終て」と書けり。李花集及新續古今集に載せたるも「ちりはて」とあり。「終て」を「絶て」と誤りしものならん。

卷十七雜歌中に、新宣陽門院「このまゝにうき世へだてよ山里のふかきとたのむ庭の吳竹」とある四の句、松井本には「まがきとたのむ」と書けり。上句に「うき世へだてよ」とあれば、こゝは「まがき」と云ふべきなり。續千載集雜上に法印定爲「身を隠すかひこそ無けれ卯の花のうき世へだてぬ同じ垣根は」へだてぬと云へる下に「垣根は」とあるを思ふべし。又卷十九哀傷歌に、寄花無常と云へることを、二品法親王仁譽「残り無く散るにつけても背かれぬ世のことわりぞ花に知らるゝ」とある第三の句、松井本には「ありはてぬ」とあり。いづれも無常のことわりを云ふ語にて、古今集雜下に平貞文「ありはてぬ命待つまの程だにも、うき事繁く歎かずもがな」新拾遺集雜上により人知らず「うき事も何かは歎く然りとて背かれぬ世の秋の夕暮」など見ゆ。以上の他に誤字脱字など多く見えたるは、一々本書について校訂し置けり。「松井本」と注せるは、皆松井簡治博士所藏の古寫本なり。

「かねぬる」

卷十八雜歌下に、前大納言宗房「世々を經し我家の名の惜しければ惜しからぬ身を棄てぞかねぬる」とあるは、萬葉集は勿論、古今集後撰集などにも「かねつる」とのみ言ひて「かねぬる」と言へること無し。小町集に「妻戀ふるさをしかの音に、さ夜更けてわが片戀をあかしかねぬる」とあれど、それは後世の俗本にして、歌仙家集本、及古寫本には「あかしかねつる」とあり。然らばこゝも「かねつる」と訂正すべき歟と云ふに、松井本にも「かねぬる」とあれば、これは後世の誤れる詞づかひとして、もとのまゝになし置くべきなり。公任卿集に「春深み、み山がくれの花無しと云ふにつけても、わけぞかねぬる」續詞花集旅に赤染衛門「一夜だにあかしかねぬる、秋の野に鳴くくすぐ

す蟲ぞ悲しき」新古今集雜下に攝政太政大臣「浮き沈み來ん世はさても如何にぞ心に問ひて答へかねぬる」俊成卿
女集に「白妙の袖の氷に影さえて結びかねぬる冬の夜の月」など多く見えたり。公任卿の頃より言ひ出でたる詞づか
ひなり。

「わけ」と「わき」

卷二十賀部に、右近大將長親「此君とわきてぞ仰ぐ雲井まで生のほるべき園の吳竹」とある「わきて」を、流布本
に「分て」と書けるは「わけて」とも「わきて」とも讀まるゝ事にて、惑ふ人もあるが、國歌大系本には「わけて」
とせり。されど松井本に「わきて」と書けるを正しとす。

按ずるに「わけ」とは「おしわけ」ふみわけ「霞をわけて」など云ふ方にて、こゝには叶はず。春歌上に、
今上いまだ御子におましましける時、家に侍りける梅の花を

折りて奉るとて

福恩寺前關白内大臣

いと早もわきて、手折らば春の宮に木高く匂へ宿の梅が枝

御返し

御製

春の宮に木高く匂ふ花ならばわきて、や見まし宿の梅が枝

とある二ツも、流布本には「分て」とあれど、松井本には「わきて」と書けり。後撰集秋中に「いつとても月見ぬ秋
は無きものをわきて今夜のめづらしき哉」また「月影は同じ光りの秋の夜をわきて、見ゆるは心なりけり」とあり。今夜

の月が特にさやけく見ゆるは、八月十五夜の月と思ふ我心の爲なるべし。月夜は多き事なれど、取わきて今夜の月はと云ふ意にて「わきて今夜の」また「わきて見ゆるは」と云へるなり。新拾遺集秋上に西行「常よりも秋に鳴尾の松風はわきて、身にしむものにぞありける」新續古今集春下に前左大臣「みよし野はいつくも花の蔭なればわきて葉の跡も尋ねず」などあるは皆此意なり。新古今集の頃より多く用ひられたる語にて「わきて猶」「わきてなど」「わきてまづ」なども言へり。此集雜上に大納言光任「暮れ難き春の日影もわきて、猶爲す事も無き身に知られつゝ」新千載集秋下に源兼泰「わきて猶あはれと思へ行く秋の形見に折れる峯のみぢ葉」新後拾遺集夏に中宮大夫公宗母「わきて、まづ吾に語らへ郭公待つらん里はあまたありとも」續千載集春下に大僧正實超「わきてなど、同じ梢の春風に片枝殘して花の散るらん」續拾遺集秋上に後嵯峨院「わきて、この心づくしの秋ぞとも木の間の月の影よりぞ知る」など見えて、初句にさへ用ひたり。

「湊入り」と云ふ語

卷一春歌上に、前中納言爲忠「湊入りの蘆の朽葉の霜の上にむれ居し雁もたち歸るなり」とあるを、頭註に「萬葉十一に「湊入りの蘆わけ小舟障多み」とよめり。湊入りの蘆の朽葉と云ふこと、いかゞ。舟ならでも湊入りと云ふべきにや」と難じたるは、よく言はれし説なり。「湊入り」とは舟が湊へ入ることにて、九の卷三十五丁に水門入爾船已具如久と言ひ、風雅集冬に、如願法師「湊入りの棚無小舟跡見えて蘆の葉むすぶ薄氷哉」新拾遺集戀二に、藻壁門院但馬「湊入りの芦間をわけて漕ぐ舟も思ふ中には障らざりけり」新後撰集冬に、後九條内大臣「朝霜の枯葉の芦のひ

まを荒み安くや舟の湊入るらん」など見えたり。爲忠は「湊入り」と云ふを地名と心得られしにや。

「數ならぬ」と云ふ句

卷十四戀歌四に、度會行治「數ならぬ美濃の中山なか／＼に隔てはてなば戀しからじを」とある初句は、數ならぬ身と云ふを美濃に言ひかけたる修飾語にて、後撰集以後に多く見えたり。後撰集戀一に「數ならぬ深山みやまがくれの郭公人知れぬねを泣きつゝぞふる」新千載集雜上に平高宗「數ならぬ深山隠れの遅櫻花だに咲かば時すぎぬとも」續後拾遺集戀一に頼阿法師「數ならぬ三室の山の岩小菅言はねばしたに猶亂れつゝ」藤原宗泰「數ならぬ深山隠れの埋れ水うきにはえこそ洩さゞりけれ」紀俊文「數ならぬみなせの川に行く水の深き思ひぞ有りてかひなき」同雜上に藻壁門院但馬「數ならぬみくづにまじるうつせ貝拾ふにつけて猶ぞしをるゝ」など見えたり。修飾語としては、をかしさも面白さも無く、何の感興もおこらぬやうなり。人麿が劔クシロククタフシノ著手節フシノ乃崎サキ、狛コヤツル劔ツル和射見ワサミ我原ミガハラなどよめるには比ヒぶべくもあらず、平凡なる言葉と言ふべし。

美濃の中山は不破郡垂井町の近くに在り。麓ミヤウチの宮代村ミヤヨより十七八町、高からぬ山なれども、こゝに美濃國の一の宮國幣中社ナシタツ南宮神社ありて其名高し。續拾遺集旅に、不破の關屋に書つけて侍りける、よみ人知らず「都をばそなたとばかりかへり見て關越えかぬる美濃の中山」とあり。

打消の助辭「なで」

卷十一戀歌一に「ふじのねや絶えぬ思ひの夕煙消えなでさのみ何くゆるらん」とある「消えなで」は消えはせでと云ふ意。又戀歌三に「待てと言はど待つべきものか玉の緒の短き命思ひ絶えなで」とある「絶えなで」は絶えはせで或は絶えずしてと云ふ意なり。萬葉集十の卷二十四丁に「よそにのみ見つゝや戀ひむ、くれなゐの末探花の色に出でずとも」とある終句、群書類從に入りたる人丸集には「色に出でなで」とせり。されど「なで」と云ふは、萬葉には無き助辭なり。古今集戀三に小町「みるめなき我身を浦と知らねばやかれなで、海人の足たゆく來る」と見えたるが其始なるべし。「なで」の「な」は「暮なば」「消なば」などの「な」にて去の轉音なり。「で」は「すて」のつゞまりたるなり。「色に出でなで」は色に出でずしてと云ふ意、色に顯はして知らせず、外ながら戀ひつゝやあらんと云へるなり。又「かれなで」は絶え離ること無くてなり。萬葉卷三に妹乎目不離相見染跡衣、卷九に袖可禮而一鴨將寢とあり。絶え離るゝを「カレ」「カル、」と云へり。富士山は昔時は火山にて、煙が常に立ちのぼりしなり。思ひの「ひ」に火を寄せて「絶えぬ思ひの夕煙」と云ひ、「くゆる」は煙るに悔る意を寄せたり。大和物語に「ふじのねの絶えぬ思ひもあるものを、くゆるはつらき心なりけり」とあるに依りて詠めりと見ゆ。後撰集雜四に「かひも無き草の枕に置く露の何に消えなで、落ちとまりけん」新古今冬に、權僧正永縁「なか／＼に消えは消えなで、埋火のいきてかひなき世にもある哉」新勅撰雜四に、知家「あさち山色變りゆく秋風にかれなで、鹿の妻を戀ふらん」新千載夏に、後白河院「橋の花の宿とふ郭公かれなで、今も昔戀ふらん」新古今戀二に、菅原秀能「もしほ焼くあまの磯屋の夕煙たつ名も苦し思ひ絶えなで、」など見えたり。

「うき瀬」と「ウキヨ」

秋歌上に、七夕後朝を、幸子内親王「たち返り渡るもつらし。たなばたの今朝はうきせの天の川浪」とある。「うきせ」を、流布本に「うき世」と書たるは紛らはし。世の字、萬葉假名は「セ」の音なれど、多くは代の義に用ひらる。此集戀歌五、後村上院御製にも「うき世」と書き、稽照館本に憂世とあるは「ウキヨ」と心得たるが如し。されどこれは紀氏六帖第四に「涙川浮きたる泡と身をなして人のうき瀬を流れてを見ん」源氏物語手習の卷に「はかなくて世にふる川のうき瀬には尋ねも行かじ二もとの杉」新後撰集雜中に實家「いかゞせん關の藤川代々を経て仕へし跡にうき瀬残さば」續後拾遺集戀一に榮子内親王「よしさらば渡りもそめじ思ひ川うき瀬に袖の濡れもこそすれ」新拾遺集戀二に永福門院「人心淺きにまさる思ひ川うき瀬に消えぬみづからも憂し」新續古今集戀五に大僧正果守「うき瀬のみまさる涙の川社ほさぬ衣のうらみわびつゝ」などある。「うき瀬」にて、いづれも川によみ合はせたり。源氏物語葵の卷に「如何なりとも必ず逢ふ瀬あなれば、對面は有りなん」とある「逢ふ瀬」の類にて「うれしき瀬」「悲しき瀬」とも言へり。松井本に假名にて「うきせ」と書けるぞ正しき。これを憂世の事としては、更に聞えぬ歌となるべし。「うき瀬」と「ウキヨ」とは全然別語にて「ウキヨ」は川に關係無けれども「うき瀬」の方は、其前後に必ず川をよめり。此集雜歌上に、尊良親王「さらば身のうきせもかはれ飛鳥川涙加はるさみだれの頃」雜歌下に前中納言爲忠「うきせには沈みもはてし吉野川よしや世の中歎かさらん」とある二つは假名にて「うきせ」と書きたれば難無し。これは「うき瀬」の方なり。又雜歌下に、世泰親王家右京大夫「行末のあらましにのみなぐさめて今のうき世に厭は

でぞふる」また平惟材朝臣「うき世をば棄てし身なれど隱家とげに定むべき山陰ぞ無き」とある二つは「ウキヨ」の方なれば「うき世」と書けるぞ宜しき。

古事記上卷に靑人草之落苦瀨^{アヲヒトクサノクルシセニ}而とある苦瀨を、本居翁「ウキセ」と改訓せり。其説に「勢は「逢ふせ」「戀しきせ」「かゝるせ」などよめる是なり。勢は豎にも横にも用ふ。豎とは時なり。長く經行時の間に、人に逢ふ時をさして逢勢と云ふ。横とは處なり。川の瀨などは是なり。上より下まで長き流れの間に、渡る處をさして勢と云ふ。古歌に渡瀨とある是なり。川は浅き處を尋ねて渡るものなれば、渡瀨は浅處なり。それより轉りて、渡る處ならねど、浅き處をも瀨と云ふ。西行が歌に「こゝを勢にせむ」と云へるも、こゝを其處とせむと云ふ意なり」と言はれしは、詳しき解説なり。但し古事記の苦瀨は舊の如く「クルシキセ」と讀む方可ならん。「うきせ」は憂き場合と云はんが如し。それを瀨に寄せて、古川、涙川、飛鳥川など、川によみ合はせたり。

「咲 な む」

秋歌下に、後村上院「移し植ゑば山路の菊も今年よりはや九重の色に咲なむ」とあるは、版本にも寫本にも「咲なむ」と書けり。これは「咲きなむ」と讀むべき歟、又は「咲かなむ」と讀むが正しき歟、惑ふことなるが、國歌大系本には「咲きなむ」とせり。されど「今年よりはや」とよめる「はや」は早く咲けかしと願ふ意に添へたる言葉と聞ゆ。拾遺集夏に中務「夏の夜の心を知れる郭公はやも鳴かなむ明けもこそすれ」とあるは、夜の明けぬうちに早く鳴けかしと欲する意なり。これと同例にて「はや咲かなむ」とよめるやうに聞ゆれば「咲かなむ」と讀むが正しきなり。

本居翁云「なむ」に三つの差別あり。末をかけて云ふ「なむ」、願ふ意の「なむ」、「ゾ」と云ふを、ゆるめて云ふ「なむ」是なり。古今集春下に「いざ櫻吾も散りなむ、一さかりありなば人にうきめ見えなむ」とある「散りなむ」は吾も櫻と共に散らうと末をかけて云ひ、又「うきめ見えなむ」とは、我身の衰へたる姿が人に見られるだらうと、これも末をかけて云へり。此格いと多し。又願ふ意の「なむ」とは「行かなむ」「貸さなむ」「言はなむ」「有らなむ」などの如く、カサタナハマラの字より續くなり。エケセテネヘメレより續けて願ふ意になるもあり。

(エ) 古今雜下

人知れず思ふ心は春霞たち出て君が目にも見えなむ 見えよかしなり

(ケ) 同 戀一

春たてば消ゆる氷の残り無く君が心は吾に解けなむ 解けよかしなり

(セ) 後撰戀六

白雲の行くべき山も定まらず思ふ方にも風は寄せなむ 吹き寄せてくれよなり

(テ) 同 別

此度も吾を忘れぬものならば打見ん度に思ひ出でなむ 思ひ出でよかしなり

(ハ) 同 賀

年の數つまんとすなる重荷にはいとど小附をこりも添へなむ 添へよかしなり

(メ) 後拾遺春

かりがねぞ今日歸るなる小山田の苗代水の引きもとめなむ 止めよかしなり

(レ) 金葉別

戀しさは其人數にあらずとも都を忍ぶうちにいれなむ 入れよかしなり

又「ゾ」をゆるめて云ふ「なむ」は詞書に多し。古今集の序に「赤人は人丸が下に立たんこと、かたくなむありける」貫之が詞書に「かくさだかになむ宿りはある」業平朝臣の詞書に「これなむ都鳥と云ひけるを聞きて」などある是なり。又古今集物名に忠岑「たもとより離れて玉を包まめや、これなむそれとうつせみむかし」後拾遺戀一に源頼光「かくくなむとあまのいさり火ほのめかせ磯邊の浪のりもよからば」新葉集戀二によみ人知らず「せめてたゞ身を

離れゆくわがたまもこれなむ、それと知られだにせよ」などあるは、此「なむ」を歌によめるなり。今按ずるに「なむ」に三つの差別ありと言はれしはいかゞ。これは用言の活用（ハカマ）によりて、意義が變れるなり。エケセテネヘメレより續け言ひても願ふ意となるは、下二段にはたらく用言なり。此下二段の用言は末をかけて言ふ時も同じ續けざまなれば、いづれの意に用ひし歟、これを知るに惑ふこと多し。「なむ」と云ふ助辭は一つなれど、「咲かなむ」と云へば、咲けよかしと願ふ意となり「咲きなむ」と云へば、咲くだらうと末をかけて云ふことゝ知るべし。

久米路の橋

戀歌五に後醍醐天皇「我戀は久米路の橋の中絶えて契り空しき葛城の神」とあるは、後撰集戀五に、かれにける男の思ひ出て、まで來て物など言ひて歸りて、よみ人知らず「かづらきや久米路に渡す岩橋の中々にても歸りぬる哉」（中々はナマジヒニと云ふ意に用ふる語、久米路の橋は半にてかけざりし故上句は中と尋はん爲の前置なり行かであるべきを、なまじひに行きて、つらき思ひをしたりと云ふ意なり）かへし「中絶えて來る人も無き葛城の久米路の橋は今も危し」とありて、昔時役の行者が葛城山より吉野の金峰山へ岩橋をかけんと山神に命じたるに、葛城の一言主の神は其形醜しとして晝は役せざりしを、行者怒りて咒縛せしかば、橋は半途にして止みぬと言ひ傳へたり。それを思ふ事の遂げざるに用ひて、中絶えし契りなど言へり。元享釋書に、役小角一日告山神曰、汝等架石橋通行路、衆神受命夜々運巖石、督營構小角呵レ神曰、何不早成、對曰、一言主神其形甚醜、雖晝役待レ夜出、以故遲耳、小角促一言主、一言不レ肯、小角怒咒縛、繫之深谷とあるは、有り得べからざる事なり。修驗道の人たちが、小角を神聖化せしめんとて作りたる俗説なるべし。元享釋書には、それをよく吟味せずして記載したるなり。此書にはかゝ

る事往々見えたり。三井寺の名稱について、境内より涌出する清水を、天智、天武、持統三帝の産湯ウツユに用ひしが爲の名稱なりと云ふ俗説を載せたるも、其一例なり。一言主大神は三代實錄第二に、貞觀元年正月、正三位勳二等葛木一言主神等奉授ニ從二位ニとあり。古事記傳四十二に『かゝる類(久米路の橋の類)の説は神を卑ヒしきものに貶トして、佛の道を尊トきものにせん爲の事にて、例の僧ホウの輩ソウゴトの虚説なり。一言主大神は天皇すら、かくの如く畏み賜ふばかり、いみじき御威徳イキホトましまして、尊トき大神におはしますものを、小角如コカクき微賤ヒトシきものが、いかでか制し奉ることを得む。かへすくおふけなく、いともかしこき妖言オウゴンにこそ」と見えたるは、まことにさる事と聞ゆ。續日本紀第一に、役君小角流コカク子伊豆島コノ初小角住コノ於葛木山ニ以ニ咒術シロ稱シ。韓國連廣足師アトス焉。相傳云、小角能役コカク使鬼神シ液シ水ニ採シ薪ヲ。若不レ用レ命ヲ即以レ咒縛ヲ之トあり。此後説に依りて彼の岩橋の事を作り出でたる歟。清正集に「葛城や久米の繼橋つきくも渡しもはてじ葛城の神」新古今戀一に實方朝臣「いかにせん久米路の橋の中ぞらに渡しもはてぬ身とやなりなん」同戀五に能宣「葛城や久米路に渡す岩橋の絶えにし中となりやはてなん」新拾遺集戀四に實方朝臣「わがごとや久米路の橋も中絶えて渡しわぶらん葛城の神」など多く見えて、此虚説ソウゴトを採り用ひしは口惜しきことになん。

池水のいひ

戀歌一に未言イテダイイイテシテ出戀と云へる心を「問へかしな袖のみ濡れて池水の言ひ出で難イきしたの心を」とあるは、言ひに械キを兼ねて池水の械キと續けしなり。械キとは池水を流しやる樋ヒなり。後撰集戀三に「小山田の苗代水は絶えぬとも心の池のいひは放たじ」同戀四に「池水の言ひ出づること難ければ水隠ミツカモリながら年ぞ經にける」拾遺集雜戀に「ともかくも言

ひ放たれよ池水の深さ浅さを誰か知るべき」月詣和歌集に待賢門院堀川「うれしさにつゝみもあへず池水の言ひ出で難きみくづなれども」新續古今集夏に藤原雅親「池水の言ひ出で難き思ひとや身をのみこがす螢なるらん」など見えたり。言ひ出でかねて心のうちにこめ置きて年経るを「言ひ出で難きしたの心」また「水隠ながら年ぞ經にける」と言へり。

ゆ ふ 山

卷八羈旅歌に、よみ人知らず「草枕ゆふ山風の寒ければ今夜は更に寝む方も無し」とある「ゆふ山」について村上氏の頭註に「萬葉集卷十に豊國之木綿山雪之可消所念とよめり。木綿山は豊後國速見郡に在り」と言へるは、豊後の由布山と心得られしが如し。されど此「ゆふ山」はそれにはあらで、夕方の山と云ふ意なるべし。此歌は宗良親王千首に見えて、羈中山と題せり。玉葉集夏に前太政大臣「秋近き谷の松風音たて、ゆふ山涼し岩の下水」從三位爲子「風の音に涼しき聲を合はずなりゆふ山陰の谷の下水」風雅集旅に從三位爲子「越えなやみわが行きとまるゆふ山の尾上を月は今ぞ出づなる」などある類にて、朝渡り行く川を朝川と云ひ、夏見る山を夏山と云ふと同例なり。山風は朝夕が特に寒ければ、夕山風と云へるなり。豊後の由布山は續古今集秋上に知家「誰しかも雲居はるかに豊國のゆふ山出づる月を見るらん」とあり。それは多くは「豊國の」と冠らせたり。萬葉にも豊國之木綿山と言へり。豊後國速見郡の西南部に在りて、鶴見嶽と對峙す。休火山にして山上に池あり。高さ五千餘尺。湯布嶽とも云へり。麓の川上村温湯より一里八町。岬々として其状あたかも芙蓉峯に似たり。故に豊後富士と稱す。こゝより流れ出づる川を由布

川と云ふ。大分郡に入りて大分川となる。

花鳥と云ふこと

卷一春歌上に尊良親王「花鳥の色にも音にも先だちて時知るものは霞なりけり」卷十六雜歌上に、大僧正賴意「花の色鳥の聲まで時にあふ春の宮居ぞ光ことなる」とある花鳥は櫻と鶯なれど、冬の部に前關白左大臣「花鳥の馴れしなごりも忘れぬに月と雪とをみよし野の山」とある花鳥は櫻と郭公にて、それに月と雪とを加へて四季の景物とせり。玉葉集春下に權中納言公雄「花鳥の色音も絶えて暮るゝ空の霞むばかりに残る春哉」同夏に前太政大臣「花鳥の飽かぬ別れに春かれて今朝より向ふ夏山の色」風雅集上に爲相「花鳥に猶あくがるゝ心哉老の春とも身をば思はで」源氏物語桐壺に「なつかしう、らうたげなりしをおぼし出でたるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞ無き」云々、是等は皆櫻と鶯なり。後撰集夏に貫之「花も散り郭公さへ往るまで君にも行かずなりにける哉」「花も散り」と云ふて春の過ぎ去りし事を思はせ、郭公さへいぬると云ふに夏末に至れるよし知らせ、君にも行かず」とは殊邊に打過ぎたるよしなりかへし藤原雅正「花鳥の色をも音をもいたづらに物憂かる身は過ぐすのみなり」これは「花も散り郭公さへ」と云ふを受けたる返歌なれば、櫻と郭公なる事云ふまでも無し。時節に依りて變る事のある言葉なりと知るべし。

此集の特色と今上御製

いづれの勅撰集も古歌を採り用ひたるに、此集には古歌を一首も載せず。南朝三代の君臣の詠のみを集めたり。新古今には古歌を取り入れしこと多く、それが爲に撰者の不見識をあらはせり。其一二を言はゞ、戀歌五に八代女王「みそぎするならの小川の川風に祈りぞ渡るしたに絶えじ」とあるは、八代女王の頃の歌體とは見えず。後世の歌なり。紀氏六帖第一「なごしのはらへ」の條に八代女王「君によりことの繁きを」云々の次に載せたる別人の歌を、同女王の歌と心得て採れる誤りなり。又「鹽釜の前に浮きたる浮嶋の」云々を、山口女王の歌として載せたるも違へり。此類の事が多く見ゆる新古今集を、わが敷嶋の道の高嶺など言はんは如何にぞや。古歌を採り用ひざる新葉集こそ、朝日を受けたる富士の高嶺の如き特色を持ってりと言ふべし。

此集の作者は、すべて百五十人、皆吉野朝君臣の詠なり。天皇の御製は後醍醐天皇、後村上院と今上御製なり。今上御製は後龜山院の御歌と申し傳へ來しを、近頃に至りて長慶天皇の御製なりと言へり。果して當れりや否哉、今後の研究を待たんとす。